
葉牡丹の花～青潟大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葉牡丹の花～青潟大学附属シリーズ中学編

【Zコード】

Z6700E

【作者名】

舞夜じょんぬ

【あらすじ】

中学二年一月。水鳥中学生徒会と青潟大学附属中学評議委員会との交流準備のため、親友関崎乙彦と出かける佐川雅弘。目障りな女子に惚れられ困りはてた乙彦のため、雅弘はいろいろ手を尽くすが、自分も初恋と出会ってしまい舞い上がる！目障りなのはわかっていても消えられない、彼、彼女の行く末は？

もし、おとひつちやんと中学で出会っていたら、僕は親友でいられただろうか。

今年に入つてからこいつも思つのは、おとひつちやん……僕の親友関崎乙彦の仇名だ……が、どうしてこうもおばかなことばかりしているのかつてことだつた。

たぶん僕だつたら、もつと楽なやり方するのにな、どうしてこんな面倒なことばっかりするのかな。いつもそんなことを考え、いつのまにか話を聞き流すべがついていた。

おとひつちやん、もじもじしてないで言ひちやんえばいいの。

「雅弘、聞いてくれないか

とうとうおとひつちやんが口を切つた。すつと三十分くらいい、僕は待つていた。やつとだやつと。

「うん、いいよ。おとひつちやん

僕は少し笑顔をこしらえてみた。こつと笑つてみた。こつするとおとひつちやんは機嫌よくなるつてことを、十年間の経験上、よく知つてゐるからだ。

「来週の日曜、悪いんだけどな、一緒に着いてきてほしいんだ」

「どこに?」

野球とかサッカーの試合を観にこいつと誘つているんだろうか。悪いけど、それは勘弁してほしい。やつと風邪が治つて学校に行く前日なんだつて奴にだ。

「あそこにだ

「あそこつてどこ?」

ははあ、もしかして、この前言つてたことかな。

僕の直感は大抵当たる。先週、本当だつたら行くはずだつたんだけど、キャンセルせざるを得ない事情があつて、行けなかつた、あ

そこだ。

「雅弘、青大附中に付き合つてくれないか」

先週から僕は、ひどい風邪を引いて寝込んでいた。インフルエンザではないけれど、熱も出たししつかり学校も休んでしまった。そんな中、違うクラスのおとひつちゃんは毎日、僕のうちへプリントだと、ノートだとかいっぱい用意して来てくれた。そろそろ熱もひいた頃だし、学校へ行つてもいいかな、というちょうどの時期だつた。

「いいけど、けど俺が行つていいの」

「いいに決まってる。最初からお前と一緒にいくつもりだつたんだ。つていうか、生徒会では今回動けないし」

おとひつちゃん、また熱くなつてるな。

外の雪も一気に溶かす、関崎乙彦水鳥中学生徒会副会長様。

僕はだまつて話を聞いていた。パジャマのままで炬燵に入り、みかんの皮をむきながら。おとひつちゃんは片膝を立てて、学生服の襟を外した。こうやるとなんとなく、おとひつちゃんも学校の番長っぽくみえる。こうすれば総田と見かけだけでも、対張れるのにな。

「お前が学校を休んだ次の日さ、俺と総田とふたりで行つたんだ。本当は雅弘だけ連れて行くつもりだつたけど、お前が倒れたんだつたらしきょうがねえよ。あれだけ乗気でない総田がだぜ、ぎりぎりになつて付き合つなんて言い出したから」

きっと修羅場だつたんだろうなあ。

あとで総田幸信……水鳥中学生徒会、もうひとりの副会長様で、かつおとひつちゃんのライバルだ……に電話をかけておこつ。こつそり決めた。

「で、青大附中に行つたんだけどな。なんか、評議委員会の方で、渉外の仕事は担当することにもつ決まつてゐるんだとさ。総田はあんまりいい顔してなかつたけどな。とにかく、そこの評議委員長と話

して、今週もうこちど、集まろつてことになつたんだ

「じゃあ総田とか、あと内川会長と行けばいいのに」

天敵総田よりも、一年下の生徒会長・内川くんといきやあ一番丸く収まる僕は思つ。おとひつちやんのことを慕つてこる、数少ない味方のひとりなんだから。

「いや、内川も、三月の卒業式式典の準備でんてこ舞いなんだ。手が空いてるのは俺だけだし、総田はもう行く気ないみたいだし、だからなんで俺が行くんだ？」

前からおとひつちやんには、青大附中との交流会に参加するように頼まれていた。僕は一切生徒会とは関係がない。単におとひつちやんの親友だつていう、それだけだ。なのに、総田にしき内川にしろ、僕にしきゅう頼み」としていく。単純なおとひつちやんだつたらしかたないと思つて手伝つけれど、それ以上の見る目持つている総田がなんで僕なんかに頭下げるんだろう。まあそっちの方が一番丸く収まるつてこともあって、僕はしきゅうおとひつちやんの目を盗んで連絡を取り合つていた。

「そうか、じゃあいいよ。もう病院でも、学校行つてこいつて言つてたし」

まだ鼻水が垂れてきて、ティッシュが手放せない。ぐずかじの中はくしゃくしゃのティッシュで一杯だ。あとで捨ててこなくちやいけない。

「あれ、おとひつちやんどうした？ なんかこいつ、すりぐくほつとしてるようなんだけぞ」

僕は鼻の下を人差し指でこすつた後、おとひつちやんの顔を見つめた。

気付かれなければじゆつくつと、注意深く。

「なあにがほつとしてるだよ。お前、昨日までは具合悪いつて布団の中から出でこなかつたくせにこ

おとひつちやん、心配してくれてるんだよな。

せじつと、嬉しくなる。

「じゃあな、期末試験用のノート、四組の分と、ほり、三組の分、両方持つてきた」

「両方ってなんだ？」

昨日まで持つてくれたのは、おとひっちゃんのクラス……僕は一年三組で、おとひっちゃんは四組。別なのだ……の授業ノートだけだつた。全くないよりはましだけど、先生によつて出題範囲が異なるから困つたなあ、とは思つていた。

おとひっちゃんは顔の筋肉を妙に引き締めつゝ、つなげた。

「水野さんが、たまたまノート取つてたつて話してたから、そつちも「ページしてもらつたんだ。技術と保健体育だけは別だけだな」わつきたんかあ。

水野五郎さん、通称さつきたんが、おとひっちゃんどどついう風に話をしていたんだろ?。ちょこつと氣になる。一瞬だけ想像し、すぐ「イメージが湧いてやめた。わかりきつてる。きつとさつきたんはおとひっちゃんに、はつかねずみの表情で見上げたんだろ?。その一撃でおとひっちゃんは、ぱおつとしてしまつて黙つてしまつた。

「ありがとう。おとひっちゃん、じつこじとじるがす!」こよな。俺ならそこまで気付かないよ。ごめん」

「じゃあな、明日、朝、迎えに行くからな」

「ちょっと、いいよ。大丈夫だよ」

おとひっちゃんは首を振つて、手も軽く振つて、僕の部屋から出て行つた。食べ終わつたみかんの皮が散らばつてゐる。皮を出されずにみんな飲み込むのがおとひっちゃん流の食べ方だ。僕はぐずかごにそれを詰め込み、袋の口を閉じた。

机のノートとページ、両方を開いた。

おとひっちゃんは今回、ページじゃなくて、自分のノートを全部手書きで写してくれたらしく。学年トップを譲らないおとひっちゃんのノートは貴重品だ。けど、でも。

実はさつきたんの方が使い勝手いいんだよな。

「コピー紙のきれいな文字。ノート」と借りたんだろうが。もしそうなら僕は断言したつていい。おとひつちゃん、僕の分の他、絶対自分用にもコピー取つていいはずだ。

窓の雪が凍つていて。

咳き込みながら窓の外を眺めると、おとひつちゃんが背中を丸め、ジャンバーに手を突つ込みながら歩いていくのが見えた。

僕のうちはおとひつちゃんとこから近いけれど、一週間毎日、わざわざ僕の部屋まで上がつてきて、ぶつきらぼうな言い方で元気付けた後帰つていくなんて、そう簡単にできることではないと思う。僕だけじゃない。きっと、おとひつちゃんにとつて友だちといえる奴には、きっと誰にでもそうするんじゃないかなって思う。

そういう奴だ。おとひつちゃんは。

だから僕の親友なんだ。

インフルエンザかもしれないのに、期末試験前だつていつの間にか僕の側にきてくれるなんて、まずいやしない。

おとひつちゃん、いい奴だ。けどな。

寝すぎてちよこつと痛む片一方の頭をさすりながら、僕はもう一度ベットにもぐりこんだ。病人の特権を利用して、もう少し寝ていよ。

水鳥中学生徒会が行つた昨年度の「大イベント」は、学校祭三日目・自主企画「修羅場」。いろいろ修羅場もあつたにせよ、喝采の中終わつた。おとひつちゃんの爆弾発言を初めとして、かなり衝撃が走つたことも多かった。でも、なぜかわかんないけれど、水鳥中学の先生はあまりうるさく言う人がいなかつた。僕もこれは意外だなあ、と感じた。

どうやら、おとひつちゃんの燃やした情熱の炎が、大人にはすつと伝わつたらしい。

肝心要の生徒たちには全くだつたけれども、それは気付かせない

めうにしておけばいい。

その辺は総田副会長がうつまく立ち回つて片付けたらいい。

その後生徒会改選は、おとひっちゃんの後輩・内川くんがあつさり信任投票で生徒会長に任命され、一年副会長も自然と再選。書記と会計も一年がひとりずつプラスされた以外はあつさりとスライドした。なんだ、あれだけおとひっちゃんが悩む必要もなかつたつてわけだ。僕としてはおとひっちゃんを会長にしたい気持ちでいっぱいだつたのだけど、今思えばそれは危険なことだつたと思う。

純粹で、ひたむきで、不器用なおとひっちゃん。

幼稚園の頃から、僕をかばつていじめつ子たちに立ち向かつてくれたおとひっちゃん。

今日も、見舞いに来てくれたおとひっちゃん。

すつごく、すつごくいい奴なのだ。僕はおとひっちゃんが大好きなはずなのだ。なのに、いつもやつて寝ていると、妙な気持ちが湧いてきて、気持ち悪くなる。熱がまた出てしまいそうだ。

おとひっちゃんがもし、俺の親友じゃなかつたら。

炬燵の上におきっぱなしのコピーを、ベットから無理やり手に取つた。さつきたんのノートコピーだ。

明日、学校に行つたらありがとうつていつといつかな。

さつきたんとは小学校五年の時に、同じクラスになつて以来、女子の中でもちょくちょくおしゃべりするようになつた。きちんと男子にも「くん」付けで呼んでくれるし、誰に対してもやさしいはつかねずみっぽい笑顔を見せてくれる。僕に対しても、ほんの少しだけど、サービスしてくれているような気もするけれど、友だちづきあい長いんだからしかたない。そのくらいは、嬉しいこととしてもらつといづ。

でも、おとひっちゃんは相変わらず気付いていないのかな。

さつきたんにはもろにばれてるつてこと、気付いてないんだろうな、あの調子だと。

僕は信じて疑わない。

おとひっちゃんの想い人がさつきたんである」と、それがすでに、生徒会役員全員にばれているつてことを。みな、同情を持つて内緒にしてくれている。紳士同盟だ。

僕だつたらたまつたもんぢやないな、つてなんとかしようとするけどなあ。

それすらしようとしないおとひっちゃんつて、やつぱり、なんといつか。

続けると、僕は親友としてあるまじき言葉を口走つてしまつ。もしかして僕はおとひっちゃんのことを見下してゐんぢやないだろうか。

裏表のないこんない奴を、せせら笑つてゐんぢやないだろうか。

もやもやしたものが抜けきらず、僕は慌ててテレビをつけた。落ち着かない時に限つて、画像は映らない。白黒のままでかえつていろいろする。すぐに消してラジオを入れた。これもだめだ。電波が悪天候のため受信しづらくなつてゐるみたいだ。

ああ、全くなんだよ！

もう風邪が鼻以外に残つていいないせいか、むしょに動きたくてならない。病人の時間は終了だ。僕はベットの上に投げつけばなしの青いはんてんを羽織り、そつと階段を降りた。父さんも母さんも、まだ店に出てゐるはずだ。僕ひとり、誰にも聞かれないように電話ができるのは、この時間帯だろう。期末試験一週間前は、生徒会活動もお休みだ。もちろん部活もそうだけど。

僕が電話したのは、もうひとりの生徒会副会長、総田幸信だ。

今年こそ、万年二番順位返上に燃えているんぢやないだろうか。邪魔したら悪い、とおとひっちゃんには思つ。でも総田には全然そんなこと考へないです。勉強だけが命ぢやないだろ、つてことだ。運よく、一発で総田が電話口に出た。相変わらずへらへらした口調に凄みが増している。

この調子だと日々おとひっちゃんと遭り合つてゐるんだろう。あ

つさり勝利なんだろ？

「佐川かあ、お前、一週間寝込んでるって聞いたけど、元気そうじやねえか」

「うん、明日から学校行くよ」

僕はまだかすれた声で答えた。

「それより、今いいかな。ちょっとおとひっちゃんのことで聞きたいことあるんだけど」

「おおさ、なんだ」

声は明るい。生徒会室での戦いは勝利の連續に違いない。

「この前、青大附中におとひっちゃんと一緒に行つたって聞いたんだけど、その時なにがあつたのかなあ。ちょっとだけ気になつたんだ」

「ちょっとだけつてなんだよ。関崎がまたぐちつてたのか

「いや、そうじゃなくてさあ」

天井の木目が少し濃くにらみつけてくる。僕は見上げながらぐつと腹に力を入れた。

「なんで総田、青大附中の交流会に乗気じやないのかなあつて思つたんだ」

ぐつと言葉に詰まつたようすだ。ふつつと息を吹く気配があつた。

「俺が乗気にならないとおかしいか」

「いや、総田のことだから、なんか考えてるんだろうなつて思つてはいたんだ。けど、おとひっちゃんだけに全部任せとおくなんて、何かまずいつてことあるんじゃないかなあ。俺はおとひっちゃんにそういうこと、詰つ気なんて全然ないよ。ただ」

「ちょっと咳き込んだ。まずい、店に聞こえないようにしなきや。

「俺も青大附中にくつついて行く以上、総田に迷惑かけるようなへま、したくないからなあ」

思いつきり気の抜けた声を装つた。僕の得意技と、人はいう。別に普通に話をしているだけなのに、総田はものすごいく僕を買つてく
れているらしい。

「へまな。確かに」

総田は沈んだ声で返事した。

「まあまあ、佐川が一緒に行くんだつたら、一安心つてとこか。関崎は俺の想像をはるかに越えることやらかして、大騒ぎに仕立てちまうから、正直なところ心配ではあつたんだ」

「だから一緒に行けばいいのに。それかさ、内川会長だけでもさ

「いや、待て、俺の話を聞けよ。佐川参謀殿

参謀か。

少しじらして、相手に話をさせるのがコツ。あとは一切口を挟まず、最後まで聞くこと。

総田にせよおとひっちゃんにせよ、自分でしゃべりたくてなんないことがたくさんあります。そういう奴にはとことん、聞き役に廻つてやつて、気持ちよくさせればいい。そうすれば大抵の情報は簡単に手に入る。どうしてふたりとも、こんな簡単なことに気付かないんだろう。僕もあまり教えてやらないから、わからないのかもしれないけれど。

咳払いをした後、総田の口はするすると僕の聞きたいことを吐き出してくれた。

僕はずつと耳に受話器をつけて、寒気が走るのをこらえていた。
「佐川がぶつ倒れて青大附中の評議委員会にけなかつた時のことなんだな。実は」

総田の言い方は秘密めかしていたけれどたいしたことじやないようにも聞こえた。

「関崎ひとりで舞い上がらせておくのもいろいろまずいし、内川にうまく話をつなげてやることも必要かなと考え直して、俺もくつついていくことにしたんだ。関崎のことだ、青大附中の連中たちの顔を見て、赤い布をひらつかされた牛状態にならないとも限らんしな」

今年の一月に、一度生徒会同士の交流ということで出かけたことはあると言っていた。その時は生徒会役員全員で青大附中へと乗り

込んだわけだ。ただ、総田はその時あまり、いい印象を受けなかつたらしい。おとひつちゃんとは正反対にだ。

「関崎本人は非常に、青大附中の連中に対して仲良くしたいような顔をしてたな。向こう側の連中つてのは、やたらと女たらしで一本ねじの抜けたような奴が多くて、どうも見ていて虫唾が走るタイプだつたんだな。女子はともかく、男子連中、お前ら男だろ、もつとしゃきっとしろよーって怒鳴りたくなるような感じなんだ」

おとひつちゃんとは正反対つてことかな。

なんとなく、わからないでもなかつた。僕は黙つて聞いていた。「で、今回は生徒会を抜きにして、向こうの評議委員会つてことと直接交流会をいたしましょ、つてことで話が来たわけだ。おい、評議委員会つてなんだよ、つて聞いたなら。単なる水鳥中学の学級委員の集まりときたもんだ。おい、なんで生徒会が学級委員と仲良しこよししなくちゃいけないんだつて、俺としてはかちんと来たわけだ」

評議委員会、と学級委員会とは別なんだ。

その辺はよくわからない。やつぱり、私立中学にはいろいろあるんだろひ。

いきなりまた声を潜め出したのは、総田にもさしさわりのある話題なんだろう。

「でもまあ、関崎が機嫌よく話を聞いて、向こうの評議委員長と仲良くしゃべっているので、害はないだろ」と俺も安心していつわけだ。単なるお友達づきあいを止める気ねえよ。女子は別だしな」

総田好みの女子がたくさんいたんだね、きつと。

僕は思わず咳払いと笑いを隠した。

「四月以降少しずつ、青大附中の部活動関係のイベントとかに参加させてもらおうとかいろいろ話は盛り上がつていた。うちの中学校バスケ部だけはやたら強いだ。それ、向こうの評議委員長も知つててさ、ぜひ一度練習を一緒にさせてもらひことできないかとか、交流を部活動中心でどうだらうかとか、提案してくるんだ。やたら

ヒー。」

全国大会出場したもんな。去年の中体連で。

水鳥中学バスケ部を絶賛されたからには、総田はもとより、おとひつちゃんだつて機嫌よくなるだらう。ずいぶん、青大附中の人は水鳥中学のことを調査している。

「けど、本当に盛り上るのは俺たち一年連中が引退してからのことになるだらうつてことも言つてたな。やつぱりいろいろよんびいろなき事情ありありなので、すぐに交流会をやるのは、青大附中でも難しいんだそうだ。ま、俺も一応は来年受験生だし、あまり生徒会にもかかわつてられないしさ。とりあえずは内川にバトンを渡すだけでもいつかといふことで、その場は納まつた。それにしてもあいつら、野郎のくせに、お茶、出すんだぜ」

「お茶つて、出すつて？」

言つている意味がわからず問い合わせ返した。

「ほら、家庭訪問の時なんかにうちの父ちゃん母ちゃんが、先公に出すような感じだぜ。すげえ濃い緑色の液体を、茶碗に入れて持つてくるんだぜ。お茶くみつて奴」

「それを、男子がやるのか？」

「そりなんだ。俺だつたら会計連中にやらせるようなもんだが」

総田、それつて男女差別だよ。川上さんの前で言つたらまずいよ。うちの父さんも母さんに夜、番茶入れてあげて飲んでるよ。知つたことじやないけれど、心の中ではちゃんと注意しておいた。「とにかく、青大附中は変だ。絶対、変だ。なにがおかしいって、まず茶道の授業があるだろ。委員会活動はほとんど部活動と一緒になり評議委員会は別名演劇部なんだ。要するに学級委員会がいきなり下手な演劇やらかすようなもんだぜ。あとな、規律委員会つてのがあるんだけどな、こつちでは生活委員会とおんなじことしているらしい。ちゃんと週番もあるんだぜ。違反カード切つて制服のことぐたぐた言つだけじゃないんだ。あいつら、暇があると洋服屋に出かけて、『青大附中ファッショングラブ』つてもん、作るんだぜ！」

「『青大附中ファッショングランプリ』って何？」

全く謎だ。青大附中の理解できない組織関係に僕も思わず問い合わせ返してしまった。

「ほら、漫画ばっか描いて集まってる連中いるだろ。いかにももてないって感じの奴。そう奴らが「コピー取つて本を回したりするだろ。ああいことを、委員会の経費で堂々と落として、イラスト本作つてるんだ！ 佐川想像してみろ！ お前のクラスの水野さんがいきなり、漫画同人誌を生活委員会の主催で作り出した、なんてことになつたらどうする」

わつきたなんなら、描くんでなくて、モデルになつて描いてもらつほりじやないかな。

総田、そういう案もわつてきたんだつたらどうして利用しないのかなあ。

僕はさらに続く青大附中の委員会最優先主義疑惑を聞き流した。おとひつちゃんに内緒で、生活委員会をうまく丸め込んで、さつきたんをモデルにした「違反防止のファッショングランプリについて」みたいな冊子を作るよもちかければいいんだ。おとひつちゃん、喜ぶぞ。校則最優先主義にも反しないし、おとひつちゃんは舞い上がる。総田にも迷惑がかからない。一石三鳥じやないか、そういう風にわづして総田、利用しないのかなあ。もつたいたい。

核心に進むにはまだ十分くらい時間が必要で、僕も風邪がぶり返しそうな寒い廊下で足をばたばたさせていた。そんなに青大附中が変わつた学校だつてことを聞かなくたつていいのだ。総田だつて本音を言つちゃえば、

「どうみたつて情けない連中が、なんでこつも好き勝手やつてるんだばつかやつー。」

つてどこだらう。僕も聞いていて、面白そつだなとは思つ。やることは面倒そつだけど、これだけイベントが揃つていたら、水鳥中学の生徒も喜ぶんではないだらうか。

「で、おとひつちゃんは何て言つてたの」

僕は無理やり話を引き戻した。

「あいつか？　もう、度真面目の極地で話を聞いてたぜ。相当、あのうすらぼけ評議委員長と相性が合つたみたいでな、『ぜひ自分たちの代で、青大附中との交流を軌道に乗せたい』と烈火のごとく語つていたぞ。まあ、いつものことながら、どうでもいいことに熱をあげるのが関崎のいいところんだろうが、振り回される俺たちの身にもなつてみる。これからどうする？　顧問の萩野先生あたりに話を持つて行つて、摔倒するのか？　青大附中の連中は受験がないけどな、俺たちには地獄の公立入試つて奴があるんだ！　どうするんだよいつたい」

公立高校入試か。

そういうえば、総田は公立にするんだろうか、それとも私立に……。おとひつちゃんと対を張る成績なんだから、青大附属高校を受験しないとも限らない。ちなみに青大附属中学・高校とともに、青潟市では難易度ナンバーワンレベルの学校だ。僕にはおよびじゃない。

「総田、今のところ青大附属を受ける気ないのかなあ

「ねえよ、あんな金のかかるとこ、誰が行くかつて！」

即座に却下だった。

「俺はな、自由にやりたいことができる公立で十分なんだ。もつとも落ちたらしゃれにならねえけど、青大附属みたいなぬるま湯階級の連中としゃべくつてたら、もう腹が立つてなんねえよ。なあにが、自慢下に『奇岩城』だ？　女子と抱き合つてポーズとつてビデオ撮るなんて、お前らなにか欲求不満なんじやねえかつて突つ込みたくなるぜ」

女子と抱き合つてポーズ？　なあんだ、そういうことか。

総田には悪いけど、本音が透け透けだ。

さつきから総田は女子のことにやたらこだわつてたよなあ。やっぱり、川上さんと仲良くするだけではものたりないのかなあ。女子と抱き合つてポーズしてみたいのかなあ。なんか今話している

総田、かなり、欲求不満なんだね。川上さんも親切にしてあげればいいのに。ノートをノート一してあげるとかすればいいのにな。さつきたんみたいに。

長話をした割には、得るものは少なかつたといつのが正直なところだ。

要は、総田が青大附中の連中と相性が合わなかつたという、ただそれだけのことなんだろう。僕もそれは想像がつく。おとひつちゃんと仲よく話をしている評議委員長つてことだから、きっと器用な奴ではないだろう。かなりとろい奴だったのかもしれない。でもおとひつちゃんはそいつと仲良くしやべりつづけ、次回の青大附中訪問をOKしてしまつたといつ。それはそれでいいんじやないだろうか。どうせ総田が文句言いながらも、萩野先生にごまつてお願いすることだらうし、おとひつちゃんはそれを自分の手柄だと勘違いして、青大附中にせつせと通つことになるんだらう。おとひつちゃんの居ぬ間に総田は内川会長を懐柔すればいい。万万歳だ。

「佐川、もしあの学校に行くんだつたら、ひとつだけ注意しどけ」もう一度、声がひそやかに聞こえた。車の音が響き、聞き取れずに大声で聞き返した。

「注意つてなんだよ」

「ひとりな、ちょっと、やばいのがいる」

「やばいってなんだよ」

最重要情報かな。

みしつと天井が軋んだ。雪が積もつて落ちる寸前なのがもしかれない。

「一回田、一回田と共通して、評議委員にひとり、なんともいえず、いやあなた感じがするのがひとりいるんだ」

「ふうん、性格が悪いんだ」

「いや、そういうわけじやがないだろ。性格悪だつたら、うちの三上以上の奴はいない」

愛の裏返しだね。

この辺はつつこまずに僕も流した。

「さつき俺が、お茶を出してくれたとか言つただろ。評議委員の野郎連口バ

良道口才

（六）すこし濃い緑色のお茶を出してくれた。でね。

俺には一杯だったんだけどな、関崎には五杯くらい出したんだ

そんな飲んだらおなかかぢやほぢやほにならぢやう。

「それがな、左川

總田は少し黙(二)

「一杯目からは、その女子が十分」とにお茶を、関崎の分だけ代えていったんだ

女子？

なんか、総田の話には「女子」が絡んでいて困る。いつこのひて、半年前の学校祭でもこいやといつぱい経験した。また変な方向に話が進むといやだ。

「そのいやな奴つて、女子なの」

「そうだ。お前も見たらわかる。あの雰囲気といい存在といい、なんとも言えない」

総田はその女子に対し、それ以上話せなかつた。やはり、男たるもの言葉を慎みたいんだらう。言わなこつてことは、言葉に刃むかむかするタイプだつてことだ。

「総田、ひとつ聞きたいんだけど、その女子のお茶を、おどりつか
うってやうだつ。

「全部、無理して飲んでたな。あいつのつか、どうこうつけしてたんだ？」お茶は全部飲まなくてはならないとも思ってたのかよ。一気に飲み干すもんだから、その女子がすぐしゃしゃり出してきて、また濃いお茶を持ってくるんだ。で、関崎もしつかと飲み干して、

まるでわんこそばみたいことしてるんだよ

おとひつちやんらしいや。

人のうちで出されたものは、きちんと食べきらねばならないといふしつけをされていたのは、僕も知っている。おとひつちやんの性格上、そういうきつちりしたところは抜けていない。でも、お茶を五杯つてのも飲み過ぎなんではないだろうか。帰りのバスで、ものすごくトイレに行きたくなつたに違いない。

「でもそれは、その女子が問題あつたんじゃなくて、おとひつちやんに問題があつたんじゃないかなあ。飲み終えてからになつてたら、氣を遣つて出す人もいるしや」

「ああそうだな。うちの川上とは大違いだな」

やたらと川上さんの名前が出てくる。もう笑う寸前で僕は片腹を押えた。

「でも、あの女子は違うぜ。なんというかなあ、ねばつこい。じつと関崎の手元を見詰めていて、隣りでの評議委員長の茶碗がからになつていても全然気にせずに、ただ関崎だけ見つめてるんだ。まあな、悪いことしていいるわけじゃねえから僕も何も言わなかつたけど、とにかくお茶はちびちび飲むように心がけたぜ」

「変わつた女子なんだね。評議委員なの」

「らしい。一回田のご訪問時は俺たちも用心して、できるだけお茶を注がれないですむように、ほとんど手付かずにしておいたんだ。関崎もそうしてた。けどな、相手はもつと上手だつた。冷めたんだろ、つてことでまたお茶の準備をして、関崎の茶碗だけ持つしていくんだ。それも全く手をつけずにだぜ」

僕も行く時は、お茶を一切飲まないようにしようとした。

「けど、なんでおとひつちやんにだけ、そんなお茶注ぎ攻撃してくるのかなあ」 まさか、という直感が走つた。こういう時の僕の直感は百パーセント当たる。総田に答えを言わせたかった。

「まあ、あいつにも、新しい春が来たつてことかねえ。どうですかい、佐川の田那」

おとひっちゃんはさつきたん命だつて、知つてゐるくせに。

ラスト五分の興味深い情報を耳に納め僕は受話器を置いた。

すつかり風邪をぶり返しそうで、あわててベットにもぐりこんだ。母さんにばれたら大変なことになる。また、怒られて学校を休まなくちゃなんなくなる。学校好き嫌いあるかもしれないけど、僕は勉強以外学校つて大好きだ。

さつきおとひっちゃんは、あまり乗り気じゃない感じで僕を誘つてたよな。

おとひっちゃんに関する情報について、僕は誰よりも持つていてつもりだ。

なにせ付き合いが半端じゃない。幼稚園の頃からあいつは僕のことを守つてくれたし、今でも「雅弘、お前は俺の一番の親友だからなー」と言つてくれている。

おとひっちゃんが今、誰のことを好きで、誰を信頼していて、何をどうしたいか、不思議なくらいわかるのは、たぶん一緒に過ごした毎日の長さにあるのだろうと、僕は思つ。

そう、ほんどのことはそうだと思つんだ。

ただ、ひとつだけわからないのは。

どうして俺は、おとひっちゃんみたいな奴と親友でいたいんだろう。

もちろん理由はたくさんあって、数え切れないとくらいだ。小さいじろかの仲良しだからと一言で片付けることもできなくはない。けど、中学に入って以来僕としては、おとひっちゃんのお間抜けなところばかりが目について、かつてのかっこいいおとひっちゃんの姿が見えなくなつてきてる。自分でも、それはやだなあと思う。元陸上部だから運動万能は折り紙つきだし、成績は学年トップだし、性格さえ見なければかつこいい奴の部類に入るだろうし。

でも、おとひっちゃんがなんで、自分の行動がみえみえだつて

ことに気付かないのが不思議だつた。僕がいつも、おとひつちゃんのしたことについて影で動いていることすら、想像していないんだろ？。ばれないように気を遣つてはいるけれど、僕は総田としようと連絡を取り合つてはいる。いつばれてもしかたないのに。そうだ、さつきたんのことだつてそうだ。おとひつちゃんは堂々と隠しているつもりかもしれないけれど、実は当のさつきたんにも、好きつて気持ちを気付かれているなんて知らないんだろう。クラス全員にお見通しだつてことすらも。

まつたく、おとひつちゃんは僕よりずつと、ガキだとしか言いようがない。

影で立ち回つてはいるのが僕と総田だと知つたら、きっとぶつちがれるだろ？。

絶対に、これを知られてはならない。

僕はおとひつちゃんの親友でありたい、大好きなおとひつちゃんだと思つてはいたい。

でも、だんだん僕の中ではするすると下降気味な価値ランク。

「めん、おとひつちゃん。けび、どうしようもないよな。布団の中で思いつきりくしゃみをした。廊下にいた母さんに気付かれて、また苦い粉薬を飲まされた。ああ、やっぱり早く学校行きたいよ。

その気持ち悪い女子つてどんな女子なのかなあ。きっと兎をがぶつと食べてしまつようながらつちりした人なのかもしれないなあ。さつきたんとは正反対だよきっと。相変わらず今でも、おとひつちゃん、さつきたんの前に出るところに口、利けなくなるし。お茶くみの女子のことはなんとも思つてないよなあ。

おとひつちゃんがなぜ、僕を連れて行こうとしたのか。

ふたりで行こうと誘つたのか。総田じゃなくたつて、僕には見ええた。

ん。

今度はジュースを一缶、もつて乗り込もうよ。おとひりぢや

僕は口直しこ甘いみかんをもつて皮むき、せぬばつた

天井が果てしなく高い青潟大学附属中学の体育館。しかも広い。水鳥中学の体育館とは大違った。床もてかっているし、しかもつるつるだ。

スポットライトが天井全開の中、おとひっちゃんはひたすら体育館内を全力疾走していた。

ひとりではない。

もちろん僕でもない。

僕は入り口付近でもたれながら眺めていただけだった。

おとひっちゃん、息、切れないよなあ。

元陸上部でしかも長距離ランナーだったのだから。今はだいぶ身体もなまつたと言っているけれど、高校に入つたら陸上に復帰したいようなことを話していた。

一緒に背中にくつついて白い息を吐いているのは、伸びかけのスパート刈り頭をきりりと整えた、青大附中の男子だった。制服のブレザーではない。濃い青に白い線の入つたジャージ姿だった。

しかし、挨拶もそこそこに、

「じゃあ、少し一緒に走りませんか」

はないよな。

おとひっちゃんも即座にOKした。僕には理解不能だ。

何が楽しくて、「体育館三十周持久走」やろうって言つんだろう。

ふたりとも顔は険しい。がはがはと白い息を吐きながら、それでもフォームを崩さないところが、やはり運動部。あと五周回ればゴールだ。疲れてるなんならいいかげんやめろよ、誰も誉めるわけでもないんだから、と僕は思う。でもおとひっちゃん、無駄な努力が大好きなんだからしかたない。

けど、日曜だつてのになんでこんなことしてるんだろ。

後ろの方でまたひとり、入ってくる気配がした。髪の毛をお下げ編みにして、耳のところでくるくる巻いてカンフー映画の女の子みたいな感じにしている女子だった。この人はちゃんと制服できたらしい。軽く頭を下してくれたので、僕も帽子を脱いで挨拶した。

「水鳥中学の人ですか？」

おつとりした口調で聞かれて、僕もつい笑顔で答えた。

「あと、向こうのひとりと一緒に」

女の子はこつくり頷くと、黙つたまま持久走を観戦し始めた。青潟大学附属中学の評議委員かなんかだろう。唇が少し光っている。瞳もきょとんとしているけど大人みたいだった。なんとなくだけど、さつきたんに似てると思った。

持久走は大詰めだ。マッチレース、と思わず実況をしてみたくなつた。僕の前を走り抜けたふたりの顔を見るとまだまだ余裕が感じられる。ただちょっとだけ相手の男子、分が悪そうだ。歯を食いしばり、あごが出ている。おとひっちゃんはもくもくとフォームを変えていない。あと二周。

ちょっと相手が悪かつたよな。

勝利はまず、おとひっちゃんの手にありつてとこだ。

青大附中の彼も相当馬力あると思うけど、やはり陸上部上がりの長距離走者と勝負するというのは、かなり無謀だそんなこと知るわけないだろうから持ちかけたんだとは思うけど。おとひっちゃんの性格上、遊びでも手は抜かない。どんな時も全力投球。

たとえこれから、青大附中評議委員会主催で、お茶を注がれつつ交流準備会が行われるとしてもだ。

また後ろから人の入る気配がした。横目でちらつと伺うと、ブレザー姿の男子がひとりと、一緒に連れられてもうひとり女子が姿をあらわしていた。僕の隣りにいる女の子も同じく視線を向けた。男子の方は僕とその子へ礼をしてくれたけれど、もうひとりのポニー

テール女子はつんと向こうに向いたままだった。態度悪い。
もしかして、例の彼女だろうかな。

「よこよラスト一周。こいで声をかけなくちゃ。

「おとひっちゃん、勝負だ！」

はつと、隣りの女の子が僕の方を見た。

おとひっちゃんはまったく無視。しかし踏み出す足が心持速くなつたように見えた。たぶんラストスパートだ。

「健吾、がんばって！」

僕の隣りでちろつとえくぼをこしらえてみせ、女の子もかすかな声をかけた。もちろん体育館内には聞こえる。そいつ……たぶん健吾という名なんだろう……はその子に向かい、何かを言いたげな視線を送ってきた。

もしかして、おつきあいの人なのかな。

帰つたら総田にこの話どう伝えようか、ちょいとだけ考えた。ラストスパートの直線でおとひっちゃんは形相変えて一メートルくらいい引き離した。勝負をあきらめたのか、健吾くんは距離を無理に縮めず、立つたままゴールした。僕の立ち位置がゴールだ。

僕の目の前で、見事全力疾走。水鳥中学元陸上部の血は、見事に青大附中の覇者を倒したつてわけだった。

後ろで数人、まばらな拍手あり。立つたまま両膝に手を当てて、かがみこんではあはあ言つている青大附中の彼に、僕の隣りの女の子は近づいていった。

「おとひっちゃん、こんな本氣出してどうするんだよ。これからだよ

答えはない。とにかく、心臓が相当苦しいらしい。学生服を脱いで、ワイシャツ一枚汗ぐつしょりかいたままで倒れている。こういう時はタオルを渡すのがベストなんだろう。僕はおとひっちゃんの学ランを上からかけてやつた。ついでにポケットティッシュを袋ご

ト

と渡した。

「雅弘、ありがと」

僕はしゃがみこみ、まじまじとおとひっちゃんの横顔を眺めた。マラソン大会後に精魂尽き果ててぶつたおれでいるおとひっちゃんと同じだった。髪の毛は汗で濡れていた。息も大きい塊が白く浮かんで消えていた。

まったく、おとひっちゃん、手抜きできないからなあ。

「関崎さん、すげえ、あんたやっぱり、すげえよ」

おとひっちゃんよりもダメージが低そうな彼が近づいてきて、側にしゃがみこんだ。今度はおとひっちゃんをはさむ形でさつきの女の子が、僕の前に立っていた。ちょうど足首の細いところに田が行つた。すぐに逸らしたので気付かれてないはずだ。

「やっぱしなあ、生徒会でもこついうすげえ奴がいるから、水鳥中学のバスケ部つてす」いんだよなあ。ほんと、負けました。俺、尊敬します！」

うちの学校では絶対に言つてもらえない台詞だよな。おとひっちゃんが腕立て伏せの要領で起き上がつた。そのまま座り込み、いつのまにか円陣をこしらえている集団ひとりひとりに田を向けた。

「いや、俺もひさびし、真剣勝負できて、すげえ楽しかった。ありがとう」

だいぶ息も落ち着いたらしい、座つたまま、おとひっちゃんは手を差し伸べた。勝負相手の彼も、唇をぎゅっとみ締めたまま、それでも笑みは隠し持つたまま、手を握り合つた。また、周りから拍手が沸いた。いつのまにか青大附中評議委員会の連中がみな集まつていたらしい。

あと、ぽんぽんと一回、タイミングのずれた手招き。

「時間です、立村先輩、早くしてください」

盛り上がりがってるのになあ。

握手中のふたりが、その声に思いつきり顔をしかめていた。おと

ひつちやんはすぐ無表情にもどったがもうひとりの彼は「へへへしげに一点を見つめていた。例の声が聞こえるとこひう」。

「そうだな、では、場所を変えましょ。とつあえずみな一年D組へ集合」

別の声……男子だつた……が後をひきとる格好で指示を出した。円陣を構成していた連中がひとり、ふたりと固まって入り口に流れしていく。最後に残つた僕とおとひつちやんと、勝負相手の健吾くんと彼女らしく女の子、そしてポニー・テールの女子がひとり。

「一緒にきてくれないか。一年の女子たちと一緒に準備手伝つてほしいんだ」

「わかりました」

廊下から聞こえるのは、やはり指示を出していた男子の言葉。

ポニー・テールの女子は僕たちをじつとにらみ据えた後、ひとつひとつを見つめるような形で、入り口から出て行つた。

なんか、変だなあの人。

僕だけじゃない。残つていた他の連中も同じことを考えていたらしい。姿が見えなくなつたとたん、ほおつと息をついたのがその健吾くんだった。

「つざつてえなあ。気持ちいいことやつてるとこだつてのに」

意味ありげに、隣りの女子へ視線を投げ、すぐに唇を一本に結んだ。

「健吾、じゃあ私、部室で待つてるね」

「ああ、すぐ連絡するからな」

女の子は僕とおとひつちやんにまたこくつと礼をした。手を口元に当てて僕の方をじつと見つめ、また笑つた。

「ほり、早く行つちまえ」

照れ隠しつてやつだな。これ。

浅黒い肌が少しほてつてているみたいだ。これは僕がよく、総田を恋愛ネタでからかう時、よく見る肌の色だった。

見送つた後、彼は膝をまたぽんぽんと叩いた。

「じゃあ、一年D組まで案内します」

おとひつちゃんも急いで学生服をまとい、ボタンをかけないままジャンバーを羽織った。おまぬけな格好だ。おとひつちゃんの名譽のために、この姿が総田一同に見られなくて本当によかつた。つくづくそう思った。

生徒玄関ロビーに赤いじゅうたんが敷かれていたとか、廊下を歩いてもそれほど寒くないこととか、壁が白く明るいこととか、目が奪われっぱなしだった。僕もほとんど、他の学校に足を踏み入れたことがない。どこの学校もみな、木目の焦げ茶壁、風が吹き抜ける窓、冬場に廊下出る時は、防寒を完璧にしないとひどい目に合う。学校ってそういうもんだと思い込んでいたんだけど、やはり青大附中は別世界だ。

やつぱし、私立は違うよな。

「さつきの人、評議委員じゃないの」

「違うつす」

またまた、照れた風に答える健吾くん。後ろで小さく、

「雅弘、黙れ」

とささやくのはおとひつちゃん。はしゃぎ過ぎと思われているようだ。おとひつちゃんは自分で仕切りたい性格だ。その辺は忘れないようにしておかなくては。

「あ、今日は最初だけ顧問の駒方先生がいますけど、すぐにいなくなつてあとは、俺たちが好きにやつていつてことなんで、『気楽にお願いします。あと、それとですね』

敬語を使つたり妙にフレンドリーになつたり、変わつた男子だ。

「もし、無理に飲みたくないとか食べたくないとかだつたら、一切無視していいです。まじで俺もいらんもの飲めつていわれたら、相手にぶつかけるし」

ははん、例の「お茶五杯わんこそば事件」を知つてゐるんだな。

隣りで学ランの金ボタンを必死にかけつつ、おとひつちゃんは無言だった。

答えられるわけ、ないだろ？

一応僕の提案で、おとひつちゃんと僕の分、缶コーヒーを一本用意してきた。ちゃんと領収書ももらつて。緑色濃いお茶なんて、怖くて飲めないし。

階段を上がつて一番奥の教室へ向かつた。扉式の教室に健吾くんとおとひつちゃん、それからきんぎょのふんみたく僕が入つて行つた。すでに青大附中の評議委員が八人くらい、机を「の字型にならべて席についていた。各一席ごとに、全員の分、お菓子が紙皿にセツトされていた。なんとなくお誕生会の延長つて感じだつた。椅子もみな、白っぽい。いろいろと名前の彫りこみとか、カシニング用の英語の落書きも残つていたけれども、雰囲気がさつぱりしているのだけは強く感じた。

まずは、教壇のパイプ椅子に腰掛けてくる、おじいさんっぽい先生に、おとひつちゃんが挨拶した。

「水鳥中学生徒会、副会長の関崎乙彦です。本日はお招きいただきありがとうございました。よろしくお願ひします」

元陸上部。腹から出した声。僕の方をちらつと見て続けた。

「今日は生徒会外なんですが、涉外を担当してもらつてる佐川雅弘も連れてきました。どうかこいつもよろしくお願ひします」

ちゃんと僕だって挨拶するつもりだったけど、無理やり肩を小突くようにするのはどうかと思つ。ま、そういうことがおとひつちゃんだけだ。

先生は口を結んだまま、にこやかに僕らを眺めていた。ふんふん頷きつつ、

「ひつりんや、よく来たね。青大附中は委員会活動の方が活発だから、今回評議委員会とのお付き合いをお願いすることになつたけれども、堅苦しことはいいからな。ゆつくりと、まずは友だちにな

つて帰つても、うれれば大成功だよ。さ、どうぞ」「やります

右の一一番端っこにいる、色のやたらと白い人形みたいな男子生徒に領いてみせた。

「委員会の交流会とは云つて、今日は日曜日だ。無理に堅い話をす
る必要はないよ。私は職員室で待つていてるから、ゆつくつとおしゃ
べりをしていきなさい」

立ち上がった男子生徒は、きちんと一礼して、先生を見送った。
他の連中もつられて起立。もちろんおとひっちゃんも、僕も。

「すいぶん、いいかげんな学校だよなあ。 気楽なことは確
かなんで、僕としてはちょっとほっとしたんだけど」

扉が閉まり、足音が消えるまで青大附中の連中は立ちっぱなしにな
つた。だいぶかすかに聞こえる程度のところまで、僕ら水鳥中学ふた
りに向き直つた。

「今日は本当に、わざわざいらしてくださつてありがと」「やれこま
す」

おとひっちゃん、そして僕にまた一礼した。先生もいないのに、
「すいぶん形式ばつたことする奴だ」

僕たちふたりの席は、窓際だった。首すじが冷える以外はあつた
かかつた。

青大附中の制服は少し茶の入つた灰色のブレザーにネクタイだつ
た。遠めで見ると、会社に向かうおじさんたちに似てゐる。おとひ
っちゃんがああいう格好をしていたら、本当に歳がわからなくなつ
ちゃうんじゃないだろうか。思いつつ、僕はお菓子をつまみ始めた。
チョコレート、ポテトチップス、クッキー、家でお密さんに出すよ
うなお菓子ばかりだつた。

隣りのおとひっちゃんは、手をつけずにノートとカンペ
ンを取り出して、じつと例の蠅人形男子生徒に合図を送つていた。
どうやらそいつが、総田の言つ「うすらぼけ評議委員長」らしい。
胸に貼り付けている金の名札を読むと、「立村」とかかれている。「

たちむら」だろうか、それとも「りつむら」「だろうか。僕の視線に気付いて、一瞬目を合わせた。でもすぐに逸らし、隣りの男子連中と一言二言話をしていた。紙コップにジュースを注いでくれたのは男子だった。お茶ではなかつたみたいでほつとした。かばんの缶コーヒーも無事なようだ。僕が座つている席は、蠅人形の彼の斜め左だつた。真つ正面にいるのがおとひつちゃん。今日の話し合いはたぶん、おとひつちゃんと、蠅人形との語り合いになるんだろうな。眞面目なんだろうけど、やつぱり、すこしほーっとしている感じするなあ。

僕は少し考えつつも、注がれた炭酸のグレープジュースをなめた。青大附中の評議委員……いわゆる学級委員……がなぜ、そんなに交流を求めるのか、僕にはよくわからなかつた。おとひつちゃんに前もつて聞かせてもらつてはいたけれども、そんなんだつたら生徒会同士で友だちになればいいじゃないか。けど、青大附中の評議委員会は顧問の先生も、その形でいいと思つてゐるみたいだし、あまり深いことは考へない方がいいんだろう。

なによりもおとひつちゃんの顔ときたら、すっかり溶けている。水鳥中学生徒会室ではいつ爆発してもおかしくない地雷状態の顔してゐるくせにだ。

もしかして、おとひつちゃん、青大附中でものすゞくリラックスしてゐる？

口を尖らせながら、おとひつちゃんはさらさらと何かを書いていた。ページが左側、ぼわつとふくらんでいた。

「あの、水鳥中学生徒会からの、まず挨拶をしていいですか」

おとひつちゃん、やっぱり仕切り屋の本能發揮だ。大抵水鳥中学生だと、総田や川上さんが「けつ」っとばかりに冷たい相槌を打つのだろうが、やはり青大附中、その点大人だ。全員、きちんと机の上に手を組んで、身を乗り出してきた。

「すみません。この前の続きですね」

みな敬語を遣つてゐる。蠅人形がかすかに笑みを浮かべてゐる。

細くて人形みたいだつた。委員長らしくない。

「そうです。まず、この会は水鳥中学生徒会と青大附中評議委員会の交流準備会、だと思つてます。それでいいですか」

当たり前だら、そつとつてたくせにさ。

ばかみたいなこというおとひつちゃんだ。僕はチョコレートを口に放り込み、がりりとかんだ。

「そうです。まだ、しばらくは、『交流準備会』扱いでやりたいと思つています」

「それはいいんですが、うちの学校は」

おとひつちゃんは言葉を切り、紙コップのジュースを一気に飲んだ。おとひつちゃん分はどうも炭酸入つていなかつたらしい。オレンジジュースだつた。「やっぱり、公立なので、公立高校入試があります。僕の学校では、生徒会の改選が十月にあります。その後は三年生が一切参加できない形になります。受験勉強があるからです」

「そうだよ。おとひつちゃんの言つとおりだ。

「たぶん、合同で何か集まりができるとしたら、一学期だけじゃないかと思います」

「そうだな。けど、誰がこれ提案したのかな。

たぶん、総田あたりからの案だらう。おとひつちゃんは総田に吹き込まれたことを、自分が考えたんだと思い込んで話すくせがある。「また、六月の最初に中間試験、七月の頭に期末試験があるので、できれば五月か六月の半ばにやつてもらいたいと思つてます」

「思います思いますつて、おとひつちゃん、見てみろよ。他の連中よくわからない顔しているよ。こついう時はちゃんと相手の学校に説明させてからの方がいいつてのにな。

「つこみはしなかつた。だって、おとひつちゃんの顔、見事に真つ赤だ。さつき走つた後だとは分かつてゐるけれども、なんかかんかあるとすぐ頬を火照らせるのはみつともない。こついう場所ではむしろ、総田の方がずっと分かりやすく説明できるだらうになあ。

けど、意外にも、目の前の蠅人形委員長は笑みを絶やさなかつた。遅れてきた女子ふたりに席に着くよう、指先で合図し、その後はずっとおとひつちゃんを見つめていた。総田も言つていたけれど、前回、前々会の集まりでは、妙にこいつとおとひつちゃんが盛り上がりつていたらしい。なんか、わかるような気がした。

おとひつちゃんのせられやすいからな。

おとひつちゃんのわかりづらい説明に見切りをつけたのかどうかわからない。でも蠅人形委員長はもう一度大きく頷いて、隣りの男子にまたささやいた。「あらよつと」とつぶやいた相手方は、コピーした紙かなにかを渡している。

「ありがとうございます。実は今日、青大附中評議委員会でもあまり話が通じていない人がたくさんいるので、あらためて説明します。関崎くん、繰り返しになりますけれど、よろしくお願ひいたします」やつぱりわけわかんなかつたんだ。なるほどな。蠅人形委員長さんもおとひつちゃんに手を焼いてるんだ。

僕は立村評議委員長の顔を見上げた。いわゆる男子たちがしていいる普通の髪型に前髪といった感じだつた。ただ色が白すぎて、一瞬女子っぽく見える時がある。女子の好きな漫画だつたらきっと人気ものになりそうなんだけど、男子からすると、すぐに骨折しそうでめんどくさそうな奴に見えた。僕もそう思われているとこ、あるのかもしぬないけれど、幸い学習委員のみの担当だから目立たないですむ。青大附中評議委員長というのはいやおうなしに目立たなくてはならない地位だから、大変だろう。ちよつとだけ同情した。

「それでは、説明します。始まりは去年の十月に、学校祭を通じて水鳥中学生徒会のみなさんが青大附中生徒会を訪問してくださったことです。その時に、水鳥中学生徒会顧問の萩野先生と、評議委員会顧問の駒方先生がぜひ一度交流みたいなことを行いたいという話合いを持ったそうです。この段階ではまだ、評議委員会の出番はありません

「そうなんだ。最初は生徒会きつかけだつて言つてたもんな。

立村評議委員長はちらつと僕に目を向けた。すると僕のひとつ置き隣りに座っていた女子がチョコレートをふたつみつ、僕の紙皿にのつけてくれた。包み紙が机に山積みとなっていたのをチェックしたんだろうか。神経質な奴らだ。

「ただ、青大附中の場合、生徒会よりもむしろ、委員会活動の方に力を入れているところがあります。通称『委員会最優先主義』と言われています。先日関崎くんにはお話しましたが、部活動が低迷している理由として、運動部に入りたい人がみな委員会活動に吸い取られてしまうという問題が挙げられています」

ちつと、舌打ちする音。発信源はどこだと覗くと、僕の斜め左の席でふんぞりかえっている健吾くんの姿。ジャージ姿。浮いている。仲、悪そうだなあ。眞付いたのか、むらつと視線を健吾くんに向ける評議委員長。

「そこで、今年からは他の中学と交流を持つ時にお互い部活動のレベルアップも図れるような仕組みをつくりたい、と僕は考えています」

核心だ。

おとひつちゃんと話していく今ひとつわからなかつたことが、やつと解けた。

「生徒会同士での交流もいいとは思つたのですが、ただできれば、他の部活動や委員会活動、それと個人個人の生徒たちとのいい付き合いもできればベストではないか、というのが僕なりの考えです。もちろん僕の任期中にすべてできるとは思つてしませんが、せめて踏み出すためのきっかけくらいはこしらえておきたいというのが本音です」

なんていうか、無駄なこと考えてるよなあ。おとひつちゃんとおんなじだ。

僕はもうつたばかりのチラシコレートをそりと口へ放り込んだ。

「そこで、今回あえて評議委員会の集まりにお招きしたのは、その交流準備会をこれから九月までの間、少しずつ進めていきたいから

です。今、関崎副会長もおっしゃられましたが、公立と私立との学校事情はみな異なりますし、決して無理にということは言えません。でも、何度か顔を合わせて互いの学校の違いや問題点について話し合つ機会を持つことができれば、もつといい方法が見つかるはずだと信じています。ここでもうまくいい方法が見つかつたら、あらためて生徒会同士の改まつた交流会を行つてもいいと思いますし、六月中旬くらいに一般生徒たちを含めた集会を行つても面白いでしょう。でも、急がないでゆっくりと、先を見据えて話し合つことが、今の両校には必要なことではないかと思っています。だいたいこんなところはどうでしょうか」

最後の一言に力をこめ、立村評議委員長は席についた。こういう時拍手するもんなんだろ?けれど、他の連中は黙つて聞いているだけ何も言わなかつた。悪意がなさそなのは丸見えで、立村評議委員長の両隣にいる男子たちが軽く背中を叩いたり小突いたりしているのは見える。おとひっちゃんも真剣にノートを取つていた。別に取る必要もないことなのに妙な奴だ。唯一、椅子にふんぞりかえつている健吾くんが、僕たちの方をみて、肩をすくめて見せているのが笑えた。

暖房効きすぎで暑い。

「もう一つ付け加えておくと」

今度は意味ありげに、立村評議委員長は黒板の上にくつついているスピー カーを指差した。

「今日話している内容なんですが、全部、職員室の駒方先生のところに筒抜けです。別に聞かれてましいことしゃべるわけではないのですが、その点、心に留めておいてください」

「だれか驚けよ!」

知らないのは僕だけらしい。おとひっちゃんもちらつと視線を向けただけだ。当然青大附中の評議委員連中も落ち着いたものだつた。僕ははつとして、立村評議委員長の顔をまじまじと見詰めた。

俺だけのために、今の長つたらしい演説聞かせてくれたつて

わけか。

蟻人形には脳みそが入っていたことだ。人を見かけで判断してはいけない。僕は深く反省し、炭酸の抜けたジュースをちびちびなめた。

ちゃんと先生に盗み聞きされないとわかつていても、青大附中の評議委員連中の発言は遠慮がなかつた。敬語を遣つたり僕たちに「関崎くん」「佐川くん」と呼んだりするところは、いろいろ考えるところもあるのかなと思う。話し合いそのものは面白かつた。おとひっちゃんも打ち解けて言いたい放題しゃべっていた。水鳥中学生徒会室にいる時よりも楽しそうだつた。向かい側の立村評議委員長に何度も発言を求めたり、いきなり話を脱線させて運動部部活動関連の話に燃えたりしている。

「うちの学校は、バスケ部だけが誉められてますけど、他の運動部もそれなりにがんばつてます。僕も、前は陸上やつてましたけれども……」

ひとり、浮き上がつている奴。健吾くんがこのあたりの話題だけは目を輝かせておとひっちゃんを見つめている。机から身を乗り出さんばかりというのが笑えてならない。

「だから、運動部の練習試合などを通しての交流会を行つてのもいいんじゃないでしょうか」

「賛成賛成！」

立村評議委員長は静かに発言源の健吾くんに視線を送つた。

「そうですね。やっぱり、水鳥中学バスケ部の人たちと一度、まともに話をしてみたっていうか、練習の方法とかそういうことについての話を聞かせてほしいってか。うちの先輩連中だとほとんど、話が盛り上がりがないし、レベルも上がらない。やはり外部の風がほしいんですね」

わざわざ立ち上がり、おとひっちゃんにだけ話し掛けている。心なしか、他の男子評議委員連中は冷めた顔で頬杖ついていたりして

いる。仲、よくないんだろうな。きっと。

「そうだな、新井林。まずは三月あたりに部活動同士の交流から開始した方がいいかもしない。そのあたり、運動部の顧問の先生に頼まないと難しいですか、関崎くん」

新井林が、あいつの苗字つて。

健吾くんもとい、新井林くんは鼻を「じじ」と指で一すり、席についた。

おとひつちゃんの方を見る。

シャープを何度もぐるぐると回している。

「難しくないと、思います」

「どこがだよ！」

おとひつちゃんは言葉を切って、立ち上がった。また演説だ。

「公立受験関係が絡まなければ部活動関係での交流は問題ないと思います。水鳥中学の場合、一般生徒はあまり活動に关心がないので、もつと情熱のある人たちを中心に動いた方が、最初はいいと思います」

要するに、部員同士で友だちになつてもらえば十分つて奴だな。

けど、どうやって顧問のみなさまを説得するんだよ。また総田に尻拭い頼むのか？

いつも総田に

「また関崎のおぼっちゃんに押し付けられたぜ。関崎よりも俺の方が先生転がしできるからか？ しかもあいつ、自分の手柄だと勘違 いしてんんだぜ。ま、そういうとこがあいつだし、無理に俺も文句 言つ気ねえけどな」と愚痴られている。

「最初はできれば、バスケ部でお願いできますか」

立村評議委員長はもう一度、新井林くんに細い目線を向け、おとひつちゃんに答えた。

「今、うちの新井林も発言していましたが、青大附中で今少しづつ、

部活動のレベルアップが叫ばれます。新井林は次期青大附中バスケ部を率いることが義務付けられます。評議委員でかつバスケ部ということだと、ちょうど「石」一鳥ということで、かなり活動に幅が出るのではないかと思います。いきなり繋がりのない部活動と交流活動するのなんだとと思うんですが、もしよければ、ぜひそちらからお願ひしたのですが、どうでしょうか

ふかぶかと一礼した。

「新井林」と立村評議委員長が口にするたび、他の連中が顔をしかめるのが目立つ。ここにいるのがほとんど、一年評議委員だと考えると、相当新井林くんは、青大附中評議委員会で立場のきつい思いをしているのだろう。相性が合わなさそなのはわかる。きっと新井林くんも蠍人形立村委員長を馬鹿にしているに違いないし、そういう気持ちも僕にはわかる。当然だ。

まあおとひっちゃんのことだから、大喜びで受けれるんだろうな。

「わかりました。バスケ部交流が成功したら、今度は陸上部でお願いします」

おとひっちゃんもまた、頭を机につくぐらい下げた。

総田のしかめつらが思い浮かび、僕はふとため息をついた。なんとなく気になっていたのだが、ジュースやお菓子を注ぎ足してくれる連中……男子も女子もいるが……の中に、体育館で田にしたポニー・テールの女子がいなかつたのはなぜだろう。ねめっちいまなざしと納豆みたいな匂いのしそうな感触。

僕はあまり女子の悪口言うの好きじゃない。けど、さつきの持久走後、体育館の中で初めて、「いるだけでむかつく」という感情を経験した。

お茶のわんこそば事件って、たぶん。

間違ついたら恥ずかしいので口には出さないでいた。

さつき立村評議委員長に「女子たちと準備を手伝ってくれないか」と指示されていたところみると、学校の中にはいるんだろう。

待ち伏せしてゐるなんて言わないだらうな。

いないんだつたらそれに越したことはない。おとひつちやんも安心してジュースをがぶがぶ飲んでいるようだし、隣りの青大附中男子にもいろいろと語つてゐる様子だし。僕だけがひたすらチョコレートを食べつづけているだけだ。

ふと、斜めに位置する立村評議委員長と目が合つた。今日、何度目だらうか。

妙に僕の方を観察している。でもすぐに逸らす。

何か言いたいんだつたら言えぱいいのにな。

生徒会と関係ない僕をうさんくぞく思つてゐるんだろうか。

それとも、やたらとチョコレートばかりぱくついている僕がかしく見えるんだろうか。

全くしゃべらないわけにもいかず、食い気をそこそこ、隣りの席の男子と互いの学校について話したりしてゐた。あまり生徒会関係のことへ突つ込まれないでよかつた。なにせ僕は万年学習委員なんだから。

「今日は女子の参加者つていないので、

いきなり無言になるのが気になる。

「これからはどつさり参加すると思つけど、でもなあ。今日は特別な事情があつてな」

意味ありげにむつり顔でささやく隣りの男子。一年のバッチを胸につけていた。いろいろ、青大附中にも事情があるんだろう。

全部先生に筒抜けになつてゐるにも関わらず、みんなそんなこと忘れてしゃべりまくつてゐるうちに、一時間くらい経つた。立村評議委員長が立ち上がり、心持スピーカーに向かう格好で締めのお言葉を述べた。

「では、第一回、青大附中評議委員会と水鳥中学生徒会の合同交流準備会を終了させていただきます。次回はお互の期末試験が終わつた頃を予定してます。できるだけ早く行いたいですね。関崎くん」

俺の方ばかり見てたくせに、なぜおとひっちゃんだけなんだろう。

でもとりあえずはこれにて終りだ。

「ほんちこや、どうもお招きいただきありがとうございました」「空の紙コップとペットボトル、食べ散らかしたお菓子包み、すべてを男子連中がみな、燃えるごみ、燃えないごみにより分けて片付けていた。女子のひとりがこいつそり身をかがめて出て行つたのを僕は気になつて田で追つた。窓辺に近づいて見下ろすと、すうつと伸びた雲がくるくるうねつてているのが見えた。晴れている。空はすっぽりしている。今日来た時には、雪がゆるみかけていた。道が悪くなつてないといんだけどな。

立村評議委員長が例の蝶人形みたいな顔をほこりばせるようにして、おとひっちゃんに近づいた。

「本当に今日はありがとう。また、来てくれるよな

いきなりこいつ、ため口たたいてるよ。

おとひっちゃんはそういうところ、礼儀を重んじる性格のはずなのだが、僕の気付かないところで立村とお友だち感覚を通じ合わせているらしい。

「ああ、もちろんだ。三月、絶対ここに来る」

「それまでには、できるだけ青大附中の方も公立にあわせられるようタイムスケジュール組んでおくから」

「どうも、助かる。じゃあまた」

ぶつきらぼうながらも、おとひっちゃんは機嫌よく答えた。僕の見る限り、生徒会関連でここまで顔をほこりばせているところは見たことがなかつた。情熱の炎だけが燃え盛りわめきちらしているところばかり覗いていたせいか、なんとなくおとひっちゃんが違う人みたく思えた。

「それでは、またあらためて」

他の一年男子たちに片手をあげて合図すると、立村評議委員長はすばやく扉を開けたまま教室を出て行つた。

「ごみの片付け終わつてないのに先に帰つちゃうんだ」「ばあか、何考てるんだ」

「こつんと小突かれた。

「最初に言つてただろ。附中の委員長、顧問の先生に終わつてから報告しに行くつてな」

ああそつか。スピーカーで丸聞こえなんだもんな。スピーカーの電源切つてもらわないとしゃれにならない。

ひとりだけ、片付けに入らず僕たちをじつと見つめている視線に気付いた。しゃつきりした髪型の健吾くんだつた。

「あの、すいません、いいつすか」

どまじめに、僕たちに近づいてきて、どすの利いた声でささやいた。

たぶん、ビニール袋を結んだりしている一年生たちには気付かないだろつ。

「これから、少しだけ時間もらえないつすか」

時間はある。バスで帰るつもりだけども、たぶん本数はまだあるだろう。チケット済み。

あとはおとひっちゃんの気持ち次第だが今なら何でもOKだろう。

「別にかまわなければ、何か」

「一年連中にはばれないように、少しお話したいことがあるんだけど」

敬語と友だち言葉、混ぜ合わせた感じの、微妙な言い方だ。

「バスケ部の交流会のことか」

さすが元陸上部。運動部に関する話題にはアンテナがはたらくおとひっちゃんだ。まだ頬が緩んでいる。ひきしめてない。

「それもありますが、しかし」

健吾くんは時計をちらつと眺めた。教壇側で、視線の塊がぶつかつてくる気配を感じた。他の男子三人、じとっと健吾くんをにらみついている。

「新井林、何しゃべってるんだ」

「あ、すんません、じゃあお先に」

「（）だけ大声で。おとひっちゃんにはかすかな声で。

「じゃあ、ちょっと玄関ロビーのどこで待つてもらえますか。そこから案内します。今日は俺が水鳥中学の人たちの案内役です」

「じゃあ別に隠さなくていいのにな。

僕は、おとひっちゃんが頷くのを待つて、大きく（）べつした。

健吾くんがわざとらしくでかい声で、

「じゃあ、（）み捨て場に（）み捨ててきます。それでいいですか」「も」も、「曖昧な返事をする一年生男子。やはり（）の学校も、人間関係いろいろあるんだね。隣りでおとひっちゃんは、机をきちんとならべ直しながらつぶやいた。「やっぱり、やる気のない奴は連れてこれないってことだ。わかったか、雅弘

単に総田に邪魔されたくないんだ。せっかく手に入れた天国みたいなとこ」。

挨拶して廊下に出た。健吾くんに対しても、ずっと愛想よく、笑顔一杯の返事が返つて来た。つてことは、また来てもかまわないつてことかな。

言われた通り僕とおとひっちゃんは、生徒玄関のロビーで健吾くんを待っていた。でかい柱の周りを囲むような椅子が備え付けられていた。二年たちが片付けをしている間に、健吾くんが帰り送つてくれる手はずになつているらしい。

「雅弘、今日の会、どう思つた

「おもしろかったよ、おとひっちゃんもそうだ」

「まあな」

おとひっちゃんはそれ以上何も言わなかつた。最近無口になりつつあるおとひっちゃんだけ、「青大附中交流準備会」に参加するに当たつてはかなり熱心だつたと聞く。もちろん総田から情報もあるし、僕が観察したものもある。とにかく燃えている。

「やつぱり、学校全部暖房入ってるつていいよね。風邪ぶり返すか
と思つたけど、大丈夫そうだ」

「雅弘、もう大丈夫なのか」

話がそれた。おとひっちゃんはかばんから、すっかり冷えた缶コ
ーヒーを僕にくれた。

「とりあえず飲まずにすんだからな」

「よかつたよ、ほんとにね」

深い意味はある。あえて言わないのがおとひっちゃんだ。
なにはともあれ、「お茶のわんこそば事件」が繰り返されないで
よかつた。

さつそく一気に飲もうとした。口をつけたとたんだった。

「関崎さん、待つてください！」

「関崎さん？」

おとひっちゃんのことをそんな呼び方する奴は、僕の知つている
限り全くいない。

女子の声だった。妙に棒読み調、端々に険しいものが響く。
隣りのおとひっちゃんと顔を合わせる。明らかにおとひっちゃん、
顔色が鈍く変わっている。心持、顔が四角くなつた風に見えた。

「呼んでるの、誰？」

「隠れられないか」

隠れられるわけないよ、何言つてるんだよ！

呼ばれた以上は振り向かないと失礼だ。僕が先に顔を向けた。向
かって右側に伸びている階段を降りたところで、紺色のワンピース
姿の女子が何かを抱きかかえて立つていた。

「おとひっちゃん、女子がいる」

「わかってる」

小さい声で答えるおとひっちゃん。まだ振り向いてはしない。し
かないので、僕が先に声をかけた。

「関崎はここだけど、何か用ですか」

「私は関崎さんに用があるのです
すごい失敬な女子だ。」

一步、また一步と近づいてくる。僕は片手でおとひっちゃんの膝を叩いた。なんかわかんないけれど、僕の片手に握り締められる缶コーヒーが少しこぼれた。

あの子だ。

納豆みたいなまなざしを向け、にこりともしないで、じつとにらみつけていた女子だつた。一瞬誰かわからなかつたのは、髪の毛を長く解いていたからだつた。腰まで伸びる髪の毛。どろんとした瞳の色が怖い。幽霊が取り付きそうなおかっぱ髪の人形だ。夜中に髪の毛が伸びそうな市松人形だ。紺色の上下繫がつたスカート姿で、とうとうおとひっちゃんの前に立ちはだかつた。距離として五十分チくらいの接近。かわいそうにおとひっちゃん、腰を抜かしたみたいで立てないでいる。

「また、お会いできたのですね」

手元の物体が、妙に毒々しい薔薇みたいな花の鉢植えだつたと気が付いたのはこの時だつた。

おとひっちゃんはその子の顔を見ないで、花ばかり見つめている。一言、

「ああ、この前はどうも」

「私は今日、男子たちに今までずっと閉じ込められてました。せつかくお会いできるのに、出るなど言われてました。でもやつと、関崎さんにお会いすることができました」

「ああ、こちらこそ」

完全におとひっちゃん、思考能力失っている。

鉢植えには白いビニールのカバーが半分かかつていて、手提げみたいになつていて。しかし顔を出しているのは、見たことのない平べつた花だつた。一見、花なのだけれども、真つ二つに切つたキヤベツに色づけしただけのようにも見える。ぐしゃぐしゃと薄い紙

を折つて、ティッシュの花を作つて卒業式の準備をした、そんな感じの花だった。一輪だ。

「私はずっと、男子は救いようのない馬鹿か不細工しか存在しないと思つていました」

ゆつくりと手提げ部分をおとひつちゃんに差し出す。

「立村先輩だけはまともだと思っていましたが、結局新井林のような馬鹿男子だったことを知りました。そういうものです。男子はみな狂つてます」

いや、狂つてているのは……。

うつかり変なことを口走つたら何をされるかわからない。たぶん彼女は僕の方なんて一切眼中にないだろう。かすかに夢を見ているよつな、酔つ払つたよつな……酔つ払つたことなんてないけど、うちの父さんが酒飲んだ時の状態に似てるので……目をしている。学校で酒飲んだなんてことないだろうな。

おとひつちゃんも何かを言いたそうだったが、言わない。単におびえてるだけに決まってる。「でも、関崎さんだけは、まともだつて信じられます。人間として、男として、確かな私のローエングリン様として」

ローエングリンってなに？

身体をひくひくさせているおとひつちゃん。片手で僕の膝をなんどかつついている。でも僕だつて怖い。女子にここまで接近されるのも経験ないけれど、なぜかこの子がいると空気がゼリー状になりそうで苦しい。

「どうか、また、いらしてくださいませ。私、関崎さんのことをずっと、人間らしい人間のいない青大附中でお待ちします。それまでどうか、この花を私だと思って、お側に置いてくださいませ」

完全にこの子、変だよ。おとひつちゃん。

相槌を求めるけど、おとひつちゃんはただ、口をあけたままじつと花を一点凝視しているだけだった。きっとどうしていいのかわからんないんだ。僕だつてそうだろう。これがいわゆる「恋の告白」

だつたら、僕だつて氣を利かせて椅子から立つただろ。せめて一言、

「すみません、関崎さんとふたりにしてもらえますか」

くらい言つてくれれば。でもこの女子はそういう手続きを一切、取つ払つている。単刀直入に、演劇の台本みたいなしゃべり方をしている。今時こんな白々しい台詞のラブストーリー、ないぞ。

僕はあらためて思い当たつた。

なんで僕をおとひっちゃんが誘つたのか。

なんで、僕と一緒に来たかつたのか。

三度もこんな、おぞましい迫られ方、したくなじよ。わかるよおとひっちゃん。

ドラマに取り込まれてしまつたおとひっちゃん。

僕だけが現実の視聴者だつた。

早く逃げようよ、おとひっちゃん。

チャンネルを替えたい。僕は一気に缶コーヒーを飲みほした。

すん、と花の手提げをひつたくつた。結構重たかつた。

「おとひっちゃん、良かつたよね。この花、さつきたんにあげなよ」

市松人形っぽい女子を背に、僕はあらためておとひっちゃんに手渡した。

「さつきたんつて花、大好きだつて話してたんだ。きっとプレゼントされたらすつゝべ喜ぶよ。ほら、せつからくだからもうおうよ。な」

肩越しにちりつと振り向き、僕お得意のガキっぽい笑顔を繰り出した。

「「めん。おとひっちゃん、こつこうの慣れてないからびっくりしてたけど、花が大好きな女子の友だちはいるから、きっと喜んでると思うよ。な、おとひっちゃん」

僕の顔を見つめつつ、数回、口を開け閉めするおとひっちゃん。

かなり情けない。

「で、この花の名前、なんていつの？」

もつ一度、今度もあどけない感じで尋ねた。すでに「わつきたん」とこの言葉を出した段階で、市松人形の彼女は微動だ似せず、ただ手を下ろしていた。僕の持つている手提げ花を覗き込み、ぽつりと答えた。

「そんなことも知らないのですか」

「うん、俺、あまり花の種類知らないし。おとひっちゃんもやうだる」

頷ぐだけ。やつぱりおとひっちゃん場慣れしてない。

よくよく見ると、唇に赤いものがちらちらした。おとひっちゃんを撃墜するためにすべて勝負してきたんだろ？。

けど、この女子はわかつてない。おとひっちゃんには意味がない。

「葉牡丹です」

一言だけ、棒読みでつぶやいた。

「教えてくれてありがと。わせたんに言おつよ、この花、葉牡丹だつて」

僕はもつこけど、「わせたん」とこの言葉に力を込めて、おとひっちゃんに告げた。

「水鳥中学のみなさん、いつもです、急いでください」

救いの声だ！

僕より先に、おとひっちゃんが飛び上がった。ジャンバーとかばんをひつつかみ、なにせり「あ、あ」と発音した後、

「ありがと」

と無理やり絞り出した。

そんなこと無い」とないよ。押し付けられたんだから。

僕はからの缶コーヒーをポケットにつっこみ、一声高く返事した。

「わかりました、今すぐ行きます！」

一刻も早く、あのねめつちい視線から逃げ出したかった。もうう

た以上は持つていくしかない。返すのも変だ。おとひつちやんの手をぎゅっと引く、僕は健吾くんの声がする職員玄関まで走った。重たい葉牡丹の鉢植えで腕がひっぱられた。いやな重力だ。

「やつぱり、間に合わなかつたつすか。すんません」

健吾くんが玄関で、もうひとりの女子と一緒に待つていた。

僕と一緒に、体育館でおとひつちやんと健吾くんとの持久走眺めていた、あの子だつた。

泥でぐしゃぐしゃの体育館脇抜け道を通つた。ちっちゃな足跡が残つていた。梅の花みたいだ。きっと猫のだ。

おとひっちゃんと健吾くんが屋根の下を走り抜けていった。屋根からぶらさがつてゐる氷柱が落ちないうちに、早く、つてことだつた。バスケ部と元陸上部の足に追いつけるわけもなく、僕ともうひとりの女の子はのこのこと雪道を進んでいった。

「さつきはびっくりしましたよね」

おしゃべりする余裕はあつた。僕はほつとして頷いた。

「呼んでくれなかつたらどうしようかと思つた」

「健吾が……新井林くんが、一生懸命走つてたんですけど、間に合わなかつたつて」

呼び捨てにしてるんだ。

やつぱり、そういうお付きあいの人なのだろう。僕はあらためて隣りの女の子を見つめた。「女子」なんだろうけれど、なんとなく僕にとつては「女の子」と呼び分けしたいタイプの子だつた。髪を編み上げてくるくる巻きにし、耳の上のつけている。ちょっと頬が赤らんでいて、感じふわふわしている。

さわつたらたぶん、ぎゅっとやわらかいんじゃないかな。ほつぺたとか。

やらしいこと、考へてると思われるかもな。

僕としてはそんなつもりない。比較してゐる相手が相手なだけだ。

人形みたく、気持ち悪くない人だなあ。

振り返つてゐるふたりに僕は、わざとらしく息を吐いてみせた。

急いでたんだと強調するためだ。

「遅えぞ、佐賀」

健吾くんが女の子にもう一言何かを言つた。「さがわ」か「さが」かわからぬけれど、その子の苗字なんだろうか。コートで名札が

隠れているのでわからない。ちょっとと気になつた。

「雅弘、悪い。走らせちまつたな」

おとひっちゃんは簡単に心配してくれた。なにせ病み上がりなんだから。さつき押し付けられた重たい鉢植えだつてぶら下げているんだから。僕は膝のところに、キャベツみたいな花を抱えるようにして、もう一度息を吐いた。

「とにかくここは誰もいないから、入つてください。佐賀、悪いけど電気ストーブの電源入れてくれ」

「うん」

女の子ははにかみながら頷いて、目の前の木造建物の中に入つて行つた。木造で、かなりぼろぼろ、地震がきたら一発でつぶれそうなあら家だつた。青大附中にもこんな建物が残つていたんだ。意外だつた。

「寒いけど、入つてください」

おとひっちゃんと僕も促されるまま、中に足を踏み入れた。

右脇にはサッカーボールのつぶれた山と、野球の木製バット、白線引き用に使うチョークみたいなもの。その他スコアボード、などなどいろいろなものが置きっぱなしになつっていた。たぶん体育用具室なんだろ？

「ここじゃないつすよ。今、ここどかしますから」

床にしゃがみこんでボールを片付けている女の子を小突いてどかし、健吾くんはすばやくサッカーボールの山をくずした。スペースを広げた。隠れてて見えなかつたんだけど、引き戸の手が出てきた。意外とほこりは被つていない。佐賀さんが素早くすべりこんでいつた。

「ほとんど使つてねえつてことだからかまわねえし、今日はどこの部活も練習試合でこんなところにこねえし。なによりも、運動部以外の人間こんなところ知らねえし」

隠れ家みたいだなあ。

秘密の基地みたいで、胸がどきどきしてきた。いつのを発見すると、僕は思わずもつと掘り進んでみたくなる。おとひっちゃんもきっとそうに違いない。目が輝いている。わざわざ、葉牡丹を押し付けられた時とは違う。

「さ、入ってください」

健吾くんの後について僕たちも上がった。背のないベンチとダンボールでこしらえたテーブルらしきもの。体育道具の残骸も転がっていたけれども、外よりは整理されていた。窓はない。佐賀さんが僕の足下に赤い電気ストーブを持ってくれた。電気は通っているらしい。動いた後なのでそれほど寒いとは思わなかった。

おとひっちゃんと健吾くんが向かい合いで、その隣りに僕と佐賀さんという女の子。

四人顔を合わせたとたん、急に笑いたくなり、にっこりしてしまつた。

「なあにこわついてるんだよ、雅弘」

「いやあ、じめん」

一緒にこいつしてくれたのは佐賀さんだった。さつきからそういうけど、佐賀さんの頭を見ているとむしょうに笑いたくなるのだ。おとひっちゃんに言つと誤解されるので黙つておくけれども。おとひっちゃんは咳を数回した後、健吾くんに頭を下げた。

「さつきはどうもありがとう」

「いや、俺の方がへましちまつたもんで、すみません」

このふたりについては真面目な雰囲気を崩さない。どうも健吾くんは、葉牡丹の彼女とおとひっちゃんを会わせないようにならかつたらしい。そうしてくれたら助かっただけど、追いかけられちゃつたんだものしかたない。健吾くんのせいではない。あの、気持ち悪い女子のせいだ。

「で、今から俺が話すことなんですが」

健吾くんは唇を噛み、目を伏せた。鼻をすすり上げた。お互い風邪がはやつてることだ。

「青大附中の評議委員会についての恥さらしだって気がしてなんねえんだけど、でも、ここで言つとかねえと、あとあと聞くでもねえことになると思つ。だから、すげえ恥ずかしいけど、聞いてください。お願ひします」

健吾くん、また頭を下げた。隣りの佐賀さんも健吾くんの方を心配やつに見つめていた。やつぱりお付き合いつこひいつももんなんだろうな。

「今から話すことは、悪いんだけど、一年の連中にはしゃべんないでくれると助かります。こう言つたらなんだけど、俺、一年の連中とはあまつまくこつてないんですよ」

同じ一年のおとひつちやんには妙に懐いてるのにか？
驚いている様子のおとひつちやん。こひこひこひが鈍い。

「一年と、つてことは、立村とも？」

すでに呼び捨てにしているおとひつちやん。

「いや、立村……たんとは、去年の段階で決着つけたし。それはいい」

「決着つて？」

割り込んだ。おとひつちやんが「よけいな」とこひ田でにらんだ。

「そのことも含めて、全部話します。で、ひとつだけお願ひがあるんですけど」

「お願ひつて」

健吾くんが両腕をテーブルのダンボールにくつつか立ち上がり、おとひつちやんを見下ろした。田が必死だつた。

「この話を聞いて、さつと青大附中の連中は馬鹿野郎ばかりだと思ふんじゃねえかって思つます。けど、さつちりと交流活動したいと思つてる奴もたくさんいるし、俺はなんとしてもバスケ部との交流を成功させたいって思つてます。裏話ばかりで情けねえけど、どうか、交流を止めようだなんてことだけは、言わないでやつてください！」

あれ、泣いちゃつてる。

隣りの佐賀さんが「一トのポケットから、桃色のハンカチを取り出した。下から手渡しした。握り締めた健吾くんは鼻と手を交互に拭いた。

すすり上げる鼻声に、おとひつちゃんは口を一文字にして、大きく頷いた。

「わかった。交流活動はこのままやる。だから、話を頼む」

青大附中評議委員会に関する内部事情は、僕にとつて頭の痛くなることばかりだった。もちろん僕とは関係なく、おとひつちゃんの方にとばっちらりがくる内容のものだけれども、たぶん処理をするのは僕と総田の方だろう。総田も計画していることがあるだろうし、またふらふらされるのはたまたまんじゃないだろう。

困ったよな。おとひつちゃん。

足下の葉牡丹はストーブの隣りに転がしておいた。

青大附中生徒会がもともと、力のない組織だということはおとひつちゃんから聞いていた。去年の十月、そして今年の一月に生徒会としておとひつちゃんたちが訪問した時に評議委員会へ話を押し付けられたのにはそこに原因があるらしい。

「俺もその辺はよくわからねえけど、青大附中の場合生徒会活動や部活動よりも、委員会最優先主義つてのが貫かれちまって、実力のある奴ほど委員会に吸い取られちまうって仕組みになってるんです。うちのバスケ部をはじめとして、他の部活動がいつもぼろ負けしてるのは、運動部で活躍できる奴らがぜんぜんこっちにこねえで、委員会に燃えちまつおとなんです」

おとひつちゃんが陸上部と生徒会、一緒にできなかつたもんなあ。

僕は身を乗り出し、おとひつちゃんは黙つて見つめるかつひつで。「けど、そんなのはやっぱおかしこつてことで、去年の代から少しすつ、部活動に力を入れるようにならうつてことで、先生たちが動

き出したってわけっす。例えば、各学年の委員は半年ごとに改選されますけど、青大附中の場合、一年の一学期に決まった委員がずっと、スライドして三年まで進む方式をとっていたんです。いや、誰が決めたわけでもねえけど、暗黙の了解って奴で」

俺も学習委員やつてるから似たようなもんかなあ。

「けど、そんなのはやつぱおかしい。委員はその都度選挙できつちり選ばれるべきだと思うし、合わねえ奴はどんどん外すべきだと思う。で、俺たちの代からはこれから委員をどんどん変えてこいつってことになつたわけです」

「委員、つて、当然評議委員もだな」

「そうです。たぶん一年はこのままでいくと思つたけど、俺のクラス……B組なんですけど……女子は別の奴になります。担任がそう言い切つてます」

「B組の女子？」

おとひつちやんが言葉にした後、全身硬直させた。

「まさか、あの、やつきの」

「やつです。あの女は絶対に降ろされます」

肩がだんだんゆづくりとなだらかになつていておとひつちやん。分かりやすい奴だ。

「けど、担任が言い切つてるつてどりうこづ」

「あの女は、ここにいる佐賀のことを七年間にじめつくすだけいじめてきたんです。小学校の頃から俺と佐賀と、あの女とは同じクラスでした。めちゃくちゃな腐れ縁でしたが、今まではなかなか佐賀のことを守ることができなかつた。けど、今の担任はすげえ男で、親とあの女をあつそり成敗して、一年以降の評議委員から降ろし保健委員にしたいとまで言つてます」

「保健委員？」

青大附中の委員会組織つてよくわからない。なんで保健委員なんか？

「あ、うちの委員会はこの前も話したよつて、くせがあるんです。

評議委員会が交流関係と隠れ演劇好き集団で、規律委員会は洋服関連のファッシヨン雑誌作り俱楽部、保健委員会は主に、将来医者や看護婦になりたい奴が勉強するための集まりって感じなんですよ。ま、そればっかじやねえけど二年間おんなんじでないと話にならないつてのはそういうことです。一種の部活と一緒にってことだ」「でもそういうと、委員会活動としてはかなり問題なくないか?」「あります。委員会内で「たごたしても、部活みたいにやめる」とが一切できません。今回のように担任が辞めさせられるなり降ろすなりしない限りは無理です」

たまつたもんじゃないなあ。

僕は自分なりの整理整頓をしながら話を聞いていた。

「とにかく、さつきの葉牡丹くれた子は、二年以降交流会に来ないつてことなんだ」

「そうです。それは安心してください」

力強く断言する健吾くん。おとひつちゃんは口にしないけれど、だんだん田がやわらかくなつてきたつてことば、相當安心したつてことだらう。

「ただ、問題は、あと一ヶ月つてことです。ま、評議委員会も影でいろいろありますから俺も大きいことは言えねえけど、二年の女子とかあと、一部の男子とかがもしかしたら、関崎さんにあの女を押し付けようとするかもしれません。まともな男だつたらあの女なんてけつとつばかりたい気持ちもわかりますけど、やはりなんとかしてうまく」まかしたいていうのもあるみたいですし

一呼吸、ふつと吐き、おとひつちゃんが尋ねた。

「立村は、どつち側なんだ」

じじつと、電気ストーブの焦げ臭い匂い。どつちや葉牡丹の入っているビールがストーブの赤い部分に触れて焦げてるみたいだ。慌てて引き離した。

「立村……さんは、わかんないっす」

言葉を濁した。でも話したさそりだ。僕は方向を変えて聞いて

みた。

「もしよかつたら、なんで委員長どじたついたのか、聞いていいかなあ」

「蟻人形をぶつこわしたくなるのはわかるような気、するしなあ。

健吾くんは目を潤ませたまま、大きくくしゃみをした。

身体が冷えてきて寒い。僕はおとひつちやんの方にくつついた。

「まあ、俺もガキだつた。早い話、俺と立村さんとは、四月以降の評議委員長を奪い合つてたつてことなんです。やっぱしこれも、青大附中特有のもんですけど、委員長つてのは上の先輩が八月に指名して、それから半年間じつくりじじいていくつてやり方を取つてるんです。これも、来年確実に委員として選ばれるつてことが前提になつてるけど」

思い出すなあ、去年の学校祭の騒ぎ。

思い出してないんだろ？ おとひつちやんはじつと話を聞いているだけだ。

「で、一応三年の先輩委員長は、立村さんを指名したつてわけです。けど、俺にはどう見たつて頭の回転がどりい、ぼけた奴にしか見えなかつたんです。一年連中からはすぐえ評価されてるけれど、なんてつかこう、馬力ないつていうか」

いいたいことわかるよ。健吾くん。

「何よりも、立村さん、あの女のことをその頃からめちゃくちゃ可愛がつてたんです。女の趣味が変わつてるのは別にいいとしても、自分にはすぐえ出来た彼女がいるつてのにあの女をひいきして、へたしたら自分の次に評議委員長にじょつとたくさんでいたきらいが、なきにしもあらずつて感じで」

やつぱりそつか。体育館でも自然な感じで話し掛けてたもんなあ。ああいうことしてた男子つて、立村だけだつたな。

「先輩委員長もその辺は心配してたらしくつて、俺と立村さんを今年の三月まで並び立てる格好にして見比べて、どつちがふさわしい

かを指名しようとやり方に変えました。だから、一応今の段階では立村さんが委員長だけど、四月以降は俺になる可能性もありあります

つす

俺、って、健吾くん、一年なのにか？

僕が口走る前におとひっちゃんが立ち上がった。

「立村が委員長から外れるのか！」

「いや、そういうことはないですよ。安心してください。関崎さん落ち着いている様子はまさに、委員長になつてもOKつて感じの態度だった。立村には悪いけれど、それが実はふさわしいんではないだろうかと僕は思つたりもした。

「俺がもし指名されたら、立村さんに譲ります。その点では去年、思いつきりぶつかり合いましたし、立村さんも俺にかなり譲歩してくれたし、なによりもまんざらあの人、ばかじやないつてことがわかつたんで、やっていけると思ったからです」

口を少しあけたまま、おとひっちゃんはまたつぶやいた。

「まんざらばかじやないつて」

「杉本を下ろすことを桧山先生に提案したのは、どうやらあの人らしいです。で、来年以降の評議委員長は俺にしたいってことも言ってました。つまり、評議委員からあの女を降ろして、評議委員会をまつとうな形に戻したいということで活動してたみたいですし。ただ俺もそれなりに譲歩しなくちゃいけねえこともあつたけどな

「それはなになに？」

これは僕の質問だ。健吾くんは両腕を組み、ぶるっと身体を振るわせた。

「あの女を、決していじめの標的にしないようにする」と。たとえ杉本が佐賀を始め迷惑をかけて俺たちをぶち切れさせようとしても、俺たち一年B組は、あの女とおなじようないじめを一切しない。これは卒業するまで、正々堂々と勝負する、最後の手段だということです

正々堂々とか。

おとひつひやんは黙っていた。鼻をなんとかすすり上げ、もう一度尋ねた。

「その、杉本さん……は、そんなひどいいじめをしていたんですか健吾くんではなく、佐賀さんに向かつて。

「私、梨南ちゃんがいじめをしていた意識はないと思つてます。たぶん、私のことを守るうとしてくれてたんだと思います。ただ」

言葉を切る。僕に向かいちらつと視線を向け、耳元の髪に触れた。「梨南ちゃんと縁を切った時から、私のしたいことがいつぱいできるようになったのも、確かなんです。本当に自由になつたんだなつて、今は思つてるんです」

りなちゃん？

「どうでもいいけど、健吾くんの口が妙に緩んでいるのが気になる。田もなんとなくいとおしげ。すっかり、ほれ込んでるつて感じだ。中学一年。総田もこんな風に川上さんと接すればいいのになあ。今度からかつてやううと決めた。

「要是女子たちのよくやる無視です。俺と佐賀が付き合いだしたのが気にならなかつたらしくて、入学そつそつ仲の良かつた佐賀を無視し始め、同じクラスの女子連中にもそつさせめるよつにしたつてことだけです。たいしたことじやないかも知れねえ。どうせ俺はある女から佐賀が離れればそれにこしたことはねえと思つてた。けど、佐賀がひとりぼっちでさんざん悪口言われていることだけは許せなかつた」

素直に「付き合いだした」なんて言つなんて、すゞよなあ。もう僕たちの方なんて見ていない。健吾くんは手元のハンカチを握り締めこぶしを見つめた。

「ま、そういうことで俺と立村さんはこいつあったにせよ、今は良好な関係が保たれてるつてわけっす。ただ、一年連中はやっぱり俺のことを毛嫌いしてゐみたいで。それはしゃあねえし。問題は、あの女を可愛がる女子連中のことです」

話があつちいつたりこつちいつたりと混乱していた。僕は頭の中

で全部片付けを行つてゐるからいいけれど、おとひつりやんは大変だろつ。ただもくもくと聞いていいだけだ。

「立村さんはあの女を降ろす代わりに、他の仲良し女子連中のところに預けて、俺たちの迷惑にならないよう仮を遣つてくれてゐるよつです。それは正しいと思います。俺も、あの女の顔さえ見なければそれに越したことはないですし、自分の手を汚したくないですね。ただ、その方法のひとつとして、関崎さん、あんたとくつつけようとする動きがあるのも確かなんです。信じられねえけど、本当のこ

とです。」

「おー、おとひつりやんとくつつけるつー！」

感嘆句「うそ！」しか出てこない。健吾くんの顔を見ればばつそじやないつてことは見え見えだ。おとひつりやんの田も見ひらき、宙を舞つてゐる。狂喜乱舞ではない。絶体絶命、オーマイゴッド、そのもんだ。

「この前の一円に青大附中にいらしてくれた時、すげえひでえ田にあつたと思つんですけど覚えてますか。ほら、お茶を異常なほど注ぎ足された時のこと」 「ああ」 かわいそつなおとひつりやんも感嘆句しか出せない。

「俺たちも、他の男子連中もあれ見ててぞつとしました。あれって嫌がらせとしか思えねえつて感じです。けど、女子連中によれば、あれは杉本の愛情表現であり、関崎さんこのことを氣に入つてゐるからとこいつことでした。けど、冗談じやねえ。関崎さん、ああいう時はためらうことなく熱湯を顔にぶつかけてやつて正解だった」

それはやつすきだと思つよ。

「その後すぐに、俺は立村さんのところに行つて、眞のひと全部言つておきました。たぶん立村さんは、杉本のことを眞持ちとしてはひいきしてますから、もしかしたら関崎さんにくつつけるよつて手はず整えるんでねえかと思つたから。けど、俺からしたら関崎さんの顔には、露骨にいやだつてサインが出来ました。ですよね。そつですよね」

強引だなあ。

おとひつちゃんは答えなかつた。さすがにそれは失礼だと思つたんだろう。でも、僕はひそかに賛成していた。今、となりにいるおとひつちゃんの様子を見ても、明白だからだ。健吾くんもそういうところは鋭い。

「別に俺は、あの女が誰にほれ込もうが知つたことじやねえ。もし、関崎さんでなくて別の奴だつたらふーんつてことで無視をしてた。他の学校のところにあの女が関心を向けてくれて、B組や評議委員会に迷惑をかけないようになればこちらだつて、よけいなこと考えなくたつていいことだし。けどなあ、

「ぶしを振り上げ、ダンボールを思いつきりぶつたたいた。へこんでいる。

「せつから評議委員会と水鳥中学との間で、すげえいい関係が作れそうな時に、あの女が関崎さんに嫌がらせかなにかしてぶつぶしたら、たまたまんじゃねえ！ 関崎さんが望むならそれはしかたねえと思うけど、こんないじめをしでかして、さんざん問題を起こし、相手の嫌がることばかりやらかすあの女が、また他の学校の人たちにまで被害を及ぼすなんて、俺は許せねえ！」

で、何したの？

心で思つてはいるだけじやなくて、僕は口で尋ねた。

「今日は関崎さんが来るつて聞いていたんで、まず体育館で集合して、それから教室へ行こうと決めてました。一年連中も俺のことはともかく、杉本が害獣だつてのは理解してたみたいなんで立村さんにも話をしてくれたみたいです。ただ、二年女子たちからは大轟霆かつたらしくて大変だつたつて聞いてますが。とにかく立村さんは、関崎さんと杉本が顔を合わせないよつて、一年女子たちと一緒に職員室か別の教室かで準備をなにかさせたらしいです。一年女子が結局さつきの集まりにふたりしかいなかつたつてのはそういう理由です。杉本の見張り役に残されてたらしいです、

すごい。完璧だ。

僕は素直に驚いた。

「会が終り、立村さんが先生と閉じ込められている教室との両方に連絡をして、関崎さんたちがいなくなるのを待つてから解放しようとこうことになっていました。けど、あの女が制服じゃなくてあなたんでもない格好をして、気持ち悪い毒花を手渡すつてことは、何か手違いがあつたんではないかという気がします。俺ももつと早く、何も考えずに外に出せばよかつたつて思うけど、その辺は本当にすんません。とにかく、俺なりに精一杯迷惑をかけない方法は探つたつもりですが、見事失敗で情けないです。本当に関崎さん、すみませんでした」

君は、すべきことをみんなしてくれたよ。健吾くん。 佐賀さんと僕が同じような感じで健吾くんを見つめていると、また涙ぐんでいるらしく田を数回こすつた。

「わかった。運動部の交流についてはこれから、すぐになんとかするから」

おとひっちゃんがぶつきらぼつこ、これだけつぶやいた。電気ストーブだけでは耐えがたい冷たさで、僕は足を踏み鳴らした。それが合図で、僕たちは立ち上がつた。 おとひっちゃんとふたり、今度こそは誰もいないグラウンドで、健吾くんたちと別れた。

「じゃあ、今度は三月に。こんなひでえミス、もうしませんから」

そのことに関する返事はしなかつた。おとひっちゃんは深く頷いてみせた。佐賀さんが見えないので挨拶したくて立ち止まつたら、駆け足の音が聞こえた。

「じめんなさい、これ」

わざと忘れてつたつてのになあ。

わざわざ葉牡丹を持ってきてくれた。よけいなお世話と言いたかつたけれど、持つて来てくれたのが佐賀さんである以上受け取らなくちゃいけない。おとひっちゃんと田で合図し、僕が受け取つた。

「そんなの捨てちまえよ」

「だめよ、健吾」

また、名前で呼ぶ。

自信ありげな顔で佐賀さんは答えた。

「セツと梨南ちゃんは、関崎さんにこの花が元気かどうか聞くと思
います。もちろん新井林くんが押えるでしょうけど、梨南ちゃんは
何をするかわかんない子です。もしかしたら立村先輩から住所を聞
き出して、家までおじやましきつとするかもしません」

背筋が凍るつてこのことだ。がたがたつと肩が震えた。

「その時に花がなかつたり、捨てたなんて言つたら、梨南ちゃん何
をするかわかりません。私も梨南ちゃんと七年間一緒にいたからよ
くわかります」

「そんな怖い女子なの？」

僕がかろうじて言葉を搾り出す。おとひつちやんは言つまでもな
く硬直状態。

「梨南ちゃんは、好きになればなるほど、意地悪をする子なんです。
そして」

佐賀さんの田はやらにて真剣だった。

「裏切られたと思つたら最後、とことんつらでしまうんです。ど
んなにこっちが友だちでいたいと思つても」

つてことは、もしかして俺。

痛恨のミスを犯したつてことだらうか。おとひつちやんはよきづ
いていないかもしれないけれど。僕は真剣に震えるのを止められな
かつた。

「だから、本当に氣を付けてください」

逆恨みされるつてことかよ！

たぶんおとひつちやんは、僕が震え上がった理由なんて想像して
いないだろ。しかたなく葉牡丹をぶら下げてバス停に向かい、時
刻を確かめた。

「まだ時間あるね」

「雅弘、さつきのことだけどな」

誰もいないベンチに腰掛け、おとひつちやんはじゅうとこらんだ。

「なんだよ」

「なんで、水野さんのこと言つた

おとひつちやん、気付いてるじゃないか。

さつきの痛恨のミス、そのものである。

「いや、だつてさ、僕がもし花とか上手に育てられるんだつたら、さつきたんが一番かなつて思つただけなんだ。ほら、さつきたん、小学校の頃から教室にお花もつてきて飾つたりしてただろ？ だからこいついう花も、きっと大切に育ててくれると思つんだ。おとひつちやんのとこ、あまり花とか飾るのつて苦手だらうし、俺もあんまり好きじゃないし」

もしかしたらおとひつちやんは、葉牡丹を持ち帰りたいなんていうんじゃないだろうか。別に本人の勝手だから僕が口出しするつもりはないけれど、ただ、どうしても僕はそうさせたくなかつた。第一、おとひつちやんみたいな大雑把な奴が、キヤベツみたいな毒花とはいえ上手に育てられるわけがない。万が一、杉本さんに「あの花元気ですか」と聞かれたら、言い訳できない。おとひつちやんは物言いかけたけれども、飲み込んだ。

「だからさ、さつきたんにあげちゃおつよ。さつと喜ぶよ。おとひつちやんからだつて言うともつと喜ぶよ」

「いい、勝手にしろ」

「じゃあ、ちょっと電話かけてくるよ」

「どににだ」

迷つたけれど、言つておいた。

「さつきたんにさ。これから寄つていー」つよ。きっと喜ぶよ

すぐにゆでタコ状態で赤くなるのはおとひつちやん、全く精神状態変わつてないつてことだ。僕はバス停端の電話ボックスまで走つていつた。見上げると青潟大学の校舎が夕暮れの色をちかちかさせているのがはつきりと見えた。

「もしもし、水野さんですか？」

僕は女子に電話かけるのって結構慣れている方だ。おとひっちゃんの代わりに苦手な女子へ連絡網を回してやつたことだつてある。今日はお母さんが先に出て、すぐ戻ってきたんへ代わってくれた。

「佐川くん、どうしたの」

やつぱりきたんは優しい声だなあ。ちやんとしゃべりに波があるよ。

どうしてだらうか。つい比べてしまった。

「うん、実は、今日、おとひっちゃんとふたりで青大附中に行つたんだ。で、今帰りのバス待つてるとこなんだけど」

「そうなの」

あまり関心のなさそうなやつきたんだ。一応、おとひっちゃんがやつきたんのことを想つてはいることは承知だらうけれど、それから半年間、特段変わつた動きはなし。おとひっちゃんも動かないし、やつきたんも「あら、そんなことあつたの」とて顔で普段どおり流してはいるからだ。僕もクラスの連中と一緒にばば抜きやつたりして遊んでいるけれども、やつきたんがたまに僕の隣りにくるのは偶然だ。一緒にいるところを見ておとひっちゃんがまた真っ赤になるのも、またいつものことだ。

「それで思い出したんだけど、やつきたんつてお花、好きだよね」

「ええ大好きよ」

「青大附中の人たちから、花をもらつたんだ。葉牡丹つて知つてる？」

あの毒花と、口には出さないでおいたけれどやつきたんの声は明るかつた。

「うん知つてゐる。葉っぱが花びらになつていて、お正月によく飾るのよ。華やかなのよ」

違つよそんなきれいな花じやないよ。

「俺もおとひっちゃんも、そういう花もらつても困るだけだから、

よかつたらさつきたんにあげようか、って話してたとこなんだ。これからさつきたんの家に行つて持つていくけど、いいかなあ」かなり事実関係を曖昧にして説明した。いやな感情、さつきたんに伝わつていらないといいな。

よかつた。さつきたんは素直に喜んでいる。

「嬉しい！ ありがとう佐川くん」

受け取つたのはおとひつちゃんなんだけだ。

銀色のバスがロータリーに入つてくるのが見えた。大至急電話を切り、僕はおとひつちゃんの後に続いて乗り込んだ。すっかり疲れ果てていねむりこじていておとひつちゃんの隣り、一番奥の席。

僕は膝に葉牡丹の鉢植えを抱えたまま考えていた。

葉牡丹の花びら……葉が花びらになつていてるさつきたんが言つていたつけ……を何度見ても、「華やか」「お正月に飾る」というプラスのイメージが湧かない。

さつきたん、花に詳しいからそう言つたのかなあ。

僕の目から何度も見ても、毒々しいキャラベツの出来そこない、とう感じしかない。

もちろん、花にはいろいろあつて、好みもあるし、僕好みでないだけなのかもしれない。こんないやな気持ちで花を見たのは初めてだつた。

おとひつちゃんもきっと、いやだつたんだろうなあ。

僕はかなり正確に、おとひつちゃんの考えていることを見抜くことができる。十四年間の集大成といえばそれまでだけど、本当に丸分かりなんだものしかたない。

あの、葉牡丹の女子……杉本さんと言つていたつけ……の顔を見た時、おとひつちゃんがすっかり度を失つて身を引いていたのを、僕はちゃんと見ていた。露骨に受け取り拒否をしたくてなんない顔をしていたのも覚えてる。おとひつちゃんを知らない友だちだったら、ただ告白されて照れてるだけと思うかもしれないけれど、ど

うみたつて「側に寄るな！」の企図だった。杉本さんはそういうのわからなかつたから、あんな風に分けのわからない言葉で話し掛けたのかもしれないけれども。

そうだ、あの人、しゃべり方もなんか、変だつた。

思い返すたび、今までにあんなおかしなしゃべり方をする人がいなかつたと再確認してしまつ。もちろんいろいろ変わつた人とも話したことあるけれど、なんで「ローエンゲリン」だと「私だと思つて」とか、常識では考えられない言葉を口にしたんだろう。学校の演劇で、「なんだよくさすぎる」と馬鹿にされそうな言い方を、なんでしたんだろう。

もしかして、杉本さんのしゃべり方つて、ああいう感じが多いんだろうか？

僕はあらためて、健吾くんの聞かせてくれた話を整理して組み立てた。

健吾くんが言つことを鵜呑みにする気はない。僕の直感と事実関係だけだ。だつて健吾くんも佐賀さんも、杉本さんのことが大嫌いだからこいつ悪口言つているわけであつて、たぶん七割くらいは嘘つぽいところもあると思うから。

信じていいと思えるのは、「青大附中の評議委員から杉本さんが外される」ということ。

「健吾くんと立村評議委員長はけんかしていたが今は仲直りしている」ということ。

「佐賀さんが杉本さんにいじめられていた」ということ。

佐賀さん……あの中国風の髪型をしていた女の子……は、「いじめていた気は本人ないんじやないか」みたいなことを言つていた。その辺は想像だからわかんないけれども、杉本さんとはなれてから幸せになつたつてことだけは確かじやないかと思つ。健吾くんと付き合つことができるようになつたんだから。

もうひとつ気になつたのは、杉本さんの格好とお化粧だ。

あんな裾の長いスカートで学校の中を歩くなんて、それこそ変だ。僕が最初に体育館で見た時は、普通の制服だつたはずだから、どこで着がえたに違いない。本人は「男子たちに閉じ込められた」と言っていた。健吾くんや立村評議委員長がどこの教室に閉じ込めていた、と考えれば納得がいく。

じゃあ次だ。

どうして杉本さんはおとひっちゃんを見つけることができたんだろ？

健吾くんは僕たちをロビーで待つように指示した。もし杉本さんの顔を見ないようにして連れて行きたかったのだったら、どうしてそんなことしたんだろうか？ 佐賀さんを迎えて行きたかったからだろうか。

その辺も曖昧だ。あそこにいなでさつと学校を出でてしまったら、すべて丸く収まつたんだから。まさかぐるになつているなんてことは？ ちょっと考えすぎだろ？

そしてなによりも。

俺、性格悪い奴かもしれないよ。

があつと響く足の下。だんだん人が乗り込んできている。今までそんなこと一度も考えたことなかつた。

さつきの健吾くんの話を冷静に思い返してみると、どう考えてもひとりの女子を集団でいじめているようにしか見えない。どんなに杉本さんが問題のある人としても、会いたい人に会わせないと、別の部屋に閉じ込めてしまうとか、普通あっちゃいけないはずだ。それはわかっている。

けど、実際は違うんだ。

ダンボールを挟んで四人で話をしていた時、なんとなくだけどほのぼのとした雰囲気が漂つっていた。みんながみんな、「その通り！」と喝采を叫びたいという感じだった。おとひっちゃんも言葉にはしなかつたけれど、杉本さんに押し付けられた花を可愛いとは思つて

なかつたみたいだし、僕も。

僕も同じことを思つていた。

いじめはよくない。絶対によくない。健吾くんがすることは絶対にいけないことなんだ。けど。やっぱりまあみろって思つてはいる。本当に気持ち悪かった。側に寄つてこられるのだつていやだつた。健吾くんたちにお礼言つたかった。そう、杉本さんが評議委員から外れるつて聞いた時、ものすごく、ものすごく嬉しかつた。あの顔を見ないですむつてのがほんとにうれしかつた。

今までこんないやなこと考えたことなんてない。女子に対してもそうだ。好き嫌いはあるけど、僕の周りにいる奴はみんないい人ばかりだ。よっぽど意地悪されたか嫌がらせされたか、そうでなければ嫌いになんてならなかつた。

でも、あの杉本さんという人だけは違つた。

た。

なんでかわからんただけど、本当にぞつとした。

だから思わず口走つてしまつたんだ。

この花、さつきたんに上げようよつて。

たぶんおとひっちゃんには通じないだらう。想像すらしてないだらう。もう、明日以降どうやって総田を使って、バスケ部同士の交流会に持つていくかのことで夢見つてゐるだらう。僕がこんなにおびえているなんて知らないんだ。

杉本さんつて女子に、おとひっちゃん、逆恨みされたらどうじよつ? うじよつ?

もちろん佐賀さんの言つことをすべて信じよつとは思わない。

女子が自分に都合のいいことを言つへせがあるつてのは、わからぬくもない。

総田と川上さんを見ていればなんとなく。

佐賀さんと健吾くんが付き合い始めたのがきっかけで、杉本さんのいじめが始まったとするならば。親友だった友だちをいじめるつてのは相当、心がすさんでないとできないんじゃないだろうか。となると、もしもおとひつちやんのことを本気で杉本さんが好きだつたとして。

僕の「さつきたん」という言葉をどう受け取ったかによって。杉本さん、振られてもきっと追いかけてくるタイプの女子だよな。

そんなことになつたらおとひつちやん。初めて感じた気持ち悪い感覚に戸惑つて、へまな言葉を発した僕の責任だ。

なんとかしなくつちや。

僕は葉牡丹を膝に抱いたまま、腹に力をこめた。

「ね、さつきたんのところ、おとひつちやんも行くだろ?」

「いや、俺これから用事あるから」

せつからくおとひつちやんのためにチャンス作つてやつたのにな。

無理じいはできず、僕はさつきたんの家の前で手を振つた。そんな慌てて走つていかなくたつていいの。全くいいか悪いかわかない元陸上部だ。

さつきたんの家のよびりんを鳴らしたついでにもう一度曲がり角に振り向くと、ジャンバー姿のおとひつちやんが見え隠れしていた。いつものことだ。知らんふりを決め込んだ。

「きれいな花!」

桃色のセーター姿で迎えてくれたさつきたんが僕の顔と、花を交互に見つめた。手提げの中を覗き込み、ふわあつとした笑顔で迎えてくれた。

「佐川くん、ありがとう。私、大切にするわ

お礼を述べるのはおとうちゃんへ、なんだけどな。
わざわざ手の中だと、葉牡丹はちつとも「毒花」っぽく見え
なかつた。

予想がつかなかつたわけじゃなかつたけれど、学期末試験前日におとひつちゃんが学校を休むとは思わなかつた。葉牡丹プレゼントショック、ただでさえ寒いところに長時間いて、さらに帰り際、さつきたんの家の前まで行つて、おとひつちゃんが冷静なままでいられるとは僕も思つていない。けど、学年トップを入学以来保つてゐる以上、意地でも学校には来るだらうと思つていた。

「で、どうだい、関崎副会長のお迎えセレモニーは」

昼休み、給食もそこそこに僕は生徒会室へ向かつた。試験前で話がゆつくりできる場所つたら、生徒会室しかなかつた。総田が相変わらず石炭ストーブに火箸を突つ込んでがしゃがしゃやつていた。めずらしい、今日は川上さんがいない。

「今日は誰も来てないね」

「来させねかつた。まあ、座れや」

ストーブの側だけ過剰に暑い。僕は学生服の襟ホックを外した。
「見たよ、あの女子」

「そうか」

万感の思いを込めてつぶやいた。

「すごい女子だね」

「だろう？ またやられたか。わんこそば攻撃を」

困つた。言うべきか言わざるべきか。僕としては総田にすべて丸ごと報告するのが筋だと思つてゐる。

お茶わんこ側攻撃は幸い、青大附中の連中が食い止めてくれた。が、しかし。と。

しかたないので僕は、曖昧に答えた。

「青大附中の人たちがその女子を別の教室に閉じ込めてくれたみたいなんだ」

「閉じ込めた？ つてことはなにか、牢屋みたいなどこにか

「わかんないけど、おとひっちゃんと顔は合わせないようにしてくれたみたいなんだ」

総田の頬が、針金いれているみたいにぐぐっと曲がった。横顔だ。「それは正しい。まんざらアホじやねえな、あいつらも。関崎のこどだ。また相手側に乗せられてへらへらしてたんでねえだろ? なあ?」

「仕事は増えたよ。総田」

この辺は話しても大丈夫だ。僕は数箇所だけはしゃって、だいたいの状況を説明した。もちろん教室内での出来事のみだ。ロビーおよび体育用具準備室での内密な話題はカットした。

「ははん、そつか。むこうさんはとにかく俺たちと交流がしたくてなんねえと。すげえ必死こいてるって感じだなあ」

一通り聞き終えて、総田は学生服の裾をぱたぱた仰ぎ始めた。裏にはちやんと、竜の裏地がちらついている。生徒会副会長にあるまじき制服だ。

「青大附中の委員長、おとひっちゃんを持ち上げたり誓めたりいろいろして、結局バスケ部同士の交流会を開くつて約束させちやつたよ」

「あのうすいぼけ野郎がか。単に女たらしつてだけじゃねえんだなあ」

いや、女たらしかどうかわかんないよ。

立村評議委員長の蝶人形顔を思い浮かべた。

「うちのバスケ部つてことだつたら問題ねえか。なんてつたつて全国大会出場してるからな。青大附中のバスケ部なんて、ろくに中体連で勝負できたことねえんだろ。そりやああがめたくもなるわな。ああ、あの、運動馬鹿つて感じの奴だろ。バスケ部のキャプテンってのは」

健吾くんが、運動馬鹿か。

妙に笑えて僕は頷いた。

「とにかく、おとひつちゃんはこれから何しなくちゃいけないかつてこうとむ」

総田副会長へのお仕事依頼だ。

「とにかく、期末試験後にバスケ部との練習試合と文化交流会を用意してもらわなくちゃつてことなんだ。けど、おとひつちゃんそういうのつて、どうかなあ。おとひつちゃんは一応元陸上部だけど、言ひ方間違つたら先生たちからかなり鬱鬱かつちゃうよなあ。三年になつたら受験勉強に専念しなくちゃいけないのに、お前何考えてるんだって」

匂わせるだけで総田には通じる。きいろとだいだいの絡み合つた炎が総田の頬をおもいっきり照らす。

「なにか？ 僕が間に入れつてのか」

「一応、約束してきちゃつたからね」

前髪をぐいとオールバックにして頭をかかえる総田の図。笑える。

「正式にはおとひつちゃんが学校に復活してから、つまくやつていくつもりなんだろ」

「だからやだつたんだ。あいつを渉外なんかにしちまつのはーーー」

「だつたら総田、今からやつたらどうだろ。俺も思つたんだけどさ」「こいだ。僕は両足を椅子の上にのつけて、膝をかかえるような格好で座つた。椅子の上で安座、つて感じだ。指を絡めてみた。顎をのせて、ちょっと総田をにらみつけるようにしてみた。

「あのままだとおとひつちゃん、向こうの委員長の言いなりつて感じだよ。俺もちょっとまづいなあつて思つた。うちの学校は公立だから公立高校の入試があつて、六月以降の行事はたぶんできないって、おとひつちゃんは言つたけど。でも、向こうの委員長はとにかくやりたいてことばかり言つんだ。青大附中の行事とかも調節するからつて。生徒が行事の調節なんてそう簡単にはできないよね。要するに向こうは、なんとかこつちと仲良しになりたいつてことで必死なんだ。どうしてそこまでしたがるのか俺もわかんないけど。おとひつちゃんはその評議委員長のこと気についてるみたいで、た

め口叩いてるけどさ。でもこの調子だとおとひちやん、じんじん引きずり込まれていって、引退までずっとその活動に熱中しちゃうよ」

「みう
総田、来たかな。

「僕はもう一度、じつと田に力をこめた。

「六月でいつたん終り、つてことにした方が楽だよね
これ以上は何も言わなかつた。だって、総田があとは決断するだけなんだから。

「佐川。そうしたい気持ちは山々だつてのは、わかってくれるよな
あ

「だつて、ちょっとこのままだと、向ひうに引っ張られるよ。俺、
そんな気がする」

「佐川の言つとおりだ。相変わらず、切れるな
総田が言葉を濁す。じついう時が、大切だ。

「だが、これはあの単細胞野郎に全部丸投げさせたいつてのも、わ
かってくれるよな、佐川」

「あらり、ダメかよ。

かなりがつかりした。口を尖らせた。唇の皮があぶくみみたいにふ
くらんできた。しばらく総田は僕を申しわけなさげに眺めていた。
また火箸で火口を激しくかき回した後、がしゃんと床に置いた。曲
がつた火箸の先が甘い飴色に染まつていた。

「なあ佐川、お前があの単細胞と一緒に青大附中に行つていい間、
俺は何してたと思う」

「どうせ、試験勉強だろ？ 最後の最後でトップを奪うぞつて
白々しいことを僕は言つてのけた。当然、総田は吹き出した。
「んなことすると思うかよ、俺がそんなあいつみたいに必死こいて
やんねばなんないほど、ガリ勉かと」

「だつてそうでなかつたら次に総田のすることは一つだろ？」
意味ありげに覗き込んでやつた。唇をひんまげて、僕の顔を覗き

込む。

「川上さんとも連絡取らなくちゃいけないしね」

思いつきりはたかれた。よかつた、火箸じゃなくて。

「お前何俺のこと誤解してるんだ？」だからあの女とは関係ねえだ

る」

「いや、俺も今、もしさういうこと知つてなかつたら、これからのこと相談できないなあと思つてて。『めんめん』引つ掛けすぎた。やつぱり痛いのは『めん』だ。僕は頭をさすりながらくしゃみをした。

「おとひっちゃん、実はさ、あの子にすりこいと言われちやつたんだ」

一か八か、勝負だな。

「あの子？」

「うん、あの、子」

変なところで切つて、もう一度僕は総田の側に近づいた。おとひっちゃんはいなくとも、どうでばれるかわからない。水鳥中学は青大附属と違つて木造だから、結構音がもれやすいんだ。

「まさか、あの女子か。何言られた」

答えた方いいかな。

かなりこれは迷う。僕はとぼけることにした。

「言われたつていうか、プレゼントもらつちゃつたんだ」

「今度は食い物か。まんじゅう怖いか」

「うつんと、花だよ。鉢植えの花。持つてきて渡してくれたんだ」

総田は唇で「花だと」とつぶやいた。

「なんでだよ」

「知らないよ。とにかく、帰り際にいきなりおとひっちゃんへ花をプレゼントしてくれたんだ。今回お茶汲みわんこそばできなかつたみたいだから、そのお返しなのかなあ。俺、そういうのつてよくわからんからさ、総田に相談したかったんだ。できれば川上さんとの実体験から教えてもらえたなら、きっと今後の活動に役立つかなあ

つて思つてさ」

話がだいぶ強引だけど、総田はこうこう形で持つていくとすぐこ
頷いてくれる。ちゃんと分け前を渡す代わりに、僕の役にも立つて
くれるってわけだ。

「そりか、花な。愛の告白で薔薇でも持つてきたか」

「つづん、葉牡丹」

「はぼたん?」

総田は花の種類に疎いらしい。

「キヤベツの親戚みたいな花だつたよ。きっとお土産に食べてくだ
れいってことなんだろうな。だから俺もおとひつちゃんの代わりに
言つてあげたんだ。花を育てるのが得意な子がいるから、預けるよ
つて」

「佐川、おい」

僕はせつそくとび始めをさした。ちよつとばかり早いけど仕方ある
まい。

「だつて、おとひつちゃん露骨におびえてたよ。お茶わんこそばも
すぐかつたけれど、きっとキヤベツもらつてどう返せばいいか、わ
からなかつたんだと思うんだ。必死にこらえてた。必死にありがと
うつてお礼、言つてた。たぶんあの子、おとひつちゃんがよろこん
でくれたんだつて誤解していたかもしれないけれど、おとひつちゃ
んはとんでもない、だれか助けてつて顔、してたよ。もしこれ以上
近づいてこられたら、青大附中との交流会止めたつて顔、してた
よ」

「こひだな、問題は。

「そりか、あいつも相当、あの女子を」

火箸を数回、ストーブの火の中でかき回し、また赤くした。

「総田はあんまり乗り気じゃないつて言つてたけど、でもせつかく
盛り上がつてゐんだつたらやらない手、ないと思うんだ。内川だつ
て大変だしさ、総田だつて今更おとひつちゃんがこつちに戻つてき
たら困ると思うんだ」

そうだろ、総田。

ひつかかつた。火箸の曲がつた先がゆつくりと黒くなつた。持ち上げて僕の方を指すのは熱いからやめてほしい。

「相変わらずだな、佐川」

今度は頭をぐりぐりなでた。おとひつちゃんがやるみたいにだつた。

「天才参謀佐川雅弘、健在なりつてことか

僕が天才なのかどうかはわかんない。総田が言うには、たぶんおとひつちゃんよりは上だつてことなんだろう。気分はいい。でも調子に乗つたら口をつけられる。僕はわけわかんない顔をして、半ば口を開けた。

「今、俺が内川と何やつてるか、知つてるか」

「三月の、卒業生を送る会の準備だろ」

ちょうど公立高校入試一週間前だつた。終わつてからすぐにならなくちゃとは聞いていた。ただし、おとひつちゃんが交流会関連中心で立ち回つてゐる関係で、ほとんどタッチできない状態だとも聞いていた。

「関崎抜きでずっと話を煮詰めてきたつてわけだ。内川もぼんぼんの顔していて結構おりこつさんだ。関崎の前ではばか顔をしまくつてるが、ほんとのところはどうだかなつてとこらしい。本人も自覚してねえけどな」

僕も内川会長は、ただのおとひつちゃん大好き少年としか思つていなかつた。

「関崎はまだまだあれやこれや手を出したいみたいだが、俺としては今のうちから、内川ひとりでどんどん企画をまとめたり話をしつたりする方がいいと思うんだな。俺たちも三年になつたら少しはマジにならねばなんねえし。けど関崎がいれば内川はほよおんとしたままだ。ただ甘つたれてしまつだけだ。で、今から俺は少しずつ活を入れてるつてわけだ」

「活つて、例えばどんな？」

ストーブを火箸の先でこつんと叩いた。石炭入れ口の隙間をふさいだ。

「関崎がいる時だつたら書類関係はみんな、あいつが片付けるよな。うちの会計の分まであつという間に完成させちまう。楽では有る。しかし、今は関崎がいない状態だ。誰がやる？ 僕がやるってのか？ 「冗談じゃねえ、お前やれ、つてことで、内川は毎日書類にひいひい言つてる」

「こき使い過ぎたんだよ。内川くん、だから一月に倒れたんだよ」
「彼もインフルエンザに倒れたひとりだつた。

「でもな、よく考えてみろよ。あのまんま過保護に関崎が面倒見つづけてみる。後で泣き見るのは内川だぞ。覚えてるか。俺たちがいきなり副会長につけられて、さんざんバトル繰り返して、必死に覚えてきたことってなんだよ。こんなのを一年のうちに覚えられれば、もつと要領よくできただぜ。あの関崎ですからも、勘違いしたこと口走らないですんだだらうしな」

言えてるよ。本当にそうだ。

僕が頷くと、総田は後ろに回つて肩をもむようなしじべをした。
本気でマッサージし始めた。

「だらうだらう。愛の鞭つて奴だ。会計、書記、今的一年みな似たようにしつけてるこだ。けど関崎が戻ってきてみる、またみーんな、あいつがひとりで片付けて、一年坊主はやることなし、改選の段階で何やればいいんだかわからねえ、情けねえの三拍子。冗談じやねえよなあ

総田の本音に僕は強く共感した。伝わったのか、肩がほぐれた。

「思いつきりもんでいいよ

「よしきた！」

休み時間終わる頃まで、僕は総田に肩をもませたまま炎を見つめていた。

おとひつちゃんがものすごく後輩に対して面倒みがいいことは有名だ。僕をかばっていた時と同じことを、内川会長をはじめみんなにしているわけだ。実際、総田もおとひつちゃんがいる時はある程度気をつかって、あまり内川くんに口出しをしないようにはしているようだ。よけいなけんかはしないようにしているみたいだ。

でも、おとひつちゃんが涉外の仕事に専念し出してからは、ありとあらゆることを内川くんに仕込んでいる。はつきり言って、それは正解だと思う。おとひつちゃんのぶきつちよなところを真似たつて、内川くんが損するだけだ。むしろ、総田のように女子受けもよく、ちょっととのほほんとしたところなどを生かして、「愛される生徒会長」を目指せばうまくいきそうな気がした。少なくともおとひつちゃんのように「陰で物笑いされるかわいそうな生徒会副会長」にはならないですむ。精神的にもほんと、楽だ。

総田は言った。

「あとで泣き見るのは内川だぞ」

ほんと、その通りだ。おとひつちゃんくらい仕事の頭がよければどんどん片付けられるのかもしねないけれど、誰もがそんなことできるわけない。僕だって、おとひつちゃんのやり方を真似るなんていわれたらたまたまんじやない。

だから総田としては必死に、内川くんへ自分の経験とか方法を教え込んでいるんだろう。よけいな奴がない間に、総田幸信流のやりかたを。正しい判断だ。

けど、まだ内川くんは生徒会に入つて半年も経っていない。何がなんだか本人だってまだわかんないだろう。一応は生徒会長といわれているけれども、実質処理しているのはおとひつちゃんと総田なんだから。今のうちに時間稼ぎして、総田のやりかたを覚えてもらい、今年の十月改選以降……よっぽどのことがない限り、あつさり信任投票で決まる……内川くんのやりかたで勝負すればいいと思う。よけいなことを言つおとひつちゃんがいない方がいい。それはよくわかる。

邪魔だよな。そりゃそうだよな。

僕があえてそれ以上何も言わなかつたのにはもうひとつ、理由がある。

総田の本心だ。

おとひっちゃんがあの杉本さんといつ葉牡丹の少女に付きまとわ
れて、げんなりしていることを知つて、もし総田だったらどうして
いるだらうか。僕だったら、まずためらうことなくおとひっちゃん
を杉本さんと仲良くさせるべく努力するだらう。いいところを無理
にでも見つけて……ものすごく難しいとは思うけど……付き合つて
もううとこりまで持つていぐ。杉本さんの性格が悪いとこりとか、
そういうのは関係ない。とにかく、内川くんへの帝王学教育が終わ
るまではなんとかしたいだらうし。おとひっちゃんだつて、自分を
好いてくれる人をまんざら無視もできないだらう。とにかく、青大
附中評議委員会との交流を最優先する形にして、その間はひたすら
こらえる。耐える。いや、がまんしてもいい。

むかつく女子であるうがなんであらうが、総田にとつては、厄介
なおとひっちゃんの視線を逸らしてくれる相手だ。感謝以外の何も
のでもない。僕が総田だったら、必死に杉本さんのいいとこ情報を
たくさん手に入れて、おとひっちゃんをその気にさせてしまつだろ
う。

僕に出来ないことじやない。もちろんだ。しかし。

しかしだ。僕にはビリしても、そつしたくない理由がある。
総田の言った「天才参謀」という肩書きはありがたく受け取るけ
れど、もうひとつ僕には「関崎乙彦とは大親友」という言葉が重く
のしかかっている。

おとひっちゃんとは小さい頃から一緒に遊んでいた。当時僕の身
体もちつちつくて、幼稚園から小学校一年くらいまではよく他の男
子から泣かされていた。男子の世界は腕力だから。けど、そういう

時に飛んできてくれて、あっさり連中をのしてくれるのがおとひつちゃんだった。僕相手だけじゃなかつたけれど、気が付いたら僕に手を出す奴は一切許さない、とばかりににらみをきかせるようになつた。僕はだいぶ、楽になつた。いつのまにかおとひつちゃんの側から離れなくなつた。おとひつちゃんも喜んだ。それだけといえば、それだけのことだ。

成績も学年トップだし、黙つていればかつこいいタイプに入るし、僕にとつては皿慢の親友だつた。「だつておとひつちゃんがそう言つてたよ」と一言口にすれば、あっさり大抵のことはOKが出た。

「おとひつちゃんと一緒にハイキングに行くんだ」と言えば、うちの父さん母さんもみな納得でお小遣いをくれた。

今だつて僕は、おとひつちゃんのことが大好きなはずだ。

おとひつちゃんが僕を大切な友だちだと思つてくれることがわかるから。

要領の悪い奴だとあきれついても、やつぱり僕はおとひつちゃんのことが大好きなのだ。

そんなおとひつちゃんに本人がやりたくないことを求めるなんてことできるだらうか。

僕が感じた限り、杉本さんへの感情はもう、マイナスだ。

おとひつちゃんにとつて、好きな女の子、といえるのはひとりだけだ。

もし、葉牡丹を差し出された時、狂喜乱舞しそうな相手はひとりだけだらう。

もちろん「たいして好きじゃない子」程度だつたら、もちろん素直に「めんとか言えるだらう。おとひつちゃんもその辺は男だ、はつきりしている。

問題は「嫌い」なタイプの場合だ。

僕はまだ、おとひつちゃんにそのことを確認していない。できればしたくない。けど、杉本さんが葉牡丹の鉢植えを差し出した時、

おとひつちゃんときたら完全におぞけをふるつていた。できればこれ以上一歩も近づいてほしくなかつたんだろう。おとひつちゃんが女子の前で露骨にびびつていたのは初めて見た。

その後で健吾くんから「杉本さんの過去」について聞かされた。聞いたことを丸呑みするおとひつちゃんのことだ。おとひつちゃんは、「嫌いな女子に追いかれる」というのががまんできないに違いない。ずっとお茶わんこそばをされたり、変な花を押し付けられたりして、それを耐えながら青大附中に通わなくてはならないこと。どんなにしんどいか、想像はつく。

総田はおとひつちゃんにそのまま渉外係専念お願ひしたいところだ。

けど、僕はおとひつちゃんの為に、なんとか杉本さんから縁を切らせてやりたい。

「冗談じやないよ。僕だって、あんな子とおとひつちゃんが一緒にいるところ、見たくないよ。

実はそれが一番の本音かもしれない。

教室でさつきたんと少しだけ話をした。

とりわけ僕とべつたりしていろいろわけじやない。僕は別にもつとしゃべつていいと思つんだけど、さつきたんがちょうどいい距離でいてくれる。すつじく楽だ。

妙にくつついてくるつてわけじやない。たまたますれ違つたから挨拶する、ちよつと帰るところだつたから途中まで歩く。偶然ばかりだ。僕もさつきたんのことをうつとおじいとか思わないですむ。僕があげた葉牡丹の鉢植えについて、わざとらしく話題にしてくることもない。本当に、いい人だ。だから僕の方から話題を振つてみる。

「さつきたん、昨日の花、どうしてる?」

ふわあつと笑つた。やっぱり、喜んでくれたんだ。

「今日は玄関に出したままなの。玄関口は冷たいからさううつじない

かなあつて思つて

「あれ、寒いところでもいいのかなあ」
さつきたんはさすがに花に詳しい。

「もうよ。葉牡丹はね、冬、外に出したままでも大丈夫だつて、本に書いてたわ。それでね」

周りを気にするようにして、さつきたんは僕の隣りで小首をかしげた。

「今度のお休み、お天気よかつたら、うちの庭に植え替えようかつてお母さんと話してゐる。大切に育てなくちやつて」
どうせ捨てるつもりでいたんだから、そんな大切にしなくたつて
かまわないんだけど。

「あ、でも変な花でごめん」

「ううん、佐川くんが持つてきてくれたんだもの、ちゃんと育てる
わ」

だからあれはおとひつちやんがもらつたもんなんだつて！
すっかりさつきたんは、葉牡丹を僕がわざわざ持つてきてあげた
つて思い込んでゐる。

たぶん、そう思いたいんだろう。

一応、僕なりに説明はしたけれども、信じたりなんてしないんだ
もつ。

女子つて、どこか自分の都合のいいことばかり信じてしまつくな
があるみたいだ。

おとひつちやんのうちに寄つて、給食のパンと牛乳だけ届け、僕
はさつと家に帰つた。

まだ一年だから受験も先だし、といつことで、店の手伝いをさせ
られる。僕のうちには青潟駅前で小さな本屋さんをしてゐる。雑誌と
かコミックとかもあるけど、結構学校の参考書や教科書なんかも扱
つてゐるので、お客様は入つてゐる方だと思つ。今の時期だと、青
大附中受験用の参考書とかが売れるつて、うちの父さんが話してい

た。あんまり近くには、学校の教科書を扱う本屋が少ないんだそうだ。よくわかんないけど、教科書なくしてもこまらないなって思う。部屋でシャツとセーターを重ね着して、あつたかくした後店に下りていった。父たちが返品作業中だつた。床に積み上げた本をダンボールにより分けている。今の時間は学生が多いので会間に打つレジもせわしない。しかたない。僕もレジ脇でカバーをかける手伝いをすることにした。受け取つて「カバーつけますか?」とお客様に尋ねて、OKだつたらいそそと紙のカバーを表紙の上から挟み込む。たまにはビールの袋に入れてあげる。一時間くらいばたばたしていた。だいぶ人がはけてきた時だつた。

「あの、」

女の子の声が、僕の真ん前でした。ピーク時間最後のお客さんかと思つて、目を向げずに返事した。

「はい、少々お待ちください」

「佐川さん、ですよね」

やつぱりかすかな声。僕は顔を上げた。カバーをかけ終わつた本をその前にいたお客様に渡し、あらためてその子の顔を眺めた。見覚え、あるある。

耳の上にまあるく編みこみした髪の毛をまとめている。カシンフーマンに出てくる女人みたいな髪型の子。忘れるわけない。紺のコートで隠されているけれど、きっと青大附中のブレザーフリースを着ている。ほわほわつと首のあたりがあつたかくなつた。言葉がうまく出てこない。まずは挨拶を。

「ええと、この前はどうも」

女の子の名前が出てこない。確か僕の苗字に似ていた記憶はあるんだけど。一緒にいた男子は「健吾くん」だつて覚えているのにだ。肝心要の記憶力が弱すぎる。

隣りで父さんがやつと僕の顔を見やつた。なんか誤解してるのかもしない。ここできちんと説明とかなくちゃなんない。

「この前、おとひつちゃんと青大附中で会つた人だよね
「覚えていてくれたんですか！」

声が弾んでいた。僕の方がびっくりするくらいだった。誤解が一層広がりそう。

父さん、見えないとこりで僕をひじで小突くのはやめてほしい。
なんかうずうずする。

この人助けてくれたんだよな。まずはお礼だな。

言葉を慌ててつなげた。

「あの時はほんとに助かった。ありがと！」

一年だったはずだ。昨日、体育器具室でダンボールを挟んでにこにこしあつたあの子だとわかるのだけど、肝心要の名前が思い出せない。

「あの、今少し、いいですか」

迷つてている間に女の子は僕を真つ正面からすうっと見た。じいつと、つて感じじゃなかつた。葉牡丹の彼女のよつこ、にらみつけるのではない。僕の方がもつと見ていたいっていう角度に、せりせりと。

父さんは完璧に昨日の出来事を誤解したらしい。結構、家の父さん、女子とのこととかに曰ざわとくて、しょっちゅうからかわれている。「雅弘、おとひつちゃんとお前、どっちがもてるんだ?」といきなりちょっかい出すのはやめてほしいと常々思つてている。たぶん今、僕の方がもてもてだと勘違いしまくつているはずだ。勝手にしろだ。

「じゃあ、雅弘、だいぶ空いて來たから、もう戻つていいぞ
なにがもう戻つていいぞ、なんだよ！」

頼むから、下手なウインクするのを止めてほしい。女の子の前、そんなことは言えない。もう勝手に返品作業でこてこてに疲れてるつてんだ。僕は頷くだけ頷いて、さつさとレジコーナーから出て行つた。あぶなく返品用のダンボールに躓くとこだつた。あの子の前でこけないでよかつた。

「いいけど、なあに」

女の子は児童書コーナーの本棚前へ歩いていった。『ミシク』コーナーだと僕と同じくらいの奴がたくさんいて落ち着かないし、雑誌コーナーも同じだし、ってとこだね。児童書だったら、うるつこていののはお母さんと子どもくらいだし、ちょこまかして子どもの騒ぎ声はBGM代わりにもなる。僕がもし、店の中で内緒話したいとしたらたぶん連れてくるのはなにだ。

「じめん、あそこでこにゅこにゅしてたのひの父さんなんだ。」

「佐川さんのお家なんですか」

「田でわかる『佐川書店』。なんのひねりもない。

「うん。うち本屋だつて、昨日しゃべつたかな」

「今日はたまたま参考書を買いに寄つたんです。まさか、佐川さんに会えるなんて思わなかつたんで、驚きました。いきなり声をかけてしまいごめんなさい。アルバイト中だつたんですか」

「アルバイト、ときたか。单なるうちの手伝いなんだけだな。

女の子はずっと僕に敬語を使つ。一年上だからなおさらなんだろう。僕なんて背も低いしがきつぽい顔してるし、一年の中に混じつても変じやないと言われている。先輩扱いなんて、めつたにされたことがない。あらためて気付いた。この子、背がちょっと高い。

「ううん、うちの手伝いだよ。だから、大丈夫なんだ」

何が大丈夫なんだか、自分でもわからないことを口走つている。どうしてかわかんないけど、髪巻き上げの女の子を見ていると僕ひとり、ひとりでペラペラしゃべつてしまつ。ラジカセの早回しボタンと再生ボタンと一緒に押したみたいだつた。女の子はまた耳に手を当て、髪の毛に触つた。

「で、俺に話つてなあに。昨日のことかな

偶然、というのを僕は信じていなかつた。

昨日の今日、たまたま僕がレジにいたからといって、いきなり声をかけるなんて大胆なこと、できる子ではないと想つのだ。おとな

しゃうで、じこかせつせたんじめことのあねはにかみぶつを見て
もせうだ。健吾くとの指示だらうか。

騙された振りしてやつてもここねじ、嘘つぐのはよくなじよ
なあ。

絵本と児童書の境目が四角く「一」取りされていた。立ち読み
している格好で僕は女の子の隣りに立つた。小さな声でせわやいた。
「もしおとひちやんにばれたらまずこつてことだつたら言わない
よ

「あの、私」

女の子が目をまんまるくして僕を見つめている。こつもそうだ。
何気なく、「うじやないかな」と思ったことを女子に言つと、大
抵おんなじ反応をする。別にやなことを話したつもりじやないんだ
けど。

「わざわざ来ててくれたってことせ、本当に知られたらまずこつてこ
とだよね。ほんとだつたら生徒会と関係のない俺よりも、副会長や
つてゐおとひちやんの方が話通じるはずだもん」
ちよつと意地悪なことを言つてしまつた。

「俺、勘違いしたこと言つたかなあ」

まずい。嫌味いっぽいだと思われてしまつたかもしれない。そう
思われたくない。

手持ちぶたきの片手を、本の背に滑らせた。

「佐川さん、私」

床に座り込んでしゃべりでいるちやな男の子が絵本を広げて
いる。騒ぎ声に混じつて女の子の言葉は聞き取りづらかつた。

「新井林くんには内緒なんです」

「新井林？ ああ、健吾くんのことか。

でも、お付きあいしている奴に内緒つてことは。やはり今の再会
は計算ずくなんだ。

「おとひちやんのことを聞き出すために、わざわざここに来たの
？」

やはりだ。予想はついていたけれども、ぐったりきた。女の子はうつむいた。ほんとに泣いちゃいそうだった。学生かばんを両手で抱え、ゆっくりと僕を見上げた。本当に泣いているみたいだった。

「今日のこと、誰にも言わないでください。でないと私

「別にいいけど、けどどうして」

言いかけて、その前に聞かなくちゃいけないことを先にした。

「「めん、俺、言いすぎた。名前、もつかい教えてほしいんだけど、いいかなあ。俺は佐川雅弘。あ、もう知ってるよね」

泣き笑いめいた表情で佐賀さんは僕を見つめた。ほわほわともやのかかった、やわらかい湯気がかかっているみたいだった。白くて豆のような小さい花。たくさん集めてぽんと渡されたような感じだった。

「佐賀、はるみ、です」

「女の子」じゃなくて、「佐賀さん」と心で呼ぶよになつた瞬間だった。

僕は黙つて佐賀さんを、自動ドアの出入口に連れて行った。一緒に外へ出るにこした。

外に出ようと思ったのは、やはり店の中で親から向けられる視線がうざったかったことと、佐賀さんの立場を考えたからだった。他の男子と一緒にいるところを見られたらかなり誤解されるだろう。

別に僕はそれでもいいんだけど。悪いことなんもしてないし。隣で佐賀さんがくしゃみの声を押し殺していた。どこか中に入つた方がよさそうだ。

「ちょっと歩くけど、郷土資料館に行こうと思つんだ。いいかな」小首を傾げて僕を見た。

「店でお客さんに渡している無料招待券があるんだ。けど、あんまり行く人いないみたい。人気ないんだよ」

「私はかまいません」

「あそこ、中に入ると、展示室のどまんなかに大きなすがあるんだ。閉館時間まで座つていられるんだよ」

総田と落ち合つ時によく使つてている場所だった。店のレジで配つている無料招待券をくすねてきてこつそり連絡を取り合つ。大人が数人うろついている以外は見事に静か。館員の女の人が座つているくらいだろうか。安心して機密情報を交換できる場所だつた。

佐賀さんは唇のはしにえくぼを作つた。

「ありがとうございます」

「いいよ。けど、青大附中からだつたら遠かつたよね。自転車、今 の時期は使えないし」

「バスで來たんです」

「じゃあやつぱり、狙つてきたんだな。

佐賀さんとしては、「偶然本屋に立ち寄つたら僕がいた」という設定を守りたかったみたいだけど、不自然なことをしたつてろくなことはないとと思う。

偶然出会った人をいきなり、そんなふたりつきりになれそうな場所へ引きずり込むなんてこと、できない。

目的があるからこそ、できる」とつてあるはずなのだ。

「バスの時刻は調べた方がいいよね」

「大丈夫です。最終、見てます」

完璧だよ。

水鳥中学の知り合いには会わずにすむよう、近道を使つた。五分くらい歩いたところに、「青潟市郷土資料館」と木目の看板が出ている建物がある。見た目は目立つけれども、中に入ると受け付けのおじさんが黙つて招待券をもいでくれた。コンクリートの壁ばかり目立つ、かすかにピアノの曲が流れているところだつた。主に青潟市のなりたちとか歴史とか、水害地震など天変地異の話とかのパネルが張り巡らされていた。時代劇に出てくるような紐綴じの本とか、形をなしていない木造の板とか、見ても面白くない。僕たちはわき目も振らずに茶色のソファーに向かつた。青潟市全域の立体地図を背に座つた。髪の毛の白い男の人が、ゆっくり歩いている以外は誰もいなかつた。

「ここ、五時半までいても平気だよ」

「はい」

僕もジャンバーを着ないまま来てしまつたので、かなり寒さが答えた。中は暖かいけれど、暑いほどではない。佐賀さんもコートを羽織つたままだつた。手袋だけ脱いで、両手で握り締めていた。

目的つて、なんのかなあ。佐賀さん。

僕にだけ用があるのは確かだ。

おとひっちゃんのいないところで、もつというなら恋人の健吾くんすらはさまないところで話さなくてはならないこと。

昨日教えてもらつた話は全部焼き付けてあるけれども、今日に至ることなかつたのがはつきり結論付けられなかつた。まあいや。わかんなかつたら、聞けばいい。

単純なことだ。

「佐賀さん、俺、少しずつ質問していくけどいいかな」「聞いていくつて」

片手をまた耳元に当てて、佐賀さんは首をかしげた。わざとらしくない。髪の毛の角度が三角定規の先っぽ程度に傾いたくらいだった。

「俺、謎解きが好きなんだ。推理小説とか、ドラマとか見て犯人当てるのがすっごく好きなんだ。だから、佐賀さんの話、ちょっとだけ当ててみたいんだ」

わざとらしい言い訳だけど佐賀さんはうつむいて、小さくうなづいた。

「外れてたら言つてくれればいいよ。おとひっちゃん、葉牡丹くられた人のことかな」

「葉牡丹、梨南ちゃんの」

すぐに反応が返ってきた。僕は畳み掛けた。

「帰り、俺たちを送つてくれた時、言つてたよね。葉牡丹くれた人が逆恨みすると大変だから葉牡丹を持っていってほしいって」
かすかに唇を開き、佐賀さんはふたたびはあつと息を吐いた。
でも言葉には出さない。僕は気づかない振りしてさらに続けた。
「俺とおとひっちゃん、ちゃんと持つて帰つたよ。けど、男子は基本的に花育てるの苦手だろ？ 枯らしたらあとで大変だつて聞いたから、別の知り合いに預かつてもらつたんだ」

「その人、男子ですか、女子ですか」

答えた方がいい。即断した。

「女子だよ。同級生で、やさしくていい人なんだ。おとひっちゃんも、その人にだつたら預けたいって言つたんだ」

少しうつくりめに力をこめて言つた。

特に「やさしくていい人」「その人にだつたらいい」というところはアクセント記号を思いつきりつけて

「やさしくていい人、なんですか」

かすかな声で、目を伏せたまま佐賀さんが問い返した。

「うん、関係ないけど、おとひっちゃんの好みって、やさしくておとなしくっていい人が好きなんだ」

「ぐど」ようだけど、アクセント記号をつけさせていただいた。

「やさしくって、おとなしくって」

また佐賀さんが繰り返した。勘違いしてるとじやないかつて気がしたので、慌てて僕は軌道修正した。

「うん、けど俺はおとひっちゃんと好み違うかもしれないなあ」無意識に口走った振りをした。

「佐川さんがですか」

「うん、俺つてあまり女子に興味がないんだ。いい人だつたらみんな男子女子関係なく、いい人だから好きっていう。それだけなんだ」なんでそんなこと言い訳したのかわかんないけど、口が勝手に動くのだからしかたない。

「そうなんですか」

「もうひとつ、おとひっちゃんつて、すつごこ度真面目野郎で、曲がつたことが大嫌いなんだ。いじめをする奴は男子女子関係なく、絶対許さないな。たとえ自分が好きだった子だつたとしても、そういうことをしているんだつたら、縁を切るか、もしくは殴るかしちゃうなあ。俺、おとひっちゃんと幼稚園の頃からの親友だけど、そういうところはぜんぜん変わつてないんだよ」

匂わせてみた。昨日の話を丸ごと信じると、葉牡丹の君こと杉本さんは、僕の隣にいる佐賀さんを思いつきりいじめていたらしく。佐賀さんの反応もあいまいだけど、事実関係を認めているつて感じだつた。現場を見ているわけではないので判断できないけれども、やりそうな人だなあという気はたしかにした。気に入らぬことだつたら文句をつけて押し通しそうなタイプ。違つているかもしれないけれど。僕なら、たぶん違うんじゃないかと疑問符はつけるつもりでいる。けど、おとひっちゃんがあの話を聞いて、それでも杉本さんのこととかばうとは思えなかつた。いじめをして堂々としている

る」とや、担任にも嫌われて次期評議委員会から降ろされているといつことマイナスの点数を増やしているんじゃないだろうか。

「俺、思うんだけど、健吾くんは杉本さんのことが大嫌いなんだよね。だから、かなり悪口に上乗せしていることがあるんじゃないかなって思つたんだ。だから話を少し低く見積もつて聞いてたんだ」

僕は続けた。よく総田に話し掛けるような感覚で。

「俺がはつきりと本当だつて思つたのは、健吾くんと佐賀さんが、杉本さんのことを大嫌いだつてことなんだ。違つてるかなあ」

「違つてます。私、梨南ちゃんのことを嫌つてなんかいません」

慌てて早口に否定する佐賀さん。頬が真っ赤だつた。首を激しく

振つた。

「梨南ちゃん……杉本さんのことなんですが、あの子は私と小学校一年の時から一緒にいたんです。本とか百科事典とかそういうのをたくさん読んでいて、成績もよくつて、それに可愛くつて。小学校の時は田立つてたんです。新井林くんも言つてましたけど、確かに私は梨南ちゃんにひっぱられてたところつてあつたと思うんです。梨南ちゃん男子が大嫌いでののしりあいのけんかばかりしてたから。私に話しかける男子を見ると、すごい勢いで文句まくし立て追つ払つてました。馬鹿と話すと馬鹿になるからつて

やつぱり杉本さん、佐賀さんをいじめてたんじゃないかな。

確信、さらに深まる。

「でも、梨南ちゃんはそれを私のために、つていつも言つてました。だから私も、そななだなあつて思つてずっと言つ通りにしてました。けど、新井林くんからそれは違う、悪意なんだつて言われてから、だんだん考え方が変わつてきたんです」

俺から見てもそれつて嫌がらせだよ。健吾くんのしたことほ
然だよ。

おとひつちやんも杉本さんをぶつとぼしていただろ。

「けどけど、私、考え方が梨南ちゃんとは違つてるんだつてことを伝えただけなのに、ものすごく怒られてしまつたんです。小学校の

卒業式前に、私、靴の中に蛆虫を入れられたことがあつたんです。梨南ちゃんじやありません。他の男子が梨南ちゃんの靴だと思つて間違つてしまつたんです

男子だつていやだ、女子だつたらもつとすこしに驚きだつただろう。「泣いちゃつた？」

僕の顔を横目でにらむよつにして、佐賀さんは頬を押された。

「だつて、足の上からこぼい小さな虫が上がつてきて、私、何がなんだかわからんくつて」

「男子だつてパニックになると思つよ」

「その時、梨南ちゃんは私の靴を脱がせよつとしてくれたんです。梨南ちゃんは善意だつたと思つてます。けど、その時に新井林くんが来て、梨南ちゃんを突き飛ばして、私をおぶつて教室につれていつてくれたんです。そして、」

頬を今度は両手で押された。

聞きたくないけど聞いてみた。

「なんか言われたのかなあ」

「私とお付き合い、したいつて」

それだけ言うと佐賀さんはつむき震えた。

そうなんだ。やっぱり、付き合つてるんだ。

なんで佐賀さんが、健吾くんとのきつかけを、会つて一回田の僕に打ち明け始めたのかわからなかつた。関係はあるんだろう。たぶん杉本さんとのことで何があるんじやないかとは思う。けど、僕としてはどうでもよかつた。関係なかつた。

「で、杉本さんはそれからけんかになつたんだ」

「はい。あれ以来梨南ちゃんは私と口利いてくれなくなりました。けど、それはしかたないんです。新井林くんと付き合つてしまつた私が悪いんです。私、関係なく友だちでいられると思つたけど、梨南ちゃんは絶対に許せなかつたみたいなんです」

先に彼氏を作つてしまつたから悔しかつたのかな。

佐賀さんが杉本さんよりも早くそういうお付き合いしたところの
だつたら、納得だ。

もしどっちを選べとか言われたら、僕も、たぶんおとひっちゃん
も同じ選択をするだらうから。

「どうして許せなかつたのかなあ。理由、あるのかなあ」

「ほけほけした調子で僕はさらによく尋ねた。

「たぶん、なんですけど」

ほつれた耳もとの髪の毛を、人差し指で押さえるようにして、僕
の顔をじっと見つめた。

目が合つた。そらせなかつた。

「梨南ちゃんは新井林くんのことを七年間、好きで好きでならなか
つたんです」

そういうことか。

思わず、ひざを打つた。

キーワードが見つかると僕の頭の中ではものすごい勢いで答えが
まとまつていぐ。これって無意識なんだけど。

「だから健吾くんは、杉本さんのことを嫌つてたんだ」

「小さい頃からそうでした。新井林くんは梨南ちゃんのことが大嫌
いだつたんです。でも梨南ちゃんはずつと新井林くんのことばかり
考えて、一生懸命関心ひこうとして、赤ちゃんみたいなことして
たんです。なんとなく、四年生くらいからそういうかなつて思つてたん
ですけど、梨南ちゃんと友だちでいたかつたから言わないであげた
んです。なにか機会があつたら、新井林くんと仲良くするきっかけ
あるかなとも思つて」

「けど、そういうのはなかつたんだ」「蛆虫の事件だつて、もし私
が新井林くんと付き合わなければよかつたのかな、つて思いました。
でも、その時私、梨南ちゃんよりも新井林くんの方が本当のこと言
つてるんじやないか、つて感じたんです。でも、梨南ちゃんととも友
だちでいたかつたし、それで、私

言葉の切り方が僕には、テレビドラマの人みたいに聞こえた。

「佐賀さん、俺、思うんだけど」

途中でさえぎりたくなつた。

「別に俺、杉本さんのことを佐賀さんが嫌いになつてもおかしくないと思つんだけどなあ」

あくまでも、気抜けした風に。田の前をゆつくり通り過ぎてこくおじさんを田で追いながら。

「無理に好きにならなくたつてこになつて思つたけど、もうほいかないの」

「だつて私、梨南ちゃんがずっと小学校の時から、私をかばつてくれてたんだと思ってたし」

勘違いだ。僕はその点で、完璧健吾くんと同じことを考えていたんじやないかって思つた。

なんか言わなくちゃ。佐賀さんの言葉とずれているもののが、乾いた空氣の中にふわふわ漂つてゐるような気がした。彼女本人はぜんぜん気がついていないみたいだつた。女子つて意識しないで平氣で、怖いことを言つ。男子だと「これつてまづいかもなあ」と思つことを、わざと言つ。

「俺、あまり杉本さんつて人のことよくわかんないけど、健吾くんがしたことは当然だつて思つよ。佐賀さん、杉本さんのことを友だちだと思つてるだらうけれど、男子からしたらとんでもないなつて感じるしさ。どうこうことじつたのかなあ」

佐賀さんの手は、ずっと手袋をひねりつづけていた。

「男子たちと話をしていると、『他の女子たちに嫌われるからやめなさい』って言つてくれたりとか。あと、品のない可愛いノートを使つと頭が悪くなるからやめなさいとか、漫画よつもけやんとした辞書を読みなさいとか。それからそれから

とんでもない人だな。

ほとんど杉本さんと話をしきれない僕が言つのもなんだけど、これだけ聞けば十分だ。

もちろん、佐賀さんがうそをついている可能性だつてないわけで

はない。

ただ僕の見る限り、佐賀さんの方に分があるよ」と思えてならなかつた。

「なんで男子と話をしてたの。別に杉本さんの悪口とか言つてたわけじゃないだろ」

「前の日のテレビの話してただけだつたと思つます。梨南ちゃんのうち、テレビないからそういう話できな」

完璧、変だよ。

前の日のテレビドラマとかアニメとか、そういう話で盛り上がるつてみんなやつてることだ。たぶん佐賀さんは他のこととこわゆる「ふつう」の話をしてたんだろう。でも、杉本さんはそういう話題に入れないから無理やり佐賀さんを引き離して、自分のところにひっぱりいれようとしてたつてわけだろ。

「可愛いノートって、女子が使つているピンクとか花とかの奴？ 男子で使つてたらばかにするかもしねんだけど、なんで女子同士で頭が悪いとかいうのかな」

「梨南ちゃんはいつも、真っ白い柄のないノートを使つていたから「杉本さんの趣味がそういうだけであつて、佐賀さんの好みに文句いつ権利ないよ。はつきり言つて杉本さんがおかしいよ」

僕の顔を驚きまなこでまつすぐ見つめる佐賀さん。髪型も、ひとみもみんなまんまる。

「読む本だつてそだよ。漫画読むことつてそんなに悪いことかなあ。うちの親も、もつと真面目な本読めとか言つけど、それって好みだよなあ。佐賀さん、杉本さんの言つ通り漫画読まないできたの「いいえ、他の友だちとか、先生とかが貸してくれたんです」

先生つて、ほんとかよ。

佐賀さんの周りの人つて変わつていて。杉本さんのように、「漫画の代わりに辞書を読め」と意味不明なことを口走る女子がいると思つたら、「漫画を貸してくれる」先生がいたりする。僕も、辞書と漫画が並んでいたら、まず漫画を手に取るだろ。辞書を愛読書

にする人もいたつていいけどすべての人の趣味だと決め付けられるのはよくない。

「読んでいるんだつたら、あとはふうんつて無視しちゃえればいいのにな。杉本さんには勝手に辞書を愛読してもらつて、佐賀さんは自分の読みたいものを読めばいいんだ」

首をかしげずに、僕の隣で佐賀さんが何かを言おうとした。

唇がかすかに動いた。一いつつ時、女子はよくわけのわからないことをいっぴい並べ立てる。すうつと聞き流して、必要なところだけ繰り返せばいいと僕は思つてゐる。真正面からすべてを聞き取つて、すべてに答えるなんて、男としては大変だ。さつさと結論だけ言つちやつた方が佐賀さんにとつても、僕にとつてもいいかな、と思つた。

「佐賀さん、嫌つたつて誰も責めないよ。なんで杉本さんをまだかばいたくなるのかわかんないけど、今の話みんな聞いてみて、杉本さんのように押し付けがましいことをする奴は、あつさり縁を切つて正解だつて思うよ。もちろん生で見ているわけじゃないし、俺も一回しか会つた事のない人の悪口言いたくないけどね。もし佐賀さんが杉本さんを嫌いだつたとしても、軽蔑する気なんてないよ」

もちろん、他の中学の連中についてだらだら悪口を言つつもりなんてないし、佐賀さんの言い分がすべて正しいと決め付けることもできない。なによりも今日、佐賀さんがなんで僕を訪ねてきたのか、その理由がまだ判然としない。自分と健吾くんとのことで、杉本さんがとばっかりを受けていることとか、おとひつちゃんが杉本さんのことを好きなのかどうかとか。いろいろあるだろう。けど、僕からしたら佐賀さんは言い訳をしているような気がしてならない。本音は杉本さんのことの大嫌いなのに、どうしても認めたくないあたりかばおうとしているというんだらうか。

そう、びんびんと感じてしまう。

小学校の頃から、嫌がらせされてきて、それでもがまんしなくちやいけなかつたことなんかを。

佐賀さんのために、とわざとらしい言い訳をして、杉本さんは自分の好みばかりごり押ししつづけてきたってわけだ。僕からしたらばかばかしい以外のなにものでもない。健吾くんが爆発して佐賀さんを守るうとしたのは、当然のことだと想つ。佐賀さんだつていっしょに、爆発しちゃえぱい。言いたい」とせつときつ言つて友だち関係を切るのが一番いいはずだ。

なんで女子つて、腐れ縁をまだまだ守るうとするんだうつなあ。

「私、梨南ちゃんのこと嫌いだなんて」

「嫌いなんだよ。俺にはわかる」

なぜか、強く言い切りたかった。

「佐賀さんは女子の好きそうなノートを使いたくて、漫画とかも読みたかったんだろ。いろんな好みつてあるとは思つけど、杉本さんが佐賀さんに命令する権利なんてあるのかな。佐賀さん、どうして文句言わなかつたんだろうつて思つたんだけど、きっと杉本さんが佐賀さんのためにつて言つたからそういう思い込もうとしたんだろうなあ。けど、そんなの佐賀さんには関係ないじゃないか。俺もよくおとひつちやんにああしきりしきりつて言われることあるけど、ふふんつて無視すること多いよ。だつて、俺とおとひつちやん、違う人間なんだもん」

思わず飛び出した。

意識なくてぽんと出でしまつた言葉こそ本物かもしれない。

そうだよ、おとひつちやんと俺は、違うんだ。

「私、今日、聞きたかつたんです。梨南けやんのことだ」
言葉が震えていた。寒いんだろうか。田の前の温度計をちりつと見た。

「関崎副会長さんも、梨南けやんのことをちりつ思つてこるのか、知りたかつたんです」
「じゃあ、俺じやなくておとひつちやんのとこに行けばこじ

やないか。

「私、関崎副会長さんがもし本気で梨南ちゃんのこと、いいと思つていいのだったたら、協力したいと思つてました。これがきっかけで、また梨南ちゃんと友だちになれるかもしねないと思つたからなんです。でも」

それだけでは終わらないよな。

様子を伺つた。目立たない程度にうなづいてみた。

「そうでなかつたら、梨南ちゃんのために、別のことをしようつと思つてたんです」

「別のことつてなに?」

言いよどんでいた佐賀さんはひざをじいじと見下ろし、『一トの上から手袋を強く絞りかげんにした。力をいれているみたいだつた。本当に梨南ちゃんが好きな人と、仲良くなつてほしいから、そのため』

「ふうん、いるんだ、おとひつちゃん以外に、健吾くんのことじやなくつてか」

「はい、梨南ちゃん、自分でもわかつてないんです。本当に好きな人がそばにいるのに認めたくないんです」

どう出ようかな。

迷つた。佐賀さんが派手な前置きをした後、どう考へても杉本さんのこと嫌いなゆえの行動を取らうとしていることに、戸惑つていた。女子つてわからない。はつきりと「杉本さんと関崎さんをくつつけたくないの協力してもらえませんか」と言ってくれたら話は別だ。ちゃんと健吾くんあたりも交えて相談したいなつて思う。でも、佐賀さんはまだ、杉本さんと「友だちに戻りたい」などと信じがたいことを言い張つていて。

結論にさつさと進みたかった。

「ごめん、俺なりの結論言つていいかなあ」

さえぎり、また大きな目で見つめる佐賀さんに答えた。

「悪いけどおとひつちゃんは杉本さんのこと、あまりよく思つてないと思うんだ。苦手なタイプじゃないかなあ。おとひつちゃんの好みって、おとなしくてやさしくて、いつもここにこしていいる感じなんだ。人前で他の男子たちの悪口を平気で言つ人とか、あといじめを学校するような人は、絶対に許せないタイプなんだ。だからたぶん」

仮に相手が佐賀さんだったら、話は別だつたかもしれないが。その辺は想像なのでノーコメント。

「そうですか。そうなんですか？」

唇の端が小さく上を向いたように見えた。

「けど、帰りに佐賀さん言つてただろ。杉本さんは逆恨みするタイプの人だつて」

両手で葉牡丹の入つた手提げを差し出してくれた佐賀さんの顔を思い出した。

「だから、おとひつちゃん、断る方法がわからなくて迷つてると思うんだ。もし杉本さんがおとひつちゃんのことをうらんで、青大附中評議委員会との交流関係をぶち壊す可能性だつてないわけじゃないし。おとひつちゃんにとつて、交流会はなんとしても成功させたいことだから、自分が我慢すればそれでいいつて思つてている。けど、そのために杉本さんみたいな人と付き合うなんて耐えられないなあどうしようつて、たぶん悩んでいると思うんだ」

僕はぼそつとつぶやいた。あまり強い調子で言いたくはなかつたけれど、事実そのだからしかたない。

「もし杉本さんに別の好きな男子がいて、心変わりしてくれるんだつたら、一番丸く收まると思うんだけどなあ。そうすればおとひつちゃんは安心して青大附中の交流行事に参加できるしね。杉本さんも逆恨みしないで幸せになれる。これが俺の思う最高の終わり方」

声を立てずに佐賀さんが慌てて目頭を押された。

女子がいきなり泣いてしまうなんて、困つた。ポケットを探つた

けれども、ハンカチとかティッシュとかそんなものない。

「あ、俺、変なこと言つたかなあ。『ごめん』

「いいえ、いいんです。私」

静かに涙だけがころつころ転がるのを、僕はただ覗き込むだけだつた。

女子が泣くところつて、あまり近寄りたくない。何を言つても通用しそうにないんだから。

「佐川さん、教えてください」

涙が大粒で零れ落ちる中、声だけがさらさらとしていた。つまつていなかつた。

「私、そんなに梨南ちゃんを嫌つてゐるよう見えますか」

「うん。とこどん嫌つてゐるなあつて思つたよ」

「復讐したがつてゐるよう、見えましたか」

「うん、もしあとひつちゃんと杉本さんが付き合いたいつて感じだつたら、ぶつぶつぶししたいつて思つてるんぢゃないかなつて」

「私、いつたいなんで」

「簡単だよ。佐賀さんはずっと前から怒つて当然のことを怒らなかつたんだ。杉本さんに文句を言つたかったのに言えなかつたんだ。今、怒つて当然だよ」

もう一度佐賀さんの目が大きく潤み、ぽつんと片目から涙を落とした。

「私、そんな悪い人になんてなりたくないなんて」

「佐賀さんは杉本さんをいじめ返したりなんてしてないんだろ？ まだ友だちでいたいつて思つて俺のとこに来たんだろ？」

僕はどどめを刺した。

「そんな無理しなくていいよ。佐賀さんのような人だつたら他にいくらでもいい友だちできるよ。杉本さんなんかを見捨てたつて誰も責めやしないよ。第一、杉本さんなんかに時間をかけているひまつたら、もつといい友だちと出合つたほうががずつといいよ。俺でよかつたら相談に乗るからわ」

最後の言葉は、余計だったかもしれない。

ずっと黙っている佐賀さんの顔を覗き込むと、涙が大分乾いてきた風に見えた。

「ほんとに、私のこと、軽蔑したりしないですか」

「あたりまえだよ」

べそかいて、ちょっとだけ鼻のあたりがぐちゃぐちゃしている。犬の狹に似ていた。なでてやりたかった。

「じゃあ、言います。佐川さん」

狹くしゃ、とした顔が一瞬にしてぴんと引き締まった。

「私、梨南ちゃんのことが、嫌いでした。小学校の頃からちよつかり出してくる梨南ちゃんが、大嫌いでした。今までずっと感じない振りしてたけど、本当はずうと前から、離れたくてならなかつたんだつて。佐川さんが言ってくれるまで、私、そんなこと思つちゃいけないんだつてずっと思つてました。たつた今まで。だから友だちなんだつて顔して、うまく取り持つてあげようなんて。でも、私は関崎さんが本気で思つてないつてこと聞いた時、なんだかうれしかつたんです。私、最低な人間だつて思つちゃつたけど、本当にそつだつたんです」

「いいよ、当然だよ」

だんだん佐賀さんの口調が、ぴんと張り詰めてきた。ただおとなしいだけのしゃべり方じやなかつた。本気だつた。ガラスの中に展示されている流木や化石などがぐいと僕たちを見つめているようだつた。

「ほんとの」と言つと、梨南ちゃんが私のことを憎んでいた理由はずっと前から気づいていました。新井林くんのことを、梨南ちゃんはずつと好きだつたんです。でも新井林くんは梨南ちゃんのことがもともと大嫌いでした。だから梨南ちゃんは一生懸命ちよつかい出してたんです。私とくつついて、新井林くんに关心持つてもらおうつしてたんです。でも、結局それは失敗に終わつたんです。私が

本当にしたいこと、したか？」

それが、健吾くんと付き合いつつのことか。

一步引きたくなる寸足。僕は足を組みなおし、展示されている地図を眺めた。

「そのことは後悔してません。梨南ちゃんから縁を切られて、ほんの少し、ほつとしてたりもするんです」

「遅すぎるくらいだつたんじゃないかなあ」

「そう思う自分が悪い人間に思えてならなくて、自分でさぞうしたらいいかわんなくて」

もう涙を流していなかつた。もう一度僕は佐賀さんと田を合わせた。そらさずにいた。

「嫌いな奴を嫌いと思つてどこがいけないんだつて思つけどなあ。口で言つたりいじめたりするのは悪いと思うけど」

「ううん、私絶対そんなことしません。したくないです。けど、どうしても私、梨南ちゃんにされたきたことが、友情からだなんでもう思えないんです」

かちんと、頭の中でプラグが刺さつた。

佐賀さんつて、もしかしたひ。

それ以上の言葉は形にならなかつた。じほんとひとつ咳をして、気持ちを整えた。

白い壁にたくさん張り巡らされた青潟市の歴史跡は、青潟市民だつたら常識として頭に入れているものばかりだつた。

事実関係ばっかりで、どうこう風なやり取りがあつたのかは想像つかない。知りたいとも思わない。

結果だけわかればそれでいいと、僕は思つてゐる。詳しく知りたいんだつたら、そういう人が自分で調べればいい。

僕がほしい結果つていうのは、杉本さんがおとひつちゃんじゃない人を好きになつてくれることであり、おとひつちゃんが余計なことを考えないでくれること。ついでにこうなら、おとひつちゃんが青

大附中の評議委員会交流会に専念してくれることだ。総田をはじめ水鳥中学生徒会もそうすれば平和になる。佐賀さんも、杉本さんからこれ以上僻みのエネルギーを向けられて傷つかなくてすむ。全員、幸せになる結末だ。

そのためにどうすればいいのか。

僕は佐賀さんにめいっぱい、復讐してほしかった。

さんざん自分の幸せを邪魔した杉本さんに、とどめを刺してやつてほしかった。

杉本さんを嫌いでもかまわないのだと、わかつてほしかった。

「佐賀さん、ひとつ俺からの提案があるんだけど、いいかなあ」裏を見せないように、小学生に似た口調で僕は切り出した。

「え？」

「杉本さん、別に好きな人がいるって言っていたよね。おとひつちやんじやなくて、別の奴がいるって。その人とくつっけることって、できるかなあ」

もう展示室は人がいなかつた。館員さんが顔をのぞかせて様子をうかがう程度だ。

「というか、佐賀さんは杉本さんをその人とくつつけたいと思うかなあ」

「どうということでしょうか、佐川さん」

不安そうに、それでも落ち着いた声だつた。たつた一時間足らずで、凜としてしまつた佐賀さんが、かつこよかつた。「せつとき言つただろう。誰もが安心する結末に持つていく方法を考えてたところなんだ。もし水鳥中学の人だつたらいくらでも俺、手を回す自信あるけど、青大附中は無理だよ。だから、佐賀さんと協力して、青大附中評議委員会も、水鳥中学生徒会もまあるく納まる方法をこれから考えてみたいんだ。協力してくれればの、話だけど」

驚いたのは一瞬だけだつたらしい。手袋をひざの上に置き、佐賀さんは両手をそろえた。こづくりうなづいた。

「梨南ちゃんが本当に好きなのは、立村評議委員長だけです。立村先輩も本当は梨南ちゃんのことが誰よりも大切なはずです。今お付き合いされている女子の先輩よりも」

確信に満ちた言い方だった。

あの蝶人形評議委員長か。

ものすごくびっくりしたわけではなかつた。予想はしていた。

「そうかあ、立村かあ……わかるような気、するな」

「立村先輩は同じ評議委員の先輩と半年以上お付き合いされています。見た感じ仲良しです。けど、本当は梨南ちゃんのことを可愛くてならないはずです。それに今お付き合つされている女子の先輩には、別にぴったり合う男子の先輩がいるんです。立村先輩とはどうみても、不釣合いなんです」

「杉本さんを評議委員から降ろすことにしたというのは、立村の指示なんだろう? 健吾くんがそんなこと言つてたよね」

覚えていないようで意外と記憶に残つてているものだ。

「はい。新井林くんが万が一評議委員長となつた場合に、梨南ちゃんを傷つけないようにするためです。新井林くんは気づいてませんけれど、立村先輩は影でいろいろと、梨南ちゃんを守つとしています。おおっぴらにできないのは、ただ今のお付き合つしている先輩に気遣いしているからです」

青大附中の評議委員会恋愛事情は派手だと聞いていたが、ややこやしい。

「とにかく、立村は杉本さんを気に入つてゐるんだ。けど、彼女持ちだつたらよりほどのことがないとくつつけられないよ」「いいえ、いいんです。くつつかなくてもいいんです。梨南ちゃんが関崎さんでなくて、立村先輩のことが本当は好きなんだつて自覚できれば」

「そつか、なるほどな。やはり佐賀さんつてすごこよ。

「やうすれば、今度は梨南ちゃん、立村先輩にしつこく付きまとうよになるはずです。他の男子先輩だつたらわかりませんけれど、

立村先輩は梨南ちゃんに対してだけやさしいです。お付き合いまでいかなくても、関崎さんのこと忘れてくれれば、あとは知らないことにしてもいいんじゃないでしょうか」

完璧だ、佐賀さん、おみそれしました！

「この辺はすべて、佐賀さんの口からしゃべらせたかった。

僕と佐賀さんが郷土資料館を出たのは閉館ぎりぎりだった。雪が降り始め、せつかく融けかけていた道も雪するくらいぬかるみ始めた。

「ありがとうございます。あの、佐川さん」

「佐川さん」と呼ばれ気持ちのなかも、しゃかつと鳴った。

僕はポケットの中に押し込んでいた、いつの店のレシートを見つけた。

店のお客さんが捨てていったレシートかすだつた。

上に紫のスタンプが押されている。下に濃く、店の住所と電話番号が印字されていた。直接店の電話につながつてしまつ。

「俺に連絡したい時は、こここの電話番号、下一行にプラス一、してかけてほしいんだ。プラス一だよ」

「いいんですか」

「誰にも知られたくない計画だろ。俺も同じだし」

佐川書店の前で僕は手を振つた。

たぶん、これから誰にもわからないような場所で会わなくちゃいけないと覚悟していたからかもしれない。

おおっぴらに偶然、会いつて語つたなんて言い訳、もつできないだろうから。

耳元で大きく編み上げた女の子髪が消えるまで、見送つていた。

おとひっちゃんは見事、期末試験をトップで乗り切った。葉牡丹事件という衝撃的な出来事を乗り越えて見事、というのは、いかにおとひっちゃんの精神力がすごいものかってことをあらわしている。頭いいんだ。そういうとこだ けは。

結局万年一番手の総田とため息を吐く。どうせ僕なんて、上位に食い込むことなんてない。こんな奴が「天才参謀」と呼ばれているんだから学校の定期試験ってあてにならないものだと思つ。青大附中の期末試験つてどんな感じなのだろう。うちの電話が鳴るたびにどきりとしている。

時期的に重なつていてからだらうけれど、佐賀さんからの連絡はまだなかつた。

「じゃあそろそろ、準備に取り掛からないとだなあ」
独り言を言つおとひっちゃんに、僕は知らん顔で尋ねた。
「なんの?」

「決まつてゐるだろ。青大附中の交流会だ」

おとひっちゃん、やる気あつたんだ。

やはり「葉牡丹事件」を別のものとして割り切り進める決意をしているらしく、あとで総田にそこんところ、確認しておかなくては。くちばしをはさむと、おとひっちゃん、すぐすねてしまつ。黙つて話を促すことにした。

「期末が終わつてからにしようと言はしてたんだ。青大附中の期末試験は来週いっぱいで終わりだということだしな。雅弘、お前も手伝つてくれるよな

いかにも当然、と言つた顔している。まったくおとひっちゃんには迷いがない。

「けど交流会の主催つて、生徒会でやるんだろ? 僕、関係ないの

にかまわないのかなあ

「そうだなあ」

気づいてないのかよ。

僕はため息をつきたいのを「うう」といふが抜けている。世話がない。

第一僕は水鳥中学一年二組の学習委員。「長」もなにもついていない。ただおとひつちゃんの友だちってだけだ。それだけの理由で参加できるわけがない。

「じゃあしようがないな。総田たちと組むしかないか」おとひつちゃんは肩を落としてうなだれた。

「それがいいよ。俺、あまりその辺わかんないし。けど、青大附中についていくとかだつたら「くらでも付き合ひよ」下心ありすぎるほどある。

「やつぱりお前、いい奴だよ。俺の親友だ」

素直に喜びを表すところが、おとひつちゃんだよな。話をそらすために試験結果を持つてかえるのが苦痛だつてことを、ひたすらぐりつた。本音でもある。この調子だと公立高校入試に必要な内申点がかなり低くなつてしまつ。おとひつちゃんは思つてもみないだろうけれど僕はずつと下のランクの学校を狙う定めなんだから、大変なのだ。

「雅弘、お前どこ受験するつもりなんだよ」

「一応、青潟工業か商業」

最初から職業科を考えているつてのは本當だ。おとひつちゃんが公立で本命にしている青潟東よりは内申ランク低い。専門がはつきりしている学校に行きたかった。手先もどちらかいうと器用なほうだと思う。自分なりに適正チェックは怠つてないつもりだ。おとひつちゃんはよくわけのわからぬ顔をして僕を見た。

「普通科にしないのかよ」

「将来就職する時、すぐに手に職がついたほうがいいだろ。俺、おとひつちゃんみたいに頭はよくないけど、できるだけ早く独立して

仕事したいんだ。だから」

「あ、お前、大学行かないのか？」

ほりきた。高校進学したらみんながみんな大学に通おうなんて決め付けていいるとこ。おとひっちゃんの单細胞。

「高校卒業してすぐに就職しないかもしれないけど、その時は専門学校行くつもりなんだ。できるだけ就職に役立つ能力身に付けたいからわ」

言葉を発せざとまどつているおとひっちゃん。

たぶんおとひっちゃんにとつて、「青潟大学附属高校」大学進学「一流企業就職」というのは万人向けの道だと思っているのだろう。特別に目的がなかつたら、僕だつて普通科を目標にしていたかもしない。僕としてはできるだけ早く就職して、お金を稼ぎ、独り立ちしたいと思っていた。家から早く出て一人暮らししたいそんな気持ちでいっぱいだつた。もつというなら、自分の頭と腕で働くことのできる仕事をしたいと思っていた。

「雅弘、工業だつたら、青潟工専もあるんだからな」

そんなレベルの高い学校行けるわけないだろ。

工業専門高等学校、通称、工専。自分の学力はとつくにつかんでいるつもりだ。

「今からそんなレベルの低いところ狙うなんてもつたいたいねえよ」

そう簡単に決め付けるおとひっちゃんの方がもつたいたいと思うけどな。

それ以上文句を言つと、向きになつたおとひっちゃんに噛み付かれるのが目に見えている。僕はすぐに、別の話を用意した。

「おとひっちゃん、交流会やるのはいいんだけど、青大附中から誰が来るんか」
まさか、あの葉牡丹の彼女がやつてくるなんてことはないだろか。

体育器具室で健吾くんは四月以降、杉本さんが評議委員から降ろ

されると断言していた。信じるなりば、四月以降に開いたほつがい
いんじやないだろうか。

「たぶん一年が中心だと、立村……ほら、委員長、あいつが言つて
た」

「へえ、あいつと連絡取つてるんだ。

もちろん副会長なんだから、代表として連絡を取るのは普通だろ
うけれど、かなり意外だつた。

「俺たちは三年の前半までだけ、青大附中は三年まるまる活動で
きるからだつて言つてたぞ」

となると、立村評議委員長が指揮をとることになるのだろうか。
「主だつたメンバーは現一年と、一部の一年とになりそだだという
ことだ」

一部の一年に杉本さんが入つていたらどうするんだよ。

「だから俺たちも、内川を中心として、一年連中を集めておけばい
いと思うんだ、雅弘。俺と総田は手伝いのつもりでいいだろ
う。その辺も立村と話してある」

なるほどな。青大附中は一年中心、水鳥中学は一年中心。

これだつたら見事にず れるな。

おとひっちゃんもそれなりに、考えることはあるんだ。僕は素直
にえらいと思つた。

「じゃあおとひっちゃん、交流会には出るの？」

返事は意外だつた。

「いや、俺はたぶん裏に回る。総田が関心持ち出して、やたらと參
加したがつてゐるんだ。あいつもやはり、外部との交流に命かけたい
気、してきただろうな。いい意味で内川が刺激になつたみたい
だ。内川の奴も言つてたんだ。『関崎先輩みたいに僕もぜひ、交流
関係やつてみたいなつて思つていたんです。総田先輩もぜひですか
つてな』

なんだ、そういうことか。

要は総田教授の計画がはまつたということだ。おとひ

つちやんひとりでそんなこと思いつくわけがない。

総田には後でこいつそり電話連絡する」とこした。急いで帰り、たまたま家の中にいた母さんに、

「今日、電話かかってこなかつた?」

と確認した。もちろん店ではなく、僕あてにだ。

「そんな昼間にかかるわけないじやない。雅弘、あんた何電話に最近ご執心なの?」

母さんはまだ、佐賀さんといつ女子が僕に会いにきたということを知らない。

父さんもその辺、わかってくれているらしく、後で恩を売りつけないでほしい。

「なんでもない。勉強する」

「雅弘、期末試験の成績、あとでちやんと見せなさいよ」

決していいとはいえない結果だったから、できるだけ引き伸ばしたかったのだが。厳しい現実だ。さて今夜は思いつきり説教されるぞ。

部屋に駆け上がり、天井の木目をにらんで、僕はカモフラージュ用の教科書を広げた。苦手な英語の教科書。思いつきりカタカナで発音を書き込んである奴だった。

電話番号、忘れたのかなあ。

下に聞こえるように、英語の教科書を音読したが、頭には入らない。

電話の音も聞こえない。じじじんとこく、やたらと家の電話が気に掛かる。

レシートの電話番号、下一桁、プラス一つであれだけ教えたのになあ。

やはり、紙に直接書いた方がよかつたのかもしれない。手帳を佐賀さんから貸してもらつて、空いているところに僕が書いておいた

方が。あの時は頭が回らなかつた。後悔したつてしようがない。そういうことだつたんだ。

耳の上に黒い手まりのような編み上げ髪を、たまに部屋で思い出す。

毎日、あの髪型を作るのは大変だらう。くせなんだらうか、耳もとに手を当てて小首をかしげるしぐさとかも。

見ているだけで話がするつとてきた女の子だつた。

まさか、俺と会つたことがばれたのかなあ。

いろいろ考えていたけれども、やはり原因は一つ。「レシート紛失」しか考えられない。

また相談しに来たいつて言つてくれたけど、電話来なくちや、どうしようもないよなあ。でも、佐賀さん、番号分からなくなつちやつたんだつたらしようがないか。駅前の佐川書店つて、電話帳で調べれば一発なんだけど。小さいけど、広告してるからすぐわかるよ。

カタカナ読みで、文字面には一切目もくれず、「タイターツク号の最後」を読み終えた。少しほうに单語、こびりついたらうか。おとひつちゃんとみたひな頭になれるだらうか。

なんで僕が佐賀さんのことばかり考えているかつていうと、いい案を思いついたから以外のなにものでもなかつた。おとひつちゃんと総田のように女子のことで頭が一杯、顔を見るとゆでダコ状態だからでは決してない。「つかり誰かに言つと、「お前色氣つきやがつて！」と言ひ振らされるのが関の山なので内緒にしているだけのことだ。面倒なことには巻き込まれたくない。

佐賀さんに話した「杉本さんと立村評議委員長をくつつけてみんなハッピーハンドにする」、「案なのだけど、僕ひとりではどうしようもない。むしろ佐賀さんが青大附属の人たちに協力してもらうしかない。けど、佐賀さんの立場は難しいような気が、僕はする。

杉本さんを頭に、他の女子たちが佐賀さんを無視している状況なんだからなおさらだ。

女子ってなんで、自分よりもいいと思つた子に意地悪するんだろ？
変な集団だ。もし男子だつたらすぐ友だちになりたいって思つだ。

僕が今できることは、水鳥中学生徒会の中を少し、風通しよくすることだ。総田だつて、おとひつちゃんを厄介払いするために、何気なく協力してくれているんだ。おとひつちゃんも杉本さんさえいなければ、大喜びで調子に乗るだ。ふたりで協力してもらい、学校側を口説き落としてほしい。

まずは、バスケットボール部の顧問を先にだ。僕もその辺は応援してやりたかった。健吾くんつて、わかりやすくつて、おなかのなかはなんもなくて、いい奴だ。僕だつたら立村よりも健吾くんの方を友だちにすると思つ。

おとひつちゃんももつと、健吾くんと友だちになればいいの。元の案。あるのだ。とにかく成功させたい、案が。

けど、青大附属側の状況がわからないと進められない。

佐賀さん、レシートきつとなくしつけたんだな。じゃあしようがないか。

しようがないか、では済ませるのが僕の流儀だ。

当たり前、電話がないなれば、直接会いに行く。口で言つ。これが一番簡単だ。

店に下りて行つた。よっぽど用でもないか、父さん母さんに呼び出されて店の手伝いをさせられるか、そのどちらかでなければ顔を出さないんだけどしようがない。夕方のピーク時間帯にかかつて、かなりお客様さんが入つていていた。買って行く人はひとりかふたりだつた。あとはみな、書棚と雑誌棚の前でかばんを本の上にのつけて、立ち読みする連中ばかりだつた。外は雪で、かばんが濡れているのに平氣で置いてしまつお客様さんに、うちの母さんはいつも怒つ

ていた。紺の縦襟型コートを着ている女子高校生と、雑誌棚の間に無理やり割り込んでいき、「ちょっとじめんくださいよ」と言ひながら下の引き出しを引っ張り出した。立ち読み客に対する嫌がらせだ。根性あるのはその女子高校生、一切無視して分厚い女性漫画雑誌を読みふけっていた。母さんがわざわざかばんを、本の上からどけて床に置いたつていうのに、何も感じていないうつだ。この勝負、悪いけど母さんの負けだ。本屋は読んでもらわないと商売にならない。

父さんがレジで本の間に挟むスリップ……しおりのような形をしている細長い紙のことだ。真ん中で折り返してあり、本の間に挟みこまれているものだ。これを半分に千切つて、片方を店に保存し、もう片方を出版社へ送り返すことによってお金がもらえるんだと言つてはいる……を一枚にちぎつて分けている。僕はこつそりもぐりこんだ。

「雅弘、手伝うか？」

「うん」

すでに父さんは、佐賀さんとの繫がりを知られてはいる。まだ二回しか会つたことがないのに、

「雅弘、お前もやるなあ」

と頭を小突くのは勘違いもいいとこだ。面倒だつたので言ひ訳はしない。ありがたいことに父さんは、母さんに告げ口しないようだ。かえつて好都合かもしれない。なんとなくそう思つた。

僕は父さんが色ごとに分け終わつたスリップを、輪ゴムで止めて、五十枚ずつさらりと束ね直した。

「明日、うちの配達するものつてないのかなあ」

田を合わせずに、お仕事に専念している顔をしたまま尋ねた。

「配達か？ ああ、あるぞ」

レジ後ろの棚にあるバインダーノートを取り出して、父さんはチエックを開始した。毎月、毎週到着する雑誌の定期購読予約というのがうちの店では結構ある。テレビやラジオの語学講座テキストと

が、喫茶店や美容院に届けるファッショングループ雑誌とか、飲食店などで使われる料理関連の雑誌などが中心だ。購読予約しない限り絶対に入荷してこない雑誌などもたくさんあるらしい。父さんは、ノートに全部メモしておき、入荷するとすぐお客様さんに電話して知らせている。学校が休みで僕が家にいる平日には、よくその手伝いもさせられる。お客様の都合で来れない時は、配達することもある。自転車で小回りの利く僕がよくこき使われる。当然、お駄賃を弾んでもらう。これは別か。

きっと父さんは、小遣いほしさに言ひ出したんだと思つてゐるんじゃないだろうか。

「あのさあ、俺、よかつたら、明日配達手伝おうか？」
「どうせ明日、五時間目で終わるからさ」

「どうしたんだ雅弘、手伝い自分から言ひ出すなんてなあ。さてはお前

ここだけなぜ小声で言つんだろ？

「データ代稼ぎたいのか」

結局これがよ。

誤解されてもしかたない。目的があるんだからしかたない。僕は黙つて五十枚ずつスリップを数え続けた。コミックのスリップ枚数が半端じゃない。思いつきり誤解したままの父さんはにやにやしながらバインダーを開じた。

「汗を流して賄おうつていうのはいい根性だ。よし、じゃあ明日、雅弘やれ。かなりあるからなあ、覚悟しろよ」

「大丈夫、自転車で行くから」

さつきの雪でまた明日はぬかるみそうだけど、大丈夫だろう。大丈夫、絶対大丈夫。

レジが込んできたので、「カバーいりますか？」とお客様に尋ねながらカバーかけの手伝いに専念した。今日はお小遣いまだもらえない。別に小遣い稼ぎをしたかったわけじゃないのでその辺はどうでもよかつた。部屋に戻ったとたん母さんに捕まえられて、期末

試験の結果で思いつきつ怒られたのも、これまたどうだつてこことだ。

次の日、学校の終わるのが待ち遠しかつた。

こんなに手伝いしたくてなんないなんて田は、やつない。

「佐川くん、今日はお掃除当番よ」

さつきたんに言われるまで忘れてしまつたくらいだつた。

「じめん、さぼるつもりはなかつたんだ。今日は俺水拭きだよね」机の前にぶらりとげたぞうきんを引っ張り出した。なんだかまじめつていて気持ち悪い。三月に入つたけれど、春なんてまだまだ先だ。寒い日に限つて水拭き掃除の日だなんてついていない。さつきたんも今日は週番じやなかつたのだらう。僕の顔を黙つて眺めていた。

「急いで帰らぬといけないの?」

「ほんとはそなうなんだけど、でもさけるつもじじやあなくつ」さつきたんに気付いてもらひてよかつた。掃除さぼりは違反カード一枚に加算されるんだから。またはつかねずみのよつなきょとつとした顔で、さつきたんは首を振つた。

「でも、急いでいるんだつたら、佐川くん、窓枠だけ拭いて、それで終りにすればいいわ。そこだつたらすぐに終わるし、ぞうきんをバケツで洗うだけでいいし」

もちろん誰にも聞こえないよつな声でだつた。僕にひたつとくつつく格好になる。後ろで誰かがひゅうひゅう言つてゐる。僕は平氣だけどさつきたんはいやじやないんだろうか。

「さつきたん、いいよ、俺けやんとやつていいよ」

「困つた時はおたがこをまだと思つの」

少しうつむいた感じで、わつきたんはいくつと頷いた。

「あの、実は、これからつけの配達、手伝わなくちゃいけないんだ。だからなんだ」

制服にさつきたんのお下げの先つぽがくつつくつてさわやか

れたら、言つしかない。僕はぞうきんをひねりながら、教壇上のバケツに向かつた。机と椅子をすべて下げてゐるので、前はすかすかだつた。さつきたんも一緒に雑巾をつまんでいる。

「お家の手伝いしてゐるのね、大変だわ」

「自転車で青大附属の方まで回らなくちゃいけないんだ。」

「ここまで本当のことを言つてゐるんだからやましいことではない。急いでバケツのとこにしゃがみこみ、水にぞうきんを浸した。一緒にさつきたんも同じことをした。ふたりでバケツを間ににして向かい合つた。

「やうなの、だつたら急がなくちゃいけないのね」

「うん、でも当番は当番だから、きつちりやるよ」

掃除の手を抜くのなんて簡単だ。僕は悔しいけど背が低い。だから高いところの拭き掃除なんて、台を使わないとできない。いつも机をさあつとなでるようにすつて、それで終りだ。雑巾もさつきたんの言つた通り、一度ぐにゅぐにゅと絞れば終りだ。さつきたんが心配しなくても大丈夫だつてわかつてゐる。

「それなら佐川くん」

また僕の隣りに回りこむようにしてしゃがみこむ。

「今日は私が机を全部拭くわ。そうすれば佐川くんは窓枠だけですむでしょ」

指先がちくつと痛い。きつと昨日、本のスリップを数えていふうちに指をすつたからだ。冷たくて指がおかしくなりそうだ。

「あ、ありがとう。さつきたん、助かるよ」

僕は素直にお礼を言つた。さつきたんつて、いろいろのすく気が利く人だと思つた。早く帰りたくてなんない顔、していたんだろうな。

「ううん、いいの。あのね、佐川くん」

かつちりと絞り、立ち上がる寸前こさつきたんはしゃいた。

「佐川くんからもらつた葉牡丹、ちゃんと肥料あげてるのよ。可愛いお花でよかつたねつて、お父さんもお母さんも喜んでいるの。あ

りがとう

葉牡丹、そんな大切にしなくつたつていいのに。

とりあえずさつきたんの心遣いはありがたく頂戴した。僕は絞りきつていらない雑巾でべたべたに窓枠をぬらしておいた。葉牡丹もさつきたんには普通の花に見えるらしい。

「行つてきまーす！」

店に声かけて出発するなんて、小学校以来だ。父さんは事情を知つてゐるからいいけれど……厳密には知らないに等しいのだけど……母さんは返本用の雑誌をまとめながらびつくりした顔で見送つてくれた。あとでつっこまれるだろう。きっと。

通りすがりの家はほとんど顔見知りだつたから問題なかつた。一冊単価もそれほどものすごい額じゃないので、強盗に襲われるんじゃないかとひやひやしないですんだ。使い込みなんてするわけない。ばれたら張り飛ばされる。

売上金専用の財布に全部入れて、つり銭用のきんぢやく袋をしつかりジャンバーの下に首からぶら下げた。こつするとお金が見えないし落としてもすぐにわかる。

最後の一軒は、青鴻大学の近くだつた。月刊の小説雑誌を三冊届けるだけだ。おばあちゃんでもう外に出られないので、めつたにうちの店には来ない。電話で注文して届けてもらう、ことに決まつてゐる。そこのうちには冬休みに何度か配達に行つてゐるので、道はあらかたわかつてゐる。

時計を見ると、あと十分くらいで四時だ。間に合つだらうか。

雪が降りそうで降らない空に感謝しながら、僕は最後の一軒に向かつた。

だいたい十分くらいこげばたどり着く。青大附属中学の校門から、ほぼ近い家だつた。

配達そのものはいつも通り終わった。売上金を大切に首からかけなおし、気合を入れて僕は自転車の方向をかえた。自転車でそれ違う人の多くが、青大附属らしいブレザ・制服を着ていた。中学生かもしれないし、高校生かもしれない。大学生だつたらわからない。制服着ていないと聞いている。ところどころに「下宿・青鷗大学生男子募集」とか「家庭教師します・当方青大三年・青大附中・附高入試ならおまかせください」といつた張り紙がやたら目立つ。マスクをしている人も多かつた。くねくねした道を抜け出し、ようやく青大附属中学の校門にたどり着いた。青鷗大学に直接向かうならすぐなのだけど、附中の玄関はかなり構内の中にある。中学生はペえペえだつて証明みたいなものだった。

うちの中学生と違つて、庭あたりの雪かきも完璧だ。まだまだ生徒がいっぴょうろついている。中には奥の方で雪球をこしらえている奴もいる。おとひっちゃんと同じ感性の持ち主だろうか。やたらと雪合戦をやりたがるというよ。また後ろの方では、明らかに青大附属の制服ではないとわかるような格好の男子中学生が、派手な自転車にまたがつて空をにらみつけている。目を合わせないようになっていた。金と銀のまだらな自転車つて、恥ずかしいんじゃないだろうか。一緒に歩きたくないセンスだ。

僕はしばらく校門でうろついていた。

金と銀のまだら自転車中学生は、これまた栄養まんてん、といった感じの女子と片手を打ち合わせて、仲良く帰つていつた。僕の方をちらりと見たけれど、ちつともいやな感じがしなかつた。目が合つてお互いにつこうりしてしまつた。

用事がないのに青大附中前でうろついていたらあやしまれるだろう。

う。

でも今日は、「うちの店手伝い」「配達でたまたまこっちにきた」「せつかく来たなら寄つていこうかな」「といふことで待つてたん

だ」と言い訳ができる。

「小説雑誌三冊」のおばあちゃんの家が青大の近くだったことは前から知っていた。

小説雑誌は毎月発売日が決まっている。

ちゃんと理由がたくさんあるわけだから、僕が堂々と佐賀さんを待ち伏せしていたつておかしくはない。ただ、一年だと早く帰ってしまうなんてことないだろうか。健吾くんの付き合い相手だから、バスケ部の練習が終わるまで待っているなんてことないだろうか。いや、もしそうなら健吾くんを捕まえて、何か言いつぶやいて伝えてもうこともできるだろう。健吾くんにはばれないように、と言つていたけれど、僕ならいくらでもこまかく自信がある。

でも、帰つてたらしあうがないなあ。まあいいや。四時十五分くらいまで待つてようつと。

無駄に時間を費やしあしない。僕はその点、シビアなのだ。

意外と生徒たちが切れ目なく、少しずつ、校門から出でてきている。自転車通学がかなり多いらしい。もしバス通学しているつてことだつたら反対方向のバス乗り場で待つていた方がよかつたかもしれない。でも、この前帰りのバスの番号を聞いたたら、青大附属近くへ行く路線のものだつた。方向は間違つていないとと思つ。思いつく限り、佐賀さんと健吾くんが話していった内容を繋ぎ合わせてみた。

もし健吾くんと一緒になってきたら、僕は知らん顔して健吾くんにだけ話かけることにして。おとひっちゃんには内緒で、バスケ部交流会の協力を申し出に来たとでもすればいい。佐賀さんとは会うのが一回目という顔をするのも簡単だ。そのくらいのこと、佐賀さんは得意だらう。僕ときつと、おんなじだ。

自転車が一台連なつて校門から流れ出た。と同時に小さい方の自転車がすぐに停まつた。うすい桃色の自転車がくきつとハンドルを曲げた。

佐賀さんだ。

僕はほつぺたのあたりで片手を振って合図した。

「佐川さん！」

くるりんと巻き上げた髪の束。全く変わっていなかつた。続いて先に進んだ自転車がゆっくりローターをして正面を向けた。

「なんだよ佐賀、どうしたんだ……？」

立ち漕ぎして戻ってきたのは、スポーツ刈りがだいぶ伸びてきた健吾くんだった。佐賀さんに話しかける口調とはまるつきり違つていた。

「あ、あの、ええと、水鳥の」

「おひやしじぶりです」

相手は一年生だけど、やはり僕としてはきちんと挨拶しておいた方がいいかなと思つただけだ。下級生だし、すぐにため口を叩くことにした。

「今日、たまたま用事があつて来たんで、ちゅうぶ通りかかつたところなんだ」

「あ、すげえ偶然ですね。関崎さんおげんきっすか」

健吾くんもおとひっちゃんのことが好きらしい。いいことだ。「元気だよ。どうなの。交流会の方は盛り上がつているのかなあ」隣りで物言いたげな顔で僕を見つめている佐賀さん。でも健吾くんの前だとだんまりだつた。ほんとは佐賀さんと話をしたいのだけど、お付きあいの一人にいきなり話すなんてことはできない。ポケットの中には店で配るプレミアムのバッヂが入つている。あまり物だ。ずっと前に父さんがくれたものだつた。描かれているのは有名なアメリカのバスケ選手らしいけど僕は知らない。持つていけば話のネタになるかな、と思つて持つてきた。きりのいいところで取り出して健吾くんにあげるつもりだつた。

佐賀さんがちょっと顔をつぼめ、僕を上目遣いで見やつた。

「あの、佐川さん、この前はどうもありがとうございました」

「なんだよ佐賀、邪魔すんな。男同士の話なんだ」

まだ当たり障りのない話だったので、割り込まれても困らない。僕はちょっととぼけてみることにした。

「え、いつの？」

忘れていたふりをしておけば怪しまれないだらう。田ではわかるようになし図したつもりだけど、伝わつただらうか。佐賀さんはひいたりしなかつた。またかすかに口元をほじろばせた。片手を耳に当てた。

「この前、佐川さんのおうちだなんて気付かなくて、お店に入ったの」

「店つてなんだよ店つて」

かなり機嫌悪そうな健吾くん。妬いているんじゃないだらうか。ふたりつきりの時がばれたら大変だ。佐賀さんのことだから考えがあるはずだ。僕は合わせることに決めた。

「俺のうち、駅前の本屋なんだ。電話帳にも載つているよ。『佐川書店』つて」

「ああ、俺小学校の時、あそこで青大附中用の問題集買わされたことあるなあ」

確かにうちの店は参考書・問題集関連が多い。

「でね、健吾」

「健吾」と呼び捨てにするのはなぜだらう。ほんやり考えていた。「私、この前のエレクトーンのお稽古の時に、健吾が探していた外国のバスケットボールの人の本、探してみよつと思つて本屋さんに寄つたの。そうしたら、佐川さんがたまたまレジにいたの。びっくりしちやつたの。あの時は本当にありがとうございました」

僕と健吾くんの顔を両方覗きこみながら、佐賀さんはお礼を言つてくれた。嘘ついていない。やましくない気持ちで僕は笑つた。

「え、お前、そんなこと一度も言わなかつたじやないか！」

険悪になりそうな空氣だが、佐賀さんは全く沈着冷静だ。僕は様子をうかがいつつ、佐賀さんの本心を大急ぎで探つた。エレクトーンのお稽古の帰りかどうかわからないけど、佐賀さんが僕とレジで

顔を合わせたのは本当のことだ。健吾くんに呼ばれても問題ないってことだらう。そう解釈しよう。

「うん、佐川さんにも内緒にしてもらつたの。だって、健吾がほしがっているものを買つたんだって気付かれたら、いやだつたの」「なんでそこでそうのうけるんだよ！」

急におへそのあたりが痒くなつた。

一切本を買わずに店を出たなんて、ばらさない方がいいのだらう。「だから、本を買えなくつて、挨拶だけして出ちゃつたの。でも他の本屋さんに行つた時にはもう雑誌なくて、あの時買つておけばよかつたつて、今後悔していたの。佐川さんの顔見えていて、つい思い出してしまつたんです。『ごめんなさい。ごめんなさい、健吾』最初の『ごめんなさい』は僕あてだつた。

「つたぐ、隠し事するなよな。佐川さん、すんません。こいつが邪魔したようで」

最後の「ごめんなさい」で機嫌を少し直したのかもしれない。健吾くんは生真面目に頭を下げた。

健吾くん、なんで、「こいつ」って呼び捨てるんだらう。

急に一発、勝負したくなつてきた。

ポケットを探り、外国のバスケットボール選手写真がくつついているバツチを取り出した。備えあれば憂いなし、ことわざは真面目に覚えておこう。

「これ、うちの店で配つていたものなんだ。佐賀さんが、一生懸命アメリカのバスケットボール関係の雑誌を探してたから、好きなかなあつて思つてたんだ。そつか、健吾くんにあげたかつたんだね。ならこれ、あげるよ」

佐賀さんに向かつてはつきりと、わかりやすく伝えた。 しつ

かと見返してきた日は郷土資料館の時と同じだつた。

「私は梨南ちゃんのことが、大嫌いだつたんです」とはつきりと断言した時と同じりりしい表情だつた。女子でそんなきりつとした

田を見たのは初めてだった。今も、ビセビセしてこる。

「え、佐川さん、いいんですか」

「いいよ。じめん。俺が声かけたから佐賀さん買つことできなかつたんだから」

白々しい言い訳だけど、健吾くんに信じこまわるひとはできなかつたんだから

うだつた。

証拠に健吾くんは、僕が佐賀さんに渡したおまけのバッヂを、ぐぐつと覗き込んでいる。早く渡せ、と言いたげだ。

「ありがとうございます。それなら健吾」

照れもしない。少なくとも僕にはそう見えた。佐賀さんは両手で貝殻のように丸く受け取り、じいっと見つめながら健吾くんにバッヂを差し出した。胸元から花が開くよつた柔らかい手つきだった。健吾くんも田をそのままつひとつと合わせたままで、

「佐賀、お前」

これだけつぶやき、指先でバッヂを受け取った。お礼を言わなかつた。

僕の方に向かい、「じつも、すげえうれしいです」興奮を

押し殺したような声で一礼した。本当は佐賀さんに言つのが筋だと思つ。

「だから、健吾、もし青大附属と水鳥関係のこと、いろいろ問題あるようだつたら、私、替わりにこつそり佐川さんにお手紙届けてあげるわ。私、毎週金曜がお稽古なの。駅前のバスに乗るの」
僕はすっかり取り残されたまま、ふたりが自転車を押しながら前で語り合つのを聞いていた。佐賀さんの目的は想像つかないわけじゃないけれど。もちろんこれで堂々と会つ口実ができたわけだけど。しかも健吾くんには言つて訳できるないようだけど。

でも。

別に、お付きあいしてもいいけど。

田の前で髪型をくるくる巻きにしている佐賀さんと、健吾くんの

間に思いつきり自転車を突っ込んでやりたかった。

「ああ、そうだな。佐川さん。さつきの話なんだけど、あつたかい
ところでもう少し話、進めたいんですけど、『リーズン』の休憩所で
少し、いいですか？」

佐賀さんが振り向き、小首をかしげたところで、僕も頷いた。

大型スーパー「リーズン」の中は僕たちと同じ年くらいの中学生がたくさんたむろっていた。学生服にセーラー服といった、水鳥中学とほとんどデザインが変わらない格好の連中が多い。もちろん青大附中の人たちもたくさんいた。みな昇りのエスカレーターに乗つていつてしまう。大抵は男子だけ、女子だけの塊だった。男女二人組みの中学生というと、青大附中のブレザー制服姿の人ばかりだった。

僕がいなければ、今日も佐賀さんは健吾くんとふたりだったとうわけだ。

「今日は、部活の練習とか、ないの」

「はい、練習したくても、部員が少ねえから」

健吾くんは日焼けの消えない指先で、拳骨を作つた。こぶしというのではなく、五人、と数えてそれつきり、という意味らしい。

「五人しかいないんだ。部員」

「バスとかシユートとか、あとは基本運動くらいしかできないつすよ。やっぱし、新入部員と、二年の追加入部者を集めねえと、きついです」

そうだろう。二年生の先輩たちは何やつてるんだろう。

「一年はみな、今の時期卒業式関連の手伝いとか、委員会活動に引っ張り出されます。うちの学校の連中は卒業式そのものよりも、『卒業生を送る会』の方にばっかり力を入れるから、全く練習する時間がねえんです」

水鳥は反対なんだけどなあ。

おとひつちやんが頭を抱えて文句を言つていたつけ。卒業式の合奏や予行練習でしょつちゅう、運動部関連の連中が公式の休みを取つて出て行くつて。

「だから、今日は俺の判断で休みにしました。あんまり少なくて愚

痴りあいになるのも、部の空氣をにじらせるだけだし、第一、裏で悪口ばつか言つてはいるのつて最低野郎のすることだと俺は思います。正々堂々とののしつちまえばいいの」「元気だよ。

それができる環境ならね。「言い切つてしまえる健吾くんに僕は、気持ちいいものを感じていた。

階段踊り場の椅子がまるまる空いていた。健吾くんは一度端に立ち、僕に真ん中の席を勧めてくれた。すう。まだ一年なのに、大人みたいだ。

「ありがとう。健吾くんさすが、礼儀作法厳しいね」僕をちゃんと先輩扱いしてくれるなんて、すうい、本当にすごい。「うちの学校そういう礼儀だけはすうげえうるせえから」「私は？」

あどけなく佐賀さんが僕の後ろで声をかけてきた。きつくならみ返した健吾くんは、

「お前は、俺の側でしゃがんでろ」「私もおすわりしたいわ」「しようがねえなあ」

さつさと僕の隣りに腰を下ろした。頬に手を当て、「寒かつたわ」「寒かつたわ」とつぶやいた。

いすの後ろ側に男性用トイレが位置している。いかにも従業員、といった風の人たちが入れ代わり立ち代り現れる以外は静かだった。「ここだつたらよその連中にばれねえで話ができるんです。先輩に教えてもらいました」

「先輩つて、立村に?」「じゃなくて、その上の委員長です」

あつさり答えたところに、健吾くんと立村くんとの溝を感じた。

一応、「立村さん」と呼んでいるし、なんだかんだいって勝負はついたらしいとは聞いている。でも、心底尊敬しているわけではないだろう。「先輩」と「さん」の間にはかなり大きな違いがありそうだ。

「卒業する二年の先輩なんですけど、とにかくす」¹⁾ 人になんです。成績もいいし、運動も抜群だし、男氣があつて完璧な委員長、つて人でした。俺はああいう委員長になりたいと思いますよ。たぶん、本条先輩……その人の名前なんですけど……こうこう時一刀両断で片をつけてくれたんじゃねえかなあ」

僕を通り過ぎるような視線で、佐賀さんに相槌を求める健吾くん。

「このふたり、いつものことらしい。佐賀さんも落ち着いて、うんと頷いていた。

「確かに、今は大変そうだね、健吾くんもバスケ部とかけもつてたら大変だよね」

「あと、学内のスポーツ壁新聞もやつてるから
初耳だ。佐賀さんが補足説明してくれた。」

「毎週、運動部の試合関係の情報を、新井林くんと私とで集めて、写真を取つて壁に貼るようにしているんです。去年の十一月から、新井林くんがひとりでやり始めて、いつのまにか学校の先生たちも応援してくれるようになつたんです。」

「四月からは、他の委員会や文化部の連中にも手伝つてもらう予定なんだ」

少し反り返つた。自慢したいんだろう、わかる、わかる。こういう時の相槌は決まつていて。

「すごいなあ、健吾くん。うちの学校でそこまで情熱かけてやる奴、なかなかないな。ううんと、おとひつちやんも頑張るほうだけど、大抵蠻巣かつてやめちゃつてる」

しまつた、口を滑らした。佐賀さんがまた小首をかしげたけれど、健吾くんは意に介さないように話を続けた。

「今的一年の裏事情はいろいろあります、ちょっとなあって、一年の立場からしてむかむかしてくるつてのが、あります」

「それまだどうして」

合ひの手がうまく入った。健吾くんはむらむら背筋をピソと伸ばした。もともと背が僕の頭幅くらい高いんだから、少し猫背になつてくれてもいいんだけど。

「直接関崎さんに連絡するべきかどうか判断がつかなかつたんですけど」

派手にくしゃみをして、唾を撒き散らした後、健吾くんは鼻をすすつた。

佐賀さんは僕の方に身を寄せる格好で、健吾くんを見つめていた。「この前、俺たちんところに佐川さんたちが来てくれた時、俺、言つたと思うんですね。杉本が四月以降、評議委員から降りられるから、これからは問題がないという話。覚えてますか」

もちろん忘れるものか。行きの自転車漕いでいる間、全部わざつておいた。

「俺もつつきりそれで決まりだと思つてました。ところが、三日前だつたが、こいつが」

だから、こいつって呼ぶのはやめろつて。

佐賀さんがまた頷いた。

「上の先輩を通して、交流関係についての怖い情報を仕入れてきたんですよ。まさか、裏でこいつ手を使うなんて思つてもみねかつたから」

「あの、誰が？」

「うちの委員長です」

健吾くんは拳固を片手でくるむよひにして、一回「あ」と天井につぶやいた。その後顔の筋肉を引き締めて、

「立村さんは評議委員会に害虫がいるのはまずいってことで外した。それは確かです。けど、交流関係についての別グループを四月以降こしらえようといつことで、生徒会や先生たちに話を持ちかけて、

三円末をめぐに発疋をせようとしてます

「まつそく？」

「ごめん。僕は本屋の息子でありながら、漢字があんまり読めるほうでない。

「評議以外の連中を集めて、水鳥中学さんと交流会を始めようつて腹です。委員会中心主義を壊す代わりに、委員会とは関係のないグループを結成して、活動しようつてことです」

つまりなにか。杉本さんはまさか。

評議から降ろされた場合の逃げ場所つてことだらうか。僕は用心深く尋ねた。

「杉本さんが、その中に入りそつた気配なのがなあ

「ご名答です。佐川さん」

健吾くんは一度手を打つて僕を人差し指で指し、また大きなため息を付いた。

「杉本を降ろすと決めたと、立村さんが話した時に、それっぽいことは言っていた可能性あります。でも俺、そんなこまいこと覚えてりやしねえし。評議から追い出したからといって、立村さんが杉本のことを目かけないことはねえだらうし、ひとつの手としてはその通りかもしねえ、っていう気はしました。無理やり押し込むことにはなるでしうが、評議としては安泰です。けど、ただ

毒々しい葉牡丹の葉に顔をもみくちゃにされる。

僕の想像が間違つてなければ、恐ろしい結論になりそうだ。

「たぶん、立村さんは杉本を四月以降も、水鳥中学関係の交流メンバーに置く可能性、大です。評議委員会としての活動ももちろんやるだらうし、他の委員会や部活も相当力入れてくるとは思うけど、でも、要に杉本を置くことには、計算済みなんじゃねえですか。今、佐賀と話してて、俺、そう思いました

僕が口にしたのは、思いつきり本音だった。

「それって、まずいよ

「そうつすね、絶対これは、まずいです

健吾くんと佐賀さんがまた田と田を合わせて、お互に額を合ひつていた。

佐賀さんが聞きつけてきたらしい。だつたらむつと佐賀さんに話を振ればいいのに。なんか健吾くんは、自分ひとりで話すことこだわっている。佐賀さんにいいとこ見せたいんだろう。気持ちはよくわかるけど、ものたりない。

「今、あんまり詳しいことは話せませんけど、一年の男子女子の間で、わけのわからんねえことが起こっているみたいんですよ。三年間持ち上がりだつた評議委員をひとり入れ替えるとか入れ替えないとかで、騒いでいるつていうか」

「杉本さんの時みたく？」

「あれは立村さんとうちの担任が決めたことなんで別です。けど、今回は人間関係の『ごたごた』がからんで、一年女子のひとりが評議を降りたがっているみたいなんで、な、佐賀、そうだろ？」
やつと佐賀さんが話してくれる、と思いつきや健吾くんはすぐに言いなおした。

「いや、俺がしゃべる、お前は黙つてろ。で、たまたま新しく入る予定の女子評議の先輩からその辺の事情を聞きだしたつてことです」「新しく入るつて、まだ三月だよ。まだ選ばれてないのにさ」「前もつて誰を選ぶか決めておかないとまずいらしいです。うちのクラスはとにかく杉本でなければ誰でもいいと思つてますが」

ちらつと佐賀さんを僕は覗き込んでみた。

その辺、反応をしりたかつた。何も身動きせず、おだやかに首をかしげて聞いていた。

「じゃあ、新しい評議委員が入つてくるから、みんな怒つているんだね」

うちの委員会だつたらそんなこともないだろうけれど、青大附中の場合は簡単にいかないらしい。評議委員会は一種の部活なんだろう。三年になつて新しい部員が、人間関係の『ごたごた』をひつくるめ

て入つてくるとなつたら、そりやあ動搖するだらつ。また立村も、「評議委員長」というより、評議委員会部の部長といった方が近い。

大変だ。

「それで今、立村さんが案を出していて、降りた評議委員女子を例の、交流会専門の部活動かサークルか、何かに入つてもらうことを探めているらしいです。水面下つて言つてましたけどばれつすよ。な、佐賀」

「つくり頷くだけのがもつたひない。佐賀さん、もつとしゃべるみつよ。

「ははあ、そりや。交流会専用のグループなんだ。その中に、評議委員経験者が入つたら、動きいいもんね。それに三年だからサークル長か部長か、そういうところにも置いておけるもんね」

おとひっちゃんの前ではそこまでしゃべらないだろ。つい健吾君の前では氣が緩んでしまつた。驚いている。うつかり健吾くんから水鳥中学生徒会にばれたらまずい。口にチャックをかけなおそ。 「すげえつすね。どうしてそこまでわかるんですか。佐川さん」

「つうん、なんとなくさ」

「まかして、しばらく健吾くんに演説をせるつもりだつた。おとひっちゃんにだつたらそれで通じる。けど健吾くんにはだめだつた。もつと聞きたそうな顔をしていた。肩越しに佐賀さんも僕の目をじつと見詰め、にこつと笑つてゐる。しゃべるしかないじやないか。

「俺、ガキのころからそうなんだけど、何となくこの人はこう思つてるんじゃないとか、あいつは何かたくらんでるんじゃないとか、そういうことがわかるんだ。たぶん氣のせいだよなつて大抵は流すんだけど、あとで確認するとほとんど当たつてるんだ。具体的にどういうのつて言えないけど、予知能力がすつごくあるつていうのかなあ。今も、健吾くんから杉本さんについての話を聞かせてもらつたけど、やつぱりいつものよつて、元のよつて、あるんじやないかつてことが浮かぶんだ。今までの例からして、たぶん当たるんじゃないかなあと思うんだ。でも、そういうのつて

怪しいから俺は言わないけどね

「なんとなく、わかるって」

隣りで佐賀さんが小さくつぶやいた。健吾くんは聞きとがめずに真剣なまなざしで見入っていた。

「うん、空気が読めちゃうってこののかな。この調子でこくと、たぶん杉本さんはすかすかつかつちの中学に乗り込んでくるだらうし、大騒ぎになるんじやないかって気がする。俺の勘だけどね。おとひつちゃんのことを気に入っているのはわかるし、この前佐賀さんが言つてたようこ、逆恨みされてる可能性もあるよね。でも、どれもこれもおとひつちゃんには関係ないよ。水鳥中学にも関係ないし。迷惑かける人には来てほしくないつてのが、おとひつちゃんの本音だと思つんだ」

「やはりですか」

すっかり健吾くんは、僕の言葉を鵜呑みにしている。想像しただけだつてのに。意外と単純だ。おとひつちゃんレベルなわけないよな、と改めて思った。

「関崎さんは、あの女を寄せ付けたくないつてわけですね」「当たり前だよ。その証拠に」と、あの葉牡丹、すぐに別の女子にあげちゃつたよ！」

厳密に言えば、僕が、だが。

「絶対内緒にしてほしいんだけど、おとひつちゃん、あの毒々しい花見るのも触るのもいやそうだったんだ。真面目な奴だから、たぶん俺がいなければ持つて帰つたと思うよ。でも、次の日、期末試験前だつたのに熱出してあいつ寝込みやがつたんだ。ほんと、無理してたんだよ、きっと、杉本さんのことを思い出して具合悪くなつたんだなつて俺は思つたよ」

「そりやそうだ。よくわかる」

健吾くんは頷いた。さすがに佐賀さんは身動きしない。そりやそうだ。

「たぶん、青大附中と交流会をするつもりはあるだろつこ、健吾く

んの率いるバスケ部との練習試合関係は進めてくれると思つんだ。ただ、その後、立村委員長が理想とするようなこと、できるかどうかは難しいな。せつかく準備を整えても、きっと、あの人気がつぶしそうな気、するから」

「あの人、とは立村委員長のことではない。

「そうつすね。だからなんとかしたいんですよ。俺としても、続けて、咳払いひとつ。

「で、もし佐川さんがうちの立村さんと同じ立場だつたら、どう処理しますか」

「委員長だつたらつてことかな。

「難しい要求だ。でも、答えたい。答えなくちゃ、チャンスがなくなる。

「なんのチャンスだかわかんないけど、背をつつかれる気持ちで僕は答えた。

「ほんつとこれは仮だよ。仮に、俺が評議委員長だつたら」「細かい突つ込みはなしに願いたい。直感に任せて僕は声を潜めた。「まず、学校内で杉本さんに何か恥をかかせる事件を起つ。いや、いじめとかいやがらせとか、そういうことをしてはいけないよね。健吾くんや佐賀さんの話だと、ネタは一杯あるみたいだから、そのことを、杉本さんが一番好きな人の前で話すんだ。この前健吾くんがしてくれたような感じのことを。けど、あれだとまだ陰口にしかなんないよ」

「氣まずやうに口をゆがめ、ちつと舌打ちする健吾くん。」
「ううう」とこ見ると、僕は先輩だつていぱりたくなる。調子に乗るつてこのことだ。

「だから、誰かと組んで、おとひつちゃんの前で、今まで杉本さんがどうこつことをしてきたのか、佐賀さんをいじめて苦しめてきたのかつてことを、全部話してしまえばいいんだよ。佐賀さん、ほんとひどい田にあつたんだよなあ。」
「の前健吾くんが話してくれたことが全て事実だとすれば」

「事実です、あつたりまえだつての」

最後の一言は投げやりだけど、まあいいか。

「それだつたらなおさらだよ。おとひっちゃんも単純だから、否定できない証拠とか、出来事とか、あと本人が図星されてどきまきしたところなんか見たら、信じるよ。おとひっちゃんはいじめをする奴最低だつて思つてているからなおさらね。そんな子、誰が好きになるかつて思つよ。どんなに葉牡丹押し付けられたつてね」

「けどそれは、汚ねえ気が」

言ひかけたのを、僕は遮つた。

「嘘を並べるんぢやないよ。杉本さんを弾むし上げるつてわけぢやないよ。うーん、うまく言えないんだけぢや。例えばよく学校のいじめ問題を討論したりする時に、どこかの学校で起つた例をあげたりするだろ？ ついつつかり先輩に礼するのを忘れたら、体育館の裏に引っ張り込まれて蹴りいれられて、学校行くのよくなつたなつて、登校拒否になつてつて話」

「の前道徳の授業でやつていたことを、適当に言つた。よく覚えていたもんだ。」

「いかにも偶然、つて顔で話すんだ。『どつかの学校であつたらしこれど、友だちを家来にしてずつとひっぱりまわしてきた女子が、惚れてた男子を取られたことを逆恨みして、クラス一丸無視させたつて。でも、やっぱり正義は勝つんだね。その女子反対に無視されちやつて、学校追い出されるんだつてさ』とか。さりげなくやるのがコツだよ。たぶんおとひっちゃん相槌打つよ。『それは当然だな、やられて当然だ』つて。杉本さんだつていたたまれないよな。本当のことを自分の好きな男子の前でえんえん並べられているんだから。そんなところ、普通だつたらいたくないよな。すぐに逃げるよ、逃げてそれつきりになるよ。だつて本当のことなんだから逆恨みするしかできないし、したつてみんな無視するだろ？」

「そんなことで動搖するような女か、あがく」

また吐き出すよつて言つて健吾くん。

「わかんないよ。そこまで根性座つている女子だつたら俺は別のこと考えるけど、うちの学校の女子を見る限り、これでめげなかつた人いないな。あ、この方法ね、小学校五年の時にクラスのいじめが起こつた時、打つた手なんだ。おとひつちゃん、正義でもつて女子たちを怒鳴つて、『卑怯なことするなんて、最低だ！』つてわめいたんだけど、全然効果なくて、かえつていやみ言われただけだつたんだ。おとひつちゃんかわいそつたから、俺、こつそり、やつたんよ。女子たちが集まつているどこで、なーんも知らない振りして、今言つたようなことを。夏休みの学校合宿の時にね」

僕からしたら、誰が誰のことを好きだとか、そんなのは丸見えだつた。

いじめのボスらしい女子が、別の男子のことを好きだという噂を聞いて、僕は手を打つた。その子の目の前でその男子とトランプやりながら、奴が軽蔑するタイプの人間について語つてもらつた。どんなことだつたかは覚えていない。相手のことなんて無視してとことんしゃべつただけだ。その女子みたいなことをする奴は大嫌い、とこう言葉を引っ張り出したとたん、ぐだんの女子は泣きべそかいて部屋を出ていつてしまつた。

もちろんその後、いじめられていた子へのハツ当たりもあつたらしきけれど、その点はすでに男子たちがおとひつちゃんを守り立てるべく一丸となつていて、あつさりつぶれた。男子だつていざとなつたら結束固いのだ。女子が男子に守つてほしいんだつたら、せつきたんみたく思いやりある態度をしないと駄目だと思う。杉本さんがもし同じクラスにいたら、男子一同、冷たく無視していただらうつし、佐賀さんを全力で守つてあげただらう。

健吾くんが佐賀さんを守りたいのだつて同じだ。

「佐川さん、それつてできることなんですか。俺にはちよつとすくすぎでできねえな」

「でも、こざとなつたらひとつ的方法として覚えておくとこうかもしないよ」

僕は、佐賀さんを除き見た。僕の顔をじっと見つめているけれど、田をそらさない。あまり見つめていると健吾くんに「変」と思われるんじゃないかな。うつかり、疑われたりなんかしたら大変だ。うちの本屋に来てもらえないくなる。

「ひとつ的方法ですか。うちの立村さんにも、そのくらいの頭があればなあ」

頭というよりも、好みが変なんだよ。

たぶん、葉牡丹を愛する性格なんだろう。

しばらく僕は健吾くんを相手に、水鳥中学の事情について説明していた。

相変わらず、

「関崎さん、すごいつすよ」

の連呼。体育館二十周持久走でおとひっちゃんに負けたことが、相当効いたらしい。

「本当にあいついい奴だよ。」

僕も繰り返した。たぶん健吾くんは、運動能力の長けている奴には無条件で尊敬の念を抱いてしまう性格らしい。けど、僕はどいつもたつて運動神經いい方じやない。さらにはいうなら、

「佐川さん、青大附高受ける気ないんですか」

と真剣な田で尋ねられた時も、どう答えてよいかわからなかつた。

だつて、僕の第一志望は、青潟工業か商業なんだから。

職業科を選ぶと決めたのは早い。おとひっちゃんにも言つたけど、僕はその点、自分の成績をよく理解しているつもりだ。ちゃんと就職できる学校に行きたい。早く一人暮らし、したい。

でも、健吾くんや佐賀さんは、エリート中学青大附属の生徒だ。当然、エスカレーター式に高校へ進学するだらうし、たぶん大学にも行つちゃうだろう。

頭のレベル低いなんて、言われないだろな。

そんな気持ちが掠めて、つい、青潟工業を目指していると、大嘘

言いたくなつてしまつたことを口にしちゃおつ。

「ないよ。俺、成績は悪いんだ。わやんと就職できる商業高校か工業高校に進んで、早く一人暮らしするんだ。親から離れて、自分で稼ぎたいんだ」

軽蔑するならじろつていうんだ。と開き直った気持ちがないともいえない。次の瞬間、佐賀さんがはあ、とあきらめのため息を吐くんじやないか、それだけが心配だつた。

「自分で、働きたいんですか」

身をかがめるようにして、かすかに聞こえた。健吾くんも同じくらいに身をかがめた。ふたりにはさまれて、真剣に聞き入られている。「うん、いつまでも親の金で学校に行くのはいやなんだ。だからだよ」

ほおつとため息が洩れた。緊張してたのかもしれない。次にまた、はあつと息が。健吾くんだつた。

「独立、かあ」

田の前の階段を昇り田線で追いながら、健吾くんは脱力した。

「俺も、早く家を出てえよなあ。わかります、その気持ち」
健吾くんはともかく、佐賀さんだ、問題は。

ずつと佐賀さんの気配をうかがつていたけど、特に何か、あつたわけではなかつた。

今日、もう少し話ができると思ったのに、結局は健吾くんとだけだつた。

もつとも、実にはなつた。配達しまくつたかいはあつた。

いくら立村委員長が杉本さんことをめんこがつてているからといって、まさか四月以降も交流関係に参加させるなんて想像もしていなかつた。

もしもうなつたらおとひつちやん、立ち直れなくなるに決まつていてる。やつと連れられる、そつ思つていてるだひつよ。まさかまさかだ。

健吾くんと佐賀さんが、雪のぐちゃぐちゃした道を自転車押しながら帰つていいくのを見送り、僕はあらためてお金の袋をジャンバー中に納めた。落としてない。大丈夫だ。これからもう一走りしなくちゃいけない。大至急。母さんがうつるさいこと聞いてこない「うち」、総田に電話しないとダメだ。

おとひっちゃんじやあ、ダメだ。

ズボンの裾に雪で溶かした泥の跳ね返りがいつぱいだつた。あとで母さんに、洗濯に手間がかかるつて怒られるだろう。さつさと着替えてあつたかくした。まだ夕ごはんの準備はできていよいようだつた。僕は素早く電話前に陣取り、暗誦している電話番号を打ち込んだ。

いつたん総田のお母さんが出て、すぐに本人に代わつてもらつた。

「おう、なんだ。また耳より情報か」

「耳よりどころじやないつて。もう、大事件大事件」

手短に僕は、「杉本さん四月以降も交流会に出没か?」の顛末を説明した。

電話の向こうは僕の話を黙つて聞いていた。相槌ひとつ打たないつてことは、寝ているか真面目に聞いているか、それとも何か食つているかのどつちがだらう。

「な、総田、耳よりだろ?」

「お前、それどこで聞いた」

「たまたまね」

言葉を濁した。健吾くんの立場が青大附中の評議委員会で悪くなるのは避けたかった。

「まったくどこで情報仕入れてくるんだか、すげえ奴だ。で、耳より情報を関崎は知つてているのか? 知つてるわけねえよなあ。でなければあんなに情熱的に、交流会関係に打ち込むわけねえよなあ」この辺は答えに困つた。断言できない。青大附中の立村評議委員

長とは、かなりいい付き合いでしているようだし、多少は裏組織の話をしていないとも限らない。でも、四月以降また、「葉牡丹の彼女」に追いかけられるとは思っていないんじゃないだろうか。おとひつちゃんがそれを望んでいない限り。

「あのさ、総田。おとひつちゃん、そんなに交流会に関してあいつ、燃えてるの」

「ああ、すげえぞ。ちくしょう、どうせ俺は万年一一番や。おおいばりであいつ、春休み中の交流会準備に燃えてるぜ」

知らなかつた。おとひつちゃんは僕に一言も話してくれなかつた。お互い様だ。総田に聞く。

「なんだよ、春休みの交流会準備つて」

「お前あいつから聞いてねえのかよ、めつずらしいなあ」

むかつとくるけど本当のことだ。しかたなく頷く。健吾くんとおんなじで、話相手がもの知らないとなると、ふんぞり返つてしまベりだすのが総田のくせだ。

「しかたねえなあ。つまりだ。四月になつまつたらとにかく忙しいだろ。入学関連の行事もてんこもりだし。俺もそろそろ手抜きたい時期だし。だつたらまづ三月末に、うちの学校で『この前お招きいただきありがとうございました』風の会を開いてことになつたんだ。すでに萩野先生の許可ももらつて。俺が交渉した。萩野先生が立ち会つてことだ。問題なくOKだ。ただ、附中と違うのは、あまり軽いのりではできないことだな。関崎が仕切るんだから当然か」

「軽いのり、でもなかつたけどなあ」

おとひつちゃんが立村の手玉に取られたあの場面、軽くはない。

「俺が今、萩野先生と案の交渉に入つているところなんだけどな。関崎の奴、また難しいテーマでもつて討論したがつてるんだ。座談会の二の舞さ。『校則について』とか『いじめについて』とか、『制服の自由化』とか、そのあたりだろうなあ。青大附中にそのあたり、テーマになるものの資料を送りつけて、あらためて意見をまとめて

むりって議論しようつと、やんなとじろだ」

おとひつちやん、こりてないのかよ。

テストでは同じ間違いを決してしないおとひつちやんなのこ、こ
うこりとこりては、学習能力ない。

「なんでおとひつちやんつて、学校関係のネタが好きなのかな。
道徳の教科書からきつと抜き出してきたんだね」

ふとこぼれた言葉に真実があるつて本当だ。総田にせよ、佐賀さ
んにせよ、どうしてこんなに僕の本音を引つ張り出すことがどうある
んだひつ。

せつせつ、佐賀さんにも健吾くんにも話した案。まだあの時は具体的
になにすればよいかが思いつかなかつた。生煮えのことしか話せ
なかつた。

杉本さんこ、おとひつちやんの前で思いつきつ事實でもつて
恥をかかせて、もう一度と水鳥中学の交流会関連には参加させられ
ないよつことすること。

否定できなこ事實はちやんとあるんだ。

佐賀さんを無視していじめているひつこ。男子たちも、担任の先生も認めていん。

そのこことをおとひつちやんは知つていて思つたび、たぶん
ここまですこい奴だとは思つていなはずだよね。

おとひつちやんは健吾くんの言葉を鵜呑みにしてはいだらう。
葉牡丹を押し付けられたとはいえ、女子に好きになつてもらえたな
んて、めつたないことだ。そのことは素直に嬉しいだらう。でき
ればさつきたんだつたらなあ、と夢見ているだらうけれども。

でも、同情と、本音とは違う。

早く縁を切りたいと思つても、あの杉本さんとこりす、ピクニーア
みたいに離れないだらう。佐賀さんのことをしてじめづけているこ
とからしてもそうだ。七年間、健吾くんをはじめ男子連中に迷惑を
かけてきたことだつてそつだ。とにかく、しつこすぎた。逆恨みす

るかもしない。おとひつちゃんがどうしてもお付きあいできない、と言おうものなら、水鳥中学生徒会に対しても思いつきり復讐するかもしれない。

佐賀さんはその被害者だ。誰もが話を聞いたらそういう想ひだらう。でも、男子の悲しさで、女子を振るとこになつたら、どうしても悪役にならざるをえない。けつともおとひつちゃんは悪くなくて、杉本さんの強引なやりかたに問題があつたにも関わらず、悪口言われるのはおとひつちゃんになつてしまつ。「あの堅物関崎副会長が、せつからく告白してくれた女子を振るなんて、思い上がりもいことこだわ」とわざやかれるだらう。言い訳をしないおとひつちゃんにとつて、やついう悪口がどれだけ打撃か、想像はつく。

ならば、杉本さんがどういう人であるかを、全部おとひつちゃんおよび周りの人たちに知つてもらつて、納得させた方がいいんじやないだらうか。

あらためて判断してもらつた方がいいんじやないだらうか。

本当はいじめばかりして、人を傷つけて、迷惑ばかりかけてきた最低の女子であることを、たつぱり見せてもらつたほうがいいんじやないだらうか。

おとひつちゃんが振るにふさわしい理由を、水鳥中学生徒会の連中にも証明してやれば、みな賛成するだらうし、杉本さんを一切近づけないですむ。

わつきたんと語り合いたくてならなかつたおとひつちゃんに、僕は自分の意志で、できることをしたつもりだつた。ほんと、おとひつちゃんのために、だつた。けど、わつきたんは相変わらず僕と仲良しでいたいだつた。

おとひつちゃんとはちょっとだけ丁寧に話をするよになつたけれども、僕ほどに接近はしない。ぞうきんを同じバケツに入れても、さつと指は触れさせないだらう。

それが現実なんだと思つ。どんなにおとひっちゃんが好きでも、さつきたんの気持ちは変わらないんだ。

もし、おとひっちゃんが杉本さんのことを本気で好きになつたんだったら、あきらめて僕も応援するだろ。いやいやながら、葉牡丹の生育記録を連絡してあげてもいい。おとひっちゃんをなだめすかせて交流会に参加させたつてい。いくらだつてできる。

でも、おとひっちゃんはすでに、はつきりと「杉本さんは嫌い」と意思表示している。

それが現実なんだ。

僕はおとひっちゃんを、「振られたかわいそうな男子」にはしたくない。

また、「嫌われて当然の女子に付きまとわれる哀れな奴」にもしだくない。

そんな「情けない奴の親友」でもありたくない。

おとひっちゃんが姑息な女子を徹底して嫌つてはいるが、本人および他の連中の前ではつきり口にすれば完璧だ。

杉本さんは相当根性腐つてはいるように思つけれども、やっぱり女子だ。それなりに傷ついて、もう評議委員はあるか、交流会関連にも参加する気をなくすだろ。

いじめを平氣でやらかし、一般人に危害を加える女子を、水鳥中学生徒会一同は拒絶する。今後、一切、来てほしくない。

暗にひそませたメッセージを、総田を通じて伝えることができればよい。総田も杉本さんに対してもだけは、当然だと感じるだろ。

交流を進めたがつてはいる青大附中評議委員長たる立村も考へるだろ。お気に入りの女子か、それとも評議委員会か。ちゃんとした男子だったら、ためらうことなく委員会最優先を選ぶだろ。水鳥中学生徒会が嫌がつてはいることを無理やりすすめようとは思わないだろ。おとひっちゃんが苦しんでいることがわかれれば、泣く泣

く杉本さんをひつこめるだらう。

おとひつこちゃんにも嫌われたかわいそうな杉本さんを、もしかしたら慰めるかもしれない。佐賀さんの話によると、杉本さんは相変わらず立村に対しても性格の悪い行動を見せ付けているらしい。それでも可愛がつていいというんだから、きっとお気に入り度は本物だ。そっちで面倒を見るなりすればいい。知ったことじやない。水鳥中学に関係ないところでなら、何したつてかまわない。

佐賀さんを無視するなんて、最低だ。

もうひとつ、店から外国のバスケ関係付録をくすねておこうと決めた。

今度佐賀さんが来た時に渡そう。

佐賀さんの電話番号つて何番だっけ！

肝心重要なことを忘れていた。

ほんとは、一番最初に確認したかつたことなの。待ちぼうけはまだまだ続くことだ。

こんな奴、どこが「天才参謀」だつて！

僕がもつと頭よくて、青大附属に通えるような奴だつたら。

今回に限つては僕の成績が悪いことを、いやつて程思い知られた。

健吾くんや佐賀さんが僕を軽蔑したようなまなざしを投げつけたわけじゃない。かえつて尊敬してくれたようなこと、言つてくれた。でも、佐賀さんはどう思つたんだろう。なんとなく、嫌いに思られたわけではなさうだけれど。

青大附属高校にあのふたりはストレートで進むんだろうし、もしかしたらおとひつちゃんも一緒に行くかもしない。でも、僕はやつぱり、無理だ。ものすごく勉強して、青潟工専に受かつたとしても、どうしようもない。

どうしようもないのかなあ。

水鳥中学生徒会で行われる予定の交流会……厳密には「交流準備会」……は、非公式ながらも先生たちの許可を得て、来週の土曜日午後に開催決定した。おとひつちゃんと総田ががんばつて先生たちをまるめこんだ、もとい説得した努力と根性の結果だ。

「今回があくまでも、『準備』なんだつてことを強調しといたぜ」

総田はにんまり笑いつつ、僕に予定の書かれたプリントを渡してくれた。

「正式に交流会が動き出すのは四月以降つてこと。関崎の奴、一刻も早く開きたがつていたけどな、そうそう簡単に、忙しい時にできるかつて。卒業式とかいろいろあるんだぜ。まあ、来週の土曜だつたら、教室もきれいだし、そんなに大騒ぎしなくとも青大附属のみなさまをお招きできるんではないかと、思ったわけだ」

「ずいぶんあつさり決まつたよね」

早い展開にびっくりした。いろいろ裏に手を回さないと交流会な

んて出来ないと思つていたからだつた。行事なれしている青大附中
だつたらともかく、公立の水鳥中学でそんなこと、時間がかかつてい
つのまにか卒業なんてことにならないだろうか。心配していたのだ。
「だからだ、俺が『交流準備』つてことにこだわつたのはな、教師
連中にあまり重たいこと考えさせたくなかったつてわけさ。だろ?
最初は軽い気持ちで教室を貸してもらつて、先生にくつづいても
らつて学級会みたいなことをやううつってことを強調したわけだ」
「ああ、そつか。小学校の時やつた『おたのしみ会』みたいになん
だ」

夏休み、冬休み、春休み、それぞれ直前に、教室を使って「お楽
しみ会」を各クラスで行うのが常だつた。転校することに決まつた
奴がいたら、土曜の放課後を利用してよく、「お別れ会」とかを行
つたりした。延長上と考えれば、納得だらう。

「けど、先生たちはなんも言わなかつたのか?」

「だから、一応、議論するテーマは決めているぜ。学校祭以来、『
校則』『いじめ』あたりの問題を熱く語つてもらえればいいだろ?
関崎が向こうの委員長に連絡して、簡単に意見を集めてもうらう
うにしているらしいけど、そんなのどうだつていいだろ?」
おとひつちやんのことだ、本氣で議論戦わせようと思つてい
るよな。

何度もつても無駄だつてわかつてゐるのに、やめる二ひだりない
おとひつちやんの性格。
「うそりあきれるほかない。

「で、水鳥の生徒会連中はみんな参加するんだらう?」

「そりやあなあ。関崎言つには、一年の代表が六人くらい来るつて
言つてたぞ」

「一年だけかあ。

何期待していたんだか。話を聞き流しながら、僕はこの前佐賀さ
んと会つてから、何日たつたかを数えていた。もう、一週間近く経
つた。うちの店を他人の振りして覗き込んだり、郷土資料館のあた

りを遠回りしてみたり、この近辺のHレクターン教室つてどこだろ
うと電話帳で調べてみたりとか、僕の思い当たることはすべてした
のに、全く収穫なし。一番いいのは総田かおとひっちゃんに頼んで、
健吾くんの電話番号を聞きだしてもらうことだね。

健吾くんには内緒で来てくれたんだから、僕はできれば佐賀さんとふたりっきりで話をすべきだと思っていた。

「その六人つて、面子どつなつてるのかなあ」

「知らねえ。その辺はみな関崎が把握してるぜ。俺は内川会長と一緒に、当田じんなテーマを振るかを考えてるとい。ほら、青大附中の評議委員会つてかなり芸人が多い」とこでな、毎年冬になると、ビデオでドラマ仕立ての演劇を撮つて自己満足するんだと。ほり、『奇岩城』だつたか。怪盗ルパンの話なんかも、無声映画つていうのかな、ああいう感じでこしらえてたぜ」

「無声映画？」

古すぎる。イメージ沸かない。総田は何気なく博学だ。

「もちろん台詞はちゃんとしゃべっているんだけどな、途中経過とか、あらすじとかを、話の途中に文字で流すんだ。紙に書いてあつたものを、カメラで少しずつずらしていくつてやりかたであ。いわゆる紙芝居感覚。器用なことするよな」

やつぱりよくわからない。青大附中の評議委員つて、遊び人が多いんだろう。

「彦一とんち話」を押し付けるつちの学校とは違うよなあ。
中一の時、学校祭三日目に無理やり見せられたつまらない演劇を
思い出した。臨時演劇部といつた形で先生たちがキャストを集め、
上演したという代物だつた。

「おもしろかったの、それ

「おもしろいといふか、出来は悪くない。が、しかし、爆笑した」
どこで爆笑したのかは、謎のまま総田は話を逸らした。

「でな、顧問の萩野先生に話したんだ。青大附中つて変人が多いん
ですねつてな。そしたら、水鳥中学でも同じことをやつたらどう

かとか言われてなあ。「冗談じゃねえよ、どうせうちの学校だつたら演劇やるつたつて、教師連中が喜びそつて生徒がふて寝つてやつばつかりだろ。萩野先生も同じ。『学校のいじめ問題をテーマにした演劇脚本』とかを見繕つてやるよつて。全く勘違いもいいとこだぜ」

学校のいじめ問題、演劇、か。

網にかかった。言葉の魚はちゃんと捕獲して、水槽に泳がせとこう。

交流準備会について、僕はおとひっちゃんから詳しことをほとんど聞いていなかつた。

あまりにもだんまりだつたので何氣なく、「」

「」の前総田がしゃべつてたんだけどさ」と持ち出してみた。白状した。

「雅弘、ごめん。俺も隠す氣はなかつたんだけどな。とにかく先生と話をつけるのが大変だつたんだ。悪かつた」

平謝りされても困るんだけど、まあいいや。僕は知らない振りして、とつぐの昔に総田から得た情報をふんふんと聞いていた。

「そつなんだ。もし、俺、おとひっちゃんの役に立つようだつたら手伝つよ」

終りまで聞いた後、切り出した。もちろん満面の笑顔を忘れないでだ。

「雅弘、けど、お前最近、店の仕事忙しいんだり? 水野さんが言つてたけど」

あれ、おとひっちゃんわつきたんと話なんかしてるんだ。

「これまた意外だ。隠していくたくせに、何氣なくぼろがでる。かわいそつだからその辺も知らん振りをしておいた。店の配達をこまめに手伝つていて忙しいのもほんとのことだし、大抵は青大附中近辺までぐるつと一回りしてくるから時間がかかるのも否定できないことなんだから。父さんは『データ代稼ぎ』と信じ込んでいるけれど。」

「うん、でも、この一週間ずっとだつたから、一日くらいは大丈夫

だよ

「ほんとか？ ジャア、俺が萩野先生に頼んで、お前も参加できる
よつて話してみる」

みるみるつむけひがおとひつちやんははつきりだした。声が花開く
よつて華やいでいる。なんだ、おとひつちやん僕にしてほしかった
んじやないか。

「けじや、おとひつちやん。誰が青大附中から来るか、もつ名簿、
出来てるんか」

「ああ、立村に連絡して名簿をもらつたんだ。一応な」

やはり、おとひつちやんは立村とウマが合つたりじて。総田の言つ
「つすりばけ評議委員長」。やはり同類、感じるものがあるので
う。

「一年が中心なんだ」

おとひつちやんは黙つた。

「一年も来るの」

今度は僕の声が花開いた。まずい。笑いながらまかした。

「ああ、来る」

わかりやすい。しほんでいる。肩がいつきにがくんと落ちたのが
おかしい。一呼吸置いた後、僕は尋ねた。もしかしてと思つてたけ
ど、やつぱりもしかしてだ。

「何人？」

「ふたり」

「まさか、来るのか、あの人」

返事はないけど、言葉を飲み込んでいる様子ですべてが読み取れ
た。

そうこつことか、おとひつちやん相当まにつてゐな。

杉本さんとうとう、水鳥中学へ上陸するつてことだ。

葉牡丹の生育状況および、おとひつちやんの本心を確認しこだ
うか。

「おとひつちやん、眞合悪くなつてないか」

「悪くなつてねえよ。そんな失礼なことするか」

無理してゐるな。

つつこんでもしようがないので僕は黙つていた。どんなに努力してもおとひつちやんは杉本さんを好きになんてなれないだろ。それはすでにわかりきつてることなのにだ。おとひつちやんはいい奴だから、懸命にまだ考へてゐるのだから。どうやつたら杉本さんを傷つけないようになつて断れるだらうつて。

もし、相手がさつきたんだつたら、とも思つてゐるだらう。

「おとひつちやん、大変だね」

アドバイスなんてしたらむくれられるのが田に見えていたので、僕は同情だけにどどめておいた。

葉牡丹を巻り取つてもつ一度と水鳥中学の敷居をまたげないようにするにはどうすればいいか？

佐賀さんと健吾くんと話をした時も思つたことなんだけど、どうして僕は杉本さんにだけこつも露骨に、「嫌い」つて感じるんだろうか。

もちろん好き嫌いというのは誰にでもあることだらう。いじめられたり、悪口言われたりとか、ちゃんと理由があつて嫌うんだった僕もこんなに悩まない。理由がないから変な気持ちになつてしまふ。

初めて田と田が合つた時、佐賀さんはいやな気持ちを感じなかつた。

なのに、杉本さんに対しても、背筋がぞつとした。

もちろんおとひつちやんに葉牡丹を渡していたのを見た時は、胃の中の珈琲を吐き出すんじゃないかと思うくらいだつた。多少、僕に失礼なことを言つていてたけれど……ふつう「葉牡丹」なんて名前、知らないと思うよ……、そのくらいのことば、他の女子だったら許していただろう。女子をこんなに嫌うなんて、初めてだつた。

でも、杉本さんは少なくとも僕になにも、悪いことをしていない。

葉牡丹を奪い取ったことへの逆恨みがいつ来るかと心配していたけれど今のところは大丈夫そうだ。

僕の方が、杉本さんの見かけと雰囲気だけで思いつきり嫌つちやつている、それだけだ。

しかも、それだけの理由で「杉本さんに徹底的恥をおとひつちやんの前でかかせて交流会関連に一切タッチさせないようになります」として計画を立てているのだ。やめよつとも思はず。」

どうしてだろう。

僕もわからない。佐賀さんが僕と同じことを考えるのだったらまだわかる。健吾くんが復讐したくなるのだったら全く納得だ。けど、なんで一度しか会つたことのない女子に対してこんなことを思つのだろつ。

自分を弁護するわけじゃない。でも言わせてもらひ。他の男子たちも、なんで杉本さんに対しては、ぞつとした顔を見せるのだろう。総田も、おとひつちやんも。まあおとひつちやんは葉牡丹を押し付けられた不幸な奴だからしかたないにしても、総田がなんで一旦見るなり「とんでもない女」と言い切つてしまつのだろうか。 健吾くんや佐賀さんの話によれば、青大附中の他男子たちも同じらしい。

共通する「むかつく」「感情。どうしてだかわかんない。

いろいろしてきて僕は、部屋にくすねてきた鈴蘭優のポスターを机から引っ張り出した。

別に僕は鈴蘭優のファンなわけではない。

ただ、髪型が佐賀さんに似ていた。それだけだ。本当に、それだけだ。

顔は全く違ひの元、髪型が同じなだけで、可愛いと思つ自分がいる。

杉本さんと同じ髪型にしていたら、そう感じるのかなあ。想像しかけておえつときた。やっぱりこの髪型は、佐賀さんでな

いと似合わない。鈴蘭優よりもはるかに上手だと僕は思つ。

階段を昇る足音が聞こえた。みしみしするのは母さんの体重か。すぐに机へ鈴蘭優をしまいこんだ。

「雅弘、電話だよ、女の子から」

返事せずに、僕は階段を駆け下りた。母さんが部屋にまだいるのが気になるが、気にしている暇なんてない。

「もしもし、佐賀さん？」

受話器を握り締め、第一声。当たつてよかつた。外れてたら恥さらしだった。

「はい、あの、私です」

かすかにひやかく声に、僕は耳の形がつぶれるへりこ受話器を押し付けた。

「私、今日、お店に寄つたんですけど、傘を忘れてきてしまつたみたいなんです。今、駅前なんですけれど、傘、届いてませんか」

傘忘れたって？

粉雪交じりの雨が降つていた。雪だけだつたら、青湯の人たちは傘なんて使わない。僕もフードがぶつて凌いだのに。

「店に寄つたつていつくらい？」

「はい、今日、学校休んで、Hレクターのグレード試験受け行つたんです。午前中に寄つて、今、試験が終わつて、今帰ろうとしたら傘忘れてきてたことに気が付いたんです」

「ちょっと待つて」

受話器をおっぽり出したまま、僕は店の中をぐるっと一回りして、レジの父さんにも一声かけて確認した。忘れ物の傘なんて届いてない、とのことだった。

「「めん、なによ。うちはないみたいだ」

「そうですか……」

沈んだ。雨に打たれて泣いちゃいそうな声だつた。

「もしかして、佐賀さん、傘がないから困つてる？」

「はい、今、ものす」。雨で、雷も鳴つて、どうしようかと思つて

「この電話、どこからかけてるの？」ああ、駅か

佐賀さんは一拍置いて、

「駅の職業別電話帳をめくつて、佐川書店を探して、見つけたんです」

やつぱり、僕の電話番号、覚えてなかつたんだ。

力が抜けそつだつた。同時に空をぶつこわすような雷鳴が聞こえた。木造の僕のうちは雷なんて落ちたら完全に燃え尽きてしまいました。電話の向こうで、きやつと小さな悲鳴が聞こえた。佐賀さんが体を小さくしておびえている姿が目に浮かぶようだつた。

「わかつた、駅なんだよね、今から俺、傘持つていくから、待つて」

僕はコートのフードを被り、父さんのこつもり傘を一本持つて玄関を飛び出した。三月なんて春じやない。まだ冬だ。雨と雷と闇がセットで、もう夜だ。ほんとはまだ四時半くらいなのに。傘がなくて困つてゐる友だちから連絡が入つたら、すぐに駆けつけるのが当然だ。変なこと、全然考えていやしない。

思いつきり走つてきたのに、やつぱり濡れてしまつた。分厚いコートなのに脳天へ染み込む冷たさ。髪の毛だけはおかしくなつてないだろう。フードを外し、改札口と公衆電話コーナーを交互に見た。なかなか見つからずなんどもぐるぐる見渡してゐるうちに、お辞儀をする人を発見。平安朝の人みたひな、長い髪をのばしたまんまの佐賀さんだつた。

薄桃色の横に長い手提げを胸に抱きかかえ、走つてきた。

「ごめんなさい、私、そんなことお願いしたくて言つたんじや」

「いいよ、俺のうち近くだし、いいよ」

長い髪以外はすべてピンク、ピンク、ピンク。リボンを襟とポケットにつけたコート。

ちらつと覗いたスカートも、もう少し濃いピンクだつた。

傘なしで走りたくない格好だった。やっぱり雨の中、走ってきてよかつた。

佐賀さんをねらしたくない、本氣でそう思った。

ピアノのおけい」とこののはよく聞く。エレクトーンとののは意外だった。

「エレクトーンってどのくらい練習てるの」

「小学校に入つてからすぐなんです。本当は、ピアノを習つつもりでしたけど」

一週間仕事をしたおかげで「デート代」の小遣いはたんまり稼いでいる。懐は暖かかった。思い切つて近くの珈琲喫茶店に入ることにした。あまり中学生が来るところじゃないという先入観があるせいか、学校の友だちと顔を合わせることがない。しかも出てくる飲み物が思つたより安い。150円で珈琲紅茶どれでも大丈夫。駅前に住んでいる利点だ。

「じゃあ、毎週駅前に来てるんだ」

「はい。いつもは学校終わつてからなので」

寄る暇がなかつたつてことだろ。わかる。わかる。

淡いランプがところどころにぶら下がつている店内で、僕は一番奥へ席を取つた。セーター姿でめがねかけた大人がひとりで煙草をふかしている。窓とカーテンは閉まつていた。どかんとどこかで、大きな雷の落ちた音が響いた。佐賀さんが肩をすくめて僕をきゅうと見つめた。

「大丈夫、あとで俺がバス停まで送つてく」

ほつとした顔で佐賀さんはうなづき、慌てて頬を押えた。また首をかしげた。

見れば見るほど、なんでもしてあげなくなつてしまつ。変だ。僕の方がおかしくなつていて。ふつうに見えるよつに、僕は佐賀さんを壁際に押し付けるようにして座つた。真向かいに腰を下ろして、あらためて佐賀さんの瞳を見つめた。

意識してくれてるのかな。

いつも、健吾くんとはこいつを感じているのかな。

ぴりりと電流が走る。ふつうに見られないと変な奴だと思われてしまつ。急いでメニューを広げた。どうせ珈琲しか頼まない。

「なんでもいいよ。俺、うちの手伝いしてるから大丈夫なんだ」

「いいえ私が払います」

「今日は俺が、佐賀さんにおじつたいんだ。やつせてくれないかな」

僕はかたくなに首をふる佐賀さんを無視して、珈琲と紅茶を注文した。ウエーテレスさんが愛想良くすぐに運んできてくれた。

「佐川さん、おうちのお手伝いしながら学校に行つてるんですか」「いつもじゃない、いやいやだけビ本當のことなので、僕は嘘なく頷いた。

「うん、うひそん大きな店じゃないから、俺も手伝わないとダメなんだ」「すごいですね。だからなんですか」「ためらいながら、僕に尋ねてくるのは言ひづらっこことなんだろうか。

「だからってなにが

「はやく自立したいってこと、この前、佐川さん言つてましたよね。私、そんなこと一度も考えたことなかつたし、学校でそういうこと、話す人もいなかつたし、びっくりしました」

ああ、やつぱりしつかり聞いてたんだ。それなら僕が職業科の高校を選ぶふつてことも覚えてるんだろう。

「俺、この前も言つた通り、成績よくないんだ。だからいい学校に行けないと思う。だけど俺のやりたいことはものすごくレベルの高い学校に行かなくてもできる」とだから、やつするつもりなだけなんだ

「決して嫌味を言つたつもりはない。なのに佐賀さんはすっかりうなだれてしまった。あわてた。

「佐賀さん、違うよ、俺、佐賀さんのように青大附中に合格できる頭あれば、行つてたかもしれないし、同じ職業科でも青潟工専を受けられたかもしれないよ。俺は佐賀さんも健吾くんも、レベルの高い学校で一生懸命やつているのみで、すごいなあっていつも思うよ。ただ俺は、早く家を出たいというのが目的だから、成績それなりで別のやりかたができるんじゃないかなって思つたんだ」

また首を振る佐賀さん。目がつるんできた。ちょっとぴり泣き虫なのかもしない。

「いいえ、佐川さん」

目尻を指先でこすり、じつと見つめてきた。

「私、佐川さんみたいになりたい。佐川さんみたいに強くなりたい」
佐賀さんは僕を相手にとつとつと話し始めた。

時間はかかりそうだけど、かかればかかるほど一緒にいられる。「私、ほんとはピアノを習いたかったんです。でも、先に習いに行つていた梨南ちゃんがピアノの先生と喧嘩してやめてしまつたって聞いて、悪いなって思つてエレクトーンにしたんです。今でも梨南ちゃんは誰かにピアノの話をされると怒ります。エレクトーンはピアノにくらべてレベルが低いと思い込んでいるみたいで、何にも言わなかつたんだけど」

「とんでもない人だなあ。

もう何度も思つたことなので、慣れちゃつていて。

「けど、エレクトーンって難しいし、面白いんです。だから、梨南ちゃんには言わいでグレード試験受けたりしてました。エレクトーン弾く人なんて馬鹿みたい、と梨南ちゃんは言つていたけど、そんなことないつて、最近やつと思えるようになつたんです」

「そうだよ、それって当然だよ」佐賀さんは指先を、鍵盤弾くような格好に丸めて、とんとんと叩いた。

「でも、ずっと怖かつたんです。今でも、まだ怖いんです。今日の試験でも順番待つてている間に、梨南ちゃんの声が聞こえてくるみたいで、自分が変になつちゃいそつだつたんです」

よくわかんないけど、今日のグレード試験がうまく行かなかつたつてことなんだろう。試験に失敗した直後だつたら、そりやあ、泣きたいだろう。

「大変だつたね」

それしか言えなかつた。

「私、ずっと自分に言い聞かせて、エレクトーンはピアノと同じくらい素敵な楽器なんだつて思うようにしてきたんです。弾いている時、楽しくて、誰に認めてもらえないでもかまわないので。けど、梨南ちゃんがいつも『エレクトーンなんてピアノの延長上にある低レベルな楽器よ』とか言つていたのが耳にこびりついて、怖くなつちやつたんです」

最低な女子だな。もう確定。

僕は珈琲をごくんと飲んだ。熱すぎてやけどしそうだつた。

「どうせ今、杉本さんはピアノが弾けないんだろ？ 今の話からすると、それつきりピアノなんて習つてないんだろ？ エレクトーンもオルガンもシンセサイザーも」

「はい、たぶん」

僕には分かる。最低な女子だと再認識した。

「それはさ、佐賀さんが自分のできないことを軽々やつているから、やつかんでいるだけだよ。詳しいことはわかんないけど、ピアノの先生とけんかしてやめたつてことは、がまんするだけの根性がなかつたつてことだよね。俺、そっちの方が情けないなあつて思うよ。もし佐賀さんがピアノを習つていたら、杉本さん自分のことを追い抜かれるんじやないかつて思つて、焦つてたんだよね。当たり前だよ。それだけの力を佐賀さん持つてゐるんだし。エレクトーンをばかにしてるつてことは、杉本さんが鍵盤ものを一切いじれないことを『まかすための言い訳だよ。情けないよな。自分で努力するか、いやな先生に頭を下げてもう一回習い直せばいくらでも追いつけるのに。努力しないで、できる人をやつかむなんて、俺からしたら最低だよ』

「けど、私

「へぎつたい、いろいろして僕は言い切つた。

「僕は佐賀さんの方が何倍も、何十倍も実力があると思つよ。習い事つて大変だらうなあつて、思つ。がまんしなくちやいけないこだつて多いだらうじ。でも、それを投げ出さないでがんばつてやりぬいたことつて、俺はほんとすごいことだと思つよ。今日の試験、きつと辛かつたんだらうなつて思うけど、でも、佐賀さんはそんなことでめげる人じやないつて、俺、一発でわかるんだ。ほんとだよ」女子と話すと時々、短気の虫が騒ぎ出してしまう。目の前にちやんと、こうすればいいってことが並んでいるのに、気付かない振りをしているんだから世話がない。佐賀さんだつて本当は、したいこと、わかつているはずだ。成績はもしかしたら杉本さんの方がいいのかもしれないけれど、何倍も、いや何億倍も、佐賀さんの方が頭いいことがわかつている。男子をいやな気持ちにさせないと、嫌いな女子でも思いやりを持つように心がけていとこりとか。馬鹿だつたら、絶対に、できない。

許さない。

テーブルをこぶしで押し付けるように叩いた。

「来週の土曜日のこと、健吾くんから聞いていい?」

「え、あ、あの」

どもつたけど、ちゃんと頷いてくれた。知つているんだ。

「一年では健吾くんと、あの人人が、来るつて聞いたんだけど、ほんと」

たぶん立村の次に評議委員長となるのは健吾くんのはずだ。人数聞いた段階で、健吾くんは外れないだらうと思つていた。そして杉本さん。ふたり。

「梨南ちゃんですか。はい、たぶん今から楽しみにしているはずです」

はにかみながら、佐賀さんは紅茶カップを丁寧に持ち上げ、一口飲んだ。

「だつて、毎日関崎さんがメモで置いていった紙を見つめて、ほうけてます」

おとひつちゃんそんなもの置いていったつけ。

覚えがない。首をひねつた。佐賀さんはかすかに笑つた。

「ノートをやぶいて何か書いて、立村先輩に渡していったみたいなんです。それを立村先輩に頼み込んで、もらつたみたいですね。暇があればそればかり眺めてます。周りでさんざん馬鹿にされても全然気が付かない風です。口癖に『青大附中の馬鹿男子なんかに、あの方の価値なんてわからない』のだそうです。お友だちと話してました」

あの方の価値、ね、確かにあ。

おとひつちゃんはいい奴だけど、価値、とまで言つてしまえるんだろうか。僕は笑いをこらえきれなくて、つい大声で笑いこけてしまつた。佐賀さんも僕に付き合つて、顔をほころばせてくれた。やっぱり、こういう時の顔が一番いい。

「ごめん、笑いが止まらなくつてさ。じゃあ今からもう、おとひつちゃんのことばかり考えて夢うつなんだね」

「はい、梨南ちゃんは好きな人のことしか考えられない人です。好きになればなるほど、いじめるのがくせでした。でも、きっと、関崎さんは梨南ちゃんに一度も悪口を言わなかつたから、いじめなくとも好きになつてくれると思つたんじやないでしょ？」

勘違いもいいとこだ。葉牡丹をさつと手放したおとひつちゃんの本心、知るがいい。

「いじめなかつたんじやないよ。おとひつちゃん、いやでいやでもらなかつたから、離れるために機嫌とつただけだよ。そんなことも気付かないで、学年トップなわけなんだ」

悪いけど、一瞬のうちに「職業科進学コンプレックス」が消えた。成績のよしあしと、ほんとの意味での「頭のよし」は違つんだ。

僕は苦い珈琲を半分飲んだ。缶コーヒーと違つて、砂糖が入つてない。

胃がちょっとちくちくしてきた。夕飯前つていうのが効いたらし
い。

顔をしかめると、佐賀さんが静かに見上げてくるので作り笑いを
浮かべた。

今日は佐賀さんの電話番号を聞かないと帰れない。

雷はまだ時折鳴っているけれども、やつせほびつねはなか
つた。

「佐賀さん、これから言つことは、悪いんだけど健吾くんには内緒
にしてほしいんだ」

僕は切り出した。やつと、練りに練つていた案を話せるのが嬉し
かった。両手を膝の上に置いて、お上品な格好で佐賀さんがこつく
り頷いた。

「いや、健吾くんを無視するんじゃないんだ。この前会つた時も思
つたんだけど、健吾くんつて正々堂々としたやりかたでないと、納
得できない性格なんだなあ。あんなに杉本さんが嫌がらせしている
のに、クラスでいじめをしないようみんなに言い聞かせるなんて、
普通の人じやできないよ。俺だったら、かかわり持たないよ」

「健吾……新井林くんは、裏表のあるやりかたが本当は嫌いなんで
す」

でも、相手は裏表のある奴なんだからしようがないじゃない
か。

ちくつと来た。ひとりで突つ込み僕は続けた。

「僕としては、悪いけど杉本さんに金輪際、水鳥中学生徒会に関わ
りあつてほしくないんだ。青大附中の評議委員会がどういうことし
ているか知らないけれど、人に迷惑をかけてくる人には、寄つてき
てほしくない。これ、おとひっちゃん以外の生徒会役員にも聞いて
みたんだけど、みな杉本さんのことを嫌つてているのは確かなんだ。
おとひっちゃんだけは悪口言わないけれど、本当のこというと、別
に好きな子いるし、杉本さんと付き合つなんて眞合悪くなる以外の

何者でもない、と思つんだ」

おとひつちやんにはばらせない計画だ。強調した。

「でも、健吾くんと同じく、おとひつちやんも正々堂々としたことが好きなんだ。きっと、杉本さんに押し捲られたら、礼儀として付き合いしなくちゃいけないんだって勘違いするかもしれないんだ。自分が本当はどうしたいか、あきらめて。けど、おとひつちやんはこんなこと、絶対にしたくないはずなんだ」

「わかります。私も、この前、そう思いました」

おとひつちやんの様子を一応はチェックしてくれたのだろう、納得だった。

「だから、俺としてはこの前話した案を、実行したい。杉本さんに来週の土曜日、水鳥中学で自分の本性を暴露しようと思っている。すつじく汚いことだと自分でも思つよ。ふつうの人にだったら、俺もこんなひどいことしたくないよ。でも、佐賀さん、今でも杉本さんに言われたことが気になつてしまつんだろ？ エレクトーンなんてピアノよりレベル低いとか、さんざん嫌味言われたことが気になつちやうんだろ？ 俺だったら『どうせ鍵盤も弾けないくせに馬鹿女』って言い返すけど。それができないくらい、辛かつたんだよね」

「つむいた。前髪に光が当たつて、白い横筋がしゅうりと走つた。天使の輪、つて奴だろう。

「馬鹿なのはどつちや、つてことを思い知らせてやりたいよ。俺はおとひつちやんの親友だから、嫌いな女子なんかと一緒にいてほしくないんだ。言い方変だけど、あの人、いわゆる『みそつかす』だと思つんだ」

「『みそつかす』？」

小学校一年の四月に、僕があてがわれていた居場所だつた。

「そうだよ、ほら、ドッヂボールとか鬼ごっこする時、誰かの弟とか妹とかが混じつたら、手加減しようつてことで『こいつはみそつかすにしようぜ』って言うだろ？ 僕小学校一年の時、そうだ

つたんだ。体もちつちやかつたし、頭もよくないし。弱虫だつたし。いつも他の奴から『雅弘はみそつかすな』つて決め付けられてて、悔しかつたんだ』

真剣な目で僕を刺す。机の中の「鈴蘭優」のポスターよりも、ずっと真摯だった。どんどん突き刺せとささやいてくる。

「俺、ほんつと悔しくつてさ。毎日必死にかけつこの練習したりしてた。誰にも言えないよなあ。年上の奴らと遊ぶならともかく、同じ学年で『みそつかす』だよ。恥ずかしいよ。けどね」

しゃべりだしたら止まらなくなる。店の中が幻映画館になつたみたいだつた。佐賀さんの背中に幻影が映つていいよつだつた。

「おとひっちゃんだけは、俺のことを『みそつかす』扱いしなかつたんだ。あいつ、俺を幼稚園の頃からかばつてくれてて、『雅弘泣かしたら他の奴も泣かしてやつからな!』つて体張つてくれたんだ。けど、おとひっちゃん、あの時は他の奴らが俺を『みそつかす』扱いしているのに、平氣でボールを俺に当てるてくるし、鬼ごつこの時も容赦なく、タッチしてくるんだ。みんなから文句ぶうぶう出たよ。けど、おとひっちゃんはつきり言つてくれたんだ。『雅弘はみそつかすなんかじやねえよ。差別すんな』つて」

「『みそつかす』ですか

そだらうううううううう。納得している顔。やつぱり僕がガキつぽいんだ。

「俺も努力したつもりだよ。早く『みそつかす』から脱出しようとつてたからさあ。一年の六月くらいにやつと抜け出すことができたんだ。すつじく嬉しかつたよ。女子にはわかんないかもしれないけど

ど

あの時、

「おとひっちゃん、俺、みそつかすじやなくなつたよー。」
とおとひっちゃんに報告したんだつたつ。

「あつたりまえだろ、お前のろまじやねえもん

つて言つてくれたことが今でも忘れられない。思い出なんてとつく

の昔に消えていたことが多いけど、おとひっちゃんがなんでもない顔して、実はすつしょく嬉しそうに言つてくれた時の顔が、後ろの壁に浮かび上がってきたようだつた。

「あの時、俺は『みそっかす』から脱出するために、ものすごい努力したつもりなんだ。繰り返すけど、毎日学校から家まで二回往復して走つたりとか、ほんと苦しかつたよ。でも努力すれば報われるんだつて、その時初めてわかつた。おとひっちゃんが一緒にみそつかす扱いしなかつたのも、俺ががんばつて走りつづけたのを応援してくれてたからなんだつて、後になつてわかつたんだ。みそっかすから抜け出すには、他の奴らの迷惑にならないくらい動かなくちやいけないし、とろとろしてちやいけないんだつてことも、あの時よつくわかつたんだ。ちゃんと、ルール、あるんだよ」

「これから本題だ。珈琲を飲み干した。と思つたらウエーテレスさんが黙つて珈琲と紅茶を注ぎ直してくれた。どうじよつ。おかわり代を請求されたら。

「佐賀さん、俺思つんだけど、杉本さんは『みそっかす』から抜け出すための努力、しているのかなあ。もし、佐賀さんや健吾くんを傷つけないよう努力するとか、紙鍵盤用意してピアノの練習するとか、そういうことをしてたら、僕たちも『みそっかす』から外してやると思つ。けど、そんなとこ全然見せないらしいよね。結局佐賀さんがエレクトーン上手になればなるほど、やつかむわけだし、健吾くんのことを嫌がらせして迷惑かけるし、おとひっちゃんが嫌がつているのみえみえなのに、さらに追いかけてきたりするんだ。どうしても仲良くしてほしいんだつたら、ルールを守つてくれつてことを、俺は言つよ。の人普通じゃないから、普通に話してもたぶんわからないよね。だつたら、堂々と今まで杉本さんが佐賀さんに何をしてきたか、どんな迷惑をかけてきたか、そういうことを水や青大附中の人たちの前で証明して、みんなに判断してもらつた方がいいよ」

遊んでいる時にうるちゅるして迷惑かける『みそっかす』。

『みそつかす』扱いされたくないのだったら、早く走るよつ努力することが必要なんだ。

「水鳥中学交流準備会に佐賀さん、健吾くんの付き添いつてことと一緒に来る」とできないかなあ」

計画の芯。僕はやつと切り出すことができた。

「え、私がですか」

「そう。すでにおとひっちゃんと立村との間で話し合いが進んでいるらしいよね。テーマは『いじめ』なんだ。うちの学校、青大附中みたいに学校で演劇をやろうかつて話が出ていたんだ。『奇古城』みたいにドラマチックじゃないけど、『学校内のいじめ問題』をテーマにした話をやろうかつて考えているみたいなんだ。どういう内容なのかはもう少しおとひっちゃんをつついでみるけれども、杉本さんが今まで佐賀さんにしてきたことを、そのまんま演劇の内容にしてしまつたらどうだろうかな、って思つたんだ。佐賀さんは辛いかもしれないけれど」

「え、でも、私」

戻惑う佐賀さんにまた僕は短気になつた。

「でも私、なんか言つことないよ。会の担当になる水鳥の生徒会役員に俺、いろいろ頼んで佐賀さんのされてきたことを演劇のネタにできないかどうか聞いてみる。実際に起こつたことの方が説得力があると思うし、僕も交流準備会に参加する予定だからちゃんと手を挙げて発言するよ。もちろん、佐賀さんや健吾くんから聞いたなんてことは、内緒にしてさ。田の前に杉本さんがいる前で、被害者の佐賀さんがいる前で。杉本さん、自分のことをネタにされているって知らないけど、みんな、佐賀さんがかわいそうな思いしている気が付いたらどんな顔、するだろうなあ。本人はどう思つているかことみんな知つていいことだろ？ おとひっちゃんの前で、杉本さんは自分のしてきたことが、正真正銘の『いじめ』であつて、最低な人間のすることなんだつて証明されちゃうんだよ。ふつうの神経

持っている人だったら、泣くやうよな

「私なら、泣きます」

佐賀さんは、当然だよな。

今は笑っている佐賀さんに、ほつとした。

「結論として、『いじめをする人はどんな理由があるにせよ許せない。加害者。青大附中と水鳥中学はいじめ人間を一切受け入れない』つて結論に持っていくことができたら、最高だよな」

「でも、梨南ちゃんにそんなことしたら、きっと傷ついてしまうと思います」

言いかけた佐賀さんを押しどごめた。

「俺、杉本さんがどう思おうが関係ないよ。要は、おとひつちゃんの前で、杉本さんがいじめをする最低の人間だつてことを証明するだけのことなんだからさ」

どうしようもなく許せなかつた。

「うちにいた時、ちょっとだけ

「俺になんも悪いことしてないのになんでもんな嫌いになるんだろう」

つて罪悪感を持っていた。でも、これですつきりした。理由判明。

佐賀さんがまだ、苦しんでいるのに、平氣でいるあの性格がいやなんだ。

もちろん僕が一方的に佐賀さんびいきなだけなかもしれない。佐賀さんと健吾くんとの話し合いを鵜呑みにしているだけなのかもしない。でも、杉本さんのしてきたことはどんな人も許せないことだろう。

いじめられる方に罪がある、とは絶対に言つてはいけないことがんだといつ。

でも、佐賀さんが受けた傷のことを考えれば、杉本さんに罪がないとはどんなことあつても言えないと思つ。

それに、杉本さんにはござとなつたら逃げ場所がある。

「立村は相変わらず、杉本さんのことをひいきしているよね」「梨南ちゃんには無視されますけどしょつかず、声かけたり、呼び寄せたりします」

「蠅人形のような顔。すぐに火で解けてしまいそうな頼りない態度。「じゃあ大丈夫だよ。おとひっちゃんに振られたって、本当に好きな人が待っているんだから」

佐賀さんはもう一度、大きく頷いた。

「梨南ちゃんが本当に好きなのは、立村先輩です。立村先輩と一緒にいてくれれば、きっと」「社会の迷惑がひとつ減るよ」

今日こそ忘れてはならない。おかわりでもらった珈琲を舌、やけどしそうになりながら頭と胃をちくちくさせた。

「でも、水鳥生徒会も今、『ごたごた』しているから何か変わった事があつたら、連絡したいんだ。いままでいじめ問題の演劇をやろうとしていたくせに、次の瞬間『彦一とんちばなし』になっちゃう可能性もあるし。佐賀さん、電話番号、もらつていいかな」

ピンクのかばんから、やはりピンクの女子らしいノートを取り出した。五線譜ノートだった。綴じ目からはがして、電話番号だけ書いて渡してくれた。

絶対落とさないようにしなくちゃいけない。財布の中に押し込んだ。あとで別の紙にメモしておこう。鈴蘭優のポスターに原本ははさみこんでおこう。

雨はまだ激しく降っている。すっかり夜。もう六時近い。バス停まで、こつもり傘でふたりで入つていいと決めた。

佐賀さんがお手洗いに行つている間に、会計をしてもらおうとした時、ぽこんと僕の肩を叩く人がいた。

まづい、誰かいるのかな。

恐る恐る振り向いた。

「今日は、サービスだぞ」

父さんだつた。いつも来る取次の営業さんとふたりで打ち合わせしていたらしい。ふたりでにやにやしながら、手を振つて出て行つた。

もちろん、ふたりぶんの支払いは終わっていた。

総田には、「中学演劇脚本集」を一通り読んでもぐと連絡した。

青大附中評議委員会の一様がいらした時に、テーマを「いじめ問題を扱った演劇の上演について」にしておくのだから、詳しく調べておくのは義務だろう。うちの店にそんなマイナーな本があるわけもなく、仕方なく図書館で調べた。

文字を読むのは慣れている。どれもこれも、くわすぎる。

先生と生徒が喧嘩したり、いじめたり、体罰ったり。いろんな出来事が学校内で起こるのだけど、どの話もハッピー・エンドの大団円。こんな話、僕だったらすぐに寝ちゃうだろうにな。学校内の九割はおとひつちやんと違つ感性の持ち主である以上、他の奴もそうに違ひない。

僕は途中、飛ばし飛ばし読み終えた。

さつきたんが図書館の入り口でこっくりと僕に頷いている。

なんか用かなあ。

文字読み過ぎて、うんざりしていた僕は、さつきたんに手を振つて呼び寄せた。きっと来てくれるんだ。いつも僕の呼びかけを無視することないんだから。

「佐川くん、どうしたの、その本」

「ほら、来週青大附中の評議委員会の人たちがうちの学校に来るから、そのテーマに使う資料を読んどかなくちゃって。こんなかび生えた話、やだよなあ」

一行、学園ものの台詞を読み上げてみた。さつきたんはお下げ髪の先をなでて聞いていた。

「『いいか、お前ら、弱いものいじめしたくなつてはな、自分の中に同じ弱さを見てしまつから、ついついらして腹が立つてしまつうんだ』」

「なあにそれ

「咽がいがらがいじめてつまく声が出ない。おすもひさんみたいに、つぶした声で続けてみた。

「『お前らがいじめているのはな、お前ら自身だ。一番弱虫で惨めな自分をこれ以上傷つけてどうするんだ。いいか、お前自身を守りたいんだつたら、今からいじめるのをやめるんだ。自分の醜いところをしつかと見つめるんだ』」

もちろん、一本調子の棒読みだ。さつきたん、しばらく顔をかみ締めていた。『機嫌悪くなつたのかな、と様子を見ると、全然違つた。笑うのをこらえていただけだつた。

「いいよ、さつきたん、笑つたつて」

「ごめんね、佐川くん、俳優さんみたい」

咽の奥でくつくと音をさせて、さつきたんは僕の隣りに座つた。

「どういつ台本なの」

「どうかの中学生演劇部で使つた台本なんだつて。うちの学校、演劇部ないだろ。いつも学校祭の間際に先生たちがめぼしい奴に声をかけて、集めるつて感じだろ。俺、今これ読んで思つたよ。去年の学校祭でやつた『彦一とんち話』の方がずっとましだつて」

「でも、佐川くんが出るんだつたら面白いのかもしれないわ」

あいかわらずさつきたんはおとなしめのすつとした笑顔を浮かべていた。

何度見ても、いやな気持ちになんてならない顔だ。

「さつきたん、時代が古すぎる学園演劇なんて、出る気になれるかなあ。俺はやだなあ

「でも、先生たちは演劇をまたするつもりなんじょ？」

さつきたんには詳しい事情が伝わつていないようだつた。四月以降に先生たちがどんどん話をまとめて、現在の一年生たちを中心にしてやるつもりなんだろう。現三年は今のところ受験一色になるだろつから、ただ眺めているだけでいい。

「うん、青大附中の評議委員会つて、冬休みに毎年、怪盗ルパンや

名探偵ホームズのような話を劇にして、ビデオに撮つておくんだって。それを学校内で流したりするんだって。それも見る分には面白そうだけど、同じことをうちの学校でするなんて、できないよ」

「ホームズとかルパンとか?」

さつきたんは、口付近の本棚を指差した。江戸川乱歩全集がずらつと並んでいる。

「そうだよ。次は『怪人二十面相』あたりやるんじゃないかな」「周りに気遣いながら、さつきたんはまたまた、咽を鳴らしてうつむいた。

昼休みも終つた。公立高校入試が終わつてすっかり気抜けした顔の三年生たちとすれ違つた。一応、すれ違つたら礼をするのが決まりだ。忘れないようにしておけば大丈夫、リンチなんてされないですむ。

僕はエンペツの先を無意識につぶしながら、情報の整理を行つことにした。

ある程度おとひつちゃんや総田から話を聞かせてもらつたら、ふうんと頷いた後で、自分の中から湧き上がつてくる答えを待つ。なんも考えない。ただ、勝手に噴出す油田みたいなものを待つだけなんだ。地理で習つた、中国の油田みたいな感じにだつた。ちなみに苦手の英語だ。さつき、総田からノート貸してもらつたから、当たられても訳を読み上げればそれでいい。

あんな恥ずかしい劇をやらされるなんて俺はいやだけど、でもこれで通した方がいいなあ。

絶対に僕の出番がないこと分かつていいからなおさらだ。目的が決まつていてるから大丈夫だ。自分に関係なれば問題はない。

先生たちとおとひつちゃんに受ければ、あとはみんな勝手に寝てもらつたつていいんだし。思いつきり匂うよつた青春ドラマをやろうつてことにしたらどうかなあ。

総田はまず

「冗談じゃねえよ、こんなくせえ話に誰が乗るかって」と眞理子が笑った。「当然だ。

おとひつちゃんは

「眞面目な話の方がいい。いじめは決してよくなないことなんだから」とを真つ正面から突きつけるつていいことだと思つんだ。けど、一年時の『彦一とんち話』みたいなものにはしたくないから、みんなでもつと話し合つたほうがいいと思つんだ」

つて言つだらひ。これもまたひとつ考へ。

僕としてはどうでもいい。

これから先、生徒会が青大附中の評議委員会から参考意見をもらつて、どんな風に演劇を盛りたてていけばいいかを話し合つて、その合間に杉本さんをぐつさり刺せばいい。できれば足もとを。もう一度と、水鳥中学なんて来たくない、やめてやる、と思つてからこそこそ突き刺せばいい。

佐賀さん、ちゃんと健吾くんに話したのかな。

本人が田の前にいて、もう逃げも隠れもできない状況下の中、僕は「あくまでも俺が考えた案なんだけど」

と前置きして、杉本さんのしたことを全部しゃべつてやるだらひ。もちろん青大附中の連中には……健吾くんには話さないとまずいこともあるけど……内緒にしておこう。僕が佐賀さんから聞き出したことなんだ、つてばれたら、杉本さんの逆恨みに火がついて犠牲になつちやうかもしれない。

偶然、僕が思いついたことであつて、佐賀さんとは一切関係ない。思い当たる節があるんだつたらそれは偶然だ。

僕に責任なんて全然ないし、もちろん佐賀さんらしきいじめられつ子の話が出てきても、それは偶然でしかない。そういう張ればいい。

悪いけど杉本さんつて、おとひつちゃんが嫌つていてることに気が付かないほど鈍感な女子なのだから……なにせ、顔見れば一発で感情がもう見えのおとひつちゃんなんだ……いつちが強気でつっぱねれ

があきらめるだろう。それどころか、「私が悪い」と思ってくれるかもしない。反省して、もう一度と佐賀さんをいじめないようしてくれれば最高だ。蝶人形委員長がきっと慰めてくれるだろう。

立村か。あいつも頭悪そだもんなあ。

成績はどうだかわからない。でも、佐賀さんと珈琲紅茶のお付きあいをしてから、僕の「成績」に関する考えはまるっきり変わった。順位がどうのいつのじやない。杉本さんが学年トップを保つていようが、おとひつちゃんが今回もトップであろうが、所詮それと本当の頭のよさとは違うんだってこと、証明されてしまった。

どんなにいじめられて、エレクトーンの試験で失敗してしまったらしい傷ついても、杉本さんのことを思い遣ろうとする佐賀さん。周りのことをみな見極めて、なんとか必死に対等になろうと努力する佐賀さん。

ほんとに頭のいい人、ってこういう人なんだ。

俺、そういう風に、してるよな。

職業科志望、それがどうした！

もし、杉本さんがいい性格だったら、きっとおとひつちゃんのお間抜けぶりをさらけ出して、幻滅してもらうって方法も取れたのにな。

杉本さん以外の女子にだつたらそうしてただろう。他中学の女子で、しかも好意を持つてくれている子相手だ。好き好んで傷つけたいとは思わない。おとひつちゃんはきっと、そう思っている。大嫌いなタイプだとしても、決してつっぱねたりできないに違いない。おとひつちゃんは紳士だ。

けど、相手は「ふつう」の子じゃないのだから仕方ない。

逆恨みする執念深い、人を平氣でいじめる最低女。

僕が佐賀さんの情報を丸呑みして言っているといわれればそれま

でだらう。

お前がしていろ」ともいじめじゃないか、と突っ込まれれば言い訳できない。

たぶん他の奴が同じことしていたら、僕も止めるだらう。でも、杉本さんに対してもだけはビリしてもふわふわりんとした気持ちになれなかつた。

総田と例の郷土資料館で待ち合わせすることにした。天気は良かつた。大雨の後はだいぶ春めいているようすだつた。雪と泥が完全に一体化して、靴がどろどろ。あとで洗濯する母さんに怒鳴られそうだ。制服のままで行くことにした。

「おつす」

総田がもう来ていた。交流会準備でくそ忙しいであらう生徒会室、どつやつて抜け出してきたんだらう。

いつもの真ん中席に座つた。また人がいない。経営成り立つてのかな、いつもこんながらだと、とうちの父さん母さんも話していただつけ。僕もそう思つ。総田とふたり並んで座り、膝を開いて両手を置いた。ふつと一息ついた。

「おとひっちゃんはどうしてるの」

「あいつひとりでなんか書類作つてゐるが。例の『いじめ問題』用に使うコピペの下書きをさ。けどなあ、どうせやるなら俺たちが適当に、演劇の台本出して、『これどうすか?』と声かけりや、それでいいような気がするけどなあ、んで」

「別にいいよ。おとひっちゃんにはやりたいよつておひらせりやおけばいいよ」

僕は、借りてきた「中学演劇脚本集3」なる、教科書の親戚みたいな本を一冊取り出した。

緑色の表紙で、なんかつまんない。

「俺も演劇やれつてか。やーだね」

「出る奴はみな一年か二年に押し付ければいいよ。内川会長だって
いる、それより、なにより、これどうかな」

一通り田を通してみて、使えそうな脚本を用意しておいた。さつ
きたんに読んできかせた奴ではないけれど、内容は五十歩百歩だ。

「先生連中に受けがよさそうな、関崎好みのやつかよ」

「とにかく、あらすじだけ読んでみてくれないかな。総田教授」「
読む気配なしなので、僕は自分の口で言うしかなかつた。ひじで
つつついた。

「この話、ふたりの女子が出てくるんだけど、ひとりがどこかのお
金持ちのお嬢さまで、同級生の女の子を取り巻き使っていじめてる
んだ。こんな話、今時ドラマでもやんないけど、結構いじめたりす
る場面がすごいんだ。リンチっぽい場面もあるんだよ」

「うわあ、たむいぼ出そうだぜ」

「でさでさ、いじめている女子はいばつているけど、実は大の弱点
があつて人前で歌うことができないんだ。自分が音痴だから。そこ
で、いじめている女子にわざと人前で歌う役を押し付けようとする
んだ」

「それってなにか。ギャグでやつてんのか」

「ギャグじゃないから怖いんだよ。あらすじだけ言つちゃうよ。そ
のいじめられつ子は『都合主義なんだけど歌がうまくて、周りから
拍手喝采を浴びちゃうんだ。それを見ていたいじめつ子はなんとし
ても自分が勝たなくちゃと焦り始める。うーんと、途中いろいろあ
るけど、いじめつ子は悩みに悩んで、自分も人前で歌う練習をして、
いじめつ子を負かそうとする。けど簡単にはいかないよね。結局音
痴をさらけ出してみんなから大笑いされるんだけど」

「聞きたかねえよ。そんな劇やるんだつたら俺、すぐに帰るぜ」

「とにかく聞けよ。いじめつ子の女子がすつと立ち上がりつて『私
も一緒に歌うわ、みんなで歌いましょう』と、生徒全員に壇上で呼
びかけて、手を取り合つて歌うんだ。そして最後に抱き合つんだ。

幕つて感じ

「えーっ、絶対やだやだやだ。俺は反対」

総田、首と腰をくねくねさせてのた打ち回つてゐる。僕も本音はその通り。こんな劇、本氣で上演してゐる学校あるんだろうか。末尾の発行日を見たら、僕の父さんが生まれる前後の脚本だ。冗談じやない。時代を考えろつていうんだ。

「でも、いいとか、本当にあつたんだ？」

「本當、でなはをた」

「つまり、桜本さんって女子かしめ「子のよ」なことをやっていたとしたら、」

総田の眼と口

あの女子
かし

教えてやるよ
「

いて説明した。

「コンセントやつねな」

「たゞ、僕も同じだよ。そういう子に好かれたらおどひこちやん
耐えられないよ。しかも水鳥に乗り込んでござれたら、たぶん死ん
じゅうよ」

大げさだけど、大の本音だ。杉本さんの性格はあまりにもひどすぎ
る。おとひつちゃんが青大高校受験にもし失敗したら、たぶん杉本
さんのせいだ。

「別に俺としては、魔性の女に食われてもらった方が相手も関崎も本望ではないかと思うんだが」

「ダメだよ。おとひっちゃん食われるだけならいいけど、水鳥中学にも足をつっこんでくるんだよ。内川だつて巻き込まれて大変なことになるよ。とにかく集めた情報からすると『こんだ。先生たちですら、追い出やうとしてるんだって』

僕が強く説明すればするほど、総田の顔は引きつっていく。

「だから追い出すしかないんだよ！俺、水鳥中学生徒会のためにもそつだし、おとひつちゃんのためにも、それからもちろん、総田、お前がやりたいことを成功させるためにもそつ言ってるんだよ。ね、協力してほしいんだ」

佐賀さんと一緒に眺めた青鴻市の古い地図。あの地図はかなり古い時代に作られたものらしいけれども、ほとんど縮尺とか当たつていると習つた。本当のことつて、結構長持ちするもんなんだ。直感つて、だから大切だ。総田も僕の方をちらりと見て、腕を組み、十秒沈黙した。

「わかった。佐川の案に乗つてみるか」

僕はさつそく、案を一気にしゃべりまくつた。メモには残さない。総田の頭だから、すぐにすりつと叩き込めるに違いない。証拠が残つていたら、おとひつちゃんに半殺しにされるだろ？

「つまり、」の台本を少し水鳥中学生徒会でいじつてみたつてことにするんだ。僕が聞いた杉本さんのすこい過去の話、ほとんど引用できると思うよ。ほら、いじめつ子が音痴だつて話あつただろ。そこを、ピアノにしちゃうんだ。杉本さん、ピアノの先生とけんかしてやめちゃつて、上手になつた友だちをずつといじめてたつていう話を信頼できる情報筋から手に入れたんだ」

佐賀さんだとは気付かないだろうな。たぶん大丈夫だろ？

「ピアノが弾けないくせに、ピアノの演奏ができると自慢しちゃつて、自爆するんだ。けど、あわやつてとこをいじめられつ子の彼女に助けられるんだ。そして、両手をついてごめんなさいつて謝るんだ。ところが周りの男子たちは彼女のことを絶対に許さないつてぼこぼこにしようとする。ところがいじめられつ子の彼女は立ち上がり、『いじめを繰り返すのはここでやめましょう。私はあなたも、そして私をいじめた全ての人を許したいの』とか、白々しい台詞を言つ。あとで」

調子に乗ると僕は怖いぞ。総田もふむふむとつづいている。ちゃんと、聞いていてほしい。

「IJの台本にあるんだけど、いじめっ子が横恋慕している男子がいるってこと。そのまんま使っちゃうんだ。それ本当のことだからさ」

「へえ、そうなのか」

あまりしゃべってしまったのは何かとは思つたのでぼかす。イメージはもちろん、バスケ部の主将様である。

「それで、その男子はいじめられっ子のことが好きなんだ。何かがあるとすぐ、いじめられっ子を守ろうとするんだ。いじめっ子は男子によつてしまつちゅうぼこぼこにされる。でもめげずに男子を追ういじめっ子。IJの辺、ギャグっぽくすると受けるなあ」

「佐川、お前バラエティーのシナリオ書きになれよ。才能あるぜ」「ないよそんなの。で、もう一つ、仕上げなんだけど」

大切なのはここだ。僕にははつきり言つて、脚本書きの才能なんてないけれど。

「唐突に、ここで『芦毛の王子さま』を出すんだ。ひょこつと、知らない男子がやってきて、いじめっ子を救おうとするんだ。みんなにぼこぼこにされているいじめっ子を、いじめられっ子は守ろうとするんだけど、女子だからそれができない。そこで、馬に乗つた別の男子がやってきて、そのいじめっ子を諭す、てか、叱る、ってか、抱きしめる。彼女は救われる。で、最後は大合唱。どうかなこれ。ほんとギャグだけさ」

僕はラスト部分をかなり、意味ありげに説明したつもりだった。

「『芦毛の王子様』か。お前、競馬好きだろ」

「父さんから教えてもらつてるんだ。結構僕が予想すると、当たるんだよ」

「なまつちゅうい、うすらぼけの、王子さまか」

「本気で演じるんだつたら、内川にやつてもらつてもいいけどな」

「いや、青大附中からヘルプでもらおう!」

さすが総田。その辺呼吸を飲み込んでくれてこる。おとひっちゃんに説明するとしたら、一日あつても大変だろうけど、一発で納得OKだ。

『芦毛の王子様』立村評議委員長の顔が思い浮かんだはずだ。

早い話、青大附属中学発の情報をそのまま、既成の中学演劇脚本に盛り込んでいけばいい。僕も面倒なことはしたくないし、交流準備会用こつきりの話で終わらせたい。どうせ、公立は受験の関係であまり面倒なことはできないと、顧問の先生も言うだろうし。ただ、青大附属がもともと演劇ネタ好きなところだと聞いているから、「こんなのはどうですか？ 脚本としては使えますか」と聞いてみることだ。

「準備会」だからこそ使える手だ。本式の交流会になつたら、僕がいきなり持つてきた脚本なんかを利用することなんてできやしない。おとひっちゃんが知らないうちに計画するなんて無理だらう。おとひっちゃんが気付かないうちに、杉本さんを落ち込ませてこれつきり水鳥中学の敷居をまたがせないようにすることが、第一の目的。おとひっちゃんが杉本さんタイプの女子を嫌つてているというのを証明するのがその一。

仕上げは、これだ。

僕は総田に、あとでもう一度電話することを伝えた。学年万年一番の頭脳で、わらわらと計画書にこらえてくれるだらう。

「それと、もうひとつお願ひあるんだけど、聞いてくれるかな」

実はこっちの方が僕にとっては重要だった。

「いつも、総田が使つてゐる図書準備室の鍵を、当田だけ、貸してほしいんだ

「へえつ？」

そりや驚くだらう。僕は前から総田が、こつそり鍵を作つて川上女史と密会していることを知つてゐる。去年の秋、総田が生徒会室に一本の鍵をキー ホルダーにぶら下げていたのを見て、冗談半分で、

「これ、生徒会関係の鍵か？」

と聞いてみた。そしたら曖昧な言い方をしていたので、すきを見て学校内、すべての南京錠に鍵をあわせてみた。見事発見、ただそれだけのことだ。

「おい、何言つてるんだ、佐川」

「いつも持つている、車のついたキー ホルダー。の中の一本がそうだろ？ もう一本は生徒会室用でさ。確か学校の鍵はスペア禁止だつて聞いてたけど、総田は賢いからすぐに作つたんだね」

校則違反もいいことだ。見つかつたらまず違反カード五枚くらい切られてついでに停学だ。

「佐川、何を言いたい」

「だから、一日だけでいいんだ。あの部屋の鍵がほしいんだ。そこで俺が待機していたほうよかつたらそこにして」

何度か僕も下見で覗き込んでおいた部屋だ。かなり埃が舞つているけど、奥のごみ箱にはジュースの空き缶とかポテトチップスの空き袋とか、たくさん入つていた。つまり、あそこで食事も可つてことだ。駄目でも食べる。持ち込んで。

「要するに、お前専用の待合室がほしいってことか」

「そういうこと。一日だけでいいんだ。あそこをまるまる、貸してほしいんだ」

これ以上脅迫する必要なんてない。生徒会副会長が露骨な校則違反をしていることを、ばらすかどうかなんて低レベルなことを言わなくたつていい。総田にはその辺の呼吸も飲み込んでくれていい。僕も、困つた顔で頭を下げる。

「ごめん、ほんつとうに今回だけ。ちゃんと部屋掃除しつくから！ 川上さんも居心地いいよつにせー。」

「あ、刺さつたか！」

思つたとおり、総田教授の顔は黒く染まつた。

「佐川！」

「頼む、ほしいな」

片手を出して、今度はにっこりと笑いかけた。

「ちくしょう、お前、能力を間違ったことに使いすぎてるぜ
サークル用の車がキー ホルダーになつている鍵。手の中に落と
してくれた。

「どつせ、しばらくは使う気もねえよ。先公どもの見てない隙を狙
つて、好きなようにしろー。どつせあの部屋、あかずの間なんだか
らな。单なるごみ捨て場ともいつ」

「ラツキー！ これで準備十分間に合ひつよ。

総田の思わぬサービスに、思わず顔がほころんだ。

「どつせあの一人のことだ、別の密会場所を開拓したんだろう。

もし、健吾くんと佐賀さんが僕とこつそり相談する必要があるな
らば、そこに連れてくればいいし、もし佐賀さんを「委員会外の人
だから入ってきてほしくない」という扱いにするんだつたら、それ
でもいい。僕は裏の手を使って佐賀さんだけをここにひっぱつてこ
れらつてわけだ。

完璧だ。青大附中の体育準備室と同じような場所。

問題は土曜日ということで、先生や用務員のおじさんが覗き込ま
ないかつてことくらいだけど、総田もうまくやつているんだ、たぶ
んなんとかなるだろう。その辺も総田に釘をさしておこう。

明日、昼休みを使ってもう一度チェックしておこう。もちろんお
とひつちゃんには内緒だ。

「あ、忘れてた。まだやることがたくさんある。

家で父さんの

「デート帰りなのか？ のぼせてるんだ？」

とつつく声を無視して電話をかけた。

もちろん電話番号は、毎日眺めているので暗記している。

女子のうちに電話をかけることには慣れている。けど、佐賀さんは青大附中の人だから、ものすごいお嬢さまかもしれない。電話をかけるとまず家政婦さんが出て、それからご両親が出て、最後にやつと繋がるなんてことないだろ？ アホな想像を繰り返した後、気合を入れてダイヤルを回した。最初はさすがに家政婦さんじゃなく、たぶんお母さんらしい人。思わず

「あの、水鳥中学生徒会の佐川と申します」

と大嘘ついて名乗つてしまつた。全く述べたらめつてわけじゃない。生徒会には関わつているけど役職があるわけではないんだから。

「お待たせしました」

そんなに経つてないのに、声が電話だとくるくるっと丸まつて聞こえる。佐賀さんの髪の毛みたいだ。ほわほわっとさわりたい。

「あの、俺、佐川です。土曜のことについて、健吾くんに伝言頼みたいなつて思つたんだ」

佐賀さんは僕のどもりどもり説明した言葉を一通り聞いてくれた。

「新井林くんは、土曜日、来ない予定なんですね」

きつぱり答えた。

「え？ 健吾くん、だつて評議委員だろ？」

「ええ、でも新井林くんは、バスケ部員でもあるんですね」

知つてゐる。でも、まだバスケ部同士の交流会は始まつていはないはずだ。

疑問をぶつけると、佐賀さんはためらいがちに答えてくれた。

「私、新井林くんに言つたんです」

小さなくしゃみが合いの手に入つた。

「一年になつたら、うちのクラスの評議委員になりたいから、今のうちに参加させてほしいって。そうしたら新井林くんも賛成してくれたんです。もう梨南ちゃんが評議委員になれないのだったら、新井林くんと話の合つ人がなつた方、いいかなと思って。それで、新井林くんも、私が参加するんだつたら安心だからって、自分の優先したいほうを取つてくれたんです」

次期評議委員？

佐賀さんのクラスは確かに健吾くんと杉本さんが評議委員のはずだ。前の話で、杉本さんが担任の権限で落とされるところは決まつていろいろらしい。空いたポストに、佐賀さんがもぐりこむところとか。

さすがだ。やるなあ。

その通りの言葉を伝えた。佐賀さんはまた、かすかに笑い声を立てた。咽のところでぐぐもる、小さな声だ。

「新井林くんのおまけでは、参加したくないし、それに、佐川さんにも失礼だと思ったんです」

「俺に？」

佐賀さんの声が凜と響いた。

「私のために、そこまでしてくださる佐川さんの姿見て、私は、思いつきり反省しました」

俺の姿？

身体が震えてくるのが分かる。変なところが興奮している。やばい、初めてだ。

「私も、私のやりかたで、自分の考えていたことを梨南ちゃんにはつきり言わなくちゃって、思つたんです。けど、梨南ちゃんは私をまるつきり無視してます。話し掛けても、逃げます」

逃げるかよ。

本人は無視しているつもりなんだろうが、佐賀さんは「逃げる」としか見えないのだろう。おとひっちゃんがさつきたんの家を前にして「用事がある」とか言つて逃げたのと同じように。僕の目と佐賀さんの瞳、ぴつたり重なつている。

「だから、逃げ場所のないところで、一度話し合つつもりなんです。お願ひがあるんですけど、聞いていただけますか」

まだ身体と頭が熱くなつた状態で、僕は頷いた。

「いいよ、できる」とだつたら

「今のことを、当口まで誰にも言わないでいただけますか。このこ

と、梨南ちゃんにも、立村評議委員長にも内緒にしておきたいんです。私がもし来ると知つたら、梨南ちゃん何をするかわかりません。また、言い訳くつつけて逃げます。梨南ちゃんは自分しか通用しない言い訳が天才的にうまいんです、「す」いことを言つてるよ。

「だから、私、梨南ちゃんと一対一できちゃんと話をしたいんです。私がちゃんとひつぱつて、きちんと決着をつけたいんです。そして、きつちりと、評議委員になりたいんです」

申しわけないけど、僕は完全に全身、ゆでダコ状態だつたと思つ。風呂上りなのか、と突つ込まれても言い訳できないくらい。

「いいよ。わかつた。俺もそれは内緒にしどくよ。けど、どうで話し合いするのかなあ」

「大丈夫です。途中で私、梨南ちゃんが言い訳できない理由を言って、連れ出します」

言い訳できない理由？

佐賀さんはそれを詳しく教えてくれなかつた。たぶん佐賀さんのことだ。杉本さんの弱みを知つてゐるんだらう。僕がおとひつちゃんの弁慶の泣き所を知つてゐるよ。

「わかつたよ、でも無理しない方がいい。俺もちゃんと、佐賀さんが過ごしやすくするようにするからさ」

すっかり汗が流れてしまつた僕だが、電話の声は自分でもえらく冷静だつた。

だつて、「佐川さんの姿を見て」とか言われたら、変に興奮しているところなんて見せられないじゃないか。

興奮の残りは後で、鈴蘭優のポスターを貼つて考えよう。ずっと部屋に貼るかそれとも机の中だけにしておくか、迷つていただけど、もう限界だ。毎日眺めよつ。寝る時、見上げても大丈夫な場所に。もつ父さん母さんに何言われたつてかまわない。声の記憶だけじゃ、もう眠れない。

図書準備室は総田の言つとおり、ほとんど廃墟だった。なんでもういう部屋が残っているのか不思議だ。一応、掃除当番は割り振られているらしいけれども、見えるところだけ適当にほつきではなく度らしい。テーブルの上に本棚が積み重なっている。身体をかがめれば十分姿を隠すことができる。もちろん食べ物も持ち込んで平気だ。唯一心配なのは、間違つて南京錠を下ろされてしまふことくらいだけ、万が一のために総田にも帰りに一声かけてもらうよう頼んである。まあ、そんな心配はないとと思う。佐賀さんと話をした後はすぐに学校から出て、また郷土資料館あたりに行けばいい。

汚いよなあ。こんなとこ。まあ僕も、こんなことやつて

いること、ばれたら違反カード切られるだろう。

今まで一枚しか出されてないんだから、ちょっとくじらこ多くなつたつて平気だ。

佐賀さんが来るんだからリスクは覚悟の上だ。

掃除をして、パイプ椅子を一脚用意し、本を全部重ね合わせた。もう誰も読まないような本ばかりだった。さつさと片付けた後はすぐに玄関で、青大附中評議委員の一様をお迎えしなくてはならない。顧問の萩野先生には、僕が自主的に参加したいと申し出たといふことで、おとひっちゃんが話を通してくれた。去年の国語担当だつたこともあって、すぐに萩野先生はOKを出してくれたらしい。その代わり、プリントを全部手書きでこしらえるという面倒な仕事を押し付けられた。なんでも、先生たちの都合でコピー機が使えないとこそこそ、会計の川上さんとかを使えばいいのに、おとひっちゃんは僕にしつかり原稿を押し付けた。

「悪いな、雅弘。俺も一応は田を通しておいたんだけどな、総田の原稿だ」

総田の奴、全部俺の内容を丸写ししたんだな。

「すっげえ真面目な台本見つけたみたいでなあ、あいつも珍しいよなあ。俺、驚いたよ。古い時代の学園ドラマみたいなんだけど、総田と川上がふたりでいろいろ考えたらしく、現代っぽくアレンジしあんだとな。萩野先生にはまだ見せていないんだが、たぶんあれだけたら大丈夫だ。青大附中の連中もきっと驚くぜ」

おとひっちゃんが何も考えていなのは明白だ。あらすじもキヤストも、ラストに「いじめつ子を救いにくる王子さま」が出てくるところも、みんな僕の指定通り。もう少し、総田も考えたつていいのになつて僕は思った。でもまあ、本氣で演じるつもりのない台本だから、これでいいだろ？

総田にはあと、内川たちへ、若干の情報提供をしておくよう頼んでおいた。

この中のネタが、青鴻市内の中学で実際起きた……青大附中とは言わないが……出来事であること。こついう人間をどう思つかを、道徳の授業みたいに真剣に考えるふりをすることとか。

要は、杉本さんの前で、杉本さんらしいキャラクターのことを、おとひっちゃんおよび水鳥中学生徒会の人間は大嫌いなんだってことを、断言しちゃえればいいのだ。おとひっちゃんの正義感はたぶん、台本中のいじめつ子に当たられるだろう。かわいそうなのはいじめられつ子だと言うだろ？ 何も考えていな可能性はあるけれども、杉本さんだってそのくらいあてつけられたことは気付くはずだ。

問題は、逆恨みの恐ろしさつてところだ。けど、大人じゃあるまいし、殺し屋を頼んだりするようなことはないだろ？

杉本さんがこれつきり、水鳥中学に顔を出さない、かかわりをもたないようになつてくれれば、あとはハツ当たりだろ？ が逆恨みだろ？ が勝手にしてもらつてかまわない。僕たちは全く手を汚していない。ただ単に、「演じるための台本をこしらえてみた」だけのことだ。

あとは総田と内川会長が頭を並べて、くれぐれも日本を一切合切
やらないことに決めるかだ。総田のことがだ、

「冗談じゃねーよ、さむいほ立つや」

とばかりに、あつたり却下してくれるだり。まあ悪いけど、一年の時に演じた「彦一とんち話」をそのままやつてもうつたつてかまわない。どうせ僕たち、次期三年には関わりないことだ。

佐賀さんが来る。 佐賀さんが来る。 生の佐賀さんに会えるんだ。

毎朝挙げる真上のポスター。寝ぼけ眼だと、鈴蘭優の顔がぼんやり映つて、佐賀さんのふわふわした感じに見える。

見つめていると、また変な気持ちになる。

貼ってからすること、変な気持ちになるのを夜までかまんしてはかりいる。クラスの野郎連中がみんな、していることをしたくなるつてこいつ言つ時なんだらひ。こつそり、雑誌を引っ張り出してきて社会勉強をしてみたり、試してみたりする。おとひっちゃんにはあまり話したことのない感覚だった。

てるのかな。

なんか想像つかないけど、ありえないことじやないような気もする。総田も川上さんのことを考えて、きっとこういう気持ちになつたりしているんだろうし。口に出すことじやないけれども、みんなが女子のことひそひそ話している理由がわかるようになつてきた。

だって気持ちいいんだ。 しょうがないよ。

もう一度押み直した後大急ぎで服を着換えた。今日は授業が一時間あって、あとは一時間学校内のワクスかけだけだ。

何度も外で両肩の縫い目のところを持つて振った。

めったにいじらない頭も、少しだけ前髪をあげてみた。顔がべとべとしているのが気になる。

別におしゃれしているわけじゃない。やはり、今日は礼儀かな。健吾くんと話をするなら何にも気遣いしなくていいけど、やっぱり佐賀さんが来るんだから、しかたない。

けど、ほんとに今日佐賀さんが来ること、内緒にしていいのかなあ。

もちろん杉本さんを逃がさずに話し合いをすることが必要なら、それがベストだろう。でも、佐賀さんと杉本さんは同じクラスだ。健吾くんがうまい隠し切ることができるんだろうか。青大附中の事情はよくわからない。

僕はしばらくあれこれ想像してみた。天井の鈴蘭優ポスターを見上げて、うんと頷いた。

佐賀さんだから、たぶん大丈夫だろうな。

おとひっちゃんとは声だけかけて教室に入った。一時間だけにせよ、授業があるのはかつたるかつた。三時間目からいよいよワックスかけに入った。いわゆる「うんち」と呼ばれる黄土色の練りワックスを、先生たちがぽつん、ぽつんと落としていった。それこそ、馬とか牛のふんみみたいにだつた。雑巾を片手に、少しづつなじませて拭いていく。のどにつんとくる匂い。おなかの中に入つていいせいが、むかむかした。口を覆つても、わっくすの匂いでまた吐きそうになつた。どうしたんだろう。いつもだつたら平氣なんだけどな。

「佐川くん、どうしたの。具合悪いの？」

さつきたんが近づいてきてくれた。

「ちょっとおえつときただけだよ」

「無理しないで保健室に行つた方がいいんじゃないかしら。保健委員がいないなら、私がついていつてもいいのに」

そんな大げさじゃないよ。

いつもだつたら、さつきたんつてやさしいなつて思えるんだけど、今の僕は意地でも倒れるわけいかない。邪魔だつた。

「いいよ、なんでもないよ」

ワックスが膝について、たぶん凹つてしまつだらう。それもむかつときた原因のひとつだ。

よりによつてなんでこんな、ワックス大掃除の日に、交流準備会なんてやるんだらう。だんだん考えていいやになつた。

要するに、さつきたんとおとひつちゃんがくつついてしまえば一番いいんだよな。そうすれば、俺がこんなよけいなこと、考えなくたつていいのにな。全く、なんで俺にばかりくつついてくるんだる。さつきたんはおとひつちゃんと十分じゃないかよ。なんでかわからぬい。ずっとといい人だつて思つていたさつきたんのことがうざつたくなつた。

あつちに行つてほしくなつた。

「悪いけど、俺、ほんと具合悪いから放つておいてもらえないかなあ。ほんとに吐いちゃうかもしれないから」

「佐川くん、ごめんなさい、けど私」

まだしつこく寄つて来るつもりなんだろうか。いいかげん僕も頭に来た。

「俺以外にもおとひつちゃんがいるだろ。おとひつちゃんだつたらさつきたんにいろいろ相談したいことあるみたいだよ」

まずい、言い過ぎた。

自分で何も言い出したかわからなかつた。僕はただ、さつきたんにあつち行つてほしかつただけだつた嫌いになつたわけじやなくて。、ただ今は話をしたくなかつたつてだけだつた。なんでおとひつちゃんのことなんか口走つてしまつたんだらう。むしょうにいらいらしていた。

「今日もほら、おとひつちゃん困つてて、しつこく青大附中の女子が来るからや、逃げたくつてなんないみたいなんだよ。もしさつきたんが一緒にいてくれたらうか、きっとおとひつちゃん助かると思うんだけどさ。俺、悪いんだけどそのことで今、頭一杯なんだ。具合悪いとかなんとか言つてる暇ないんだ。じゃあ」

俺、やなこと言つてるよな。

おなかの中に寄生虫の大きいのが一匹いるみたいだ。言つても言つても言い足りない。

「佐川くん、『めんなさい』

わざきたんは、とうつとしたワックスを雑巾の隅ですくつた。背中を向けた。

だから、おとひっちゃんわざきたんはくつにしてしまえばいいんだよ！

まだ吐き気はおさまらないつで、僕はすうとしゃがんだまま廊下の板目をこすつていた。だんだんつるつるてかてか光つてくれる。今田具合悪くなるなんて絶対にいやだ。

机をもとの形にもどして、四時間田授業が終わつてから僕はすぐ教室を出た。総田とおとひっちゃんに頼まれていた脚本を持って行つた。生徒会室には総田を始めほとんど生徒会役員全員が揃つていた。おとひっちゃんだけいなかつた。

「あれ、おとひっちゃんは？」

いつもだつたら時間厳守でやつてくるはずなのに。珍しい。

「ま、少しくらい大目に見てやれよつてことだぜ」

直前までむすつとした表情だつたのに、いきなり総田が川上さんと顔を見合わせてにやついた。内川会長も相変わらずのほほんとした顔でもつて、

「やっぱり関崎先輩は、人気あるんですねえ」

おとひっちゃん、何があつたんだ？

これからおとひっちゃんの晴れ舞台「水鳥中学生徒会主催・青潟大学評議委員会との交流準備会」が行われるつていうのに。学校祭の時だつて、おとひっちゃんはやらなくともいいことを自分からばりばりやつていた。ライバル総田の仕事まで、鼻歌歌いながら片付けていたつて話だ。おとひっちゃんは、燃える奴なのだ。

「いつたい、何か変わったことがあつたのかなあ」

「佐川、お前、知らねえのかよ」

意外そつに言つのはやめてほしい。なんでもかでも、裏工作するのが僕だなんて決め付けないでほしい。

総田は満足げにんまり、鼻毛を抜いた。

「お前でも知らないことがあるとはな。いやなあ、さつき、三組の生活委員さんが来てな」

さつきたんが？ 男子にも生活委員がいるのに、瞬時にさつきたんを連想してしまった僕も僕だ。

「関崎を呼び出して、連れていつちやつたんだぜ。いやあ、舞い上がつちまつたなあ。あいつも、いつたい何を考えているんだかなあ、おい、ほんとにお前、知らないのかよ」

しつこく、僕の入れ知恵だと思つてゐるみたいだ。そう思わせておいたほうがいい、と判断し、僕は脚本の原稿を一式、置いた。

「じゃああとは、俺がガリ版印刷してくればいいのな」

さつきたんがなんでおとひつちゃんを呼び出した？

佐賀さんのことばかり考へていて、頭の中がぼおつとしていた。さつきたんにひどいこと言つたなつて気持ちになつてきた。

おとひつちゃんのことを言つのはまずかつたよなあ。

あれを気にしたのかなあ。

さつきたんも鋭い人だ。はつかねずみみたいな表情がやさしくて、今までだつたらほおつと落ち着く感じだつた。でもある日から他の女子と全然変わんなくみえた。優しいし、親切だし、いい人だ。そこんところは変わつてないけれど、いてもいなくてもいつて感じに最近はなつてきていた。さつきたん見るくらいなら、鈴蘭優のスターを見ている方がいい。

けど、おとひつちゃんとのつながりになにか関係があるとしたら黙つて見過ごすわけにはいかない。

「じゃあ総田、悪いけど、俺、別のところで印刷を片付けておくね

「ああ、わかつた。例のとこな」

総田にしか通じない言葉でもつて、僕は合図をした。

掃除と隠し場所を用意した、あの部屋へ向かう。

図書準備室に入った。通りがかりの先生に
「今日、交流準備会の準備でこの部屋借りています。すみません」と謝つておいた。

僕は一応、成績悪くても先生つけがいいのであつさつと通つた。真面目にしておいて正解だつた。

インクで手がべつとりしてしまつた。まだつめの中にはクスクスが入り込んでいたみたいで、紙の上に少し油が浮いてしまつた。ひとまずは青大附中評議委員連中プラス、水鳥中学生生徒会、あと僕の分をステイプラーで留めた。

僕の案通りにまとめられている「友情は音色とともに」とこつ、読むだけでこつぱすかしい題名がどんどんと田立つ。

元の題は「友情は歌とともに」だった。歌ではなく、ピアノにしたので、題名もそれにあわせて書き換えたのだらう。思いついて、僕は「ピアノ」のところを思い切つて「Hレクトーン」に直した。

もう一度印刷し直してこよつと決めた。

青大附中の人たちが来るのは昼ご飯が済んでかららしい。僕たちも生徒会室で最後の詰めを行いながら、やきそばパンを食べることになつていて。顧問の萩野先生が飲み物だけ、差し入れしてくれるらしい。

僕は「Hレクトーン」を書き直した後、もう一度椅子を並べなおす。窓辺にはジュースを並べられる程度の場所が空いている。あとで佐賀さんをここに連れてこよつ。ちゃんと総田にもその辺言い訳しておこなう。おとひつちゃんにばれないうまにしておこなう。

おとひつちゃん、あれ、どうしたんだ？

一十分くらい必死に作業した後、もう一度生徒会室に戻つた。まだおとひつちゃんが来ていない。

「なんでおとひっちゃんが来てないんだ？」

「ほらほら、玄関で青大附中連中をお迎えするんだと。ひとりでい

いんだと」

「ひとりでつて」

またまた総田が唇をぎゅっとゆがませて笑った。

「厳密に言つと、ふたりだな。なあ、内川」

「ふたり、です」

さつきたんか？

お迎えは僕が担当してもいいなあと思つていた。いや、僕が行くつもりだった。

「え？ 生徒会役員は全員席に付いていた方いいんじやないかなあ。俺みたいな部外者の方が、案内係つてことになれば一番いいと思うけど。そういうの、決めてなかつたのかなあ」

さりげなくいやみつたらしく言つてみた。総田にはお見通しだつたらしい。まだまだ腹に一物ある感じで、

「計画変更だつてあつていいじゃねえかよ。ま、佐川、お前も陰でこつそり観察しろよな」

計画変更つたつて。

みんな僕の計画どおりだと思つてゐるからこそ、詳しいことを教えてくれない。悔しい。しかたないので僕の目で確認することにした。

「職員玄関からだよね。会場は生徒会室だよね」

僕はあらためて確認しなおし、職員玄関まで走つた。そろそろ、青大附中ご一様到着時刻だ。一時三十分を予定してゐる。

一階の廊下窓から見えるのは、赤茶色のつぶつぶがくつついた木の枝ばかりだった。

職員玄関の入り口は職員室の近くということで、かなり広々している。先生たちの何人かは今日早く帰るらしく、

「お、今日はお客様をお迎えか。佐川、がんばれよ」

と声をかけてくれる人もいる。早いうちに内申点稼ぎするのも、

いいことだ。

週番の生活委員もいなくなつた。土曜日の校舎は、運動部の連中が廊下をランニングしていたり、菓子パンを食つたりする程度で、先生たちもみな職員室でテレビを観たりしている程度。職員室の中つて煙草臭いからあまり入りたくない。

総田から聞いたところによると、場所は生徒会室内。面子は予定よりも大幅に減つて、立村評議委員長以下三人だといつ。男子、女子合わせて一人ずつ。その中に佐賀さんが入つているかどうかは不明だけど、健吾くんがいないことだけははつきりしている。

おとひっちゃんを探すと、職員玄関にたつて、妙に硬直したまま突つ立つていて。外はだいぶ明るくなつていて。雪が車の飛ばす泥はねで真つ黒に染まつていて。土が出ているところは乾いていた。話相手は、さつきたんだろう。スカートが揺れているのが見える。さつきたんと話してゐるんだ。

ワックスかけの時の言葉を思い出した。僕としてはどうしようもなくいろいろしていてハつ当たりしちやつたけれども、きっとさつきたんは気にしていないだろ？と思つ。どうせあさつてになつたら忘れているだろ？

声が聞こえないのが残念だが、まあいい。ふたりを邪魔しないでやろ？。

腕時計の文字が「13:30」と縁に光つた。

そんな決意は、次の瞬間あつさり翻つた。

「だからなんであんたがくるわけなのよ、はるみは評議委員と関係ないじゃない」

棒読みの女子声が聞こえてきた。仮にも職員玄関です！むんて自殺行為としか思えない。僕はあわてて玄関のサンダルをつつかけて、外に出た。

「申しわけありません。新井林くんの代わりで参りました」

敬語で全く意に介さず返事をしている、ふたつに結わえた長い髪。

いつもの髪型よりも幼く見えた。よくよく見ると、薄桃色のリボンを長めに蝶結びにしている。丸めて編み上げたいつものスタイルもいいけれど、今日は一段と、守りたくなる。行動したくなる。

「どうしたんだ」

すでにおとひっちゃんがさつきたんを玄関の脇におっぽいたまま、割つて入っている。

さすが、水鳥中学生徒会副会長。生徒同士のこざこざにも介入する。側でさつきたんは呆然としたまま、四人のブレザーフリース服連中を見つめていた。さつと隣りに近づき、僕はささやいた。

「何があつたんだろ?」「う

「青大附中の人たちよね」

僕の顔をそつと覗き込むようにして、遠慮がちにさつきたんが答えた。掃除時のハッタリがまだ、ひつかかっているらしい。ここであやまっておいた方がいいかな。でもタイミングがつかめなくて僕も黙っていた。

おとひっちゃんにひっぱられてブレザーフリース服連団は玄関の松の根元にかたまつた。ため口叩いている相手は立村だった。相変わらず蝶人形顔している。申しわけなさそうにしながら、何度も頭を下げている。なにそうへこへこしているんだろう。挿むようにしてふたりの女子が寄り添っている。ひとりはおかっぱ髪、もうひとりは長くストレート。市松人形の不気味さが漂っている。立村に向かって、佐賀さんが視線をまっすぐ投げて、挑戦している風に見えた。

おとひっちゃんが立村に何度も話し掛けている。立村もおとひっちゃんと佐賀さんに小さな声で何かを言い返している。時折杉本さんをたしなめるよう、真面目な顔を見せている。もうひとりのおかっぱ髪女子が、杉本さんの側で肩を抱いて話し掛けている。

明らかに、揉め事だ。

他中学の揉め事に巻き込まれて行事中止、なんてしゃれにならないことしてほしくない。僕はさつきたんから離れてすぐに佐賀さんに近づいた。

「おとひっちゃん、どうしたんだよ」

おとひっちゃんじゃない。聞きたいのは立村相手にだ。

「悪い、内輪もめを見せてしまったな」

舌打ちし、立村はおとひっちゃんに答えた。決して、僕にではない。

「新井林からは聞いていなかつたけれど、佐賀さんもいきなりで、とまぢつたりしないか？ いや、来てくれたんだつたら、別に参加するのは問題ないと思うよ。ただ」

言いかけたところ、即座に弾き返すような、棒読みの声に割つて入られた。

「評議委員の集まりでありながら、なぜ関係のない人間が入るのですか。おかしいです」

「杉本、いいじゃないか。佐賀さんは新井林の代理なんだよ。四月からは他の委員会とか、有志とかも参加する可能性あるんだからさ」「そうよ、ね、杉本さん、ちょっとびっくりしちゃったよね」

おとひっちゃんは杉本さんの方を見て、すぐに逸らした。話し掛けることをできるだけ減らしたい、そういうのが見え見えだった。目つきが怖くて、佐賀さんの方へ近づいてきている。つまり僕の隣りに寄つてきている。気持ちはわかる。

「でも、今日は評議委員会を招いていただいたということですよね。それつておかしいです。あの馬鹿男子が何を考えていたのかわかりませんが、なぜ、委員会にも関わつていない人が参加するのでしょうか」

全く動搖していない佐賀さんの表情、心地よい。

かすかに薄笑いすら浮かべていた。よくよく見ると、唇も桃色だつた。耳もとに手を軽くやつた時、爪がぴかぴかに光つていた。大人の人人がするマニキュアみたいだつた。

「新井林くんの代行だつたら別にかまわないから、中に入れよ」同じく、立村を促すおとひっちゃん。早くなんとかしてくれつていうのが見え見えだ。

「すまない、ほら、杉本いくぞ」

杉本さんに、心持ち優しい視線を向け、立村は一人並んで職員玄関へ向かった。おとひっちゃんは僕の方をちらりと見て、付け加えるように、

「今日は佐川も参加するし、別に生徒会だけの集まりじゃないんだ。だから、かまわない。顧問も最初だけ挨拶してくれるけれども、あとは任せてくれるってことだ。生徒会室に行こう」

あえて杉本さんには田を向けないようにしようとしている。話し掛けられるのが怖いんだろう。おとひっちゃんは何を思ったのか、おさげ髪のさつきたんのところへ近づいた。

「あの、もしよかつたら、水野さんも、今日手伝ってくれると助かるんだけどいいか」

「え、私が？ だつて私生活委員だし」

「今日は準備会だから、できれば他の委員会関係の人にも参加してほしいんだ」

おとひっちゃん、言葉面だけはまっすぐだけど、思いつきりどもつていた。靴を脱いで来客用の靴箱に入れている青大附中連中にもはつきり聞こえただろう。

「雅弘も学習委員だけどいるしさ、いや、生徒会だけじゃダメなんだ。やはり他の委員会とも協力しあわないとダメだつて思つてさ」
すっかり困り顔のさつきたんだった。おとひっちゃんと玄関でどういう話をしていたのかわからないけれど、いきなり親密な言い方をされても困るだろう。こつたいなんでおとひっちゃん、こうも積極的なんだろう？ いつもとは違う。浮ついている。僕は助け舟を出した。仲直りのチャンスだ。

「さつきたん、他の委員が俺ひとりじゃ落ち着かないし、よかつたら来いよ」

ワックス時の「ざいざい」が少しでも消えてくれればいいんだけど。さつきたんはそつと僕の方に近づき、なぜか佐賀さんの方を見た。両方見比べて、唇をきゅっと結んだ。

「分かりました。参加するわ。お願ひします、関崎くん」

「なんで見るんだろ。やつぱり女子から見ても、佐賀さんは田

立つんだなあ。

生徒会室までの道のり、おとひっちゃんは独り占めしたいだろ？。氣を遣つて僕は、青大附中グループでひとり取り残されている佐賀さんには近づいた。おもてなしの心だ。気遣いだ。

「佐川さん、逢えてよかつた」

他の連中に聞き取れない声で、僕の耳もとにささやいた。拍子にふたつに結わえた髪の毛がほおにふれて、ちくちく痛かった。鈴蘭優のポスターでこの髪型の奴、見たことがある。ほしいな、となんとなく思つた。

「帰つたらじづじょづつと思つていたんだ」

「大丈夫です。立村委員長がまずOKするつて思つてましたし」

「それにしてもさ、ずいぶん青大附中の人、少ないね」

もう少しあたくさん来ると思つていた。

「あとでお話します。それもいろいろ問題があるんです。新井林くんが言づには」

前で三人語らつている立村その他ふたりを唇で指し示し、

「梨南ちゃんを連れて行くために、立村先輩が土下座して頼み込んだらしいんです。周りの人たちが嫌がるのを覚悟の上で、『今回だけいい、一度だけ杉本を参加させてやつてくれ』つて。ものすごい覚悟だつて新井林くん、話してました」

「覚悟いるのかなあ。ただ自分の好みだけだろ」

「だつて、ここでじづり押しなんてしたら、大変なんです。立村先輩きつと、自分が評議委員長から来期下ろされること覚悟の上でしているはずですもの。もちろん、新井林くんは指名されても受ける気ないと話してましたけれど」

聞こえないようにささやいていたつもりだが、いきなり立村が振り返り、僕の方を静かに見つめ、階段のところで尋ねた。

「これからどうやって行けばいいのかな」「気付いてないな。

僕と佐賀さんは顔を合わせて田配せした。

「ああ、この階段を昇つていけばいいよ。青大附中みたいにきれいなところじゃないけど、生徒会室つて書いてあるからさ」

石炭ストーブを派手に焚いているせいが、生徒会室の温度は暑いくらいだった。わかつていたから僕は学生服のままだつたけれども、コートを着込んでいた立村以下青大附中のみなさまは戸惑つたらし。すぐにコートを脱いで、書類をまとめておいてあるダンボールの上に載せた。そこに置くよう総田が勧めたからだつた。女子ふたりは戸惑つているようすだつた。佐賀さんは問題ない、テーブルの下に押し込んでいいと教えておいたから。青大附中みたいに、コートかけがあるわけではないんだから。

「これから水鳥中学生徒会主催の、青大附中評議委員会との交流準備会を行います。本日はわざわざ、ご苦労さまです。青大附中のみなさんとはこれから、いい意味での交流を深めていきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします」

初対面の連中も多いと聞く。内川会長が緊張気味に、総田のこしらえた挨拶を読み上げた。しつかり、背中には後光が差している。おしゃかさまつて感じだつた。僕と佐賀さんは一番端の出入り口付近に座つていた。さらに隣りにはさつきたんも大人しく腰を下ろしていた。僕に話したそうな顔をしていたけれど、なんとなくよけいなおしゃべりしちゃいけないような気がした。

もつと語つなら、佐賀さんの隣りには杉本さんが大人しく座り込んでいる。奥側におかっぱ髪の女子、次に立村と続いている。水鳥中学生徒会連中はみな、部屋の奥を陣取つていて。おとひっちゃんが向かつて右側に、総田が反対側に、内川会長を守るような形で席に付いている。斜めから僕と佐賀さん……かどうかわからないが……とさつきたんを眺めて、にらんでいる。別にさつきたんを取る気

なんてないのに。

顧問の萩野先生が立ち上がり、簡単に挨拶をしてくれた。後、ジースとクッキーが先生のポケットマネーで……ちゃんと説明あり……振舞われた。おなかがすいていたので、まずはぱくぱくと食べさせてもらつた。菓子パンだけでは辛い。さつきたんも僕の方をちらちら見ながら、おそるおそるクッキーに手を伸ばした。「おなか、すいてたの?」

真つ赤にならなくてもいいのに。さつきたんははにかみながら頷いた。

「佐賀さん、食べるか?」

「ううん、大丈夫です。私、学校でお昼をいただいてきました」見ると、青大附中の連中はとりたててぱくぱく食いついているつてわけでもないらしい。立村はおかっぱ髪の女子と一人、ひそひそと話をしている。杉本さんだけがうつむいたまま、佐賀さんを無視しているのが目立つっていた。

顧問のいない中の交流準備会というのも珍しい。青大附中もそうだつたのだけど、萩野先生も途中から席を立つた。なんでも、三年で公立高校入試二次募集の準備があるのでそつだ。用事があれば呼び出すように、とおとひつちゃんと伝えて、生徒会室を出て行つた。好都合だつた。

先生がいる間はそれなりに、お互の学校事情について説明したり……立村が全部その辺は説明していた。内容としては前回青大附中で話をしたことと変わらないので飛ばすけど……、春休みにはぜひ、バスケ部の合同練習試合観戦を行おうとか、六月以降にはぜひ正式な交流会を行おうとか、わりと硬い内容が中心だつた。僕にとつてはまだまだ関係のないことばかりだつた。

例の中学生演劇台本をそろそろ用意しよう。

図書準備室に全員分まとめてあるものを持ってきて、配ればいい。おとひつちゃんにも、総田にもOKをもらつていい。

けど、何を考えているんだろうな、俺も。

隣りで黙つてメモを取つてゐる佐賀さん。

健吾くんにどういふ言ひ訳をしてきたんだろ？

あの「正々堂々大好き」少年の健吾くんが、もし僕の計画を知つたらきっと凶悪うか怒るかのどちらかに違ひない。杉本さんのことを蛇蠍のごとく嫌つてゐるのは共感するけれども、汚いことをするのはいやだつて顔を、いつもしてゐる。僕もそのくらいはわかつてゐる。でも、そうしないと、水鳥中学の方に飛び火してしまつ。佐賀さんも傷ついてしまう。

けど、これつてどうかんがえてもリンチだよな。

突然、氣弱な気持ちになつてしまつ。反対隣のさつきたんが、思つたよりもクッキーを食べているのが意外だつた。そんなにおいしいのかな。僕の分もあげようかな、と思つて皿を差し出したら、佐賀さんも氣付いたらしくその中に、自分の分をちょこんと載せた。

「ほら、おなか空いているんだつたら、あげるよ」

また真つ赤になつてうつむいてしまつた。なんか僕も悪いことしだらうか。さつきたん、よっぽどワックスがけの時のことが腹立つたんだろうけれど、じつちだつて仲直りしようとしているのに。またいらいらつと來た。

「いいよ、いらぬんなら置いとくよ」

勝手にすればいいんだ。

僕は言い捨てて、佐賀さんに話し掛けようとした。けど、佐賀さんもなぜか、隣りの杉本さんの方をじいと見つめ、首をかしげていた。ちっちゃい子を見守る、お母さんみたいな顔だつた。

「梨南ちゃん、大丈夫？」

なぜか一方だけじつと見据えている杉本さんに声をかけた。だいぶ生徒会連中との語り合ひも收まつてきた頃だつた。はつきりと佐賀さんの言つてゐることが聞き取れた。近くの僕だけじゃない、たぶん、内川も、総田も、立村も、おそらくおとひっちゃんも。ちらつとにらみすえるようにして、杉本さんはまた無視した。

無視するんだから、やめねばいいの。僕とだつて話する」と、あるのにな。

脚本のことにつけて、ちよこつと報告したかつたのにだ。

佐賀さんはせらにはつきりと尋ねた。

「梨南ちゃん、お手洗い、したいんでしょ？ 私が付き合つてあげるから、行きましょう」

ぐいっと杉本さんの眼が血走った風になつた。唇を結んだまま、憎しみいっぽいににらみ返した。

いつもの棒読み口調で言い返した。

「何馬鹿なこと言つてるのよ。静かにしたら」

「だつて、梨南ちゃん、学校にいる時から、お手洗い行つてなかつたでしょ。さつきから時計の針じつと見ていたし。きっとお手洗いのこと考えているんだなつて思つてたの。今のうちは行かせてもらつた方が、あとで泣かないで済むわよ」

佐賀さんは妙にくつきりした発音で、生徒会室内に響くよつと音い張つた。

「私が付き合つてあげます。すみません、杉本さんがお手洗いに行きたいそつなので付き合つてよろしいですか」

おとひっちゃんも総田も、別になんとも思つていらない様子だつた。そりやそうだ。誰だつてトイレに行きたくなることはある。抜けたつて困らない。僕も後ろが通りやすくなるように、椅子の背を引つ込めた。川上さんが、
「トイレはね、一年四組の前にあるから、すぐわかると思うわよ」
総田の隣りに席を取つてるのは、言つまでもない。男子連中は全く無視して話を始めていた。僕もいつもだつたらそれつきのはずだつた。でも。

びつじても言つて訳つかない理由で、杉本さんとふたりつきになつて、話をつけるつて電話で話してはいたよな。佐賀さん。

杉本さんがどうしても、逃げられない理由でつてことか。

仕方なくしぶしぶ立ち上がり、うつむいた杉本さんを引き連れ、

佐賀さんが出口へ出て行つた。振り返り、佐賀さんは僕へ意味ありげな笑みを向けた。さつきたんも一緒に佐賀さんたちを見つめていた。

もう一年の教室にはほとんどいなはずだつた。
ふたりつきりで話をするにはもつてこいの場所だ。

佐賀さんの勝利が確定してから、始めようか。

僕はさつきたんが手をつけなかつたクッキーをもう一枚、口の中で噛み碎いた。

十五分くらい経ったけれどもふたりは戻つてこなかつた。最初のうちは気にしていなかつた。女子のトイレがいくら長いからといって、ちょっとと引っ張り過ぎるんじゃないかと感じてはいたけれども。もつともおとひつちゃんと総田は全く意識していらないらしい。男子つてそんなもんだ。川上さんとか、さつきたんの方が心配そうに戸口の方をちらちら眺めていた。僕の顔を見ては何か言いたそうにするのだけど、佐賀さんと杉本さんのいない席で話すのもいやみたいだつた。

「今回、青大附中のみなさまがたに見ていただきたいんだけどな」

すでに総田もため口叩いてやがる。最初から立村委員長を馬鹿にした態度を取つていた。抗議しない立村も立村だ。穢やかに相槌を打つていて。

「うちの学校でも六月くらいに一度、おたくの学校みたいに劇をやりたいなあつて話が出てるんだ。青大附中と違つて、金もかけられないし、所詮臭い内容の学園ドラマになつちまうけれどもな。一応、適当に台本を選んでおいたんだ。その辺でちょっと、『意見をいただきたいなあと思つたとこださあ』

隣りのおかっぱ髪女子が、田立たぬように立村をつづいてくる。僕には見える。

「ああ、大体の話を聞かせてもらえれば、参考になるかどうかはわからなけれど、意見は言えると思う。どういう内容なんだ？」

総田には話しづらいのか、おとひつちゃんと声かけている。おとひつちゃんもまだ、僕の手直ししたすさまじい台本の内容を知らないはずだ。

「いじめ問題を通じて、友情の素晴らしさを描いた話なんだよな、

急に僕に振つてくるなつて。無視を決め込もうとした。

「佐川くん、関崎くんが呼んでいるわよ」

さつきたんが小さな声で割り込んできた。やけにうるさい。

「台本、今別の部屋にまとめて置いてあるんで、今から持つてくるけど、いい？ おとひつちゃん」

やはりこういう場では、おとひつちゃんを立てておかねばならない。

僕が立ち上がると同時に、いきなり立村が右腹を押えるようにしてテーブルの上にかがみ込むよつた姿勢を取つた。額をつけるくらいに一度、うつむいた。

「ちょっとだけいいか」

顔をわずかにしかめている。腹が痛いらしい。盲腸でもがき苦しむ、という痛みではなさそうだ。その辺の見分けは男子なら大抵つく。たぶん、あれだ。

「腹、壊してるんだる」

にやつきながら総田がつづつく。さすが男子連中はよくわかっている。立村も少しばにかむよつにして笑みを作つてゐる。相当きわどいところじゃないだろうか。男子の場合、大きい方と小さい方を判断して、どちらのトイレに入るかを決めなくてはならないといふさだめがある。学校で大きい方をするつてことは、男子にとつてかなり勇気のいることだ。個室を選ぶつてことなんだからいきなり戸を開かれて文句が言えない。屈辱的なまだぎのポーズを笑われるはめになるばかりか、「あいつ学校でくそしてたんだぞー！」といふ、これまた恥ずかしい事実を語り継がれるはめになる。それゆえ男子としては、できるだけトイレでは小さい方のみ使用するようしている。もつとも腹の調子の問題だから、必ずしもうまくはいかない。僕もその辺は経験者なのでよくわかる。男子で気持ちがわからない奴いたら、それこそ「人の心がわからない奴」だ。

「昼、なんか悪いものでも食つたんだろうか。立村評議委員長。

「昼に牡蠣フライ定食なんて食べたのがまずかったのかな」

「あれ、立村くん牡蠣フライなんて」

何か言いかけたおかっぱの女子に、何かをささやきかけた。その子はすぐに黙つて、椅子をぐいと机に近づけ、人が通れるよう通路を作った。言う暇ない、一刻を許さない、早くトイレに行かせろってことだらう。情けないけれども男子としてはよくわかる。

「と、いつことで申しわけない」

かなりせつぱつまつた状態で立村委員長は戸口から出て行つた。今度は男子連中……おとひちゃん、総田、内川……あたりから、含み笑いが漂つた。

わかるよなあ。よつによつて腹下しどきたもんだ。

かわいそだつたのは、立村の隣りに座つていたおかっぱ髪の女子だつた。ひとりでふうつとため息をつき、口を尖らせていた。初めての学校で、ひとり取り残されているんだからそりやあ淋しいだろう。少し長めで、どうかんがえても校則違反でチケット切られそうな髪形だつた。青大附中の女子はあまり、細かい髪型を規制されていなかつた。

「じゃあ、おたくの委員長が帰つてくるまで待つことにして、佐川、

悪いが例のもの、持つてきてもらえねえかな」

総田がせつかく和んだ場を壊さないよつに、いなかつぽい口調で僕に声をかけた。

ちょうどいいところだつた。僕もそろそろ準備しなくちゃと思つていたところだ。

「いいよ、じゃあ急いで行つてくるよ」

三階の図書館隣り図書準備室へ向かつた。会、終了後のお楽しみが待つてゐる場所だつた。

ジュース、用意しておけばよかつたな。あと、お菓子もくすねてあけばな。

僕が生徒会室を出でぐるつと見渡したのは、別に何も考えていたわけじやない。何となく、右の耳たぶがひっぱられる感覚を覚えた

からだつた。一気に廊下で冷えた空気が耳の中に詰まつた。

誰かがかくれんぼしているみたいだつた。

男子と女子のトイレが向かい合つた中間点で、茶と灰色が混じつたブレザー姿の三人を認めた。

僕が廊下に出たのを気付いたのか、また頭を寄せ合いしゃべつてゐる。何かを言い合つてゐるのだろうけど、具体的な言葉が聞き取れなかつた。

あれ、さつき腹下してた奴もいるよ。

立村評議委員長が、ふたりの女子に挟まれて佐賀さん相手に何かを説明していた。さつきまで苦しそうに右腹押えていたのが嘘のように、冷静だつた。大至急すませて割り込んだつてことだろつか。

僕は少し様子をうかがいながら、三階の図書準備室に戻つた。誰も入つてきていないこと、南京錠がかけられていなことを確かめた後、脚本を参加者全員分重ね合わせた。

一度一階まで駆け下りた。呼吸を整えて、降りてきた階段とは反対側の方から昇つていつた。まだ立村たちがいるのだったら、後ろから近づいていく形になるだろう。別に襲うわけではない。

男子トイレと女子トイレが向かい合わせにこしらえられている。挟まるるようにして三人はまだ話し合いの最中だつた。僕が階段を上がつたところから見通した時、佐賀さんがうつむいているのだけがはつきりと見えた。何か、様子が変だつた。

足音を忍ばせても、階段を昇る気配は感じるらしく、僕がせつかく盗み聞き覚悟で忍び寄つたにも関わらず三人は黙りこくつてしまつた。黙られたら困る。まずはさりげなく自然な一言を投げかけてみた。

「あれ、どうしたの」

立村が無理して笑顔を作つてゐるのがありありと分かつた。ポーカーフェイスを保とうとして、うまく行かない、おとひっちゃんに似た顔だつた。早く生徒会室に戻れつて言いたいんだろう。

杉本さんが立村の背後に立つて、ぶつ壊れそうなまなざしで佐賀

さんをにらみつけていた。どうでもいい。僕の関心は佐賀さんの顔しかない。うつむいて指先で眼をこすっているのは、泣いていたからかもしれない。

佐賀さんをふたりで泣かしたつてことだらうか。

何考えてるんだろ。

盗み聞きの誘惑には勝てなかつた。

目の前には男子トイレと女子トイレが向かい合つてゐる。木製の扉だ。校内には部活動関連の連中以外いよいよだだし、よっぽどのことがない限り昇つてくることはないだらう。せいぜい顧問の萩野先生が戻つてくる程度だらう。先生だつたらいくらでも言い訳が利く。

「あのせ、悪いんだけど、俺もちょっとトイレ行きたいんだ。これ、持つてくれると助かるな」

暗に言葉へ、「大」の意味をこめた。

立村は十部弱の台本を両手で受け取つてくれた。

「ああ、わかった」

また二人の女子を交互に見つめている。僕は左腹を押えるようにして、トイレに飛び込みわざと個室に飛び込み、思いつきり派手に音を立てて扉を閉めた。今日は誰も使つた形跡がない。ことの匂いもない。つてことは、やっぱりあいつ仮病を使つて教室抜け出したつてことだ。

今度は音を立てないようにそつと戸を開いた。木造校舎のよさは、露骨にばたばた音が立たないところだらう。足音も立てないようにトイレ入り口の扉に近づいた。壁にもたれ、耳を押し付けた。

杉本さんの金切り声が一拳に響いた。

この調子だと生徒会室にも聞こえてるぞ。

「立村先輩、私が悪いというのですか」

「悪いもなにも、今ここでけんかしたつてしようがないだろ。佐賀

さん、せつかも言つた通り、申しわけないんだけど今日は先に帰つてもうえないかな」

佐賀さんを帰すだと？

立村の声だけが落ち着いていた。杉本さんはせつて食つて掛かっている。声に抑揚はないんだけど、興奮しているのが見え見えだ。相当、やらかしたんだろう。

「先輩、話を逸らさないでください。私は佐賀さんに頭がおかしいとか、病院に行きなさいとか、先輩とおんなじ頭なんだからしかたないんだとか、ひどいことを言われたんです。なんでそこまでのしられなくちゃいけないんですか、言い返すことが悪なのですか。正しいと言つことを言い返したらどうしていけないんですか？」

「杉本、あとで落ち着いて考えような。佐賀さん、いろいろ大変だろうけれど、新井林にはちゃんと話しておくし、連絡もしておく。本当に申しわけないんだけど、今日は杉本をひとりにしてやつてほしいんだ」

佐賀さん悪い」としてないの、なんでだよ。

なだめるように言い聞かせてくるらしい。佐賀さんの言い分が聞き取れない。しゃべつていないので、ひとりでがまんしているのだろう。

「私、別にひとりじゃなくてもいいです。私、何も悪いことしていません」

「わがまま言つた。今日はお前ひとりじゃないんだから。せつかく來たんだから、することだつてまだあるだる」「するこことてなんだよ。

佐賀さんの返事はやはりなかつた。やましいことを言つていなくとも、言い返せないんだろう。本当のことを言わると返つて逆恨みされるつて、この前も話していたつて。いつもこのことが何度も、本当に小学校時代から何度も繰り返されてきたんだろう。本当のことを伝えても通じない相手なんだつて聞いた。自分が間違つていることを認めようとしている最低な女子なんだつて僕は思つてゐる。そ

んな女子をかばいたてて、正しい佐賀さんを追い返そうとするなんて、立村の奴、男子の風上にも置けない奴だ。ドアを蹴り飛ばして立村の顔をあさがお便器にうずめてやりたくなつた。

「私、頭おかしくないんです。なんでそんなこと言われなくちゃいけないんですか。私、先輩と同じような病気なんかじやないって、あれだけ言つてゐるのに」

「ほら、佐賀さんはそんなんつもりじやなかつたんだろ、な」

相槌を求めてゐる。でも返事はない。突然立村の声が慌てた。

「杉本、おい、どうした」

ドアの向こうではじめて佐賀さんの動きあり。僕はせりに壁へ耳をつけた。

「梨南ちゃん、もしかして吐きそうなの？」

さすがに立ち聞きだけではまずいだろ。僕は仕方なくトイレから出た。

杉本さんが背を丸めて、手を口に当ててしゃがみこんでいた。佐賀さんもしゃがみこもうとしたのを、立村が片手で制している。片方の腕に僕の持つてもらった脚本を、もう片方の手で背中をさするようにして、

「大丈夫か、苦しいのか」

「……大丈夫です。ひとりで大丈夫」

しほりだすよつにつぶやき、杉本さんは真向かいの女子トイレへ駆け込んでいった。その場ではがまんできたみたいだつた。すぐに水道の蛇口を思いつきりひねつた水音が廊下まで響いた。うちのトイレは男女問わずくみとり式なので、だいたい誰が何をしているかはわかつてしまう難点がある。たぶん、杉本さんは僕の想像した通り、吐き気に苦しんでいたのだろう。かすかにつめく声が聞きたくないのに聞こえてしまう。

佐賀さんがあとを追おうとしたのを、立村はまた呼び止めた。

「佐賀さん、悪いんだけど、清坂さんを呼んでもらえないかな」

「あの、私が梨南ちゃんの面倒みます。私、梨南ちゃんのつままで連れて帰りましょうか、すぐ近くですか？」

「いや、いいよ。佐賀さん、本当に悪いけど」めん。あとでちゃんと新井林にもあやまるから、今日のところは申しわけないけど、先に帰つてやつてほしいんだ」

いやに立村は、杉本さんから佐賀さんを引き離そうとしている。だんだん口調が命令形になつていてるのが気に食わなかつた。追い返すのは具合悪くなつた杉本さんの方じゃないか。迎える水鳥側だつて大変なんだぞ。

僕がいることなんて忘れているんだろう。この腹下し委員長が、背中越しに立村の横顔を覗いてみた。佐賀さんがうつむき加減で小さく首を一度振り、生徒会室に向かおうとしていた。立村の表情は全くもつて冷静沈着。動かなかつた。

「冗談じゃない。佐賀さんを追い返そつだなんてや。

もちろん僕も、短い間だけ考えなかつたわけじゃない。

佐賀さんと杉本さんがトイレ近辺で言い合ひをしていたのは疑いもない事実だろ？

本当に腹を下したのかどうかは別として、立村もトイレ前廊下で激しく言い合つてゐるふたりを見つけて、仲裁に入つたんだろう。佐賀さんの言う通り、立村は杉本さんのことえこひいきしているつてことが、よおくわかつた。いじめたのが佐賀さんだと勘違いして、杉本さんを追い返そうとしたのだろう。

公平に見ろつていうんだ。

でも、いじでうつかり僕が口出ししようもんなら大変なことになるだろ？ 立村は僕と佐賀さんが隠れて会つてることを知るよしもない。今日会つたのが初めてだと思つていてるだろ？ おおつぴらに佐賀さんをかばうことははばかられた。

「あの、杉本さん大丈夫かな」

僕はおずおずと、声をかけた。やつと気が付いたのか、立村が同

じ無表情のまま振り向いた。黙つて脚本の束を差し出した。受け取つて僕は続けた。

「具合悪いようだつたら、保健室に連れて行こいつか？」

あくまでも、親切心でつてところを崩さない。はつとした表情で立村は眼を見開いた。返事はなかつた。

「吐いちゃつくらいだからそつとうござること思つよ。ジューースくらいだつたら持つていつてやるしさ。おとひつちゃんだつてそのくらいのことは大田に見てくれるよ」

まじまじと見つめ返す立村の表情は猫のよつだつた。

「保健室、空いているのか」

「うん、具合悪くて本当にだめだつたらすぐ帰つてもひつたほうがいいけどさ」

「どう出るか。僕はわざと幼く見えるよつて、おずおずと申し出た。佐賀さんも振り返り、僕の言つことを聞いていた。生徒会室にはまだ入つていない。

「悪い、そうさせてもらつていいか」

もう、喜んで。杉本さんの顔をもう見ないで済むんだつたら。空氣もきれいになる。

佐賀さんの後をついて生徒会室に戻ると、おとひつちゃんがすっかり、機嫌斜めで口を尖らせていた。おとひつちゃんは人に待たされることを極端に嫌う。短気な奴なんだ。損氣なんだけど。廊下の修羅場に気付いていたのかどうかはわからなかつた。総田たちが様子をうかがうように僕と佐賀さんに口を開けた。

僕はテーブルの上に脚本を置いて、おとひつちゃんにだけごめんのポーズ、両手を合わせた。佐賀さんは、おかっぱ髪の女子に近づき、何かをささやきかけていた。びっくりしたのだろうが、声がとんがつっていた。

「え、杉本さんが」

「本当は私が残りたかつたんですけれど

泣きそうな顔をした。どうして立村の奴は、佐賀さんの善意を素直に受け取らなかつたのだろう。腹が立つてくる。もつともあれ以上杉本さんに引っ張りまわされるのはたまたもんじやないし、佐賀さんが戻つてきたこと自体は正しいと思つた。

「わかつた、行つてくるね」

軽く一礼して、おかっぱ髪の女子は小走りに出て行つた。

「どうしたんだよ」

「杉本さんがトイレの手洗い場で吐いちゃつたらしくてさ」

その通りのことを言つた。

思いつきり川上さんが顔をしかめた。

「デリカシー持ちなよ、かわいそうじやん」

意外だなあ。あの川上さんから「デリカシー」なんて言葉、出てくるなんてさ。

そこんところは無視しておいた。総田も特別「メントを入れずに、両手を組み合わせて伸びをした。

さつきたんが隣りで僕をじいつと見つめてきた。重たいまなざしで、居心地悪かつた。

「佐川くん、さつきの人、大丈夫そうなの？」

僕より先に佐賀さんが答えた。すうつと自然に割り込んでくれた。

「本当は私も心配なんんですけど、立村先輩が清坂先輩に代わるようについて言われてて。きっと、今朝から体調が悪かつたんだと思います。でも無理していたんだと思います」

無理してくることないのに。

もともとの原因が佐賀さんだけではないといふことがわかつて、僕も罪悪感がだいぶ薄くなつた。

「じゃあ青大附中の彼はまだか

「保健室に行つたみたいだよ。一石二鳥つてここみたいだよ。腹下の薬ももらつてきたいんじゃないかな」

噂の主、立村評議委員長が戻つてきた。うつむいて、すっかり疲れた顔をしている。青大附中限定の悪い病気でも流行つているんじ

やないか。伝染病なんぢやないだろうか。いきなり拍手で迎えたのは総田だつた。ふくみ笑いで場が和んだ。

「間に合つたか？」からかうように総田が声をかけた。薄笑いを浮かべ、立村は周りがら空きの席に腰掛けた。

「おかげさまで、助かりました。恥かくかと思つた」

嘘つけ！

僕はゆつくりと立村の伏せた眼を覗き込んだ。隣りで佐賀さんも気がついたらしく、一緒に同じことをした。ふたりの視線でぴんときたんだろう。立村はゆつくりと僕たちを見返した。何も言わなかつた。

女子がいなくなつても話は通じる。おとひっちゃんと総田は簡単に、水鳥中学の生徒演劇上演計画を説明し始めた。「友情は音色とともに」あらすじをひとつさり。

「佐川さん、私、どうしたらよかつたんでしょうか」

僕にしか聞こえない声で、眼を伏せたまま佐賀さんがささやいた。テーブルに張り付くようにして聞き返した。

「の人と話、してきたんだよね」

「梨南ちゃん、わかつてくれなかつた」

話の通じる奴だつたらとつくの昔に片付いていたよな。わかりきつてていることはつつこまづに、相槌を打つた。

「どういふこと話した？」

「私が梨南ちゃんを救いたいんだつてこと、このままだつたらみんなに嫌われてしまつから、私が梨南ちゃんを守つてあげたいんだつてこと、話したつもりだつたんです。だつて、あのままだと先生にも嫌われて男子にも無視されて、それからクラスの女子にもつるんだ瞳から涙がこぼれそうでこぼれない。もつと言いたいこと言つて痛めつけたのかと思つたけど、違つたみたいだ。

「きっと、みんなから無視されるというのが、私わかつてゐるから。だからなんだつて」

だからなにをや。

僕が尋ねる前に、佐賀さんは教えてくれた。

「私が、評議委員になるのよつて。そうすれば、先生や男子たちを私が押えてあげられるし、梨南ちゃんもこれ以上嫌われないですむのよつて。だから私、代わりに評議委員になつて、梨南ちゃんを救つてあげたいのつて、そう言つたんです。本当は小学校の頃からそうするべきだつたんだけど、梨南ちゃんが怒るからできなかつたんです。でも無理しても、私が梨南ちゃんをかばつてあげて、言つたことを言つて守つてあげなくちゃいけなかつたんだつて」

女子つてやつぱり、わかんないな。

冷たい奴なのかもしれないけど僕は全然杉本さんに同情することができなかつた。

ふたつおいた席で、立村だけが何度も僕と佐賀さんをちらちらと眺めていた。たまたま隣りだからしゃべつてるだけなんだつて顔をし続けた。別にやましいことしてないんだから。でもちよこつとやましくならないといけないことも、話さなくちゃいけない。

「佐賀さん、さつさと帰れつて言われてるんだから、終わつたらさつさと帰るふりしなよ」

「さつさと帰るつて、でも私」

「帰つたつていいんだよ、俺も一緒に生徒会室出るからせ」

立村評議委員長は必死に追い返そうとしていた。奴が杉本さんびいきなのは、さつきの廊下の一件でよくわかつた。目障りな佐賀さんにはわつわとは退散してもらいたいんだろう。それから。

「詳しいこと、その時に聞かせてほしいんだ」

僕と眼が合い、佐賀さんは「ぐんと頷いた。

側でさつきたんがきょろきょろそわそわしていた。僕に何か話し掛けたわざな顔をしていた。佐賀さんに軽くあやまつてから僕はさつきたんの顔を見た。

「佐川くん、青大附中の人たち、保健室に行つたの？」

「たぶんやうじやないかな。そうした方がいいよって言つたんだ」
ちょっと誇らしげに答えてみた。佐賀さんも隣りで頷いてくれた。

「やうなの」

さつきたんは少し首をかしげていた。僕と佐賀さんの顔を交互に見つめながら立ち上がった。

「私、様子見に行ってみるわ」

いつものよひかひかひした声で、はつかねずみのすました表情でだつた。

「私も行きましょうか」

「ひとりで大丈夫。『めんなさい』ね」

佐賀さんにも同じくきょとつとした顔で返事して、さつきたんは音を立てないよう教室を出て行つた。おとひっちゃんだけがちらつと戸口を見た程度で、別にさつきたんがいてもいなくてもかまわない雰囲気だつた。生活委員ひとり、生徒会室だとやつぱり居心地悪かつたのだろうと、ちょっとかわいそうな気がした。

僕の隣りには佐賀さんだけになつた。ほんの少し声を立てても大丈夫そうだ。

すでに総田とおとひっちゃんは、僕のこしらえた脚本を広げて、簡単にあらすじの説明を行つてゐる。眞面目に読みつづけているおとひっちゃんもさることながら、みな水鳥中学生徒会連中は眞面目ぶりつこに専念してこゐる。あの総田すらも「さむいほどれるぜ」と言つていた脚本を真剣に語つてゐるじやないか。笑い出しそうになる。

「青大附中のみなさんと違つてうちの学校は所詮公立。公立だとお涙頂戴かもしくは冗談とか、そういう一同寝ろ！つてタイプの話しかできないすよ。どうせ枠にはめられているんだつたら、とことん枠の中でやつちまおうといふことで、今回は社会問題となつている『学校でのいじめ問題』を取り上げたつてわけです。先生たちがないから言えることですが、まあ、原作は死ぬほど臭い。こんなことでみんな目覚めたら世の中ラッキーだぜつて言いたいくらいです。

けど、あまりにも白々しすぎるやうにギャグになるとこいつもあらし、ギャグの中にも真実があつたりすると。今回俺たち水鳥中学徒会としては、そういう意味でこの薰り高すぎる作品を選んで、俺たちなりにアレンジしたってわけです。まあ今回台本をいじってくれた”担当の、佐川がそこにありますんで、作品アレンジに当たつての思つところなんぞをいくつか、おい、言えよ

おいおいなんだよ、俺にいきなり振るなよな。

総田の奴、にんまり笑いながら僕に話しかけるのはやめてほしかった。鋭い奴のことだ。僕と佐賀さんが語り合つてゐるのをうすうす勘付いていたんだろう。おとひっちゃんがずううと脚本に没頭しているのとは違う。隣りで川上さんも鼻膨らませて笑つてゐる。ど真ん中の内川会長も鷹揚に頷いてやがる。

「すごいアレンジですよね。佐川先輩、お忙のことこの申しわけないんですがお願ひします」

忙しいってどういうことだよー。

肝心のおとひっちゃんの方を見ると、よつやく顔を上げて一言、失礼なことを言つやがつた。

「あとで俺が誤字脱字訂正しておくからな。安心しろ」

しかたない。僕は立ち上がりぐるつと生徒会室の面々を見下ろした。立村評議委員長だけがまだ脚本に目を通してゐる最中だった。別にこいつに何思われようがかまわない。

「では一応、ストーリーなんですけど、総田副会長の言つ通り、今時代に合わない話だつたら、みんな寝ちやうのは当然のことだと思つたのと、たまたま友だちから似たようなじめの話を聞いて、これは使えるぞつて思つたからなんだけど。つい最近、青潟市内の中学で起こつたことらしいんだけど。やっぱり本当のことを書いた方がうけがいいかなつて思つたんだ。ピアノよりもエレクトーンの方がいかにも今時つて感じだし。俺が聞いた話もやつぱり、エレクトーンが弾ける子をいじめたつてネタだつたんだ。けど、最後にはいじめられていた女子の方がみんなに認められて、いじめつ子より

も上の立場になつたんだつて。ざまあみるつて思えるよなあ。先生たちにも受け、俺たちもカタルシス、つていうのかな、そういうのを味わえれば最高だなつて思つたんだ」

佐賀さんをちらつと見た。僕が「エレクトーン」という語句をゆつくり繰り返した時、わかつてくれたみたいだつた。何度見ても飽きない佐賀さんの髪型、正反対だつた。僕の隣りでまた、耳に手をあてて髪の毛を直している。ふたつに束ねたちつちやな犬の髪型みたいだつた。するんとして手が滑りそうだつた。思わず触れてみたくなつた。

「俺、この台本書いてほんつと思つたんだけ、自分ができないからつて言つて、できる人にやつかんじやう性格の女子つて、ほんつと最低だなあつて思つたよ。ほんとにこの脚本でやるかどうかわからんないけど、僕だつたら終りの方でいじめつ子が救われるなんてこと、必要ないと思うんだ。それだけ悪いことしてはいるんだから、当然叩かれて当たり前だよ。思いつきり不幸にして、それで終りにすれば本当は俺たちすつきりするんだけど。けど先生たちがうんと言わないよなあ。このいじめつ子にも事情があるんだ、かわいそうなんだつて言い張るだらうから僕も入れたけど。でも、こいついう奴、やられて当然だよな。とこどんやり返されて不幸になつて、みんなに笑われて終り、ほんとはそういうラストが本当なんだつて思つんだ。どう思う? おとひつちゃん?」

あえて振らせていただいた。おとひつちゃんに。杉本さんがいないうのがたまらなく残念だ。

予想通りおとひつちゃんはくそまじめな顔でしつかと頷いた。がしつとした瞳で持つて答えた。

「そうだな雅弘。俺も今読み終わつて思つた。人間として、いじめなんてする奴は心の弱い、最低野郎だ。これは男女子女子関係ねえよ。こういう奴がいたら

「いたら?」

エキサイトするおとひつちゃんに投げつけた、いつもの読みが当

たつた。

「俺なら、舞台の上でぶんなぐつてやるな。最後の助ける奴もろとも怒鳴りつけてやるな。雅弘、お前、才能あるよなあ。すげえよ。見直した」

総田と川上さん、内川会長が訝知り顔でにっこり笑っている。ちゃんと僕の指示が隅々まで浸透している証拠だ。惜しむらくは、こじにぶんなぐられるべき対象の女子がいないことだった。

「佐川さん」

席について、ジュースを飲み干した。佐賀さんの前で思いつきり

クッキーにかぶりついた。

「あの話、私のために」

「今は内緒だよ」

わーいもーいとーまかしながら、僕はそおつと佐賀さんの瞳の奥を探つた。

ちゃんとわかってくれていい。やつぱり、本当に頭のいい人の顔していた。泣きそうだけど、泣かない。そんな瞳だった。

今日の杉本さんの顔と唇が異様でいっぱいだったことを思い出した。うちの母さんが参観日の時にしてくる顔とおんなじだ。きっと、校則違反の化粧してきたんだね。おとひつちゃんに逢つためにだろう。他の連中、もしくはおとひつちゃんが気付いたかどうかはわからない。ただ、男子代表として言わせてもらえば「気持ち悪い顔」だった。自覚全然ないんだろう。

僕は杉本さんのことを悪く思っているのかもしれない。佐賀さんの言い分を鵜呑みにしているだけなのかもしれない。もしかしたらもつと純粹で性格のいい女子なのかもしれない。けど、どうしても思わずにはいられない。避けずにはいられない。いるだけで目障りだと、思わずにはいられない。

おとひつちゃんが、出迎えた時逃げよつとしたじゃないか。

大好きなさつきたんの側に張り付こうとしたじゃないか。
そうだよ、みんなあの顔が気持ち悪いんだよ。

「いいかな、発言して」

もうすっかり腹の調子も元に戻つたらしい……腹下し野郎と呼んでやひり……立村評議委員長が右手を挙げた。おずおずと、遠慮がちに。

「おう、意見聞かせてくれ」

おとひつちゃんも、すっかり機嫌よさげだった。どうもおとひつちゃん、この立村つて奴とは仲良くなつてゐるらしい。言葉が軽かつた。熱く語つた後だけに、少し汗が噴き出しているのは「愛嬌だ。『一通り聞かせてもらつたんだけど、たぶんうちの学校のやり方は正反対だから、あまり参考にはならないかもしれない』ってことがひとつ。それともうひとつが

膝の上でぱちぱちと金具の外れるような音がした。うつむくようにして膝のあたりを覗き込み、

「もし、よかつたら、一年前のビデオ演劇用力セットテープ、持つてきたんだ。ビデオの方は学校から持ち出し禁止だからだめだつたんだけどさ。カセットテープだつたらかまわないつてことでダビングしてきたんだ。台詞ばっかりの劇だつたから、たぶん雰囲気はつかめると思うんだけどさ。よかつたら聞いてもらえるかな」

立村の表情は揺れてなかつた。たぶん脚本の話を、思いつきり眠い気持ちで聞いていたんだろう。120分のカセットテープを机に載せ、すいつとおとひつちゃんの方へ滑らせた。ナイスキヤッチ。片手で止めたおとひつちゃんは、立村に向かつてからからつとテープを振つてみせた。

「演劇なのか」

「そう、『忠臣蔵』やつたんだ」

『忠臣蔵』つたら、時代劇だよ。

しゃれでも冗談でもないらしく、立村は大真面目おとひつちゃん

と総田に頷いてみせた。僕には一切振り向かないのがしゃくだった。川上さんと内川がまたにこやかに棚のあたりを探り出してつるさい音を立てていた。

「関崎先輩、ラジカセありますよ。モノラルだけど、音量をめいっぱい大きくすれば十分ですよ」

英語の授業でたまに先生が持つてくる、大きくてやたらとスピーカーが場所取つていてるという、古臭い奴だ。生徒会室には意外なものが転がっている。知らなかつた。

「そうか、あつたか。悪い、内川、コンセント入れてくれ。すぐにこれから聴こう。立村、実際何分くらいなんだ」

「裏表一時間入つてているけど、全部聴かなくたつていいだろ。だいたい雰囲気分かればさ」

「いや、あとついでに聞きたいんだけどなあ」にやつく総田がテーブルに腹ばいとなり、頭だけを立村に向け尋ねた。

「あんた、『忠臣蔵』の何役やつたわけ?」

「……浅野内匠頭」

総田、ぶぶつと顔を伏せたまま受けるのは、一応交流会なんだしやめた方がいいと思う。

僕の隣りで佐賀さんも、にっこりした。

上品に笑つてくれるのはひとりだけ。芦毛の王子様立村評議委員長は、おとひつちゃんだけをにらみつけるようにして、しばらく唇を噛んでいた。笑われるような事実を言うから、受けただけのことだ。おとひつちゃんも遠慮なく爆笑していた。

「つてことは、『江戸城松の廊下の刃傷沙汰』も当然、入つているんだな」

「いいだろ、そんなの」

さつきまで沈着冷静で佐賀さんを追い返そつとしたり、委員長の顔したりしていたくせに、結局は蠅人形のうすらぼけに戻つてしまふ。やはりこの男は、変だ。おとひつちゃんがカセットテープを

セットし、テーブルの真ん中に置いた。わざわざ立村にスピーカーを向けた。またむくれたようにうつむく立村。比較対照して、笑いをこじれる総田たち。

此間の遺恨覚たるか！

まだがりがり削られていないうの声が、ラジカセのスピーカーから流れた。

『江戸城松の廊下の刃傷沙汰』らしい。

テーブルを叩いてもだえる総田・川上・内川たちと、同情を禁じえない顔で見つめているおとひつちゃん。そっぽ向いている立村評議委員長。さつきたんが一度戻ってきて、青大附中ふたりの荷物をかかえて出て行つた。行き際に立村へ何かをささやいていたけれど、僕にはそんなのどうでもよかつた。生徒会連中がテープ鑑賞に熱中している間、僕は佐賀さんとふたり、おとなしくお菓子をつまんでいた。

クッキーがおいしそうで、困つた。だって、食べれば食べるほど、甘くなるんだから。

僕の言つた通りに佐賀さんは、会が終了後、すぐ立村評議委員長に「それでは梨南ちゃんをよろしくお願ひします」と挨拶して教室を出た。僕もおとひつちやんに、

「じゃあ、俺もちょっと借りた部屋、片付けてくるね」と一声かけておいた。総田には田配せしたけど、全くおとひつちやんはおかしいと思つていらないみたいだつた。内川を始め、生徒会連中はみな図書準備室のことを理解してくれているみたいだ。ちやんと、おとひつちやんには内緒にしてくれているみたいだ。ありがたい。参謀たる僕への、わざやかなお礼つてどこなんだろうか。

結局、杉本さんともうひとりの青大附中女子評議委員は帰つてこなかつた。さつきたんが、あの妖しい「忠臣蔵」テープを聞いている間に荷物を持って行つたところみると、の人たちも先に帰つたに違ひない。氣分悪そだつたし、やっぱり顔を出すのも恥ずかしかつたんだろう。立村評議委員長がおとひつちやんに近づき、なにやら話している。生徒会室を出て行きがけに耳にしたのは、「迷惑かけてすまなかつた。あのわ、やつちの顧問の先生に挨拶してつていいか?」

だった。

佐賀さんは階段を一段降りたとじゆうで待つてくれた。

「ごめん、じゃあ上に行こうか

「本当にいいんですか。私、他の中学なのに

「いいつていいって」

佐賀さんのためなんだからわ。

生徒会連中が帰る前に一度、様子を見にきてほしこと頼んである。閉じ込められる心配はない。

「けど、大変だつたね」

「はい、でも平氣です」

小さい声でしゃべっているつもりなのに、廊下にはびんびん響いた。外からは女子のジャージとおんナジ色の、茶色っぽい赤のつぼみが見え隠れしていた。何となく咲きそつだつた。生徒会室ががんがんと熱すぎたから、廊下の冷え具合がちょうどいい。図書準備室には小さい電気ストーブを用意してある。佐賀さんも僕も風邪ひかないで済みそうだ。

南京錠をポケットにつつこみ、まずは引き戸を開けた。誰もいない。あたりまえか。

「これでも片付けたんだ」

「ええと、私」

すぐに窓辺の席へ連れていきたかつた。窓を使わない本棚でかばうようにしてあるので、戸口からは見えない。ちょっとだけ部屋が狭かつた。でも大丈夫。どうせ総田が迎えにくるまでは誰も来ないんだから。

「ほり、じつち」

ジャンバーを着たまま僕は、テーブルの隙間を横になつて通つた。一緒に佐賀さんが、コートを羽織りながらついてきた。急いで椅子の足下にセットしておいた電気ストーブに電源を入れた。

「まだ寒いけど、がまんしてくれるよね」

「私、大丈夫です」

窓辺には、夕暮れ色が漂つていた。三月に入つてからだいぶ日の降りるのも遅くなつた。まだまだ夜になるには早かつた。佐賀さんがどこに住んでいるのかはわからないけれど、青大附中の近くだつたら十分だろう。今日、何で来たんだろうか。

「自転車です。梨南ちゃんは清坂先輩の自転車に乗せてもらつてきたはずです」

「わあい、二人乗り、やつちやいけないんだ。俺もやつてるけど」

からかい調子で答えてみると、

「だつて、梨南ちゃん、お母さんから自転車に乗つてはいけないつ

て言われてるんです。学校も歩いて通つているんです

なんて家庭なんだ。

もう過去の人、扱いにしたい。いいかげん軽蔑も面倒になつた。

「もう一度と会つこともないだろうから、きっと杉本さんの話は今日で最後になるよ」

僕は言い切り、佐賀さんから詳しい事情を聞き出すことに専念した。

「話の合間に何度か、耳に手を当てて、束ねた髪のほつれを直すしぐさに、何度か僕は目をそらした。変なこと考えたらまずい。今ここにいるのは、鈴蘭優のポスターじゃない、佐賀さんなんだ。

「私、最初に言つたんです。梨南ちゃんに」

唇を一本に結び、窓辺の橙色を見つめるよつよじで佐賀さんは話し始めた。

「小学校の頃、本当は梨南ちゃん、みんなから馬鹿にされてたのよつてことから。今まで私が気付いていたけど、話したら傷つくかもしれないと思つて言わなかつたことを全部言つました」

「たとえばどんな?」

「男子には、いえないことばかりです」

言葉を濁した。男子と違つて女子がエッチな話をするとも思えない。いろいろあるんだろう。

「あ、でもこの前お話ししたことがほんとあります。ほんとは、梨南ちゃんピアノ習いたかったんでしょとか、ほんとは新井林くんのことが好きだったんでしょとか、最近男子に無視されてるのがつまらなくて、一生懸命ちょつかい出しているんでしょとか、あと」

僕の方を見た。

「佐川さん、私のこと軽蔑しないでくれますか

「約束するよ」

「本当は、私みたいになりたかったんでしょつて」

のどのところでうつと何度もこみ上げるのをじらっていた。相当、言つのが辛かつたんだなつて僕は思つた。

ずっと言いたくてもいえなかつたことが多すぎたんだ。きっと佐賀さんは。

「私、梨南ちゃんみたいに成績よくないし、泣き虫だし、可愛くないけど、でも友だちはたくさんいたんです。男子も女子もたくさんいたんです。先生も私のことみんな好きだつて言つてくれました。けど、梨南ちゃんはそうじやなかつたんです。一番物知りで、可愛くて、お姫様みたいだつたけど、男子からも女子からも、先生たちからも笑われたんです。うちの母が良く言つてました。梨南ちゃんはふつうの子じやないから、親切にしてあげのよつて」

親切にしてあげる、か。

言葉の奥に苦いものを感じてしまつた。風邪をひいた時に飲ませられた、オブラーートに来るんだ漢方薬みたいなものだつた。

「だから、女子たちは梨南ちゃんに『親切』にしてあげただけなんだつてこと、教えてあげたんです。私の思い込みじやないと思います。だつて、この前の同窓会の時も、クラスだつた女子がみんな言つてたし。先生も言つてたし」

大きく深呼吸して、今度はガラスを真つ正面から見据えて、

「私、いろいろ考えました。梨南ちゃんは私を無視しているけど、本当は私みたいに男子たちと仲良くしたかつたこと、わかつてました。六年間、梨南ちゃんの周りには『親切』にしてあげたいという人ばかりで、本当のことを言つてくれる人が、今でもいらないんです。梨南ちゃんのことを大切にしてくれるのは立村先輩しかいないのに無視しちやつて、関崎さんとか新井林くんとか、手の届かない人ばかり追いかけてるんです。小学校三年の時、クラスで特殊学級の教室を一緒に掃除する決まりになつていたんですけど、梨南ちゃん、その子にはものすごく人気があつたんです。ずっと壁に頭突きしていた子には、黙つてくつついてあげたり、同じことばかり話してうつとおしい子にも付き合つてあげたり。いつも梨南ちゃん、そういう子たちには好かれてたんです」

いるんだ、ああいう人が好きな奴が。物好きだよなあ。

「だからみんな言つたんです。梨南ちゃん、本当はそのクラスにずっといたほうが楽しいんじゃなかつて。うちのお母さんも言つてました」

なんだか意外だつた。実は杉本さん、人によつてはいい人だと思われるのかもしれない。佐賀さんや健吾くんには迷惑なことでも、特殊な好みの奴には親切に感じられることがあるらしい。

「でも、梨南ちゃんそれ聞いてものすゞく怒つてました。せつかくそういう子たちが懐いてくれていて、逃げたりするんですから。逃げても逃げても、その子たち、梨南ちゃんのことが大好きだから離れなくつて、結局、あきらめて一緒に遊んであげてたみたいですね」「まるで、立村みたいにか」

大きく頷いた。

「梨南ちゃんにはあの子たちと同じよつた立村先輩の方が向いてるんです。どんなに逃げても嫌つても、立村先輩だけは必死に守つてくれてます。ほんとは梨南ちゃん、そういう人たちと一緒にいる方が幸せになれるんだと思います。新井林くんや関崎さんのような人は、向いていないんだと思うんです」

おとひつちゃんかあ。

学校祭二日目の座談会挨拶の、おとひつちゃん爆弾発言を思い出した。

自分の立場を犠牲にしても、すべてをかけて勝負するところ。僕ならもつと要領よくやるけどあえて玉砕勝負するおとひつちゃんが、僕は好きだつた。

そんなおとひつちゃんと、バスケ部の花形・健吾くんと重ねてくれているのが、僕はたまらなく嬉しい。杉本さんにはもつたいない相手だつて、言つてくれている。

「おとひつちゃん、ほんと、いい奴なんだ。ちょっとばかだけど、でも本当にいい奴だよ」

僕は繰り返した。言葉の裏には隠しておいた。

杉本さんなんかには、やれないよ。あいつを。

「立村先輩がなんで梨南ちゃんのことがあそこまで好きなんだろうって不思議に思つていたんです。去年の十一月くらいにその理由がわかりました」

さらに佐賀さんは話してくれた。

「立村先輩はふつうの人よりも、数学の能力が劣つてゐるんだそうです。健吾が言つてましたし、先生たちもみな知つてゐるみたいなんです。うちのお母さんに聞いたら、生まれつきの障害つてのがあります、一生直らないそなんです」

そういうえは、指使つて計算していたつて言つてたよな。

総田が確か、話していた。

「たぶんですけど、梨南ちゃんのことを本当に理解できるのは、そういう風に梨南ちゃんと同じ思いをした人でないとわからないのかもしけないつて思いました。立村先輩、学校では女子に物笑いにされてる人だし、梨南ちゃんと同じようにいじめられていたらしさって聞いてます。だからなおさらなんじやないかつて、思うんです。だから梨南ちゃんを守つてあげたいつて思うんじやないでしょうか。さつきも私と梨南ちゃんが話をしていた時、立村先輩が割り込んできて私に帰るように言つたんです。その時、梨南ちゃんは立村先輩に『同じ病気じやない』つて言つてました。私、それが梨南ちゃんの氣付いていないとこなんだつて思つたから言つたんです。立村先輩しか、梨南ちゃんを本当にわかつてくれる人はいないし、好きになつてくれる人なんていなつて。梨南ちゃんとおんなじ経験して、同じこと考えている人はあの人しかいないのよつて。関崎さんみたいな人は梨南ちゃんの手には届かないのよつて。健吾……新井林くんと同じことになるわよつて」

また、名前を呼び捨てにした。氣を遣つてゐるんだろうけれど、何かの拍子でぽろつとこぼれる。僕が顔をしかめたのを読み取られたのは情けない。

「『めんなさい。けど私、関崎さんのように成績が良くて、運動神

経抜群でつて人、梨南ちゃんには向いていないと思うんです。梨南ちゃんが憧れている人はきっと健吾……新井林くんみたいな人かもしれません。でも、そういう人にはどんなに努力しても、嫌われることしかできないんです。私、それ、七年間見ていていやつてほどわかつたから、だからはつきり

「いいよ、もう、そんなこと忘れたほついいよ。佐賀さん」

女子トイしか、廊下か、その辺はわからない。佐賀さんの持つている力をすべて尽くして、杉本さんに懸念に訴えたんだろ？

「評議委員を来年私がやるつてことも話しました。担任の先生にはみんな話してあるし、了解ももらつてゐつて。そうしたら梨南ちゃん言いました。『私の後ろずつとくつついてきたくせに、なにがで

きるつていうの』つて」

「それはひどいよな！」

「いいえ、私、言われてもしかたないんです。でも、梨南ちゃんがもし評議委員になつても、男子にまたいやなことされて、女子たちからは物笑いにされるのが私にはわかるんです。そんな思いさせたくなかったんです。もし私が評議委員になつたら、きっと男子たちはわかつてくれて、梨南ちゃんをそつとしてくれると思うんです。新井林くんも協力してくれると思つんです。先生もこれ以上、梨南ちゃんに厳しいこと言わないでくれると思うんです。そして私が梨南ちゃんに、みんなが本当にどう思つているかをわかりやすく、わかるように説明してあげるよつにすれば、もつと変わると思うんです。私、自信ないけど、でも」

「そんなんに杉本さんにこだわるのつてどうじて。俺、これ以上佐賀さんが傷つくのは損だと思つよ。無視すればいいんだよ」

きつと言つて返す表情に、僕は見とれてしまつた。頬に橙色がふわあと差した。

「気に入らないからつて無視するひとつつて、梨南ちゃんと同じことだと思つうんです。私、おんなじこと、したくない」

田の前にゆっくりと下りてきた、丸い太陽のかたまり。

ガラスに跳ね返っている。佐賀さんは再びそれに田を映した。僕も追つて見つめた。まぶしくなるのをこらえて見据えた。

「佐賀さん、俺のやつたことって、それじゃ許せないかな」

「え？ 佐川さんの？」

おなかの中からじす黒い煙が立ち昇りそうで、じるじるしてきた。

「あの、台本のこと。俺はもしかしたら、杉本さんと同じことしてたのかなってわ」

「でもそんな」

「うまく言えない。佐賀さんがどうして杉本さんをあそこまでかばおうとするのかわからなかつた。せっかく習いたかったピアノを、嫉妬に巻き込まれたくないからという理由でエレクトーンにした惨めさ。自分が気に入っているピンクのノートを、いやみ言われてしまつたから使えなかつた寂しさ。いろんなことがいっぱいあつたんだと思う。そんなことされても、きっと佐賀さんはがまんしてんだろう。杉本さんはいい子なんだと言い聞かせてきたんだろう。でも、本当は大嫌いだつたつて言つていたじやないか。だから復讐させたかつた。言いたいこと言つて傷つけて、ざまあみろと笑つてしまつた。でも佐賀さんは結局、杉本さんを「かわいそう」という理由でからうじてとじめを差さずに帰つてきた。

気に入らないからつて無視することって、梨南ちゃんと同じことだと思います。

「私、おんなじ」と、したくない。

僕のしたことって、杉本さんと同じことだつたんだらうか。佐賀さんがしたくなかったことを、無理やりやつてしまつたんだろうか。

言わずにいられなかつた。

「あれは、杉本さんに読ませるつもりだつたんだ。あそこまで自分のしたことをつぶさに書いてあれば、きっとあの人も反省して、佐賀さんに泣きながらあやまるんじゃないからつて思つたんだ。けどさ、

俺、そんなことする必要なかつたんだね。佐賀さん、いつか俺みたいに強くなりたいって言つてくれたよね。そんなことないよ。佐賀さんの方が俺なんかより、ずっとずっと強いよ。あんな時代錯誤のお涙頂戴劇なんて読ませなくたつて、佐賀さんは杉本さんをこてんぱんにやつつけちゃつたんだ。思いやり持つて、吐いてしまつべらい具合悪くさせてしまつてわ」

「いえ、たぶん梨南ちゃんもともと具合悪かつたんじゃないかなあつて」

「かもしれない。けど、佐賀さんがまっすぐ立つていて、正しいことをきちんと話していたから、あんなふうに杉本さん取り乱して泣きそうになつたんだと思うんだ。どんなにヒステリーを起こしても、佐賀さんは全然動じなかつたよね。俺、それがすごいと思うよ。あんな台本のいじめられっ子がわざとらしい感動的台詞連ねでいるけど、そんなのとは全く関係ない。今ここにいる、佐賀さんの方が誰よりも強いんだ。だから俺」

咽から出でてくる言葉は止められなかつた。太陽に向けていた目がお互いぶつかり合い、痛くなつた。

「佐賀さんにこれからも、交流会に関わつてほしいんだ。杉本さんのことなんか抜きで、おとひっちゃんのことなんかどうでもいい。それだけの力、持つてるんだ。自信もつて、評議委員になつて、また水鳥中学に来いよ」

ぼろぼろに崩れた田のふちと口元で、また泣いてしまうんじやないかつて気付いた。こんなこともあらうかと、ちゃんとティッシュを渡した。手に取らないで顔を覆つた。田だけ出していた。

「佐川さん、私もわかんない

小さくさやいた。

「どうして私、佐川さんの前だとこんなになつちゃうんですか。私わかんない。どうしてそんなに私のこと、わかるんですか」

「どうしてつて言われても」

「どうして佐川さん、青大附中に来てくれなかつたんですか」

成績追いつかないって言えないよ。

太陽の沈むのを眺めていた。鳥の影が田の前の教室に映っていた。泣き止むまで物思いにふけろうと思つた、その時だつた。

「頼む、会わせてくれ」

「立村、落ち着け、とにかく俺の話を聞いてくれ」

「直接話をしないといけないことだつてあるはずだ。悪い、入らせてくれ」

問答しているのが聞こえる。ひとりはおとひつちゃんだつてすぐわかる。あせつているから。言い方はきついのに冷静なしゃべりなのが立村だらう。

部屋を借りたこと自体はおとひつちゃんも知つていて。でも佐賀さんと一緒にいるところを見られたらしゃれになんない。

「立村先輩がいるんですか」

ふうつと顔を上げ、両手をこする佐賀さん。あどけなかつた。

「うん、おとひつちゃんと一緒にみたいだ。俺に用があるみたいだ」さつさと僕が出て、立村の用事を聞いてやるのがいいのかもしない。おとひつちゃんの慌てぶりが気に掛かる。そんなにやばいことを僕はしていいはずだ。それとも、杉本さんともうひとりの女子がいなくなつたから探しているのだろうか。僕が悪いこと、何かしたつていうんだろうか。

「とにかく出てみる。大丈夫だよ。俺、佐賀さんがここにいること、言わないからや」

背筋がぴくぴくするのを隠して、僕はテーブルの横をまた、すり抜けた。

「どうしたの、おとひつちゃん。あ、さつきはどうも」

中に入れるわけにはいかない。佐賀さんが物静かとはいえ、気付かれないとも限らない。立村の表情はそれほど荒れていなかつたので僕も少し気を楽にした。おとひつちゃんだけがひとりで焦つている。

「雅弘、お前何かたぐらんだのか！」

立村よりもエキサイトしているおとひつちゃん。

思いつきりとぼけたことにした。

「何をつて、何をさ？」

「な、そつだろ、お前何もしてないよな。何も後ろめたいことしてないよな。そういう奴じやないよな！」

力をこめておとひつちゃんは僕に吸い付く。隣りの立村はやはり、蠍人形の静かな佇まいのままだった。

「当たり前だよ。あの、で、俺に何か用？ 今、片付けていて忙しいんだよ。おとひつちゃん、あとで連絡するよ。総田たちも片付け大変なんだろ。早く戻りなよ」

そらぞらしく続けた。背中のドアはしっかりと閉まっていた。

「ああ、な、わかつただろ、立村。お前の氣のせいだと思う。だか

ら

どもりつつおとひつちゃんは立村を階段の方へひっぱり出そうとしている。背丈からするとおとひつちゃんの方がずっと高いし、体格だってがつちりしている。腕をひっぱつたら蠍人形、一発で折れるだろうに。折れなかつた。動かなかつた。ただ黙つて僕を見つめていた。コートは着ていない。抱えている。

「中で話をしたいんだ。少しだけでいい。入つていいか」

「困るよ。ここは水鳥中学なんだよ。青大附中じゃないんだよ」
よけいなことを言い出したおとひつちゃん。本当にたまつたもんじゃない。

「雅弘、話だけ聞いてやれ。立村も一度聞けばわかるだろ」

しかたない。手つ取り早く済ませるか。佐賀さんは窓辺だから、戸口付近だったら気付かれないと。

「いいよ、けど椅子ないから、入るだけだよ。水鳥中生しか見せちゃいけない本だつてあるんだよ」

立村は頷くと、黙つて戸をひいた。よかつた。薄暗いから佐賀さんの気配は感じられない。

僕が背を向けたまま、立村に向き直った。おとひつちやんが後ろでむつすりとにらみつけている。僕と、立村の背中と両方をだ。まず見抜かれているとは思わないけれども用心に越したことはない。ふんと鼻で笑うようにして見上げた。

「早くしてほしいんだ。暗くなつちやうから」

立村は黙つて、かばんから何かを取り出した。一度おとひつちやんの方を見て、戸が閉まつているかどうかを確かめるように手を伸ばした。ページを扇状にぱららと広げ閉じた。

「この台本に手を入れたのは、佐川くん、君だつて聞いたんだけどね、本当なのか」

やはり腰碎けの蝶人形。言い方は静かだつた。かんたんに言いくるめることができる。

「うん、今日も話に出てただろ？ 青大附中のビデオ演劇みたいなことを、うちの学校でもできないかなつておとひつちやんと総田が話し合つてて、俺も手伝えたらなつてことで用意したんだ。けど、青大附中みたいに『奇岩城』とか『忠臣蔵』とかやつたら大騒ぎになつて、結局先生たちからやめろつて言われるだろ。だから、ちょっと臭いかなあと思つたんだけど、先生受けしやすくて、話もギャグにできるような内容にしたんだ。だよね、おとひつちやんおとひつちやんの言つことは信じしそうだ。この男。

「それはさつき聞いた」

立村の表情は変わらない。静かにページをめくつた。

「聞きたいのは、誰から元ネタを手に入れたのかつてことなんだ」「いや、噂だよ、噂。青潟でこいつこいつことがあつたんだよつてこと、先生たちが話していたからね」

徹底的にしらを切る。「冗談じゃない。僕を信じてくれるおとひつちやんには悪いけど、今はうそつきになるしかない。

僕の背中にいる、あの子のために。

「似た話を別の奴から聞かせてもらったことがあるんだが、それは

青大附中からの情報なんてことはないかな

なるほど、別の奴なあ。

全く動じるよつすもなく、淡々と尋ねつづけるのはどうしてだろう。焦るよつすもなく、ただページをめくつたまま立ち去りし、僕を見つめるだけだ。見据えるのではなく、自然に、なんも考えてないつて顔をした。

「ああ、そうかもしれないけど、俺も学校名まで聞いた記憶ないしさ」

あらためて立村の顔を見上げた。僕よりは背が高いんだと初めて気付いた。きちんとネクタイ締めているし、崩した着こなしをしていない。きわめて優等生つて顔をしている。手も顔も、おとひつちやんと比較して露骨に白さが冴える。

「いや、間違いだつたら申しわけない。」この前ひつちの学校に来てくれた時、会えなかつたから代わりに誰かへ伝言してくれたのかなと思つたんだ。俺の知つている話を、きっと青大附中の別の誰かから聽いたんだろうなと思っていたから

「え？ 俺行つてないよ

僕が立村と顔を合わせたのは、「交流準備会」一度だけだ。おとひつちやんとセツトになつて並んでいた時だけだ。

今日を含めて、一回目だ。そんなため口で質問されるよつな付き合いじやないはずだ。

「ほら、校門で待つていてくれたことあつただろ？ うちの学校の友だちが気付いて教えてくれたからせ、すぐに行つたんだけじ、一足早く、うちの新井林たちと出て行つたからせ。ちょうど後ろ姿だけ拌ませてもらつたんだ」

立村の唇がほころんだ。薄く、かすかに。おとひつちやんには気付かれぬ程度に。続けた。

「あとで新井林呼び出していろいろ聞いたんだけどさ、あいつも口が堅くて、なかなか教えてくれないんだ。プライベートのことはあまり聞く気もなかつたからまあいいかとは思つたんだけど、今日少

しあいつけに頼まれていたことがあつたしついでにやく

健吾くんに頼まれた？

猛烈に速く頭の中が回転を始めた。ねじが巻かれていく。何か、見落としていたものがあつたのだろうか。わかんない。僕は慌てておとひつちゃんに合図を送つた。早く、こいつを連れ出してほしい。けどおとひつちゃんはどまじめ顔で突っ立つてているだけだ。立村だつてきっと、わからないはずだ。まさか、あの日のことか。三人で『リーズン』の階段椅子でひたすら語つた時のことだらうか。思い当たる節がある。隠したい。言えない。だけど、田の前の蝸人形は手を緩めない。

「俺もあまり恋愛沙汰とかわかんないけどさ。新井林、かなり心配していただらしいんだ。いきなり同級生の女子を代行にするなんて勇気いることだしな。一応さつき、報告するために電話かけてみたんだけど、やはり案の定なんだ。俺も誤解を招くようなことをあいつに伝えたくないから、きちんと確認だけ取つておこつかなと思つてきてみたんだけどさ。」

言葉が乱れず、さやさやと。静かに続いた。

「もしかしたら、もしかするかもな、とは思つていただんだが、やつぱりそういうことなんだな」

ここには佐賀さんの荷物なんて見えないはずだ。影も形もないはずだ。あの棚の影に黙つて座つているはずなんだから。

振り向いちゃいけない。

僕は気を張つて首を振つた。きわめて自然に振舞おうとした。蝸人形の目にどういう風に映つたかはわからないけれど、僕がおとひつちゃんや総田にしていることと一緒にだつた。

「なんだよ、もしかしたらもしかするかもつて」

「エレクトーンの話、よくここまで本当のこと聞き出せたなつて思つてさ」

立村の目がゆつくりと僕の肩を透かしていった。棚から洩れる夕

陽がかすかに洩れている。影なんて映つていらないだろ？が。でも佐賀さんはちゃんと帰つた振りをしていたはずだつた。

「Hレクトーンの」とつてなんだよ。ピアノよりも今時っぽくしたかつただけなのに、なんでだよ

入れちゃいけない。どんなに攻められても僕が倒れるわけにはいかない。堤防にならなくちゃいけない。

「立村、どういうことだ？ Hレクトーンって」

相変わらず緊張感のない発言のおとひつちゃんがいる。この時だけは助けてほしかつた。

「あのや、もうこのくらいでいいかな、俺ほんとに急いで帰らないと家の配達があるからね」

僕が一步あとひつちゃんの方へ踏み出した瞬間。奴も僕に一步近づいた。

思わずえびぞつた。左の頬がばしんと響いた。鼻がひんまがりそくになり、一度わおん、と鳴つた。

田の前には、すっかり雨漏りのにじみ出た天井。からうじて背中のテーブルに腰を打ちつけて倒れずにすんだ。しつかと後ろのテーブル端を握り締め痛みをこらえた。腰と頬と耳と目。腰がぬけたみたいだつた。立つていられない。とうとう一発ストレートをかました蠍人形の前にへたり込んでしまつた。一発目は来なかつた。

「立村、やめる、やめてくれ！」

おとひつちゃんが渾身の力を振り絞り、立村の両手首を押えていた。

何度か利き腕の方を動かし、振り放そうとしたけれど、おとひつちゃんに腕力はかなわなかつたらしい。あきらめ、なるがままに振り上げた手を下ろした。後ろのおとひつちゃんときたら血相変えてるじゃないか。ぺたんと座つたまま、僕は半ば冷静にふたりのもつれ合つの眺めていた。耳鳴りと鼻血がうつとおしいと思いながら。

佐賀さんのことはなぜか考えなかつた。ただ、痛みに酔つていた。

あれ、おとひつちゃん、どうしたんだよ。なんで俺の前に立つてるんだよ。なにするんだよ。

もう反抗するのをやめた立村がうつむき加減で僕の顔を射た。

さつき僕の頬を拳骨で殴り飛ばした時とおんなじこぶしが、ゆっくり緩んでいった。殴つたばかりでまだ、あいつも余韻を覚えているんじゃないのかつて感じだつた。手を離しておとひつちゃんはするつと僕の前に立つた。学生服が擦れててかてがだつた。立村の姿が隠れて見えない。こんな風にしておとひつちゃんは、小さい頃僕をかばつてくれたつけ。だんだん緩やかにひいていく耳鳴り。耳の穴をかっぽじつた。ゆつくりおとひつちゃんが腰を曲げ、僕の前に座り込んだ。正座した。

おとひつちゃん、何するんだよ。

言葉になつて出てこない。立村と正面向かい合つて、お白州で「沙汰を待つ悪役たちみたいに両手をついた。

なんですよ、おとひつちゃん、なんで土下座してるんだよ。左肩越しに僕は立村の視線先を追つた。さつきまで静かだつたのに、いきなり丸い目できょときょとしている。

「立村、勘弁してくれ。俺の一生の頼みだ。どうかこいつを許してやつてくれ」

「別に関崎、お前を責めているわけじゃないよ。俺はただ」

口

籠もり、それでも突つ立つたままの立村は、僕の方にまた冷たい視線を浴びせた。奥の窓辺をまたちらりと眺め、

「そんなんにあの子が目障りか」

凍りつきそうだった。今まで僕の前にいる立村は、蝋人形で火にあぶつたらすぐに解けてしまいそうな男だつた。ぽきんと折れてごみ箱に捨ててはいさようなら、そんなタイプだつた。健吾くんのように強烈な力もなく、なんとなくぼんやりしている昼行灯にしか見えなかつた。なのに、どうしてか今はあいつの視線で動けなかつた。言葉も出ない。耳鳴りが消えていったのに、「あ」という言葉す

ら発することができなかつた。

「雅弘は、決して悪い奴ぢやない。なんか理由があつたはずだ。俺はそう信じてる。けど、お前の後輩を傷つけてしまつたことは否定しねえよ。本当に、悪かつた。俺が悪かつた」

「だから関崎、お前は悪くないと言つてゐるだらう」

「なんでもする。一いつをこれ以上責めないでやつてくれ。雅弘には後で俺がきちんと話をつける。俺も、できる」とはする。お前の言う通りにする。条件は飲む。だから、頼むこいつをこれ以上、たのむ」

おとひっちゃんが土下座していた。両手を突いて、尻を高く突き出すようにして、立村の足下に這いつぶぱり、何度も同じ言葉を繰り返した。

「頼む、こいつを許してやつてくれ。条件は飲む

と、そればかり。呪文のよう。

「おとひっちゃん、いいよ、俺が悪いんだ」

「黙つてろ！」

振り向いたおとひっちゃんの目を見た瞬間、僕は悟つた。

おとひっちゃん、本氣だ。

学校祭三日目座談会の演説でいきなり見せた、ぶつちぎりの表情。僕が、ことの及ぶまでの間、読み取ることのできなかつた感情。

おとひっちゃんの怒りは、本物だつた。

やばこよ、まよいよ、どうしよう。

目の前で冷たく跳ね返す立村よりも、僕にはおとひっちゃんの瞳の方が怖かつた。

夕暮れ色が床に四角く刺さつていた。窓辺の影は本棚と散らばつた本くらいか。歯に麻酔かけられたみたいに頬を抑え、横目で床を見下ろした時だつた。

窓ガラスの薄い斜線と一緒に、かすかに映る人影らしきもの。覗き込んでいる。

まさか！

立村のちらちら眺めている本棚の陰には、束ねた髪の毛の一一番高く立つたところがちらついていた。

とぼけたい、とぼけられない。僕の負けだ。

本棚の陰から覗いていたのだろう。光の加減でそのまま姿が影になつて浮かんでしまうなんて、気付いてないのだろう。

立村と、おとひつちゃんがそれを見つけてしまつたつてことだらうか。少なくとも立村の視線は、ふにゅふにゅとしたふたつに束ねた髪の影を捉えていた。

ちくしょう！ なんでだよ。じりしてだよ！

「わかった、関崎。それなら条件をひとつ飲んでくれるか」立村はおとひつちゃんを見下ろし、それからしゃがんだ。僕の方を見はしなかつた。

「今から、用務員室に連れて行ってほしいんだ。一緒に来てほしい」用務員室？

「他にはないのか？」

つづむいたまま、おとひつちゃんはぐぐもつた声で尋ねた。

「ないよ。何度も言つていいだろ。関崎は悪くない。手を先に出した俺が悪いだけだ」

そして僕の方に向き直り、立ち上がつた。見下ろした。おとひつちゃんに話しかけていた時とは声も変わつていた。

「後ろにいる人に伝えてくれ。今度こそ、きちんと帰つてくれとな唇をかみ締め、数秒置いて、言葉を選んでいた。

「手を先に出した俺が悪かった。申しわけない。あんたたちのことは、誰にも言つつもりはない。あの子のことと、水鳥中学には迷惑をかけないようにするからその点は安心してくれ。ただ、これだけは覚えていてくれ」

おとひつちゃんに立村は手を伸ばした。手を取つて立ち上がつた。

僕の方を振り向いたおとひっちゃんの顔はなんだか泣きそうだった。先に引き戸を開けて立村は、吐き捨てるようにつぶやいた。僕にもう一度、ストレートの言葉を投げつけた。

「田障りだつてわかつていいさ。けど消えるわけにいかないんだ」

立村が先に出た後、おとひっちゃんも続こつとした。僕に振り返つた。

「雅弘、俺が戻つてくるまで、ここにいろ。いいな」

僕にはわかる。おとひっちゃんが口先で脅しているだけなのか、それともただ今頭の中が完全にはちきれているのか。親友として十年以上付き合ってきた仲なのだ。わからないほど、僕はばかりない。ここにもうひとり、誰かがいるから、あえて何も言わないだけなんだつてことも。

「いやで殴らないのがおとひっちゃんの情けなんだつてことも。

戸が閉まり、僕は立ち上がった。まだ左の頬がはれ上がったようではひりひりした。立村の奴、本気を出しあがつた。手加減なしだつた。それでもまだ動けるつてことは、もともと腕力ない奴だつたんだろう。おとひっちゃんだったら、今ぐる腰抜かしてへろへろな状態だろう。

右側にふたつ結んだ髪型の影が映つた。

「佐川さん、ごめんなさい、私」

「俺の方こそ、ごめん。俺、守り切れなかつた」

涙目で僕の前に立つ佐賀さん。唇を震わせている。きっと僕以上に怖かつたんだろう。まさか、立村に存在を勘付かれているなんて、思わなかつたんだろう。ほんとだつたら佐賀さんがもつと奥に隠れて物音ひとつたてさえしなければ、と思わなくもなかつたけど、言つてはいけない。

それよりなにより、しなくちゃいけないことを、やらなくひり

いけない。

おとひつちやんが戻つてくるまえに。へたしたら、立村もついてくるかもしね。

それまでに、佐賀さんを学校から出でなくちゃいけない。まだ僕は逃げ道を探さなくてはならなかつた。佐賀さん本人を見られたわけじゃない。あれは目の錯覚なんだと言い逃れことだつてできるはずだ。立村はともかく、おとひつちやんには「まかしがきくはずだ。

僕は佐賀さんの手を取つた。かばん」と廊下に引きずり出した。「いいか、佐賀さん、今から俺の言つ通りにするんだ。たぶん今、あいつらは用務員室に向かつてゐる。なんでそんなところに行くのかわかんないけど、とにかく行つてるんだ」震えている。おびえている。おなかからむくむくと氣合が立ち上つてきそうだつた。

「俺が今から、職員玄関まで連れて行く。用務員室とは反対側だから、今ならまだ顔合わせないですむよ。そこでダッシュで靴を履き替えて、さつさと帰つちやえ」

「でも、氣付かれちゃつたのに」

またまた弱氣になる佐賀さん。僕は声を張り上げた。打ち消したい。

「姿をそのまんま見られたわけじゃないだろ。立村が勝手に思い込んでいるだけかもしれないだろ。おとひつちやんの方は俺がうまくやつておぐ。ここに佐賀さんはいなくて、もうとつぐの昔に帰つたことにしちゃうんだ。いいか、青大附中に戻つてからも、それを貫き通せよ。ほら、Hレクトーンのお稽古があるからさつと帰つちやつたつてことでもしとくんだ」

「でも見られたのに」

僕の方がそれは重々承知している。でも、ひつくり返すことくらいいお茶の子さいさいだ。水鳥中学生徒会・影の天才参謀と呼ばれる僕が、せめてもの意地でやり遂げたい、たつたひとつのことだ。

「とにかく、俺の言つ通りにしろよ。時間がないんだ」

腕をコートの上からつかんだ。服の厚みよりも腕の細さが指先からびりりと響く。

廊下には誰もいないことを確認して、僕は階段を駆け下りた。佐賀さんを引っ張りすぎて、転びそうになってしまった。何度も顔をゆがめていやいやをする佐賀さんに、僕はめっとにらみ付け、職員玄関まで走った。

用務員室は一階の生徒玄関脇だ。反対側だ。何の用があるのかは僕の知ったことじゃない。杉本さんとおかっぱの女子はとっくに帰つたはずだ。立村の目の錯覚だと信じ込ませてなんとか乗り切りたかった。でないと、佐賀さんが追い詰められる。

「いいな。一階職員室前には、もう人気がない。

「何も言つな、とにかく行け！」

すのこの上で靴を履き替え、またなにかを訴えたそうにして見つめる佐賀さんに僕は小さく怒鳴った。よけいなことしている暇あつたら走つてほしい。わかつっていたのかいののか、佐賀さんはしつかり腰を折つて礼をし、駆け出していった。自転車を引っ張り出しているところまでは見届けた。

さて、どう言い訳するか。

同じくくらいのスピードで三階へ駆け上がつた。図書準備室にまだおとひっちゃんは戻つてきていなかつた。電気ストーブの電源を切り、椅子を一脚片付けた。僕ひとりがくつろいでいるだけ、といつた風に演出した。もう窓辺には夕陽のかけらだけが差しているだけだつた。カモフラージュ用の台本を置いて、空を眺めた。いつもここで、総田と川上さんはいちゃついていたんだろう。さつきまでいた佐賀さんと僕のようだ。いや、僕はいちゃついていたという認識ないけど、おとひっちゃんたちからしたらそう思われてもしょうがないだろう。

ここに女子がいたつてことがわかつただけだよな。けど佐賀

さんだつて保証はない。

佐賀さんがここにいないんだつてことを、なんとか証明しなくちや。

こくつか方法はある。佐賀さんにあとで連絡を入れ、口裏を合わせておく。Hレクトーンのお稽古でとつくの昔に学校から出ていた。だからここにいた女子は佐賀さんではない。立村評議委員長の勘違い。それによつて一発張り倒されるなんて、なんかおかしい。被害者は僕だ。

とこいとをおとひちやんに信じ込ませるのはどうだらう？

相手は本当だつたら、さつきたんあたりが一番いいんだけど、おとひちやんが動搖する可能性大だから、別の相手を考えてもいい。いや、おとひちやんの知らない女子、つてことにしたつていい。他のクラスの奴で、放課後、女子に呼び出されて告白されたつてことを聞いたことがある。そのまんま、使わせてもらおう。ふたつに束ねた髪型が佐賀さんとだぶるかもしれない。そこをつっこまれるかもしれないけれど、ちょっと髪の長い女子だつたら誰でもできる髪型だつて言い逃れよう。見たのはおとひちやんと立村、そして佐賀さんだけだ。しかも立村は、水鳥中学に来たのが正真正銘、初めてだ。単に僕が、知り合いの女子とおしゃべりしていたところに因縁つけにきたという有様。加害者はあいつに入れ替わる。

けど、別に僕は事件を大事にしたいわけじゃない。と言つてやう。

別に水鳥中学生徒会との交流を邪魔する気はないとも。

その代わり、ストレートパンチ一発かませたことをネタに、ちよこちよことつづいてやるつていつのはどうだらう？

勘違いして、一年の女子の名誉を傷つけるなんて最低だとも。そうすれば佐賀さんも、青大附中で立村に言い返せるだらう。実質佐賀さんを守るため戦うのは健吾くんだろけれども。この辺も後で詳しく、佐賀さんと打ち合わせすればいい。

とにかく今は、おとひちやんに説明して、飲み込ませること

だ。いつものことだ。難はない。
背中で引き戸が静かに開いた。
覚悟した。

おとひっちゃんだとこいつ」とは、ぱたぱたした足音ですぐに聞き分けられた。

「雅弘」

低い声で、一言、呼ばれた。

答えないで、おとひっちゃんの入る戸口まで出て行つた。すっかり暗くて、立ちくらみした。ふらつきながら見上げた。

「あのや、俺、さつきのことなんだけど、あれ誤解なんだ。立村の奴が間違ってるんだよ」

おとひっちゃんは答えなかつた。

「おとひっちゃんに言わなかつたのはまずかつたと思つよ。けど、名前は言えないけど、うちの中学の人で、ちょっと用事があつて、ちょっとだけ、ほんとうにちょっとだけ話をしていただけなんだ」

返事が返つてこない。勤めてあどけなく、左のほっぺたをさすりながら僕は、目の前の黒いシリエットに話し掛けた。顔形が読み取れない状態だ。

「どうか、名前、覚えていいんだ。三田前に、いきなり電話が来て、ふたりつきりで話をしたいから、場所用意してくれとか言われて。今日土曜だから、交流準備会のあとだつたらいいかなつて思つて、ここに来てもらつたんだ。やつぱり人前だとまずいつてのがあつたから。けど、あれは青大附中の評議委員長が言つよつた、人なんかじゃないんだよ。全くの別人だよ」

どうして言い返さないんだろう。嘘つくなとか、黙れとか、いいかげんにしろとか、怒鳴らないのだろうか。おとひっちゃんはまだ、立村の言い分を信じきつているはずだ。どんな話を聞かされたのだろうか。そこそこを確認しないと次の手が打てない。はらはら

してきた。

「なのに、なんで殴られちゃうんだろうな。あいつ、手加減しなかつたんだよ。俺のほっぺたすごい勢いで殴りつけたんだよ。誤解もいいとこだよ。たまたま、隣りに座つてた青大附中の人と話していのが多かつただけでさ。ひどいよなあ。俺、本当だつたらあの立派つて奴にやり返したいよ。ひどいよ、きっと葉牡丹の子のことを身びいきして、俺がなにか悪いことたくさんだつて思い込んでいるんだよなあ。俺、ちゃんと保健室に行くようについて勧めたしさ。ほんとはああいう子、俺大嫌いだけど、それでもちゃんと親切にしてやつたつもりだよ。なのになんでだよ」

突然おとひっちゃんが戸を開け放つた。廊下の温度差ある空氣で顔が冷たくなつた。肩を掴まれて強引に引っ張り出された。廊下の三年用水飲み場まで連れて行かれた。手が冷たい。おとひっちゃんは真ん中の水道蛇口をひねり、目一杯流した。水がもつたいないつてくらい流れた。

「来い」

短く、一言だけ。断れない雰囲気だった。しかたないので跳ね返る蛇口の前に立つた。水流の音だけが廊下に響き渡つていた。隣りのおとひっちゃんはもういちど、蛇口をひねり直し、横に流れるよう水の方向を変えた。ぞうが水を吹き上げているのを横からみるような形だった。

何するんだろう。

疑問が途切れた。いきなり詰襟のあたりと脳天を両手で押さえつけられるようにして、蛇口に額をぴたりとくつつけられた。水が顔の中で空いているところ全てに飛び込み、僕は何度も首を振ろうとした。おとひっちゃんの腕力にはかなわないと分かっていても。痛い。冷たい。苦しい。

息を止めるぎりぎりのところで、おとひっちゃんは襟を引き上げてくれた。口と耳に入った水を吐き出し、しばらく咳き込んだ。前髪横髪、見事にずぶぬれだ。制服の胸あたりも、おなからへんもす

べ。

「何するんだよ！　ぶつ殺す気かよ！」
めつたに出ない罵り文句が飛び出した。おとひっちゃんに使つた
こと、一度もない。

おとひっちゃんは黙つて水道の蛇口を締めた。濡れた手を数回振
つて、乾かすそぶりをした。

「雅弘、正気に戻れ。頭を冷やせ」

それだけ言い残して、おとひっちゃんは背を向けた。

おとひっちゃん、俺の言つこと、全然信じなかつた。

いつもだつたら一発で騙されたくせにさ。

僕は前髪だけもう一度髪を絞つた。わつき立村に殴られた場所に
冷たく染みた。

腕で顔をこすりながら鏡を見た。青いあざが頬の上に少しだけ残
つていた。

おとひっちゃんの言つ通り、頭が冷えると今まで見えなかつたものが見えすぎるほど見えてくる。どうして気付かなかつたのか不思議なくらいだつた。いつもの自分だったらあつさり気付いたはずなのに。悔しかつた。

次の日は日曜で誰にも会わないですんだのではなくとした。部屋にこもつて鈴蘭優のポスターを見上げていた。両親には風邪をひいたとこまかしておいたけれども。

佐賀さん、俺のことで立村に脅されてるんじゃないだらうか。電話をかけることはできなかつた。

だつて、健吾くんと一緒にいる可能性だつてあるじゃないか。俺とのことを誤解するかもしれないじゃないか。

どうして気付かなかつたのだろう。

最初から、立村評議委員長が僕のことを胡散臭そうに見ていたことを、あえて知らないふりしていた。いや、もつといふなら、奴がさんざん意味不明の行動をしていたことを、どうして見逃していたんだろう。

生徒会室を腹下りで抜け出たとしたところだつて、二つの僕だつたらあつひとつと、

「佐賀さんから杉本さんを引き離そうとしているからだ」と判断しすぐに別の手を打つだつた。

僕が例のくさい脚本を読み上げた時だつてそつだ。

立村はいきなり、「忠臣蔵」なんていうあやしすぎるテープを提供し始めた。総田やおとひっちゃんは、単なる見せびらかし精神からだつと思つてゐるだらうけれど、今ならわかる。

あいつ、話を逸らしたかったんだ。

脚本を読んで、僕の狙つたことを一発で見破つたんだ。

だから、自分のしようもない「松の廊下刃傷沙汰」をおかずにして、僕の脚本の毒を抜こうとしたんだってことを。

いつもだったら、気付くよな。全く頭が悪すぎるよ俺つて。いや、なによりも最初から計画がずさんすぎた。

なんで、図書準備室に佐賀さんを引きずり込むもつと思つたんだろう。危険じゃないかと終わつた後に思つ。

いくら全てが終わつた後とはいえ、他の連中にばれたらしゃれにならぬことになるつてわかつていたくせにだ。

佐賀さんと話をするんだつたら、駅前の喫茶店だつて、いつもの郷土資料館だつて、まだまだたくさんあつたはずだ。

なんで、そんな馬鹿なことやらかしちやつたんだろう。

僕は寝転んで天井の鈴蘭優を見上げた。

どうしてだよ。俺は。

「水鳥中学生徒会陰の天才参謀」の名前返上だ。

ふたつしじばつて側で揺れていた髪の毛、それに触れられなかつた。

夕暮れの中、見詰め合つてしまつた時。ひとつひとつが橙色に染まつていく。僕はしばらく頭をかかえ、布団の中にもぐりこんだ。額を枕に押し付けてしじばらく身体をくねらせていた。でないと額の冷たい感触と左頬のひりひりする痛みが蘇つてしまつから。こんな女々しいことしている自分が信じられない。もう、どうすればいいかわからなかつた。

もちろん、これから僕なりにどう対処していくべきかは、土曜日の段階で考えていた。

佐賀さんに帰り際ちゃんと説明したよつて、

「あれは立村の思い込みに過ぎない。あそこで佐賀さんはいなかつた」

と言い張り、むしろ立村の暴力事件の方を攻め立てることもできるだろつ。かなり汚い手だとは分かつていて。

どんな理由があつたにせよ、あいつが僕を力いっぱい殴りつけたことだけは否定できない事実。

まだ、うつすらと痛みすら残っている。病院で診断書取るという手だつてある。

それに青大附中は私立だ。公立の中学と違つて、退学処分されちゃうかもしれない。僕が青大附中の奴に殴られたと訴えたら、うちの父さん母さんに説明したら、言い方にもよるけどさつと怒鳴りこみに行つてくれる。僕が被害者として言い張つて、あいつを窮地に落とすことだつて可能なはずだ。

そうだ。佐賀さんがあの部屋にいない、といつことだつたらしくらでも。

立村の言つたことはすべてが本当のことだ。でもそんなことを認めるわけにはいかなかつた。

僕が謝りたい相手はひとりだけ、おとひつちゃんだけだ。

信じてくれてたおとひつちゃんを、裏切つてしまつたことだけだ。

もんもんと一田中ベットで転がり続けていた夕方、電話がうるさく響いた。日曜はいつも両親が店に出てるので、僕はしかたなく受話器を取つた。

「雅弘か」

名乗ると、いきなりどすの利いた声が響いた。ひとりしかいない。おとひつちゃんだつた。

「あ、ああ」

「明日、駅前まで来い。終業式が終わつたらメシ食わないでまつすぐ来い

「なんで？」

単純な言葉しか口に出でてこなかつた。

「お前に理由を聞く権利なんてないんだからな。それと」

口籠もる気配がある。僕は耳を済ませた。「ほんとひとつ咳をし

ていた。咳払いという感じではなかった。

「水野さんと一緒に来い」

わっきたんと？

なんでもわっきたんの名前が出てくるのかわからない。天井を見上げても答えが出てこない。

「あとは俺がみんな手を回しておく。いいか、雅弘。何も言つた、聞くな。わかったか」

言つたは聞くなつて言つたつて。

僕に理由を聞く権利はない。その通りだつた。それだけのこと、している。

「うん、わかった。明日わっきたんと一緒にだね」

「水野さんには、もう話つけてあるからよけいなこと考へるな、あと

また口籠もあるよつにじて、咳をしてい。

「このことは、誰にも言つたな。ふたりでとにかく一緒に来い」

言いたいことだけぽつ、ぽつと並べて、おとひっちゃんの電話は切れた。強く叩きつけられた。

わっきたんと？

おさげ髪の、はつかねずみのような表情を思い出した。ふたつに束ねたあの髪型とは違つ何かが思い浮かび、僕はまた、天井の木目をにらみつけた。こうすると知恵が出てくる。僕のいつもの習慣だった。

俺に理由聞く権利なんてない、つたつて。

けど、理由があるから、明日駅前行かなくちゃいけないつてことだろ？ 納得がいかなかつた。でもおとひっちゃんの声は本氣だつた。僕の額を蛇口に押し付けた腕力と一緒に同じだつた。

とにかく、わかるここまで聞き出そう。

わっきたんの電話番号をクラス連絡網で探した。何度もかけたことがあるから、抵抗ない。いつもおとひっちゃんの代わりに電話してやるんだから、平気のへいざだ。

「佐川くん？」

お母さんを通じて、さつきたんが電話先に出た。

「あの、この前は」「めん。俺も、気が立つて、なんかハツ当たりしちゃつて」

どうせ謝りたいと思つていた。佐賀さんにかまけてついついさつきたんを無視してしまつていたところがなきにしもあらずだつた。土曜日の段階ではあたまがぼおつとしていたけど、頭が冷えた結果、明日さつきたんにあやまらなくちやつて気持ちになつてしまつていた。早いうちに謝つた方がいい。

「ううん、いいの。どうしたの」

よかつた。さつきたんはやつぱり暖かかつた。その声が鈴蘭優以上効果をプレゼントしてくれたなんて、言えやしない。

「つちがじめんつて思つている時に、ちゃんと『いいよ、気にしないよ』と言つてくれる女子つて、少ない。

その一言だけで、僕はさつきたんに何でもしてあげたくなる。きっとおとひつちゃんは僕の倍、そう思つてゐるに違ひない。さつきたん、おとひつちゃんにも同じことしてやつてるんだよな。

ちよこまてよ、おとひつちゃん、昨日さつきたんに連絡したのかなあ？

小学校五年の頃から、さつきたんへの伝言係は僕だつた。おとひつちゃんがどうしても女子に電話をかけたくない……言い換えると「赤くなるから絶対に女子と話をしたくない」……といつことで、いつも僕が電話していた。特にさつきたんにはやつだつた。

でもなんでだろう？

昨日は日曜だ。前の日は土曜で、とつての昔さつきたんは家に帰つていたはずだ。

あの青大附中一人女子に荷物を持って行つて、それつきり戻つてこなかつた。

僕は一呼吸置いて、最初にするつもつだつた質問を後回しにして、うと決めた。

おとひつちゃんから何頼まれたんだよ？

「きなり核心につつこんだらさつきたんも逃げ出してしまひ。『話をつけておいた』ってことは、おとひつちゃんなりに内密なことに違ひない。理由を聞く権利がない僕は、絡め手を使ってたどり着くしかないってわけだ。

「さつきたん、この前の土曜なんだけど、あのあとどうしたのかなあつて思つてさ。ほら、青大附中の女子の荷物持つて、あれで帰つたのかなあつて思つてさ」

「そうだ。なんとなく、気になつて、聞いてみたのだつてスタンスを崩さないでいこう。最初、やさしいんだけど堅い感じの話し方をしていたさつきたんが、ほわほわつとした口調で教えてくれた。がちがちしたおやつのチョコケーキをレンジでチンして柔らかくした感じだつた。

「つうん、帰らなかつたの。挨拶しなくてごめんなさい」
甘い。柔らかい。やつぱりこつこうとこがさつきたんだ。

「いや、なんとなくさつきたん、あの場所いづらかつたのかなあつて思つたんだ。俺も青大附中の人たちのことではたばたしてたし、おとひつちゃんの手伝いもしたりしなくちやいけなかつたりしてさ」
僕は受話器から繋がるぐるぐる巻きのコードをひつぱりまくつた。指が落ち着かない。うまくさつきたんがひつかかってくれるとうれしいんだけどな。手たえがありそうでなさうだ。

「あのね、佐川くん」さつきたんはゆつくりと、僕の思つてもみなかつたことを、ふんわり口調で言つてのけた。

「青大附中の人たち、保健室に行かなかつたの。だつて、保健室、土曜日、閉まつているんだもの」

え！ 保健室、閉まつてたつて、どうこつことだよ！

思いつきり黒いぐるぐる巻きコードを伸ばし、ぱつと離した。左手から力が抜けていくのがわかる。いやな予感の時つていつもそう

だ。

「佐川くん、保健室にあの人たちが行つたって聞いた時に、もしかしたら迷つているんじゃないかなって思ったの。よけいなおせつかいだつたら「めんなさい」。でも、私もよく気分が悪くなつて教室出て行くことが多いから、もしさういう時に、保健室が開いていなかつたら困ると思ったの」

「保健室が閉まつてゐて、じゃあ、昨日もやうだつたんだ?」「保健室つて年がら年中、保健の先生が座つてて、ベットも用意されていいるもんだとばかり思つていた。だから立村にそう言つたのだ。

「そう。先生、いつも一時半くらいに帰つてしまつ。それで青大附中の人、やつぱり迷つて」

「そうか、それは盲点だつた。僕はあまり保健室にお世話をなんてならないからあまり気にしなかつたのに。」

「いや、そんなことはどうでもいい。じゃああの一人はジープシー状態で水鳥中学校内をさまよつていたつてことか。」

「ひとりの人、本当に顔色真つ青だつたから、私、用務員さんのお部屋に連れていつた。そこでしばらく寝せてもらつて、それから帰つたらどうかしらつて、勧めたの」

無意識の意識つてすぐえよ。

僕はいつのまにか、昨日見損ねた場面を覗くチャンスをつかんじやつたらしい。

怖いくらいだ、驚いた。

さつきたんは気付いていない。やつぱり自分が何を話しているのかよくわかんないみたいだ。そういうおばかっぽいところも、僕がさつきたんと話をしててほつとするとこひだ。ふうん、それでそれで、と促した。

「バスケ部の友だちとかも、土曜の練習中に足をひねつたり怪我したりした時、保健室が開いてなくて困つたつてこと、話してたから覚えてたの。そういう時、いつも用務員のおじさんかおばさんかい

るから、簡単な手当してもらいうんだって。これ、内緒にしてねって言われてたけど、あのおじさんおばさん、いい人だからこっそり休ませてくれるのよ」

知らないわけじゃない。うちの学校の用務員さんは夫婦者で、花を植えたり掃除をしたりと、いつもにこにこ笑顔が印象に残つてゐる。よく石炭を運ぶために石炭置き場にいくと、僕の背が低いのを気にしてか、

「これ、持てるかな？ 少し減らそうか？」

とよけいなお世話をしてくれる。僕だって力はあるんだといいたいけど、親切で言つてくれると、楽しそうな顔しているので言い返さず、減らしてもらつていたつけ。ほんといい人だ。

いや、そんなのもどうでもいい。用務員室。

おとひつちゃん、あの後用務員室へ、立村を連れていつたはずだよな！

だんだん繋がつてくる。自分でも信じられない。自信なくしそうだつた僕の頭が、だんだん「天才參謀」の誇りを取り戻しつつある。どうか、このまま自信よ復活しろ！

頼むよさつきたん、教えてくれ、そう叫んでいた。

「じゃあ青大附中の『ふたりはずつ』と、用務員室にいたんだ」

「そうなの。一年生の女子が本当に具合悪そうで、おばさんも心配して、すぐにおふとんじいてくれたの」

「ふとんなんであるんだ」

「そうなの、泊りこみのために用意しているんですつて。一時間くらい、ずっと横になつていたの。それで一緒にいた一年の子が、委員長さん戻つてくるまで待つていてことで、一緒に付き添つてあげてたの。おかげばの、可愛い感じの人」

ああ、あのおかげばの子か。

となると、話は通じる。さつきたんが荷物を取りに生徒会室へ行つたのは、用務員室で休んでいる一人に持つて行つてやるためにだつたのだらう。さつきたんにそう聞くと、当然の答えが返つて來た。

「ふうん、さつきたん、頭いいよなあ」

心臓の激しいとくとく音を聞かせないようにして、僕はのほほんと相槌を打つた。

「つうん、私頭悪いわ。青潟商業第一志望だもの」「それはそうと、さつきたん、その人たち、いつくらいまでいたんだっけ。一時間くらい、一年の女子がふとんで寝ていたんだよね」とうとうさつきたんは致命的な言葉を発した。本人がどう思つているかどうかわかんないけど、僕にとつては、逃げ道を塞がれたのとおんなじだ。

「うん、一年の女の子のお父さんに、車で迎えにきてもうことになつたので、一時間くらい一緒にいたわ。後で関崎くんと、青大附中の評議委員長さんが戻ってきて、それから帰ったの。私、昨日関崎くんと一緒に帰ったから、覚えているわ」

おとひつちゃんと帰つたってか！

「時間くらいって、俺と佐賀さんが学校にいた時か！あの時まだ、学校の中にいたのかよ！」

「さつきたん、おとひつちゃんはその時、何か言つてたか？」

僕は震える声を聞かせないよう、一生懸命のばしのばしして尋ねた。

「うん、いろいろ」

「じまかしたつてことがありありと分かる。」こはまだ突つ込まないで置こう。

「青大附中の評議委員長と、その女子ふたりは一緒に帰つたのか？」「うん、もうひとり、佐川くんと話していた人、その人が自転車で帰つていつたのを見てから帰つたわ」

俺と話していた人がつて？

指先に絡みつくのは黒いリング状のコード。汗ばんできた。

「関崎くんと委員長さんが、用務員室の窓から自転車を見ついて、

『やつぱり帰つたな』ってほほつと言つてたわ

心なしか、そこんとこだけさつきたん、ゆつくり日にじやべつて
いるような気がした。顔が見えないのがいらだたしい。もつとたくさん、読み取れただろうに。僕の中で走るものすゞく速いコンピューターが、答えをたたき出すのに時間はかからなかつた。

八方塞りつてやつかよ！ ちくしょー！

もつほどんぢやけで、僕はさつきたんから根掘り葉掘り、用務員室での女子ふたりと男子ふたりの状況について聞き出すことにした。僕の直感はめちゃくちゃ鋭い。もう、自分でもいやになつちゃうくらいぱつと分かる。さつきたんのあいまいな説明でも、あつという間に答えが出てきてしまつ。答えが、僕の願つていらないものばつかりだとしても、関係ないくらいに。

「他の学校に来て病気になつて、心細いだらつなかつて思つて、私も一緒に用務員室にいたの。ちゃんと委員長さんには伝えておいたんだけど、関崎くんも一緒にきてくれるとは思わなかつたの。関崎くん、一年の女の子に一生懸命、なにか話をして、元気付けていたみたいなのよ。委員長さんが、『悪いけどふたりだけにしてやつてくれないか』って言つたから、私とおかっぱの女の子と、あと委員長さんが用務員室を出たの」

ふたりだけにしてやつてくれないかつて、じゃあ用務員のおばさんどうしたんだよ！

「うん、用務員のおばさんも、理由聞いて一緒に待つてくれてたの」

ちよつと待つた。理由を用務員のおばさんに話したのは誰だろ
う？

「おかっぱの女の子。青大附中つて先輩の子が後輩の子を可愛がる習慣があるんだつて教えてくれたわ。お母さんみたいに面倒みてあげたのよ。私もああいう風に、後輩に好かれたいな」

さつきたんはその点大丈夫だ。いつもだつたら太鼓判押してあげるんだけどそれどころじやない。

「関崎くんと話をした後、その子、一気に元気になつたの。ずっと

それまでにこりともしなかったのに、いきなりおかっぱの女の子に、一生懸命何かを話していたのよ。嬉しかったのね。おかっぱの女の子も一生懸命、一年の子の髪の毛撫でたの。きれいな髪の毛で、うらやましかったな。後ろで委員長さんが、関崎くんに何かお礼みたいなこと言つてたのは覚えているけど、盗み聞きしちゃいけないと思ったから、私、聞かなかつたの」

その辺、曖昧な言い方だつた。たぶん、さつきたんはすべて耳にするなり目にするなりしていただろう。それをあえて言わないのはなにか訳があるらしい。

「そうなんだ、なるほどなあ。今回はさつきたん大手柄だなあ。す「こ、よ、さすがだよ」

別の意味をこめて僕は、たっぷりさつきたんを讃めた。何度も歯を食いしばつっていたなんて、僕は決して言えなかつた。

だいたい事情はつかめたところで、最後の本題に入った。聞き出しがいいことだけ避けられない質問だ。

「さつきたん、俺とおとひっちゃんとのこと、知ってる？ 知つてるよね」

ほわりほわりと語つてくれたさつきたんが、ふと黙つた。せつかく膨らんだおいしい匂いが、抜けてしまつた。

「理由ももしかしたら知つているかもしれないけど、俺とおとひっちゃん、今、険悪なんだ。知つてる？」

「あまり、詳しいこと、わからなーいから」

途切れそうなかすかな声だつた。

「けど、俺、おとひっちゃんと仲直りしたいって思つてるんだ。それはわかってくれるかなあ」

「うん」

少し元気が出でてきたみたいだ。よかつた。

「それでなんだけど、さつきたん、今、おとひっちゃんから電話があつてさ、明日一緒に駅前に来てほしいって頼まれたんだ。さつき

たんと一緒にいて言われたんだけビ、それって何があるのかな？おとひつちゃん、わきたんには話をつけてあるって言つてたけど

わ

「……」「めんなさー」

ほんとに受話器の向こから流れる雑音にかきかされそな声だつた。知つてはいるはずだ。何かおとひつちゃんたぐらんでいるんだろ。目の前にわきたんがいるんだつたら、あの手この手を使つて聞き出すところだけビ、自分の中のレーダーが、避けるようなサインを出しここる。

「理由、教えてもらえないかなあ

まずはストレートだ。

「……ごめんなさー」

「じゃあ、いつ？ おとひつちゃんと話した？ 士羅町の帰り？」

「ううん、電話で、今わきたんなの

電話かよ！」

僕がどれだけ驚いたかつて、わかつてもうれないんじやないかと思つ。

おとひつちゃんが、なんとわきたんに電話をかけたんだ！

一緒に帰つただけでも信じがたいことなのに、それに加えて、電話まで。たぶん小学校時代の学級文集末尾の卒業生住所一覧を漁つたに違ひない。あのおとひつちゃんが、自分の持つ勇気を全部振り絞つて、わきたんの電話番号をダイヤルしちやつたつてわけだ。

おとひつちゃん、本氣だ。

逆らえないよ。

わきたんはどこまで知つてはいるんだろう？

これ以上質問を続ける気力、持つていなかつた。一刻も早く、部屋の鈴蘭優のポスターと顔つき合わせて相談したかつた。おとひつちゃんの考えていること、わきたんの知つてはいることをみな整理したかつた。

「きっと、仲直つしたいからだと思つた。それで、佐川くん、ひと

つだけお願ひしていいかしり

ささやくよくな声で遮られた。僕は頭の中の「鈴蘭優」ポスターを打ち消した。

「明日、私、佐川くんをびっくりさせるよくな」としても、驚かないでほしいの」

「え？ 僕を驚かせるよくなってなんだよ」

また、黒い予感がぞわぞわとする。口籠もるさつきたん。咽のところで、言葉を押えてくるような、くうつとこつ音が聞こえる。でもさつきたんの口調ははつきりしていた。

「終わつたら、ちゃんと佐川くんとふたりになつた時、話します。だから、それまでは何も言わないでほしいの」

なんだよ、その秘密めかした言い方つて。

おとひつちやんも、さつきたんも、何かを仕組んでいる。おとひつちゃんが言うに、僕は理由を知る権利がないんだといつ。だいぶ想像がつくけれども、肝心要のところが読み取れない。さつきたんが言つに、僕を仰天させるようなことをするらしい。

俺、おとひつちやんに落とし前つけられることなのかなよ。けど、あいつのためにやつたことなんだよ。おとひつちやんがあの杉本さんって子を嫌つてするのがわかるから、水鳥中学生徒会に近づけないようじょうとしだけなんだよ。おとひつちやん、わかつてもらえないつてのはわかつてつもりだけど、ケビン。俺はおとひつちやんのことが大好きなんだよ。

「じゃあ、明日、よろしく」

本気でさつきたんを問に詰めたり、せつと白状しただらう。なんとなく黙つていた方がよさそうな気がした。こいつ時の予感は当たる。とにかく流れに任せて様子を見ても間に合つだらう。受話器を置いてしばらくなつきたんの言葉を思い起こし、ベットに横たわつた。天井の鈴蘭優が田の前でぼやけるように視点をずらし、頭の中を片付けることにした。

立村とおとひつちゃんがどうして用務員室に行つたのか、ひとつめの理由は判明した。

杉本さんともうひとりの女子が一緒にいて、立村を待つていたからだらう。おとひつちゃんじきじきの案内でだ。

けど、僕を殴りつけた後立村は、

「ひとつだけ条件を飲んでもらえないか

と言わなかつただらうか。

おとひつちゃんも、

「お前の言う条件は飲む」

と、なんとかのひとつ覚えみたいな感じで繰り返していた。

立村の出した条件つていうのは、いったいどんな代物だったのだ

るひつ。

思ひ当たるのは、杉本さんがらみのことだらうか。せつせたんが言うには、おとひつちゃんと杉本さんをふたりつきりにして、何か話をしていたらしいということだ。大人である用務員のおばさんまで追い出して、ふたりつきりにする理由つてのはいったいなんだろう?

しかもその後、杉本さんは病人状態から一気に回復し、おかげの女子に楽しげに報告していたという。

おとひつちゃん、何か杉本さんを喜ばせるよつなことを言えと強制されたのか?

おとひつちゃん、あいつに脅されて、まさか杉本さんと付き合つなんてこと、考えているんじゃないだらうな!

背筋が寒くなるのを覚えた。風邪じゃない。

立村に殴られた類をさすつた。一緒に罵られた言葉をセツトで思い出した。

そんなにあの子が田障りか。

田障りなのはわかっているや。けど、消えるわけにはいかないんだ。

おとひっちゃんに杉本さんがベタぼれなのはよくわかった。非常識な化粧なんかして学校にくるくらいだ。相当なもんだろ？
けどおとひっちゃんの想い人は、誰が見ても明らかにさつきたんだ。

もつとこうなら、おとひっちゃんは杉本さんのことをめちゃくちや嫌っているはずだ。僕ほどではないにしても、近寄りたくない女子のひとりとして認識しているはずだ。僕にはお見通しだ。おとひっちゃんにとつても、杉本さんは田障りな女子のはずだ。

つづづく思つたんだけど、立村の杉本さんに対する関心は、尋常じゃない。お気に入りの後輩つて域をはるかに越えている。男子の恥になりそうな言い訳までして追いかけるなんて、僕には理解できない。佐賀さんが話していた通り、好みの差つていつのもあるだろう。僕からしたら

「そんなに杉本さんが好きだつたら、迷惑かけないよつて保護してどつかに連れて行け」

と言いたい。佐賀さんだつて、おとひっちゃんだつてそつとして欲しいに決まつていて。

それをだ。

立村はおとひっちゃんに土下座させて、要求を飲ませよつとしたんだろうか。

杉本さんの望みをかなえてやつてくれとでも言つたんだろ？
それつてやり方が汚すぎる。僕のしたことなんかよりもずっと、人間として許せないことだ。

大嫌いな相手を無理やり好きになつてくれ、なんて、残酷だ。

どう思う？ 佐賀さん。

鈴蘭優のポスターもとい、顔だけは佐賀さんのイメージ。語りかけてみた。

「やつぱし、変だよな！」

声を出してみた。天井に響いた。

もちろん、これは僕の直感に過ぎない。外れている可能性だつて

ある。けど、立村の言動を考えると、可能性としてはゼロじゃないような気がする。おとひっちゃんは僕のしでかしたポ力をかばってくれた。責任を感じておとひっちゃんは、自分のしたくないことをしようと決意したんだろうか。立村に頭を下げて、僕を守ろうとしたくれたんだろうか。

どうなんだよ、おとひっちゃん。

あいつが僕と絶交するつもりなのか、それともまだ親友でいさせてくれるのか。わからない。

けど、さつきの電話の内容だと、全く救いがないわけではなさそうだ。

俺が謝りたいのは、おとひっちゃんにだけなんだ。あんな奴らには意地でも頭なんて下げるもんか。

佐賀さんをいじめた奴らを、誰が。

僕は目を閉じた。眠ればいい案が浮かぶ。僕の経験法則だ。

次の日は終業式だった。さくでもない通知表の結果に、少々やさぐれていた。

だって、青潟商業・工業ともにボーダーラインときたもんだ。三年になつてから取り返せばいい、って楽天思考で行きたいとこだけど、今夜はずっと説教を食らひはめになるのがつらとおしい。帰りたくない気分だった。

いつもだったらおとひっちゃんと一緒に、どつかバッティングセンターあたりで気分爽快になつてくるんだけど、そんな脳天気なことを考えていられる状況じゃないことは僕が一番わかつている。はい、もちろん行きますよ。駅前に、十一時半。気が重い。

終業式、先生のお言葉、および四月の組替えに関する情報などが教室の空気に入り交じつた。四月には組替えがあるのでいきなり名残惜しそうに固まっている女子もいた。今度はおとひっちゃんとおんなじクラスになるんだろうか。いや、なつたらかえつてしまど

いかもしない。いろんなことを考えながら、僕は通知表をしまい込んだ。向こう側の席にいる、さつきたんへ田で合図した。できるだけ他の連中に気付かれないよう、さりげなく、かばんを上に持ち上げ、首を曲げた。さつきたんは鋭い。気付いてくれた。いつものおさげ髪のままで、廊下に向かった。終業式の日は週番のお仕事もないらしい。

別々に教室を出た。

当然、おとひっちゃんとはまだ話をしていない。一年四組の教室を覗いてみたけれども、すでにおとひっちゃんも姿を消していた。さつと生徒会室に寄つていてるに違いない。

さつきたんの家の前を、どうせ駅前行く時には通る。それならめんどりじやないしつてことで待ち合わせ場所をさつきたん家前に決めてあつた。

さつきたん家の前には、鉢植えの黄色い貧弱な花が首長く咲いていた。ざわざわした葉っぱが何重にも土にかぶさるくらい積み重なつていた、見覚えあるんだけどなんだか記憶が曖昧だ。玄関で待つているとさつきたんがすぐに出てきた。すごい勢いで着換えたに違いない。水色のブレザーに紺色のスカート姿だった。服だけだったらやつぱり、水鳥中学の典型的校則美人のさつきたんのままだった。けど、ひとつだけ違つている。

うぞぎの耳が折れているかと思つた。

「「めんなさい」

少しくるくるとくせがついた髪の毛だった。広がつていて、歩くたびにぶるんと揺れた。

「さつきたん、その髪の毛」

なんで、ふたつに結んでる?

言葉がそれ以上でなかつた。さつきたんは唇を結ぶと、また首を

振つた。

「今は聞かないでね。あとで、ちゃんと話します」

さつきたんの髪の毛は、お下げじゃなかつた。小学生の子みたいに見えた。ふたつにむすんで垂らした、犬みたいな髪型だつた。

土曜の、佐賀さんだ。

はつかねずみみたいなおちよ^{まく}、その髪型は子どもっぽく似合つていた。

何かを話さないとまた変なこと思われてしまつかもしれない。僕は田についた、門の黄色い花を指差した。

「さつきたん、あの花、何？」

立ち止まり、じつとさつきたんは僕の視線を追いかがみこんだ。花を一本指でつまむよつとして、そつと口付けるよつなじぐさをした。

「佐川くんが持つてきてくれた、葉牡丹の花よ

「葉牡丹？」

一月に受け取つた時にはずいぶん気持ち悪い花ですぐに手放したかつたあの花だ。

さつきたんに押し付けた、あの葉牡丹だ。

いやあな気持ちになりそつた。けど、僕が受け取つた時とは違い、葉っぱもすつかり花じやなくて、ちゃんとしたただの「葉」つて感じになつていた。むしろ、茎が長くて別の意味で不気味だつた。さつきたんは全く気にしていないよつだつた。首をかしげて、また髪をふると振るつた。

「本で調べたんだけど、うまく冬を越したら、黄色い花が咲くんだつて。もう少しで満開になるんだつてうちのお父さんが言つてたわ」

「え、あれ、花つてあの毒花じやないの？」

わざわざしていて、赤ともいえない氣味悪げな花。持つてきた彼女に重なるよつな、具合悪くなりそうな花。さつきたんには似合わない花。

「つうん、あれは葉っぱよ。『棟がたつ』って言つてしまつ。葉つ

ぱの中から一本、するすると茎が伸びてきて、菜の花みたいな花をたくさんつけるのよ。葉牡丹はその頃にまだ、ふつつの葉っぱになるとの」

良く見ると、葉っぱは茎の周りに一枚ずつ、間隔を開けて重なっている。花だつた頃の面影なんてなかつた。

天辺にくつついているのはなんだか小さくて、きれいなのかどうなのかわかんない、地味な花だつた。黄色い、手のひらにちょうど乗っかりそうな花びらだつた。

「つまんない花だなあ」

思わず口からもれた。

「そう？ でも、もつと温かくなつたらたくさん花が咲くから、きれいよきっと」

さつきたんは気にしない風に答え、また歩き出した。僕も追いかけた。完全に僕の心臓は別の音を立てがなりたてていたに違いない。

どうして、さつきたんはあんな髪型してきたんだろう。小学校の頃から、さつきたんのお下げ髪はトレードマークだつた。クラスの女子たちだつて中学に入つてからは、こんな派手な髪型なんてした奴、いなかつた。どうして細かくパーマかけたように広がつているのかわからぬけれど、僕の知らないところと歩いているようにしか思えなかつた。

さつきたん、なんかあつたのかよ。

思い出すものといえばひとつだけ。

佐賀さんのことだけだ。

僕と夕陽を見ながら、見つめ合つてしまつた橙色の時。

女々しくて情けないけど、あの時そのまんま、止まつてしまつた。

立村にぶちこわされなければ！

また腹が立つてしまつ。よけいなことを思ひ出してしまつ。

264

けどどうじただろ。

つりの店の前を通り、もちらり、足早に通りぬけた。さつきたんと歩いているところ、父さんに見られたらきっと、僕のことを女たらしだと思い込むに違いない。

「佐川くん、あのね

ずっと通知表の結果と、志望校の話をしていた時、不意にさつきたんが切り出した。

「昨日話したことなんだけど、もう一度、約束してほしいの」

何も、青潟駅前の横断歩道前で言つることもないだろう。せっかく信号が青なのに。仕方なく僕は立ち止まった。

「とんでもないことしても、おどろくなつてことかなあ

さつきたんは黙つた。少しうつむいた。ちょっと頬が赤くなつていた。耳みたいなふたつの髪束が、僕の方を、見たいな感じでにらんだようだつた。

「俺と関係あることだよね

頷いた。「どうしても、今、言つてもいいこと、できないのかなあ

やつぱり無言だ。ただだんだんうつむく角度が深くなつていつて、耳のところがずんずん僕に近づいてくる。

「あとで、ちゃんと、話してくれるよね

顔を上げてくれた。びっくりした。僕の見た中で一番、さつきたんの瞳がぎらぎらしていただつた。はつかねずみの瞳というよりも、兎の赤い血走つた瞳、と言つた方が近いんじゃないだろうか。言い返せなかつた。

「約束します。だから、佐川くんも約束してください」

僕は小指を出した。黙つてさつきたんは自分のをからげてきた。いつもやつて手を触れ合うのは小学校以来だつた。

あたたかくて、やわらかかつた。ずっと触つていたかつた。

えがぴょんと飛び出した。

「コート姿で制服は見えないけれど、今はふたつの中華娘髪をして待っているあの人人がいた。一緒に立っているのは、背の高いジャンバー姿の男子。隣りには、僕の顔を水道に押し当てた、あいつがいた。みなじつと、僕とさつきたんを六つの瞳で見据えていた。一歩ずつ歩いていくにしたがつてじんわりと突き刺さった。

そういうことかよ。おとひっちゃん。

蛹人形が一体、混じつていないので意外だった。

「なんだ、やつぱりそつだつたつすかあ
 最初はずいぶん眉間に皺を寄せていた健吾くんだけ、僕の
 顔と、さつきたんの方を順繰りに見た後、めいっぱいの笑顔を繰り
 出してくれた。隣りで一步下がったところに、佐賀さんがこくりと
 お辞儀をした。さつきたんを挟んで、おとひっちゃんが腕組みをし
 て僕をにらむ。にじまれるようなことを一応しているので、言い訳
 できなかつた。

「そういうわけだ。新井林くん」

おとひっちゃんは顎で僕をしゃくつた。会間にきつく牽制するま
 なざしが飛んできた。さつきたんをわざと見なによつにしている様
 子だつた。どことなく、一步離れるよつ意識しているようだつた。
 「やつぱなあ。佐川さん、本当に疑つちまつですみませんでした。
 僕もまつさかなあとは思つていたんだけじ。やつぱ、馬鹿な先輩持
 つちまつと、誤解曲解雨あられつてんですか」
 何をこんなに軽いこと言つて呑つてんだろつか。僕が口を開こ
 うとするたびに、おとひっちゃんはぎろりとにらむ。ああそつだ。
 日曜に電話が来た時言つてたもんな。

「お前は何も言うな」

つて。さつきたんとも描きりして約束しあつたんだから仕方ない。
 僕は曖昧にへらへら笑いながら、佐賀さんと視線を合わせようとし
 た。

健吾くんの側に密着している、かみ終わつたガムみたいだ。

「まあ、誤解されるのも無理ないよなあつて思ひますよ。おい、佐
 賀。お前なんで紛らわしい髪の毛で行きやがつたんだ！　お前が悪
 いんだぞ！　佐川さんに対する失礼だぞ」

僕にはずいぶん低姿勢な健吾くんだが、いつものことながら佐賀
 さんには失礼極まりない。おとひっちゃんとさつきたんさえいなけ

れば、僕が割つて入りたいところなんだけれど、そういうかない。とにかく状況を把握しようとした。

駅の前でたむろつと、補導員に捕まる可能性があるので、とりあえずはバス待合室に入り、席を分捕つた。たぶん今年中に路線が廃止になるんじやないかと言われている市営バスの待合室には誰もいなかつた。僕とさつきたん、あとおとひつちゃんと。健吾くんと佐賀さん。お互い向かい合い、ベンチに座つた。ガラス張りだつた。あつたかかつた。なぜかおとひつちゃんは、間に挟まつているさつきたんから離れようとしているようだつた。必然、僕とさつきたんがカツプルっぽく見える。

「雅弘も、今は混乱しちまつて、うまく説明できねえみたいだから、俺が話すな」

分かりづらいな。

僕に口を利くな、という牽制球、ふたたびだ。

「わかりました。けど、もう俺、いいですよ」

「いひつて、けじめをつけないでいいのか」

「ああ、かまわないつす。だつて、要するにうちの立村さんが勘違いしやがつただけなんじょうが。ばつかじやねえのつて思ひますよ。あいつがなんで評議委員長なんだかつて思ひますが、人間だし間違いもあるつてことで。悪いけどほんつと、佐川さん、申しわけありませんでした。俺が青大附中評議委員会に成り代わつて謝ります」

「あの、さあ」

口に出しかけたらまた、おとひつちゃんがにらみかけた。

「とにかくだ、雅弘が無実だつてことは判明したわけだ。俺も、そういう関係のないこととは別に、青大附中評議委員会とは付き合いたいと思っているんだ。だから、これでみな、水に流そう。立村にもやう言つておいてくれ」

立村にもやう言つておいてくれつて、おとひつちゃん！

だんだん状況が飲み込めてきた。僕が本当だつたら仕組みたかったアリバイ工作。佐賀さんのために、命がけでやろうと決めていた。お株を奪つたってわけだろうか。おとひつちゃん。

さつきたんの髪の毛先がまた僕のほおに刺さる。はにかむような表情でうつむいている。誰も見ていない隙に、僕は佐賀さんがどこ見ているのかを確認しようとした。ずっと、健吾くんの肩に寄り添うようにして、時たまさつきたんの方を窺っているのがわかつた。

ちゃんとと言い張つたんだな。あの場所にはいなかつたって。健吾くんは僕に笑顔で、前の日のバスケットボール練習試合についてとくとく語りだした。ひっぱられるように僕も聞き入つていた。けど気になるのは佐賀さんの田だつた。あどけなく甘えていようだけど、さつきたんばかり見つめているように見えるのは、気のせいだろうか。おとひつちゃんだけが腕を組んだまま、応援団の人みたいに天井を見上げていた。

おとひつちゃんは、立村と一緒に、佐賀さんが遅く帰つたことを確認したはずだと、さつきたんは言つていた。詳しいことを聞いてないのであとは憶測になる。

現場を押えてはいなつて、言い訳をするつもりだつたんだ。けどさ、どうしておとひつちゃん、手のひら返したように俺をかばうんだ？

もちろん、このまま流れに乗つていけば、僕と佐賀さんの無実は証明される。

けど、どうして健吾くんは僕の顔を見るなりいきなり納得してしまつたんだろ？

一言も話さないうちにだ。駅前でだ。

さつきたんは急に僕の側に近づくように足を寄せた。ブレザーのカフスボタンと、僕の学生服の金ボタンが触れ合つた。かちりとなつた。そして佐賀さんの方を静かに見つめ返して、柔らかい視線が絡み合つていた。

「どうしたの」

「『めんなさい、佐川くん』

すうつと僕の眼を見つめてきた。また、血走ったような睨のまなざしだった。

「だからどうしたんだよ」

健吾くんの会話が途切れたところで、せつきたんは軽く小首を傾げ、健吾くんの方に合図を送った。珍しご。せつきたんから男子に合図を送るなんて、めったにない」とだつた。

「あの、『

中途半端につぶやめつむいた

「あ、なんつすか」

大股開いて両手を組み、前かがみのまま健吾くんはせつきたんに答えた。

「本当に『めんなさい』私が紛らわしい」としつりやつたから、お隣りの人に迷惑をかけてしまつたんですね」

「いや、あの、その、『めんなさい』も人のこと言えないし」

「こきなりへども『めんなさい』は『めんなさい』ことか。僕も、隣りのおとひつちやんも、『めんなさい』と絞りこむように見下ろしている。けどせつきたんは全然気にしないようで、ただ健吾くんにだけ話し掛けていた。ちょっとむかつときた。

「あの、私、土曜日の午後に、佐川くんを呼び出せうと思つて、図書準備室にいたんです」

ちよつと待てよ、せつきたん、何言つてるんだ?

声が出来になつたのを『じらえた』。慣れているそのくらい。『じまかすのは平氣だ』。けど、せつきたんは、確かに前置きどおり、びっくり仰天することを言つ出した。指きりしたから顔には出さないけど、もう心臓の音が響き渡り発狂寸前だ。

「いや、そのことはもうこいつですよ」

「いいえ、私、やつぱりはつきりさせておかないとダメだと想つんです。でないと、お隣りの人にも失礼だから。ごめんなさい」誰にごめんなさいのかよくわからない。佐賀さんは同じく、こつくり頷いた。健吾くんとぴったりくついたままだつた。

「だから佐賀、お前があんまり泣き叫ぶから俺だつてこいつしなくちやいけなかつたんだぜ。誤解されるお前にも責任あるんだぞ！」

また怒る。僕は隣りのさつきたんと向かいの佐賀さん、両方を交互に観察していた。

「ごめんなさい」

やつぱり謝る佐賀さんだつた。けど、よけいなことは言わない。僕との約束通り、誰が作ったかわからない流れに沿つて様子を見ようとしているらしい。

さつきたんの言葉が、ちやかちやと続いた。揺れない芯のある言葉ばかりだつた。

「私、途中で生徒会室を抜け出して、用務員室に杉本さんたちの荷物を持つて行つた後、佐川くんと待ち合わせていたんです」

「いやあ、それはよくあることじやあねえかなあつて」

健吾くん、戸惑つている様子だ。さつきたんに飲まれている。

「いえ、本当はあの日、佐川くんに話すつもりだつたんです。委員長さんが来なければ」

また僕に視線を送つた。皿と皿が合つた。

「私、佐川くんと、お付きあいしたいんだつて」

もちろん知らないわけじやない。前から僕のことを気に入つてきて。

れていて、うれしいなとは思つていた。けど、まさかそんないきなり言われても、僕は困る。第一、僕はさつきたんと待ち合わせてなんていなかつた。さつきたんはとつぐの昔に帰つたもんだと思つてから。まさか、用務員室でおとひつちやんたちと顔を合わせて

いたなんて想像すらしていなかつた。

指と指が絡まりあつた記憶が蘇り、鈴蘭優のポスターを眺めている時と同じ精神状態に引き戻されそうだ。

「けど、言おうと思つた時、委員長さんが入つてきて、けんかになつてしまつたので、私、出られなかつたんです。私、生活委員のくせに、校則破つていろいろ見られたくなつたし、それに、お隣りの人がしてきた髪型がとつてもかわいくつて、つい真似してしまつたんです」

「こいつの、がか？」

健吾くんのなんともいえないねめつちいまなざしが、佐賀さんに注がれた。見たことないんだろうか。そんなことはないだろうと思つうけど、確かにふたつに結い上げた髪型は似合つていた。

「だから、もしかしたら、佐川くん、わかってくれるかなつて思つたんです。けど、人に迷惑かけることになるなんて、思つても見ませんでした。だから、出られなかつたんです。関崎くんもいたし、変なこと誤解されたら恥ずかしくつて、つい、窓辺に隠れてしまつたんです」

さつきたん、俺の計画を先取りしてるのでか？

必死に表情を隠した。照れている振りしてうつむき、指の関節をぼきぼき折つた。

「だから、お隣りの人はいなかつたんです。あの場所にはいなかつたんです。信じてあげてください。もちろんこんな髪型していたから、おとなりの人に間違われたのはしかたないかなつて思うので、委員長さんは悪くないと思います。けど、でも、佐川くんは私と会つていたんであって、お隣りの人とではないんです」

急に頬を両手で覆い、うつむいたさつきたん。ガラス張りに春っぽい陽射しがさしてきて、だんだん熱くなってきた。ビニールハウスの野菜みたいな感じだつた。

「いいつて。もういいつす。俺、こいつのことを疑つたこと自体、最低な奴だつて反省してるんだからさあ。もうほんと、謝らなくた

つていいんだって」

丁寧語とため口と混ぜ合わせた妙なバランスでもって、健吾くんがさつきたんをなだめている。でも動かないのはさつきたんがずっと、顔をさすつているから。背中を丸める格好でいたさつきたん。ちょうど僕とおとひっちゃんど、真剣に目が合つた。

「おとひっちゃん、俺」

「黙つてろ。水野さんに失礼だろー！」

かなりきつい怒鳴り口調だつた。

おとひっちゃんの前で、言ひちやつたんだ、さつきたん。

もともと分かっていることだつた。けど、おとひっちゃんの前では決して口にしないでほしかつた。いや、おとひっちゃんがそう言うよう言いくるめたんだろうか。僕の中ではそういう答えがもう出ている。おとひっちゃんのたぐみだつてことが、浮かび上がつている。どうすればいいんだろ。僕は健吾くんにこくつと頷いてみせた。ついでに佐賀さんを眺めた。同じようにうつむいている佐賀さん。女子がふたり動搖している様は、居心地悪かつた。嘘がまんべんなく盛り込まれていてからなおさらだつた。

さつきたん、どうして、ありもしなかつたこと、こきなり言うんだよ。

『氣まずい雰囲気になつたのを救つたのは、やつぱり健吾くんだった。咳払いをしたのち、おとひっちゃんと僕に親指を立ててぐいぐいと押した。

「もう、俺のことは気にしないで大丈夫ですよ。あとは青大附中で片付けることですから。ただ、これだけ人を傷つけてしまつた以上、俺としては決着を立村さんとつけます。あ、大丈夫です、ちゃんと冷静な第三者の先輩に見てもらつて、弾劾裁判してもらいますから

「さ、裁判？」

健吾くんは佐賀さんの腕をひっぱりあげるようにして、ポケットに手を突つ込んだ。僕よりはるかに背が高いのが目立つ。

「ただ俺と佐川さんが一緒にしゃべっているところ見かけたからつていつて、こそそ泥棒猫みたいなことしゃがつて、さらに佐賀が佐川さんとくつついているんでないかつてありもしねえことを吹き込みやがつて。しかも、あんな馬鹿女に現抜かして、自分より頭がいい佐川さんを殴りやがつて。やっぱ、最低つすよ。まあ、四月からはあの人元でしつかり働かねばなんないつてわかつてますんで、これできつちりけりをつけて、水に流します。どうもすみませんでした！」

最後に握手を求める手を出してくれた。先におとひっちゃん、次に僕に。こわごわ触ると、実に堅かつた。皮が分厚かつた。やっぱりバスケ部だから、手の皮が鍛えられているんだろうか。

「もう変な誤解がないんで、俺も安心して、困った時に佐賀を使って佐川さんへ連絡できますよ。立村さん通してだとやっぱりいろいろ、問題あることも多いと思うんで、俺、何か変わったことがあつたらすぐ、佐川さんちの本屋に佐賀を向かわせます。またあんにやろうが誤解しやがつたら、そんときは俺が黙っちゃあいません。安心してください。ほんと、申しわけなかつたっす」「

これからバスケ部の自主練習があるから、つてことで、佐賀さんとふたり、健吾くんは待合室から出て行つた。佐賀さんももう一度こつくり、僕たちに頭を下げた。最後にわつきたんとまた、視線を絡めていった。

とうとう僕とおとひっちゃん、そしてわつきたんと三人だけになつた。何時くらいなんだろうか。腕時計を見た。同時におとひっちゃんが立ち上がつた。

「雅弘、これでけりはついた。水に流したからな」「え、おとひっちゃん、どうこうことだよ。俺、理由聞いてないつて

「だから理由を追求する権利、お前にはない！」

最後にわつきたんへおとひっちゃんはじいと視線を送つた。す

ぐにさがすを返して、出て行つた。追おつとした。立ち上がりかけた。

「佐川くん、いいの、私、関崎くんが今ビニに行こうとしてるかわかつてるの」

「わつきたん、あの、約束通り、聞かせてくれるよね」

言葉がかすかにどもつてしまつた。立つたまま見下ろすと、さつきたんは泣きそうな顔で僕を見上げた。

「いつたいどうして、あんなこと、言つたんだよ。俺、約束したから何も言わなかつたけど、わつきたん図書準備室なんかにいなかつたじやないか。どうしてだよ…」

助けられたつてことは分かつてゐる。わつきたんとおとひっちゃんが口裏合わせてくれなかつたら、たぶん今ごろ健吾くんに決闘を申し込まれていたに違ひない。今までの流れからして、ふたりが僕を助けようとして、話を合わせていたことくらい見当はついていた。さつきたんが、僕に告白しようとして、図書準備室へ向かい、たまたま立村に勘違いされたつてことを。しかも勘違いされた理由が、髪型だつたからといふこと。

無理のある説明だ。だつてわつきたんはずつと、用務員室で待機していたのだ。

わつきたんの言ふ分を信じればの話だがおとひっちゃんが、立村だつてそれは知つてゐるはずだ。

けどおとひっちゃんはあえて、嘘をついてくれた。

わつきたんと一緒に、嘘つきになつてくれた。

正々堂々とした性格の、嘘が大つ嫌いな、おとひっちゃんがだ。

「俺、嘘をついてまでかばわれたくないよ…」わつきたんもおとひっちゃんも何考えてんだよ。そうだよ、俺、ずっとあの佐賀さんつて子と一緒にいたよ。俺が呼び出したんだ。そうだよ、健吾くんが騙されてるんだよ」

「知つているわ」

「知ってるならなんで、そんなわけのわかんないことをするんだよ！俺はこういう風に騙されるのが一番嫌いなんだよ！」

「「めんなさい。でも、私も言いたかったの」

さつきたんは僕のむちゃくちゃな怒鳴り声を黙つて受け止めていた。善意でやつてくれたことはわかつてゐる。僕もこうしたかった。けど、ほんとは僕が全部けりをつけるつもりでいたことを、を勝手に演じられると腹が立つてしまつ。理屈じゃない。わけがわからない。

「私、もし佐賀さんつて人がいなかつたら、同じことしていたと思うから」

今度はうつむかなかつた。唇をかみ締めた。目をそらさなかつた。まつすぐすぎて、目が痛かつた。蛇口をつけられたあたり、鼻筋一番上あたりがきんと冷えた。

「「めん。俺、やつぱり変だよな」

「今からみんな話します。話したら、一緒に関崎くんのところに行くから。私」

僕は全身脱力状態で思いつきり浅く座つた。さつきたんの顔を見ないようにして、さつきの健吾くんと同じポーズを取つた。少しは男っぽく見えるだらうか。

さつきたんはしばらくためらつてゐた。片方の髪に手を置いて、しゅるりとゴムを外した。もう片方の束にも同じことをした。見ると、杉本さんと同じくらいの長さがある髪の毛がばさつと肩に落ちていた。耳の上だけゴムのあとで膨らんでいた。

「関崎くんが委員長さんと一緒に來た時、びっくりしたの。関崎くんはずつとうつむいていて、委員長さんは今にも倒れそうな顔をしてたの。ずっと身体の震えが止まらなかつたみたいで、用務員室に來た時、ふたりとも何も言わなかつたの。そうしたら、窓からふたつ結びにした青大附中のあの人人が、自転車漕いでいくのが見えて、みんな呆然つて感じで眺めていたの」

わかってる。わかってるさ。俺が悪いんだ。

「関崎くんがそれ見て、最後にがっくり頭下げて、『すまなかつた、俺が悪い』って言い出して、委員長さんもそんなことないつて首振つていたわ。その時は何が起きたかわからなくて、ただ私も眺めているだけだつたけど。おかげばの女の子、委員長さんと仲良しで、何度も腕さすつてたわ。何か一生懸命話しかけて、それでも何も言わなくて」

ああそうか。あいつにも彼女いるつて言つてたよな。

さつきたんの話によると、おとひっちゃんはもちろん、立村も相当、精神的打撃を受けたみたいだ。少しだけ、やまみろと言いたくなつた。人を殴ると大抵そうなるもんなんだ。

「しばらくそうしてたら、委員長さんがストーブの方に関崎くんを呼んで、話をしていたの。聞かないほうがいいかな、と思っていたんだけど、聞こえてしまったの」

「何、それは」

「それは……」

さつきたんは口籠もつた。大抵のことだけ、口籠もつたことにたいていほんとのことが隠れてるんだ。話してくれるのを僕は待つしかない。ずっと黙つていたら、やつぱり痺れをきらしてさつきたんが動いた。かすかに、頷いた程度だった。

「一年のあの女子に、ふつうの女子と同じ風にして、きちんと話をしてくれつて」

「ふつうの女子？」

「あの子は今まで男子に人間らしく扱われたことがない子だから、他の女子たちを相手にする時と同じく、きちんとお断りしてあげてほしいって、一生懸命言つてたの」

まじかよ！

ガラス張りの光が一瞬真っ白く染まつた風に見え、僕は窓越しに空を見上げた。

「早い話、杉本さんつて子を振つてくれつてことなかなあ」

じっくり、さつきたんは頷いた。

「私、関崎くんたちがいない間、あの子たちと一緒にいたでしょう。ずっと一年の女の子、関崎くんのことばかり話してたの。どんなに私ともうひとりの子が別の話をしようとしてもダメだったの。関崎さん関崎さんって、うわごとのように同じことばかり繰り返してたの。眠るまでそうだったの」

相当、おとひっちゃんに思い入れていたのだらう。葉牡丹の彼女は。

「だからたぶん、関崎くんのこと好きなんだなって思つたわ。どうして好きになつたのか聞いたら、『ちゃんと私の入れたお茶を、お礼言つて全部飲んでくれたから』って。ありがとうって言ってくれたからって。そういう人、関崎くんのようなタイプの人にはいなかつたから、きっと自分のことを好きになつてくれたんだって、思い込んでいたみたいなの」

「ああ、お茶わんこそば事件だ」

総田から聞かされた、五杯のお茶わんこそば。だからあつさり断つちまえつて思つたんだ。まったく、ああいうとおがおとひっちゃんの人のよいところで、罪作りなところなんだ。

「話を聞いていて、ああ、きっと関崎くん、ふつうの女子にするような態度で話をしただけだつたんだなって、思つたわ。一年の子が寝てしまつた後、一緒にいた子も言つたのよ。ずっと周りが盛り上げづけてきたけれど、かわいそうなことしてしまつたのかもしれないって。だから、委員長さんもこれ以上傷つけたくないからって言つて、今日関崎くんに会わせて、きちんと結果を出してもらおうと話していたらしいの。最後にお互い納得づくで終りにしようねつて。もちろん、その子には話さなかつたらしいけれども、一年生ふたりがついてきたのは、そのことがあつたみたいなの」

もう、天才参謀だなんて言葉は返上しなければなんない。さつきたんの門前で咲いていたあの葉牡丹の花。僕は貧弱だ、みつともないと思つていた。葉っぱの毒々しさに負けて、なんてわび

しい花なんだらうと思つていた。とんでもない。葉牡丹の花は僕だ。周りからさんざん「天才参謀」だと離し立てられ、舞い上がり勝手に解釈して、結果、黙つていればうまくいくはずだつたことを泥沼化してしまつたつてことだ。

「まじかよ」

「ほんとよ。けど、まさか佐賀さんという人がくるとは思わなかつたらしくて、相当ショックを受けてしまつたらしいの。それに加えて、辛いことがあつたらしくて氣分が悪くなつてしまつて、本当の赤ちゃんみたいにずっと同じことばかり繰り返してたわ。きっと傷ついたんだと思うの」

そのことは反省しないよ。佐賀さんはその倍傷ついている。僕はただ、自分の読みが甘かつたことが許せなかつた。黙つていれば佐賀さんの思うがままに進んだらう。健吾くんからもつた情報をきつちりと吟味しないで、立村側の情報を集めようとしなかつたことこそ手抜きの証拠だ。どうしておとひつちゃんにもつと近づかなかつたんだらう。佐賀さんのことしか考へていなかつた僕のミスだ。

「それで、委員長さんはあの子を起こして、約束させたの」「約束つて、何をだよ」

「関崎くんに会わせる前に、ちゃんとこれだけ約束しろつて。『関崎くんがどんな言葉を返そつとも、決して相手を恨んだらいけない。約束できるなら、これからふたりで会わせるけどどうする?』って。委員長さん、一年のあの子のことが可愛くてしかたないみたいだつたの。一生懸命、何度も話し掛けて、最後は指きりしたの。私に、佐川くんがしてくれたみたいに」

小指の先が充血してゐみたいだつた。僕は小指の先を耳に突つ込んだ。

「その後は、私もわからん。ただ、関崎くんは一生懸命話をしていたけど、あの女の子は妙にテンションが上がつていつて、結局違う風に受け取つたみたいなの。いくら言い返しても話が通じなくて、

「うとう関崎くんはあきらめてしまったの。戻ってきて、その子、一年の子に一生懸命話してたからわかったわ。関崎くん、自分は公立高校に進学するつもりだからきっと合はないし、よくお互いを知らないから、お付き合いするのは難しいと思う、みたいなことを言ったみたいよ。でも、その子は『私は青大附属高校に進学させられません。学校から追い出されることに決まっているから、かならず公立高校に追いかけにきます』って、力強く言い張ったようなの」

公立高校へ追い出される？ 青大附中つてエスカレーター式じゃなかつたつけ。

第一、おとひっちゃん、第一志望、青大附属高校だろ？ あまり詳しいことを突っ込んでもしょうがないとはわかっていても僕は聞かずに入れなかつた。

「それってどうことだよ。だつておとひっちゃん公立すべり込めだろ！」

「だから、きっと、関崎くん、お付き合いを断る口実に、使つただけなのだと思うの。けど、その子はどうしてもその意味が理解できなかつたみたいなの。どうしても、どうしても関崎くんを好きでいたいみたいだつたの。そうしないと壊れてしまいそうだつたの。その……杉本さんつて人は」

おとひっちゃんがなぜ、あきらめてしまったのか、だいたいおぼろげに見えてきた。

ふつうに話せばきっとわかつてもうると、最初はおとひっちゃん、立村ふたりとも思つていたんだろ？。きちんと話をつけて、失恋してもらえば丸く收まる。けど、杉本さんはやはり尋常でない人だつたんだろう。懸命に、どんなことがあつても、おとひっちゃんへ必死にしがみつきたかつたんだろう。佐賀さんから聞いた理由を考えればそれも納得する。学校で無視され、嫌がらせを男子からされつづけ、先生からも嫌われる。自業自得なので僕は同情する

「氣さらさらないけれど、そんな生活の中でたつたひとり見つけた「自分にお礼を言つてくれる」男子。それがたまたま、おとひつちゃんだったんだろ？。

さつきたんも氣付いている通り、「してくれたことに対するお礼をいつ」のはじく普通の礼儀だ。僕もお茶を入れてくれたくらいで相手へのめり込んだりはしない。単なる儀礼だと思つだろ？。ふつうは。けど、杉本さんはそうじやなかつた。

今まで、お茶を入れてあげて、お礼を言つてくれる男子がほとんどいなかつたんだ。きっと。総田も内川も、最初に青大附中へ出かけた時、お茶をすぐに断つたと話していた。おとひつちゃんだけは、そんなに嫌われている杉本さんことを同情したのか、それとも何も感じなかつたのかわからないけれど、きちんと礼儀を守つた。ただそれだけのことだ。そういう相手がもし、杉本さんの周りにいたとしたら、ここまでおとひつちゃんにのめりこんだりはしなかつたんじやないだろ？。そうだ、

唯一守つてくれている、あの立村評議委員長相手だつたら、葉牡丹を差し出しても両手で受け取つてくれだろ？。

繰り返すけど、おとひつちゃんは決して、杉本さんみたいな子を好きにはなれないだろ？。どんな理由があるにせよ、佐賀さんをいじめて、嫌がらせをしたことだけは否定できない事実なのだ。僕の脚本を始め、健吾くんの言葉、その他のいろいろな噂などを複数合わせてみてもそう思つ。

けど、おとひつちゃんは、いい奴だつた。

運悪く、ものすごくいい奴だつた。

だから、杉本さんの想いをあつさりと切つてしまつことにより、すべての人から嫌われてしまわないうに、逃げ道を残してやつたんだ。そういう奴だ。僕だつたらとことん立ち直れないくらい叩きのめして、ふいつと捨ててやる。そつされて当然の女子にすら、情けをかけてやれるのが、関崎乙彦という男なのだ。

僕の、一番の親友なんだ。

さつきたんはちょっと黙り、『くんとつばを飲んだ。僕の表情を伺つた。

「ふたりの女の子が車で帰つて、私、関崎くんと、委員長さんと一緒に話したの。関崎くんも困つていたし、委員長さんも何にも言わなかつたわ。ずっと自転車を置いてあるところで、一生懸命話をしていたの。関崎くん、ひたすら同じこと言つてた」

僕をまた、きつい視線で射た。受け止めた。

「『あのことだけは誰にも言わないでほしい』って

「あのことって？」

「佐川くんがあの、佐賀さんと一緒にいたことを言わないでほしいって、何度も繰り返したの。委員長さんはずっと話を聞いて黙つていたけど、とうとう頷いたわ。さつき、話をしていた男子の人。あの人はずつと連絡をとつて、佐川くんのことを報告していたらしいけれど、それをなかつたことにするからつて言つてくれたの」「なかつたことにするつて？」

立村が僕と佐賀さんについて、健吾くんへ連絡を入れ、不安をあおつていたらしいとは聞いていた。健吾くんが佐賀さんを伴つて駅前に現れた理由はそれだ。僕の顔を見て、もし間違いなどあつたら僕を殴り飛ばす覚悟で。見ただけで気合の入り方が違つていた。

「委員長さんの勘違いだつたことにするつて、言つてくれたの。関崎くんは、あの杉本さんつて人に、一生懸命、礼儀正しくしてくれたんだから、それくらい自分がして当然だつて。いい人だと思ったわ。関崎くんも、委員長さんも」

それでか。

しばらく口籠もつた後、僕は自分のたどり着いた答えをつぶやいた。

「だから、さつきたんは僕に付き合ひをかけるため、嘘をついてくれたんだ」

「ごめんなさい。でも、関崎くんが電話で言つてたの。『さつと雅

弘の奴は、嘘をついて助けようなんてしたら逃げる。決してその場でしゃべらせないようにしてやるしかない』って。私もそう思ったの。だから、言わなかつたの。』「めんなさい」

「もういいよ。親切なつもりでやつてくれたんだよね」

本当は感謝の言葉を伝えたかったのに、出たのは冷たい言い草だつた。

おとひつちやんも、僕の性格を理解しているんだ。あらためてそう思つた。

僕がひそかに佐賀さんを守るために計画していたことを、おとひつちやんは無意識に奪い取つて、やつせたんと協力してやつてのけてしまつた。いつだつたか総田に、

「あいつ、人の言つたことをそのままま鵜呑みにして、自分の手柄にしちまうんだぜ」

とこぼされたことがある。まさに今回は僕がパクリをやられてしまつたつてわけだ。

もちろん、おとひつちやんとさつきたんが、僕のことを守りたくて、懸命にしてくれたことはわかつてゐるつもりだ。さつきたんが必死に嘘をついてまで、僕のことを助けようとしてくれたと、頭の中で感謝しなくちや、とは思つてゐる。けど、本能の方が領いてくれなかつた。

なんで、よけいなこと、したんだよ！

叫ぶ自分が残つていた。助けてもらいたいなんて、思わなかつた。ただ、僕は佐賀さんを守りたかつた。結果的におとひつちやんのやり方で佐賀さんの立場もキープされたわけだけ、本当は、それを僕がやりたかつた。僕ひとりのやり方で、佐賀さんを守りたかつた。

「だから、佐川くん、私、もし必要なことがあつたら、お付きあい相手のふりするから」

「いいよ、さつきたん、いやなこと無理にしなくたつて。おとひつちやんに頼まれた義理はもう果たしたんだろ」

冷たい。いやな奴だ。けどそう返事するしかない。僕は目を向けて、態勢をそのままにしてつぶやいた。

「ううん、だからさつきも言つたわ。私、いつか、そう言つたいと思つていたから」「

俺は、守られたくない、守りたいんだ！

僕はさつきたんの顔を、前かがみのまま振り仰いだ。芯のしっかりした、やわらかい、まっすぐなまなざし。はつかねずみのようなあどけない口元。

そんなさつきたんがいい人だなつて思つている。今でも変わらない。

けど、今の僕はさつきたんの言葉を受け取れなかつた。さつきたんは俺のことを守るつもりでいるんだうけど、俺は、佐賀さんだけしか守りたくないんだ。

気が付いた。やっぱり僕の前には、佐賀さんしか映つていなかつたんだ。

「俺はさつきたんの気持ちには答えられない。『ごめん』

ゆつくり前かがみの姿勢をただし、背をしつかと伸ばし。きつちりと答えた。杉本さん相手のおとひつむちゃんの時みたいに、誤解されないように言つた。

「俺は守ってくれる人よりも、守りたい人を好きになるタイプなんだ」

泣かれるかと思った。罵倒されるかと思った。けど違つた。やっぱり僕の隣りにいたのは、さつきたんだつた。

「うん、わかつた。佐川くん。けどこれだけは覚えていてね」すつかり真っ赤になつた頬を、さつきたんは隠さなかつた。

「私とつきあつていろいろつてことに、交流会の中だけでもしておけば、あの佐賀さんという人には会いやすくなると思うの。そういう時だけ、私を呼んでくれればそれでいいの」

さつきたん、それは、ひどいよ！ そんな俺がひどい奴だと

思っているのか！

声が出た。慌てた。

「俺、そんな汚いことしたくないよー。」

「ううん、いいの。そうすれば、あの人にならと会えるのでしょう？」

そりやそうだけど……。

僕の心に残酷な計算が一瞬動いたのを、さつきたんに読み取られちゃつたんだろうか。

確かにさつきたんの言う通りだ。ここでさつきたんと守り合つたことにしておけば、これから先、佐賀さんと会うのに好都合なのだから。健吾くんもすっかり信じ込んだらうし、さつきたんに本当にこの事を隠しておけば、お互に傷つかないで済む。総田と同じようなことを、僕ならもつと要領よくやる自信がある。

「そうすれば、私も、ほんの少しだけ佐川くんの役に立つているんだと思って、嬉しくなるの。だから、必要な時は言ってください」「傷ついたんだろう。きっと、さつきたんは僕が想像している以上に傷ついたんだ。僕が付き合いをOKするんじやないかと、希望をもっていたんじやないかって気はしていた。たぶん、佐賀さんに出会つていなかつたら、おとひつちゃんの顔色を伺いつつ、お付きあいまで持つていつたかもしない。嫌いじやない、女子の中では一番目にいいなつて思つてている子なんだから。けど、それはもうできなかつた。

「俺は、佐賀さんを守らなくちゃいけない。」

言葉に出でず、僕は立ち上がった。

「『めん。あらためてきちんと話すけど、やっぱり僕は今、さつきたんとは友だちでしかいられない。悪いけど、おとひつちゃんのいるところに連れてついてってくれるかな』

さつきたんの縋る目を、振り払いながら。

さつきたんはあきらめ加減に頷いて、ガラス戸を開けた。春だった。外の空気はもう、完全に和らいでいた。室内のこもった空気よりも、まだ冷たさの残る、鼻毛が震えそうな外気の方が、僕には気

持ちよかつた。

駅の裏は海だった。少し裏を回つたところに小さな公園があつて、ショッちゅう大道芸人や動物披露ショーなどが行われていた。僕も小さい頃はよく観にいった。おとひつちゃんも一緒だつた。ロバとか七面鳥とかが臨時の柵の中でちんまり座つてしたりした。けど今はそんなところ、めつたに行きやしない。夜中には暴走族とか、ちよつと変わつた感じの人たちが集まる集会とか、寄るとちょっと怖い場所に変わつていて。当然のことだけど、子どもが遊ぶこともほとんぢない。

さつきたんが連れてきてくれたのは、ほとんぢ人のいない公園の中だつた。

「ありがとう、ここだつたんだ」

口を利かないで、たださつきたんと五分くらい歩いていた。潮の匂いが気持ちよかつた。だんだん歩いているうちに寒くなつて、何度かさつきたんはくしゃみしていた。

「佐川くん、また、四月に学校でね」

「うん、さつきたん、同じクラスになれたらいいな」

言つてしまつてから後悔した。僕はたつた今、さつきたんを振つたばっかりじやないか。

精一杯の譲歩をしてくれたさつきたんに對して、

「俺は守られるんじやなくて、守りたい人を好きになるタイプなんだ」

と、言い訳にならない理由でもつて跳ねつけたばかりじやないか。

最低野郎だよな。俺は。

「うん、お祈りしていいいい？」

少し、にじみ出るような笑みがこぼれていた。本当だつたら僕は、めいっぱいの笑顔でもつてさつきたんと帰りたかつた。けど、もうできなかつた。

「また、春休み中に会うかもしれないしや、じゃあね」

僕は手を振った。公園の入り口でさつきたんは何度も僕を振り返りながら、もと来た道を戻つていった。

さて、どうするか。

おとひっちゃんがいるという公園。ろくに手入れされていない。雪がまだ隅つこの方に汚く残つてゐる。足を踏み入れると靴がぐちよぐちよになつた。せつかくいいスニーカー履いて来たのに。僕はベンチの方の人影を探した。

すっかりさび付いた遊具の数々。ブランコも壊れる寸前で、木の座るところが割れていた。シーソーも動かないまま。僕はずつとおとひっちゃんを探していた。

「おとひっちゃん」

小さい声で呼んでみた。

「おとひっちゃん、どここいるんだよ」

「ちつちやな頃と同じよ」、叫びたくなつた。

「おとひっちゃん」

返事はなかつた。僕は適当にベンチのあたりを回つてみることにした。

靴を泥だらけにしながら……時たま、結果の悲惨な通知表をどう親に見せるか考え込みながら……一番端にいるふたりの影に近づいていった。途中のベンチからは後ろ側を歩くことにした。そちらの方が気付かれにくいかも、と思つたからだつた。

さつきたんが話してくれたことは、僕の想像に近かつたとも言えるし、かなりずれていたとも言えるだらう。立村がおとひっちゃんに要求したものが、思つたよりも低いレベルのものだつたことに、最初はほつとした。てつくり、「杉本さんと交際しろ」みたいなことを言われたのではないかとはらはらしてからだつた。「きちんと人間らしく振つてやつてくれ」ということだつたら、簡単だつたはずだ。もつともそういう注文が必要な相手だつたので、まだ問題は山積みのようだけども。立村もその条件と引き換えに、僕と佐

賀さんは全く繋がりがないということを証明すると約束してくれたといつ。

僕からしたら水鳥中学丸儲けって気がする。

健吾くんも話していた。これから立村を弾劾裁判にかけるらしい。青大附中つて不思議な空間だと思うんだけど、この時代においてまだ「弾劾裁判」なんてもんがあるらしい。さんざん嘘を言って健吾くんを不安にさせた罪を、上の先輩によつて裁いてもらつらしい。どんなことするんだろうか。「裁判」という以上は有罪か無罪かを決めるんだろう。立村が宣言した通り沈黙する覚悟を決めたのだから、当然有罪扱いされるだろう。

また、僕にも殴った後約束した通り、杉本さんをこれ以上水鳥中学に迷惑かけないようにする、という約束の件。正直なところそれさえしてもらえれば後はどうでもいいつてのが本音だ。もちろんおとひつちゃんを追つて公立高校を受験するのは勝手だけど、それは別の話。交流準備会には一切参加させないようにしてくれるはずだ。立村が一方的に非を請け負つてくれるならば、水鳥中学は万々歳だ。完全犯罪つてことで、片付けられていたら、僕ももつと気楽でいられただろう。

いつもは僕も、上手に片をつけている。総田に頼み込んでうまく図書準備室を借りて、佐賀さんとふたりきりで相談し、杉本さんを再起不能なまでに叩き落し、おとひつちゃんからも引き離す。完璧な計画のはずだった。少なくとも、立てた段階ではそう思つていた。けど、僕は根本的に間違つていた。おとひつちゃんが僕の想像していたような、単細胞のいい奴なんぢやないつてことと、蠍人形の立村が実は相当な兵だつたこと。そして、さつきたんの行動力と想い。すべて僕が目をふさいでいたことばっかりが、今ごろになつてやつてきた。

見つめていたのは、佐賀さんのことばかりだつた。寝ても冷めても、鈴蘭優のポスターを通じて佐賀さんばかり追つていた。今なら分かる。佐賀さんをどんな卑怯な真似しても守りたかつただけだつ

た。おとひつちゃんに嫌われることを覚悟で、佐賀さんに評価してもらいたかった、それだけだった。

けど、結局守ったのは、おとひつちゃんたちの手でなんだ。僕はただ、取り返しできない寸前まで問題をふくらませただけだつた。

ベンチ五つ分離れたところに、人影を見つけた。

ふたりだった。おとひつちゃんだつてことは、ひとりの背が異様に高いことからすぐにわかった。もうひとりは誰だろう？

野郎だつてことは見当がついた。しばらく様子を見ながら少しづつ近づいた。

「おとひつちゃん？」

一つ分のところで声をかけた。ふたりの影がじつちを向いた。

「雅弘か」

何か用か、とは言わなかつた。隣りの奴だけが、冷たく僕を見据えている。何か言わないとまずいだろ？ 僕の方から先制攻撃をしてみた。

「貸し借り、これでゼロだな」

蝶人形がかすかに微笑んだ。冷たそうだが、それでいて全く動じないつて風に見えた。

隣りのおとひつちゃんは、そいつに向かい、もう潮時だろ？ 顔で顎でしゃくつた。

「悪かった。そろそろ行くよ」

「弾劾裁判か？」

僕もできるだけ冷たい響きを持たせるよつとして尋ねた。同じトーンで話をしたかった。

「そうだ。覚悟はしている」

濃い目のチェックが入つたグレーのブレザー制服姿野郎は、かばんのとつてを持ち直すと、おとひつちゃんに軽く一礼した。後、僕に向かい、

「関崎に感謝するんだな」

また捨て台詞を残して歩いていった。初めて会った時とは違う、堂々とした態度だった。最初からああいうところを見せていたら、僕も「腹下しの蠅人形」だなんて見くびらなかつただらう。黙つて見送り、後姿が角を曲がるまで待っていた。

僕とおとひつちゃん、ふたりきりになつた。ベンチの黒い背に片手を置き、僕はおとひつちゃんの脳天に向かつて語りかけた。

「おとひつちゃん、みんな聞いたよ」

返事はなかつた。

「さつきたんにみんな話を聞いたんだ。俺が聞き出したんだからさつきたんは悪くないよ」

さらりと木々の擦れる音がした。

「ほんとにごめん」

身動きしなかつた。無視したいんだろうか。急に身体が冷えた。

「俺、いつになつたらおとひつちゃんの弟分から脱皮できるのかな」
何か言つべきことがもつとあつたよつた気がした。くびくび説明したかつたけれども、なんだか照れくさかつた。いつもだつたらおとひつちゃんに言われていることを、繰り返すことはしたくなかつた。ただ、伝える言葉だけぽんと投げ出した。

おとひつちゃんは少しうつむき加減になり、がくんと頷いた。そのまま態勢を崩さなかつた。僕が離れていても追つてこなかつた。

頭を二つと叩かれた。総田だつた。

「いや、なんでもないよ」「じゃあちつと俺の話を聞け」

上の空で返事しているのがまずいんだろう。自分でもわかる。総田は口を一回への字のした後、いつもの調子でしゃべくつた。

「なんかなあ、青大附中の『忠臣蔵』テープ、あれを聴いてからつてもの、生徒会連中の田の色ががらつと変わっちゃったんだ。佐川、お前には悪いがあのさむいほ症候群のくさい演劇台本、あれは却下だ。内川の奴、すっかり田を輝かせてさ、『ぜひ六月に、時代劇をやりましょう! 演劇だと大変ですから、放送委員会を巻き込んで、ラジオドラマっぽくやりませんか! やつぱり、時代劇は男のロマンですよー』って騒ぎ出したんだ。もうあいつも、燃えるとやるからなあ。俺もお口あんぐりよ。勧善懲惡ラジオドラマ・生徒会製作で決定だぜ、おい」

いいかもしねない。公立の水鳥中学なんだから、あまりお金の掛かることはできないだろう。それにラジオドラマだったら、声だけ演技するだけでいいはずだ。即席声優でもOKだろう。例の「中学演劇脚本集」から選ばなくたつていい。放送委員会を巻き込んで、昼の放送で流してもいい。頭いいこと考えるもんだ。やつぱり総田と内川、この二人、よくやるよ。僕の出番はもうないんじやないか? 「つたぐ、天才参謀の名が泣くぜ。お前にはこれから、関崎を丸め込むつていう大きなお仕事が待つてるんだぜ。なんとかお茶わんこ娘は追つ払うことできたみたいだけどな。世の中まだまだ先が長いんだ。第一、第三の悲劇が続かないとも限らんぜ」

「誰が天才参謀なんだよ。

また物思いにふけつた。

ふたつにじばつたあの髪の、あの人のことを。

健吾くんが誤解したまま笑顔で帰った日のことを、僕は思い出していた。

おとひっちゃんとわたくさんの演技が完璧だったおかげでその場は凌げたけれども、結局は騙したことになってしまったわけだ。真っ正直なおとひっちゃんが嘘八百をつきましたことばっかりしたってもある。

この展開、きっと立村評議委員長がすべて計算したものだらう。そう信じて疑わない。おとひっちゃんがひとりで思いつくわけないじやないか。あいつみたいな一本気な奴が、こんな入り組んだ計画を立てられるわけがない。もつともおとひっちゃん本人はきっとひとりで立てた計画だと勘違いしているだらう。用務員室か帰り道か次の日の電話か、とにかく立村に「佐川の尻拭いは次のようにしたほうがいい」と吹き込まれて、それはいい、と素直に判断したというのが妥当だ。僕がもつと早く気づいていたら、ちゃんと進路修正してやったのに。

ほんとだ。どうして僕は気付かなかつたんだろう。本当の敵は、別にいることを。隣りの総田がひたすらしゃべりまくつているのを聞き流し、僕は改めて後悔した。

「おい、佐川、聞いてるのか？」

総田が、いきなりこめかみのあたりを握りこぶしでぐいぐいやりだした。つぼマッサージ、気持ちいい。

「いいいい、もつとやつて」

「お前変態じやねえか」

「いいよ、もつと締めて」

「こええなあ

手を離してくれた。僕は押えられていたこめかみを自分でもう一度もんだ。「あのなあ、お前さ、あの青大附中の女子、気にいつ

てたんだろう？」

「はあ？」

とぼけるべきか否か。たぶん気付いてこるだ。隠すのもおとひつ

ちゃんとみたいでみつともない。

「どうやら図星らしいな」

「関係ないだろ」

もう会えないかもしない。やりきれなくなつてくれる。

「あのな佐川、お前自分で自分がわからんねえだろ。ほら、俺が聞いてやる。今までの礼だ。思春期の男子が持つ性欲処理その他、ご相談にのりまつせ」

「総田の方がそつちの問題、まだてこずつてるんだろ」

怒らせないぎりぎりのところで、からかい口調で返事した。

「せつかく俺が心配してやつてるのにな、いやな、この前例の集まりで、気になる噂を小耳に挟んだんだが、どうしたのかなあ」どうした総田、いきなり意味ありげな口のゆがませ方は。僕はそつぽを向いた。

「ほらほら、すねねえでさ。つまりだな、四月以降の交流会については、しばらく佐川、お前を降ろしたいっていうだれかさんの希望があるみたいでなあ」

総田の言葉の意味が、一瞬読み取れなかつた。

「だれだかさんつて誰だよ」

「お前の大親友」

「こくんと空気を飲み込んでしまつた。むせそうになつた。げほげほやつてると総田が背中をばしばし叩いた。かなり痛いんだけどな。『俺も耳を疑つたけどな、あいつ本気だぜ。お前、思い当たる節あるの?』

総田はどうのくらい氣づいているのだろう。僕にはわからなかつた。

はつきりしているのは、総田の「う」とか全くガセネタではないということだらうか。そう言えば四月以降の交流会について予定は決まつていてるはずなのに、あいつは一言も教えてくれなかつた。

青大附中の連中にも僕が、涉外役だつて伝えてあるはずなのにだ。変だとは、思つていたんだ。『それについてはただ今、内川と俺と

の一人体制で反対運動をやつしているけれど、なにせあのシーラカンス野郎、燃えたらとことんだろ？ 僕としても事実関係を掴まない限り動けねえからなあ。おいおい、動搖してんじゃねえの？」

とことん総田は攻めてくる。怖い、怖い。去年までの僕だつたらもつとつらつとした顔でいられたのに、どうしてか今だけは駄目だつた。唇がかさかさして、乾いた皮をはいだ。ひりひりした。

「それ、おとひっちゃんが俺を外したいって言つてるのか？」

「そりなんだよ。やたらと意地になつちまつてさあ。『雅弘がある会に出ると、かえつてひどいめに遭う可能性があるから、涙をのんで出さない。理由については言えない』ってな。いかにも理由を知りたいなあといわんばかりの、言い方だろ？ となつたら聞かずにはいられない性分なもんでね」

俺がひどいめにつて、誰にひどい目に遭わせられるんだよ。立村か？

大丈夫だよ、今度は俺だつて殴り返せるよ。この前は油断していたから。

あいつの性格上、想像できないことではない。僕があのまま佐賀さんといぢやついていたつてことになつたら、たぶん健吾くんあたりから決闘の申し込みが届くだろ？ し、立委員長だつて黙つてはいないだろ？ それをうまくとりなして、何事もなく終わらせるために僕を外しておくつていうのも、一つの手だろ？ けどそれは裏を返すと、もう一度と佐賀さんに会えないつてことになる。だって佐賀さんも、僕も委員会には関係ない奴だ。佐賀さんはもしかしたら一年で評議委員を狙えるかもしれないけど、万年学習委員でもう三年、後のない僕にはおとひっちゃん経由の通り道しかないのだから。

文句を言いたくて、言えない。

おとひっちゃんの判断は確かに、正しかつたんだから。たとえ立村に吹き込まれた案だとしても、僕がこれ以上酷い目にあわないで済むにはこれが一番なんだ。佐賀さんに会えない、もう連絡できな

い、それさえ飲み込めばだつた。

「ほらほら、言つたら楽になるぜ、あの子のことかなあ。うちの川上が鋭くチェックしていたぜ、『あの子、なんだか佐川の生き血をすすりにきたみたい』ってな。俺もそう思つぞ」

「そんなんじやねえよ！」

かつとなつたのを押えきれなかつたのは失言だ。いつもパパ活ーンじやない、完全に総田のペースに乗せられた。僕が言い訳をすればするほどどつぼにはまる。あきらめた。素直にうなだれるに限る。総田に対してはそれが利く。

僕は所々曖昧にぼかしながら『たごたの説明をすることにした。あんまりにも自分が情けなくなるようなところはもうちろん飛ばして、だ。

「しぐじつたよ、ほんと」

総田は一通り聞き終えた後、ぽんと膝を打つた。

「あの蠅人形がなあ。そつかそつか。まあ、そういうことだつたら関崎も大事な弟分を魔女の手から守りたいだらうなあ

「だから、なんで魔女なんだよ！」

ふたつに分けた髪型が良く似合つ、かすみ草の雰囲気の子なのにだ。きっと川上さんになにか吹き込まれたんだ。きっとそうだ。訂正しどとかなきや。

ゆつくりと、顎のところに親指と人差し指でブーメラン形をこしらえ、総田は髭剃り後の白っぽい所をさすつた。

「けどなあ、佐川、お前もうとつくて、一番いい方法知つてるんだろ」

総田は僕をじんわりと見た。ちつとも焦つていない。当事者じやないからな。

「なんだよそれ

「とぼけるなつて、お前がわからねえわけないだろ。さつき言つてたよなあ。なんか、バスケ部野郎が言つたんだつてな。お前に彼女

がいるなら、安心して自分の彼女を手伝いに出せるってな

確かに。健吾くんはおとひっちゃんをつきたんに騙されたんだ。あいつてもしかして、おとひっちゃん以上に単純野郎なのかもしない。ふつう、疑うだう？ 僕だったら絶対に裏を取ろうとするけれども。総田はさりげに声を低めて言つ。

「なら、そう思わせちまえばいいだろ。どうせ生徒会関係は熱血関崎と、蠅人形立村とが仲良く話し合いするんだ。表舞台は一人に押し付けて、佐川は例の子とよろしくやつつ、ちゃんとカモフラー ジュをこしらえるつてな。お前、そういうの得意だろ。ていうか」また言葉を切つた。僕を横目で見た。

「そのつもりだったろ、佐川」

いつもの僕だったら、何も考えずに選んでいた方法のはずだった。総田に言われる前から、答えは出ていたはずだ。それを選べないのは、まだ僕が総田の求める「天才参謀」へ復活していないからだ。「ま、これから俺も、佐川にもう少し活躍してもらわねえと困るからな、今日のことは貸しにしどいてやるわ。ま、人間生きてたら、いろいろあらあな

やはり総田は話がわかる。たくさんの修羅場をくぐりぬけてきただけある。説教じみた言い方一言もしないのに、僕がしたいと思つていて忘れていたことをさらりと教えてくれる。しかもそれをあとひっちゃんと違つて僕の負担にしないところがまたいい。

僕は立ち上がり、敬礼した。

青潟の四月はまだたんぽぽが咲いた土のとこに雪が残つてゐる。スニーカーのつま先も真っ黒くなり、たまに滑りそうになる。僕の後ろには誰もいないから、学校でグラウンドを走つてゐる時と違つて、泥ひつかけて文句言つ奴もない。僕だってそれほど足が遅いわけじゃないんだけど、やっぱり元陸上部には負ける。

先頭のおとひっちゃんとは、一軒、家が挟まるだけの間が空いて

いる。

早く終わらうよ、おとひつちやん。むづ苦しいよ。

途中おとひつちやんが飛ばしすぎて姿見えなくなつたところで、少し歩いたりもしたけれど、結局、疲れの度合いは一緒だつた。へろへろになりながら、ゴールの駅前にたどり着いた。すっかり太陽が昇つている。駅終点の市営バスから降りてくるのは、スース姿の大人ばかりだつた。制服を着た高校生っぽい奴らも数人たむろしている。ゴールはうちの店だつた。朝七時前でも駅前は人が結構いるんだから、もつと田立たないとこにしてくれたらいいのに、おとひつちやんはやっぱり抜けているんだ。

「雅弘、お前、宿題やつたのか？」

まだ春休みの宿題に手をつけていない僕の状況を、長年の勘でおとひつちやんは気付いていたみたいだつた。首を振る。

「じゃあ匾に届ける

「え？」

いつものことだつた。おとひつちやんは始業式二日前くらいに、わざわざ宿題を完璧に仕上げたノートを貸してくれる。全部それを写しておけばいい。おとひつちやんの答えは大抵当たつていて。僕の成績レベルで宿題全問正解だと確実に怪しまれるので、少しだけわざと間違えたりしておけば完璧だ。

「おとひつちやん、ごめんな

「じゃあ、後で」

おとひつちやんは背を向けた。僕が裏口から入らうとした時、

「あ、雅弘」

声だけでぐいと呼び止められた。短い言葉。

「なんだよ」

しばらく口籠もり、おとひつちやんは紺ジヤージ上のチャックを上まで締めた。つめえりつぼく見えるように着こなしていた。

「学校始まってからはしばらく生徒会室に寄り付くな

それだけ早口につぶやくと、おとひつちやんは軽く跳ねるように

して、自分のうちの方へ走つていつた。まだ走り足りないんだ。元陸上部は体力のけたが違う。帰宅部の僕と一緒にするなつて思った。

やつぱりそなんだ。総田の言つてた通りだ。

汗をかいて身体があつたかい。おなかがすいた。たつぶりご飯を食べたい。味噌汁の匂いに誘われて、僕はいつたん考えるのをやめた。食欲こそ一番だ。おとひつちゃんがこんな風に僕を「朝のジヨギング」へ誘い出したのは、二学期終業式の翌日からだった。いくら「水に流す」と言つたところで、奴は簡単に許してくれないだろ。親友扱いしなくなるだろ。覚悟していた。もうひとりで宿題やらなくちゃいけないし、おとひつちゃんとも口を利いたらいけないんではないかと思つていた。

けど、おとひつちゃんはほんとに、あれこせつぱり水に流してくれた。

いきなり電話をかけてきて、

「明日からお前、俺と朝走るんだからな。準備しとけ」
と言い残し、またがつちやり切つた。冗談かと思った。本気だつた。おとひつちゃんは朝六時半ちょうどに裏口までやつてきて強引に連れ出し、スニーカーの履き方ひとつにも文句をつけ……結び方が甘いとか、足を痛めるから別の靴を履けとか……一十分から三十分間、しつかり走りつづけた。

おとひつちゃんが元陸上部の長距離ランナーだったことを知らぬものはいない。けど、今までは早朝トレーニングなんてしてなかつたんじゃないかなあ。本人曰く、

「現役だった頃はもつといけたんだけどなあ、身体なまつたな」と悔しそうだつたけれども、帰宅部の僕にとつてはしんど過ぎた。もういいかげんにして欲しい、と思つ一方で、大人しくくつついて走つていた方がいいんじやないか、っていう気もしていた。

言葉を使うのが苦手だ、おとひつちゃんつて奴は。枝をほきんと

折つて投げつけるような言い方をする。身体を使つた言葉ならすぐ
にぴんとくる。顔を見たり、動作をチェックしているだけでおとひ
つちゃんの考えていることがよくわかる。へばる寸前で顎上げてい
る僕を、曲がり角のとこで緩めることなく待つていてくれているお
とひつちゃん。ひたすら追つかけていた。終わつた後で、どこでく
すねてきたのかガムを一枚渡して走り去つていくおとひつちゃん。
何も言わないけれども、まつすぐ見つめてくるおとひつちゃんがい
た。

やつぱり俺は、おとひつちゃんの「弟分」なんだ。

逆らえない。

どんなに理不尽だつてわかつていても、だ。

あいつにとつて僕は、まだ面倒を見ることが必要な弟分であるこ
とを改めて実感した。いつもおとひつちゃんにあわせて「弟」の顔
をこしらえてきたけれど、とつこの昔に卒業したと思つていた。け
どやつぱり、おとひつちゃんに最後はかばわれてしまつたというわ
けだ。

俺はやつぱり、守られるだけの奴なのかなあ。

走れば走るほど、重たくなつていく鉛みたいなものが心臓のあた
りに落ちてくる。

中学三年用の参考書と、うちの母さんが買つてくれた真新しい下
着一式を机の上に投げたまま、僕はベットに横たわつた。天井には
だいぶ古ぼけてはがれかけた鈴蘭優が笑つていた。

やつぱり、俺はもう、佐賀さんに会えないのかな。

何度も鈴蘭優のポスターに話し掛けたまつりした。野郎友だちに
ばれたら何言われるだろつ、不気味がられるだろうな。

もう一度鈴蘭優を見上げて、同じ髪型のあの子のことを思つた。

そう、「想つた」。

人手がないつてこともあつて鈴蘭優ポスターで夢見る時間はすぐ
に遮られた。父さんに言いつけられ、仕方なく店のドア拭きに専念

していた。自動ドアの硝子がまぶしくて目が痛くなりそうだった。ゴールデンウイーク時期は夏っぽい気温になるんじやないかとうちの父さん母さん、真剣な顔で話していた。手の油がついた部分を、へっぴり腰で「じご」し拭いていると、声をかけられた。

「佐川さん、今、大丈夫ですか」

僕の名前を「佐川さん」と呼ぶ人は、ひとりしかいない。ぞうきんをしつかり握り締めたまま腰を伸ばし、振り向いた。喉からばくんと爆弾が飛び出しそうだった。あの声、全身ピンク、ピンク、ピンクの女の子。あの子だ。身体が一気に春体温で上昇していくのがわかる。早く、早く、なんか言わなくちゃ。ほら、あの。

「佐賀さん！」

それしか言葉が出なかつた。

「今日、コレクターのお稽古だつたんです。久しぶりに寄つてみました。あの時のこともお礼が言いたくて」

僕が大嘘言つた時のことだらうか。ちくつと痛む気持ちを抑えつつ、僕は首を振つた。

「たいしたことないよ。けどあれから大丈夫だつた？ 佐賀さんは」「はい、私、評議委員になりました！」「あれ？ まだ新学期始まつてないんだらう？」

「いいえ、うちの学校は公立よりも始業式が三日早いんです」

今日の髪型はいつもお団子ふたつ。やつぱり佐賀さんはこの髪型が一番似合つている。

「今度の交流会は、それじゃ堂々と参加できるね！」

「はい、佐川さんもいらっしゃられるんですか？」

「うん、なんとかさ」

口籠もつた。僕もおとひっちゃんに言い渡されたのは今朝のことだ。おとひっちゃんはすでに裏で手を回しているらしい。総田に気付かれるくらいだから、参加できる可能性は七割方、ないだらう。仕事中だと気、遣つてくれたんだろう。佐賀さんはピンクのかば

んを開いて、何かをさつと取り出した。別に、佐賀さんと一緒にたらガラス磨きなんてさぼつたつていいのにな。

「それでなんんですけど、これ、新井林くんから頼まれて預かってきました。後で読んでくださいね」

両手で一度胸に当てた後、僕を見つめてすうっと差し出した。漫
画で見たことのあるラブレターを渡す場面みたいだつた。そんなわ
けないけどや。じつちもなんというか言葉が出ない。

ああそうなんだ。俺にはさつきたんがいるから、安心して連絡できるんだよな。

三月末のことを思い出した。痛いところをつづいてしまった。あの時佐賀さんはずつと、健吾くんに寄り添つていたつ。僕の隣りにもさつきたんがいたのに、なんだかぐさぐさくるような気がしてならなかつたことを覚えていた。

「ありがとう。じゃあ後で読むよ」

ソフトクリームに見える複雑な折り方の手紙だつた。僕は佐賀さんのがいなくなるまで見送つた後、大急ぎでガラス拭きを終わらせた。途中雑になつてしまつたところがあるけれども、まあいつか。

部屋に戻り、だいぶ色あせた鈴蘭優のポスター眺め、ベッドの上へ横たわった。

文字を読む時だけはちゃんと田を開け、ポスターを眺めるときは目を寄り田にして少しほやけるようにしてみた。ぼやあと佐賀さんの姿と声が蘇つてくる。自分に言い聞かせ、ソフトクリーム型の手紙を開いた。もう、元の形には折れないぞ。

佐川さんへ

ずっとお手紙を書こうと思つてました。お話したいことがたくさんありました。けど、私の周りではいろいろなことが起つて、話せば話すほど大変なことになりそうなので、お手紙にします。

まず、私のことなんですけど、ちゃんととお約束通り三年D組の評議委員になりました。もちろん新井林くんも一緒です。クラス全員満場一致でした。担任の先生がもちろん力を入れてくれたのもあるんですけど、やはり女子がみな、杉本梨南ちゃんの存在は、てくれたのが大きかつたんだと思います。もう梨南ちゃんの存在は、クラスでも薄くなつてきています。先生は最初、梨南ちゃんを、「人の心がわかるように」という理由で保健委員にするつもりでいたみたいでした。けど、保健委員の人たちがそれ以来必死に仲良くなつて、どの委員の男女も一気に理解しあおうと動くようになり、結局梨南ちゃんはどの委員にもなれませんでした。

この前お会いしたときにお話したとおり、私は梨南ちゃんをかばつてあげなくちゃいけないと思いました。だから、これからはクラスから嫌われてしまつた梨南ちゃんを、さりげなく面倒見てあげるようにななくてはと思つています。

決して、私は梨南ちゃんのことを好きなんぢゃありません。佐川さんとお話してわかりました。嫌いです。大嫌いです。でも、嫌いだからいじめるという発想自体が間違つているような気がしてなりません。嫌いだったら、哀れんであげること、そういう考え方しかできない人のことを同情してあげること。自分とは違う世界の人なんだと思つて、接すること。これが大切なんぢゃないかなあと、お母さんと話して思いました。

嫌うんぢゃなくて、許すこと。そういう人がいるんだと思つてあきらめること。

今、あらためてお母さんの言つ言葉が本当だつて思いました。

だから、私はいじめたりしようとは思いません。ちゃんと、クラスをまとめて堂々と評議委員を務めよつと思つてます。

佐賀さんつてほんと、文章がうまいなあ。あらためて思う。

僕なんてまだ小学生と間違えられるような書き方しかできないのに。公立高校入試に作文の試験が無くて本当によかつたって思った。佐賀さんの手紙はまだまだ長かつた。

新井林くんも、今は完全に梨南ちゃんのことを無視しています。もうどうでもいいみたいで。さすがにクラスで悪口言つ人がいるとたしなめることもありますけれど、もういてもいなくともどうでもいい人になつちゃつた梨南ちゃんにかまう人がいなくなつたというのもあります。

梨南ちゃんは、暇さえあれば関崎さんの手紙を眺めています。折れ目がつかないよう下敷きの間に挟んでいます。立村評議委員長が毎朝様子を見に着ます。「関崎さんは今度いついらつしゃいますか」と繰り返してます。いつかは関崎さんと会えるのだと信じているみたいです。

でも、新井林くんが話していましたけれど、立村評議委員長は、もう一度と水鳥中学の方へ梨南ちゃんを送らないつもりだそうです。ここからは絶対に誰にも見せないでください。関崎さんにも話さないでください。

なんだろう、おとひっちゃんのことだらうか。
気になつて続きを読みつけた。

三月に、関崎さんと佐川さんと、もうひとりの女子の人と会つた後、卒業した先輩に思いつきり怒られたそうです。新井林くんが言うには、叩かれたりしたらしいです。けれど、梨南ちゃんを交流関係のサークルに入れるということだけは、絶対に譲らなかつたそうです。

もしそれをさせてもられないのならば、自分は委員長を降りるつもりだ、とまで言つたそ�です。最後は健吾が割つて入り、なんとか納まつたらしいです。

ですから、梨南ちゃんは表に出ないけど、一応、交流関係のグループにはいます。

今三年の女子先輩で評議委員から降るされた人がいて、その人が仕切つています。一生懸命梨南ちゃんはくつついて、関崎さんのことを見え出そ�としています。もちろん仕事もきちんとやねし、周りは女子ばかりなので、楽しそうです。

おいおい、なんだよ。ところは立村、約束が違うんじゃない
か。

僕は何度もつぶやいた。

でも、その時に、梨南ちゃんをもう一度と関崎さんには会わせないと約束したそ�です。関崎さんは梨南ちゃんから本当は逃げたいんだといふことを、きちんと説明したのにわかつてもらえなかつたら、なんとかしなくてはという理由らしいです。

立村評議委員長は、毎日、梨南ちゃんの様子を見に来てはいろいろ相談に乗つてあげているみたいで。梨南ちゃんは立村先輩のことを「不細工で頭が悪いけど考え方はまとも」という言い方をしてました。評議委員会から降るされたといふことで逆恨みして、最近は失礼なことばかり言つてますけれど、立村先輩は全然怒りません。それどころか、梨南ちゃんを連れて図書館へ行つて話し掛けたりしています。どうして梨南ちゃんは、立村先輩にしないんだろうと思議に思います。そうすればみんなが幸せになれるはずです。梨南ちゃんも幸せになるし、周りの人たちも迷惑をかけられないですむし、立村先輩も満足するはずなのに、どうしてみんなが楽しくなる

よつな」としないんでしょうか。不思議でなりません。

佐賀さんは一番幸せになれるよつな」と、してこらのかな。
僕自身もしているとは思えない。

関崎さんを追いかければ追いかけるほど嫌われるのはわかつていいはずなのに、どうして梨南ちゃんはそういうことがわからないのでしょうか。みんなが梨南ちゃんのせいで不幸になつてているのに気付かないなんて、本当にかわいそうだと思いました。私は幸せになりたいです。だから今日、思い切つてお手紙を書きました。やつぱり、私は、佐川さんに会いたいです。

身体が痺れた！ 田の前の手紙が顔に着陸した。ぱらぱらになつて慌ててまとめた。

佐川さんとお話ししていると、私がだんだん見えてくるような気がします。どうしてかわかりませんが、新井林くんや他の人たちと話していくよつ、本当の私を掘り出してしまったような気になり、怖くなります。こんな気持ちになるのは初めてでした。

佐川さんが話してくれたこと覚えてているのが「職業高校に行く」という話です。

私はそれまで、職業高校なんて頭の悪い人が行く学校なんだと馬鹿にしてました。「めんなさい。本当に馬鹿なのは私でした。私は何にも考えないで、ただ黙つて青大附高、大学へ進むものだと思って、ぼおつとしてました。きっと健吾も梨南ちゃんも同じだと思い

ます。けど、佐川さんがなぜ職業科を選びたいか、その理由聞いて目が覚めました。

自立したい、大人になりたい。初めてわかりました。

その通りだ。いつも口やかましく成績のこととで文句言われる生活から脱出したいし、何よりも自分の力で働いてみたい。自分の能力がどこまで伸びるか試してみたい。勉強なんかじゃなくて、僕の持つている能力そのものを専門で伸ばしてみたいなって思っていたからだ。おとひっちゃんのように、中学入試の雪辱戦とは違う意味で言つたつもりだった。

低レベルな奴だつて馬鹿にされたかもしないって思つていた。でもちゃんと、覚えててくれたんだ。

私も、佐川さんのように、自分の意志と能力でもつて歩いてみたいたいと思いました。ずっと梨南ちゃんの言うことばかり聞いていた頃は、私つてのりまで泣き虫で何にもできな子だと思ってました。けど、佐川さんに会つてからすべてが変わりました。私ももしかしたら、何かができるかもしれない。評議委員になれば、もつといいことができるかもしれない。梨南ちゃんとか立村先輩なんかよりもずっと、上手にできるかもしれない。そんな自信がついてきました。女子とはなかなかうまくいかないことも多いけど、男子のみんなが助けてくれるので、だいぶスムーズに動くようになりました。

そつかそつか、よかつたよかつた。

ただ、どうしても気になるのが立村先輩のことです。梨南ちゃん

のことを気に入っているのはわかつてますが、私のことを冷たい視線で見ることが多くてちょっと怖いです。私は梨南ちゃんのために、いじょうにしてあげようって思つてているのにです。もしかしたら交流サークルのことも、評議委員会関連とは関係ない形で梨南ちゃんと関崎さんを会わせようとしているからじゃないかって、噂もあります。そんなことしたらまた梨南ちゃんは同じように関崎さんに嫌われるだけでなく、水鳥中学の人たちにまた迷惑をかけるはずです。私はそれを止めたいのですが、立村先輩は私のことを嫌つてているみたいで、丁寧だけど冷たい言い方をします。梨南ちゃんに本当のことを教えてあげたのに、わざと私が梨南ちゃんに近づくのを避けるようなことします。

それだったらどうして立村先輩は、梨南ちゃんとお付き合いでしてあげないのでしょうか。

責任取らないなんて、男らしくないと私は思います。梨南ちゃんもかわいそうです。

嫌な予感がぞわつとしたのは、気のせいだろうか。

僕のほつぺたが妙にひりひりしてきた。奴にぶん殴られた跡だ。

私は今、じうじうことを相談できる人が、誰もいません。新井林くんは最近、立村先輩にいろいろ言い含められてるみたいで。私のことを疑うような目で見るので、いつも私はいろいろらしてしまいます。だんだん本当のことが言えなくなつてます。言いたいのに言えないのが辛いです。きっと私は、佐川さんでないとどういうことができるかどうか見つけられないんだと思います。幸い、佐川さんにはちゃんとお付きあいしている人がいるですから、安心して会えます。すげくうれしかったです。お付きあいしてくれてい

る人がいるつてことを聞いて安心しました。新井林くんにも怒られずにお話ができるのが嬉しいです。お願いします。今度の金曜日、またお店に寄ります。

佐賀 はるみ

やられた。さされた。完全に壊れた。

もうほとんど全身がゆでダコ状態のままベットの上でじるじるした。もだえていた。

でんぐり返し、えびぞり、ありとあらゆる技を繰り出し、僕はひたすら笑いころげていた。天井の鈴蘭優がにこやかに僕を見下ろしていた。同じ言葉だけ、頭の中で叫んでいた。やんや、やんやつて感じだった。

また、会えるんだ。佐賀さんと…

笑い納めにエビぞりを二階くらいした後、僕はベットの上にあお向けで倒れた。口の中で何度も空気をかみ締めた。

国語の成績は悪くないんだ。だから読み間違えることなんてない。佐賀さんが何を言いたいかがよくわかる。

俺に会いたいって、ことだら、要するに。

鈴蘭優のポスターに並べた格好で読み返した。

立村が僕と佐賀さんを二の次に見ているのと同じく、僕も葉牡丹の君・杉本さんのことはどうでもよかつた。これ以上かまう気はない。佐賀さんもこの手紙読む限りだと、「かわいそうな子」としか思っていないみたいだ。はつきり負けが決まっている可哀想な相手叩いたつて、後味悪いだけだ。

そのまま杉本さんを放置しておいたらどうなるか。

おとひっちゃんはしょせん、他校の生徒だ。僕が無理に動かなくたっても大丈夫だ。あいつだっていざとなつたら強い言葉で撥ね付

けるだろ？

けど一緒にクラスで顔を合わせている佐賀さんはどうなる？

佐賀さんは評議委員に選ばれたという。相棒はあの健吾くんだし、同じクラスの連中も杉本さんのことなんか無視の一手で通している。これって一種のいじめに近い状態だ。もつとも当然過ぎるだけ当然な制裁される理由が杉本さんにはあるんだから、それは自業自得だと思う。周りだってそう考えているから、先生も大目に見ているんだろう。

だけど、いくら佐賀さんが頭のいい子だつたとしても、あんなに涙もらい、傷つきやすい女の子であることには変わりないじゃないか。陰で杉本さんにハツ当たりされて傷ついてしまう可能性だって大きいにある。杉本さんみたいな人は日本語が通じないんだ。そんな奴に傷つけられて泣き寝入りなんてさせたくない、絶対に。

さらに立村が杉本さんの背後霊として立っているのも危険だろ？ そうだ、問題はあの蝸人形だ。

立村は自分自身を含めた「交流準備会騒動記」の脚本を書き、おとひっちゃんと読み聞かせ、いつのまにか舞台設定を整えてしまった。想像だけど、一番近い予想だろ？ 僕も立村と同じ立場だつたら、きっと似たようなことをしたに違いない。

「友情は音楽とともに」の脚本あらすじを聞かされた段階で立村は全て気づいたに違いない。脚本に盛った杉本さんあての毒なんて、一発でばれていたのだろう。ピアノが弾けなくてやっかみの末に佐賀さんをいじめた杉本さん、このエピソードももしかしたら立村は知っていたのかもしれない。杉本さんを連れて佐賀さんがトイレにひっぱつて行つた段階で、あいつもぴんと来たに違いない。ピーピー腹を装いさりげなく生徒会室を抜け出したのもそのためだろ？ 男子の恥をさらけ出す振りをして、佐賀さんたちを追いかけているんだ

佐賀さんを追い返そうとしたのも、僕と佐賀さんと会おうとした

のを見抜いたからに違いない。杉本さんが途中で吐いちゃつたりしたのはアクシデントかもしれない。けど、すぐに逆手に取り僕と佐賀さんとの繋がりを確認するのに使うとは、たすがだ。僕も同じことをしきりと考えたに違いない。

おとひっちゃんに取引を持ちかけたのはそれからだらう。立村が何をまくしたてたかわからないけど、口八丁でおとひっちゃんを説き伏せ、図書準備室まで押しかけた。もしあの時、佐賀さんと一緒にのところを見られていたら、立村よりも先に、おとひっちゃんにぶん殴られていたに決まってる。

立村は冷静に全部計算して、僕が逃げられないところまで追い詰めた。佐賀さんがいることを確かめ、最後の逃げ場だけ作つて去つた、つてわけだ。後々佐賀さんを脅すかなにかするために。

杉本さんへ紳士的対応をしてもらうためには、自分のことを多少恥さらしだと思われても一向に構わない。奴にとつては葉牡丹もかすみ草と同じように見える花だつたんだらう。

「どうして氣づかなかつたんだよ、俺は！」

敵は毒花・葉牡丹なんかじゃない、葉牡丹の花を守つてゐる、あいつだつた。

佐賀さんの手紙が百パーセント正しいとするならば、立村の奴、杉本さんをおとひっちゃんとくつつけるのをまだあきらめでいいんだ。正氣かよつて言つた。あれだけ露骨に振られたにも関わらず、杉本さんはおとひっちゃんの手紙と写真を見つめているという。表向き「評議委員会と生徒会」の関連する行事には参加させないにしても、個人的にだつたら別だらう。抜け道は確かにある。個人のお付き合いに口出しこそ野暮でもないだらう。おとひっちゃん、そのところ、気がついているんだろうか。絶対気がついてないに決まってる。

立村は杉本さんに関することだつたら見境なくなる奴だ。張り倒

された僕がほつぺたでよつて理解しているつもりだ。しかも佐賀さんに対してもいわゆる「慇懃無礼」な態度を取つてゐるといふ。それだけでも僕には腹立たしいことだけど、何かの拍子で佐賀さんが自己防衛してしまつた場合修羅場が繰り広げられるのは目に見えてゐる。杉本さんの行為が非常識であるうがなかろうが立村には関係ない。評議委員長の肩書きを盾に、全身全靈で佐賀さんをつぶしにかかるだろつ。杉本さんのためなら、腹下しのふりするのも、先輩連中にぶん殴られるのも、全く意に介さない奴なんだ。

そんな奴に睨まれてしまつた佐賀さんの立場を考えると、僕だってこのままじゃあいられない。もし何か間違いが起つたら大変なことになるぞこれは。

私は佐川さんに会いたいです。

おとひつちやんは僕を「守る」ために、交流関連の行事から引き離そうとしている。「弟分」である以上しじうがないことなんだつて、半ばあきらめていた。

さつきたんもカモフラーージュのためにつて申し出てくれた。そんなの汚いやり方だつてすぐに跳ね除けた。「股なんて、いくらなんでも佐賀さんとさつきたんに失礼すぎるじゃないか。

けど、事情が変わつた以上、僕は守られる「弟分」のままでいられない。佐賀さんに会わなくちゃ。どんな汚い手を使つても、僕は佐賀さんの想いに精一杯答える義務があるんだから。佐賀さんを「守りたい」つて気持ちだけ、本物なんだから。

さつきたん、俺とカモモフランジューで付き合つてくれないかな？

しばらくさつきたんと顔を合わせることを避けていた。そりやそりやうだらう。あんな救いのない振り方をしてしまつたんだから、できれば無制限に会わないでめばいいって思うのも当然だらう。僕だつて言い過ぎたつて思つてている。

でも、さつきたんつてよくわからな子だ。

何度もうちの店に来て、母さんに、「チュー・リップのつぼみがそろそろ咲きそなんです。うちの母がおすそ分けしましょうか、つて言つてます」とかなんとか声をかけているんだそうだ。そのうち数回は僕も一階の部屋にいて呼び出されたけれども、風邪引いて寝込んでいるとか言つてしまつた。それでもめげずに通つてくるところ見ると、そろそろ一度は顔を合わせないとまずいかもしけない。そんな覚悟はしていた。

佐賀さんの手紙をもらつてから、僕はもう一度さつきたんが来てくれるのを今か今かと待ち構えていた。だつて、これから計画は、僕が直接さつきたんと話をして了解を得ないと、意味がないんだから。おとひつちゃんも誰も間に挟まないで、きちんと説得しなくちやいけないんだ。

OKしてくれるだらうか？ してくれるわけないだろ？ いや、さつきたんの方から最初に提案してくれたんじゃないか、だつたら。

何度も天秤にかけて見比べてみたけれど、やつぱりさつきたんがOKしてくれる方に傾いているよつて想えてならなかつた。僕の直感が正しければ。

朝、部屋から降りてみると、店はけつじつばたついていた。僕く

らこかそのひよつと上くらこの中学生高校生がつじやうじやしてい
る。あと一日でひの学校を含め公立中学の新学期もあいまつて、
学習参考書がやたらと売れているときいた。万引きする奴もかなり
いるらしい。入荷した本からビニールを引き剥がしながら目配りす
る母さんは、普段以上にぴりぴりしていた。手伝いたくないのだけ
ど、人手が足りない以上無視するわけにもいかない。すっかり寝癖
がついた頭のまま、レジに入った。

「ああら、ちようどよかつた。雅弘、五月ちゃんよ」

母さんが僕の顔を見るなり、にこやかに手招きした。

いつもだつたら愛想悪く逃げるけれども、今日は違う。一度目で
会図しておいた。田が合つとさつきたんは僕に向かってにっこりと
笑つた。相変わらずはつかねずみのよつなきょとんとした表情だけ
で、怒つていなつてことだけはちゃんと伝わってきた。がくん、
と心の中が重たくなつた。レジでひとり前のお姉さんに、文庫の力
バーをかけている振りをして田をそらしていた。

「ほり、いいわよ、雅弘、行きなさいよ。五月ちゃんごめんね。今、
ほんくら息子を花の運び人に出しますからね、どんどん使ってやつ
てね」

母さんは花のことで話が盛り上がりてしまったらしく、結構お気
に入りにしているみたいだ。女子同士だからか。僕の方を見てさつ
きたんは、いつものように優しい笑顔を見せた。田が合つて僕もち
やんと「おはよ」と呴いた。

「佐川くん、たくさんチユーリップ、咲いたのよ。大きな花ばかり
なの」

なんで女子つてみんな、花をくれたがるんだひつ。

「チユーリップつて、そんなにあるんだ」

「うん、佐川くんが抱えるくらじよ」

「どうせ俺は身体小さいよ。

そんなひがみっぽいこと、思いたくないの」。

むつとしたまま、僕はさつきたんと一緒に店から出た。別にやつ

きたんに對してむかついたわけじゃない。あとであやまつといひ。

母さんがさつきたんに手作りのお菓子を持たせていた。

「あつがどうぞります。うちのみんなでいただきます」

「五月ちゃんはほんと、礼儀正しくていい子ねえ。雅弘、あんたも見習いなさい！」

さつきたんとお礼を言つた後、はつかねずみのよつな瞳で見つめるとこが、女人には好感度大らしい。

外は制服姿の女人たちがたくさんつらつらしていた。十一時くらいだと、ちょっと早い匂いはんを食べる時間帯なのかもしれない。

「おなか空いたね」

「うん、佐川くんのお母さんからもひつたお菓子、あとでいただくな」

「うせあぶらつこでーナンなんだろ。母さんの作るおやつはまずい。好きじゃない。けどさつきたんの口には合つようだった。やつぱりさつきたん、見た田より好みがきわものだなつて思った。」

「あと一年なのね。受験まで」

さつきたんが空の白い円を眺めながら小さな声で呟いた。少しはにかんでいた。

「さつきたんはどく受けの」

「青鴻商業なんだけど、私頭よくないから先生にランク落としなさいって言われているの」

「僕も同じだよ。青鴻工業。怒られっぱなし大よなあ」

さつきたんの志望校が青鴻商業高校だと聞かされて妙に納得していたりした。同じ職業科志望同士、気持ちが少しまぎれた。互いに仕入れた志望校情報と内申点計算について、なごみながら話していた。

さつきたん家の堀の裾には、びつしりと背の高いたんぽぼが生え揃っていた。学校近くのたんぽぼにくらべてこの生きのよさはなん

だ、と驚くくらいだつた。茎をちぎって、首チヨンパしたら、きつと遠くに飛びそうな厚みのある、しつかりした黄色い花だつた。

黄色の延長線上に、鉢植えのやはり茎が長い花。十字の親指大の大きさ。葉牡丹の花が満開だつた。

僕は立ち止まって見下ろした。あの時見た、毒々しい紫っぽい葉とキヤベツに似た縮れた葉っぱは、すでに下のところであるく広がつていた。もう「葉牡丹」って花の雰囲気じやない。ただの葉っぱだつた。なんだつて感じだつた。

さつきたんは柄の変わつた縦橢円形のはさみを持ってきた。花を切る時はいつもそれを使うんだとこう。花壇いっぱいに咲き誇つたチユーリップの花、その周りを囲むようにやさしく花を広げているのはパンジー、その他紫色、白、もちろん桜の細い枝、僕の知らない種類の花が溢れでいて、一面花のじゅうたんそのものだつた。そのまんま座り込んで、お花見気分で「Jを広げてお弁当を食べたくなつた。

びつくりするくらい大胆に、ぞくぞくチユーリップの茎を切つていくさつきたん。

「いいよ、そんなに包まなくたつて

かかえきれないくらいの花束つて、初めて見た。気障つぱく「君の瞳に乾杯！」とかいつて、渡したら笑えるだらうなあ。ただでもらつてくんくてなんだか申しわけない。

「球根を大きくするためには、早めに花を切つておいたほうがいいのよ。そうするとね、花に行くはずの栄養が球根に集まつて、来年もつと大きな花が咲くんだつて、お父さんが言つてたの」

しかし、やつぱり、なんか悪い。

鉄バケツに水を張り、チユーリップの茎をつけて、中でまたちよきちよきやつていた。緑色のちよん切られた茎が浮いていた。

「ひつするとな、お花が長持ちするのよ」

「寧寧に新聞紙でくるみ、僕にそのまま渡した。

「さつきたん、お花の先生になれるよ」

意味のないことを口走ってしまったような気がする。いつもと変わらないさつきたんの優しい瞳と、はつかねずみに似た表情。今日はお下げにしてくる。やっぱり普段着にもお下げ髪が一番似合つ。

口に出したらすべてがぶつ壊れる。わかつていた。僕がこれから何をしようかと思っているかを、さつきたんは知らない。知つてたら一十本も赤と黄色のきれいなチューリップを包んでくれるわけがない。さつきたんの素直な想いを僕はためらうことなく切り捨てた。さつきたんと、おとひっちゃんに対し、僕は最低だ。

そのくせに僕は真剣に考えているわけだ。佐賀さんを守るためにはどんな汚いやり方もするつて。おとひっちゃんにはばれないようになつそり佐賀さんと連絡を取り合ひ、健吾くんたちには「俺には彼女がいるから付き合ひ気ないよ」とアピールして、立村の攻撃をなんとしても食い止めようつて思つている。佐賀さんを傷つける奴を、僕なりの手で追い払つてやりたい、それだけのために。

さつきたんは構わないって言つてくれたけど、あの日からだいぶたつたんだ。心変わりしている可能性だつてあるのに、どうしても僕は言わずにいられないのだろうか。

僕のために、こんなに頑くしてくれてこるさつきたんを、どうして。

どうしてさつきたんを好きになつてあげられなかつたんだろう。しばらく僕は受け取つたチューリップの花束を覗き込んでいた。チューリップの香りはそれほどきつくない。中の花粉が少し花びらの裏にくつついているのが見えた。もつ一度抱え直し、さつきたんの髪をもう一度見つめた。

やつぱつお下げでなくつちや、嘘だ。ふたつに分けても似合わない。

さつきたん、この前提案してくれたことなんだけど、今から

でも、だめかな。

まず、花束に話しかけた。むせてこほんと咳をした。

ちゃんと、俺なりに、大切にするから。

ほんと、さつきたんのしてほしいこと、俺なりににするから。

だから、さつきたん、僕とカモフライージュで付き合つてくれないかな。

「さつきたん、あのわ」

そのまま発しようとした。

まんまるな瞳で、さつきたんは僕を見つめた。

びつくりするといんな顔をする。花壇の中でもまた一輪、花を摘もうとしていたらしい。立ち上がるうとして中腰になつた。ちゃんとするつと出でくるはずだつた。なのに、さつきたんの顔を見つめたとたん、喉がこわばってしまった。胸が詰まつて、それしか出てこなかつた。なんかちょっとといがいがした声だつて、僕にもわかつた。首を小さく振つてごまかそうとしたけどやつぱりだめだつた。

言えるわけ、ないよ、絶対。

さつきたんの顔見てたら、絶対にできるわけない。絶対僕を受け入れてくれるつて顔してるから。どんなにやなことだつて、きっと「いいわ」って言つてくれるつてわかってるから。僕が佐賀さんのことを考へてゐるよつこ、さつきたんも僕のことを同じよつに思つてくれてるつてこと、今こやつてほどわかつてゐるから。

佐賀さんにそつされたくないのは俺だつてわかつてゐるのさー。

「俺は、さつきたんが思つてるよつな、いい奴なんかじゃないよ」

自爆するしかなかつた。もう逃げ道、ふさぐしかない。

さつきたんがふたつに髪の毛分けたところを、僕は一瞬想像し、

すぐしさつと頭の中から消した。

「俺、最低な奴だつてこの前、わかつただろ。だからもう俺のこと

なんか、考えるなよ」

はさみを両手で抱え、小首をかしげた。

「佐川くん、私そんなこと、思わせるよつなことしてたら『ごめんなさい、私頭悪いから』

「悪くないよ、ちつとも悪くないんだ。さつきたんはいい人なんだよ」

かぶりを振った。なんだかガキっぽいことしそうだつた。片手でチューリップの花束をぶら下げた。折れそうな程、茎を握った。
「俺、違うんだよ、今なんでさつきたんとくつついて来たか、知りたいだろ？ 母さんに頼まれて花をもらひにきただけだと思つてゐんだろ。違うんだよ、俺、さつきたんにまた変なこと言おうとしてたんだよ、最低なんだよ」

桜の木に雀が留まつてゐる。鳶だつたら春っぽく聞こえるのに。さつきたんは僕の剣幕にびびつたのか、すっかり固まつてゐた。
「さつきたん、終業式のあと、青大附中の連中と会つた時のこと、覚えてる？」

僕はゆつくりと尋ねた。首を振つてさつきたんが何かを言おうとした。

「あの時の子から手紙を昨日、もらつたんだ。俺と会いたいんだつて」

ぴくんと咽元が動いた。また僕はさつきたんの気持ちをはさみでちよん切つてゐる。

「けど、条件があるんだつてさ。俺が、さつきたんと付き合つてることなんだつてさ」

「どうして？」

きよとんとして、さつきたんが手元のはさみをぶら下げた。濃いブルーのジャンバースカートが風で揺れた。

「俺が、さつきたんと付き合つていれば、あの子と付き合つてゐる男子がやきもち妬かないから、安心して会えるんだ。この前会つた、バスケ部のことばかり話していた、一年だよ。俺、あいつと話して

て楽しかったし友だちでいたかったからあきらめようとしてたんだ。笑つていいよ、さつきたん。さつきたんが花摘んでくれてた時、俺はずつとあの子のことばっかり考えてたんだよ」

ゆつくり、かみ締めるように言い聞かせた。納得するしかないみたいに。

「今日、さつきたんにもう一度、俺の方からつきあいかけて、あの子に会うための条件を整えようつて思つたんだ。最低だよな。俺、本当に、よくしてもらつう価値のない人間だつてこと、よくわかつたよ。だから、もう俺のことなんて、無視したつていいんだ。ごめん。さつきたん」

風が強く吹きはじめた。さつきたんが砂埃を目に入れたらしく痒そうに目をこすつていた。泣いているように見えた。

「ちゃんと好きになつてあげられなくて、ごめん」

不意に僕の眼にも涙が溜まつてきた。砂埃が入つたせいだつた。目の玉がごろごろして、また目をこすつた。こう言つ時、上まぶたを引き上げて、無理やり涙を流すとじみが取れるはずだ。空を仰いで、まぶしい白い太陽を見ながら、まぶたをひつぱつた。

「佐川くん、あのね」

呼び止めるさつきたんを振り切り、僕は家の門から出ゆつとした。

「聞いてほしいの」

さつきたんも両目を激しくこすつていた。同じくつり、涙目だつた。

「関崎くんが交流会の帰りに話していたの聞いたの。内緒にしなくちゃいけないことだつてわかつてゐるけど、ちゃんと話すわ」

おとひっちゃん、まだ。あいつ、さつきたんに声かけるだけでも顔が真つ赤になる奴だつたのにやたらと行動的だ。信じられなくつて、僕は思わずぽかんと口を開いてしまつた。

さつきたんはまぶたを片目だけ押えて、こくんと頷いた。

「関崎くんは、佐川くんのことを心配してたの。青大附中の人た

ちと会わせると、また「ごたごた」するから、これからは交流関係に出さないって決めたって言つたの。青大附中の委員長さんも、それがいいって言つてたわ」

なんでさつきたんに先に打ち明けるんだ？ 絶対、おとひつちやんらしくない。

さつきたんは少し咳き込んだ。

「だから、クラスが別になつても、佐川くんのことを力づけてやつてくれつて頼まれたの」

そんな器用な真似、誰が教えたんだよ。信じられない。さつきたんの言葉もそうだけど、何よりもおとひつちやんの行動が、おかしすぎる。行動が！

「それで、関崎くん、言つてたの。私なら、佐川くんのことを一番わかつてやつてくれるから、これからも友だちでいてやつてほしいんだつて。あの、この前の交流準備会の時も話してたのよ」

親みたいなうざつたいこと言つなつて言いたい。さつきたんに八つ当たりできない代わり、僕は思いっきりチューーリップを地面に叩きつけくなつた。さすがに思いとどまつた。代わりに石を蹴飛ばした。側の葉牡丹の鉢にぶつかつた。

「よけいなことするなよな！ おとひつちやんも」

「私もそう思うわ、だつて」

いつも通りの大人しい口調からこぼれた。息継ぎして、もういちど「だつて」を繰り返した。

「佐川くんは、青大附中の人には、会いたいのでしょう？」

はつとして、さつきたんの顔をまじまじと見つめた。

「私より、ずっと、青大附中の人には。だから」

お下げ髪を両肩に垂らし、両手を胸に当てた。

「私、もう一度言つわ」

春風だろうか、また埃っぽい空気を吸いすぎ僕は咳こんだ。聞いたら、おなかのところがどうにかなっちゃいそうだつた。足を踏ん張り花束を持ったまま僕はさつきたんの口もとをじつと見つめた。

「関崎くんと、青大附中の人たちの前では、私とお付き合いしたことにすればいいの。そうすれば佐川くんあの人と堂々と逢えるし、無理に交流会に出なくたっていいの」

またぐぐつとむせびそうになる。予定通りなのに、これでいいはずなのに。頭の中が真っ赤になつた。首を振りながら僕は違うつて言おうとした。さつきたんの真剣な眼差しに、阻まれた。

「私、それでかまわないの」

どんな気持ちで言つてくれたのか、どうして許せるのか、さつきたんの気持ちが僕には到底理解できそうにない。僕だつたら絶対に許せない。もし佐賀さんにそんなことされたら、と想像するだけでもむかつときそつだ。目の前で僕はじつとさつきたんを見つめなおした。

花壇の中では花の茎を切り刻んでいるさつきたんはきれいだつた。目をこするしぐさも、花をそろえて包んでくれるしぐさも。僕がもし、さつきたんに告白されいたら。もし、佐賀さんと一度も会わないですんだとしたら。もし、僕がおとひっちゃんの親友でなかつたとしたら。

好きになつてあげたい人を、好きになつてあげられなかつた。さつきたんの横顔を見ながら、僕は佐賀さんの顔を思い浮かべていた。佐賀さんが僕に、ソフトクリーム型の手紙を渡してくれた時にはにかみを、重ねていた。さつきたんに心の中でごめんつて言うことしか、今は思い浮かばなかつた。やっぱり僕は最低な奴だつた。敗者復活戦で手に入れたものを、もう手放すことはできなかつた。

学校でさつきたんとふたりで話をしている時だけは、絶対さつきたんのことだけ考えようと決めた。佐賀さんにふたりきりで会つている時以外は、さつきたんを大切にするつて決めた。

今、なによりも欲しいものを、さつきたんは花束と一緒にプレゼントしてくれたんだから。

僕は顔を上げた。唇を思いつたり堅く結んだ。じつとさつきたんを見据えた。そうしないとうまく言葉が出てこなかつた。声が震えた。

「俺、絶対、水鳥中学の中ではさつきたんをないがしろになんかしない」

言葉が詰まつた。

「もちろん外でだつてさつきたんがそうしてほしいうこと、きちんとするよ」

僕はしばらく涙目でうつむいていた。風を避けるためだつた。

「恥ずかしいって顔もしないで、さつきたんのこと、大切にする」さつきたんがポケットからティッシュを取り出し、そつと差し出してくれた。

受取つて目を拭い、僕は無理矢理笑つた。

まだ花がしおれないうちに母さんへチューーリップの巨大な花束を渡した。大喜びして玄関に飾る母さんを放つておいて、部屋に戻った僕はもう一度佐賀さんからの手紙を読み直した。僕は部屋に戻り机に向かった。手にはまだ花の茎から出たつゆが緑っぽくついていた。

もう後戻りはできない。一段田の引き出しを開いたまま、手紙を載せた。すぐ覗き込めるようにだつた。写すためのノートを開いた。手紙から、水鳥中学生徒会および交流準備関係で必要な情報を抜き出した。

僕はすぐにそらんじている電話番号をダイヤルした。

男の声。思つた通り総田本人が出た。

「よお、佐川、どうした、少しは明るい未来が開けたか！」

「あのや、総田」

僕は口元をふつとゆがませてみた。

「青大附中の内部に関する最新情報が手に入つたんだけど、聞きたいか。もちろん、おとひつちゃんには内緒だよ」

総田と話をしていると、さつきまでチューリップ抱えてめそめそしていた僕が姿を隠して、「水鳥中学の天才参謀」だつた僕が悪役笑いをしながら現れる。今のどうしようもない自分を立て直すには、総田と話をすることが絶対必要だつた。弟分じやない僕を引っ張り出したかった。

「まず、杉本さんがこれから先、うちら水鳥中学との交流を中心とするグループに参加する、これが大問題だよ、総田」

かいつまみつづ僕は佐賀さんの手紙内容を説明した。

「立村はもう一度と杉本さんを、水鳥中学へ送り込まないつておとひつちゃんに約束したらしいんだ。噂によると、先輩たちからリン

チされたかなんかしたみたいだよ

「へえ、まじかよ」

あの蠅人形だつたら一発張り倒した段階でこなごなだらう。きっと総田、甘く見ているだらう。あいつのストレートパンチを食らう瞬間までは、僕もそう思つていた。頬の辺りが思い出したようにひりひりしてきた。

「けどさ、交流グループがなんかに入つてることは、へたしたら顔合わせる可能性がないとも限らない、つてことだよね」

「まあな。行きはしないが待ちはする、つて奴だな」

「しかもおとひっちゃんへお熱の状態は全く変わってないんだつて。おとひっちゃん、確か青大附中に手紙で挨拶状みたいなの書いたら？ どつもさ、それを立村経由で手に入れて毎日眺めているらしいんだよ。気持ち悪いよな」

「さむいぼだあ」

「きつとおとひっちゃん、杉本さんのこと可哀想だなつて思つたんだと、僕思つんだ。一度はきつちり振ろつとしたけど、相手が常識的日本語理解できなかつたのは計算違いでさ。さすがのおとひっちゃんもそれ以上説得するのをあきらめたらしいんだ。見事にそれ、裏目に出でているよ」

やつぱりおとひっちゃんはそういうところが抜けている。僕だつたらやつぱり、救いようのないくらにきつぱり振るのに。

「甘い」

僕もそう思つ。

「おとひっちゃんの本音はきつと、『もう一度と勘弁』だらうな。立村に頭下げられて、仕方なく望みは残してやつたけど、相手は自分に都合のいいことしか耳に入れないこまつたちゃんだろ」

「けどなあ佐川、ひとつ疑問があるんだがいかに？」

「なんなりとどつぞ」

「佐川を生徒会関連から外したがつてだ、お前を水野さんとくつつけたがつてだ、いろいろとあいつなりに頭を使つているけどなあ、

関崎シーラカンスがあんなど、普通思いつくと思つが？」

やはり、総田も同じこと考えていたんだろう。思わずニヤッと笑

いが洩れた。

「そうだよ、総田の言つ通り。あれは、おとひつちやんがはめられ

たんだ」

「誰にだよ、まさか

「あの、蝶人形だよ」

あの日、おとひつちやんと公園で並んで座つていた、蝶人形立村のかすかな微笑みと繋がつた。どうしようもなく惨めだつたあの日のこと。どうしようもない苦い気持ちを。

「立村が僕を田の仇にしているのは、杉本さんを侮辱したからだよ

きつと」

「まさか、あんなお茶わんこ娘のために、なんだあ？」

総田にはわからないだろう。僕、だつて理解不能だ。ただ、すべての出来事を僕が佐賀さんのために仕組んだのに対し、立村は杉本さんとおとひつちやんを軸にすべて動かした。僕や佐賀さんを吊るし上げることだつてあの状況だつたら簡単だつたろう。けど立村はおとひつちやんと取引をして……たぶんおとひつちやんにその意識はないと思つけど……杉本さんと話をしてもらい、いい思い出に持つて行つてもらう」と、百パーセント振るよりもほんの少しだけ希望が持てる言葉で話してくれるよう頼んだつてわけだ。そのためだつたらおとひつちやんの要求、佐賀さんとさつきさんとの入れ替えを了解し、立村自身が恥をかかせられることもいとわない。

全部話すわけにも行かなくて、僕は総田にもう一度繰り返すだけだつた。

「すべては、杉本さんを守るためにだつたんだ」

皮肉なことだけ同じ気持ちを、今、僕も理解している。

僕はできるだけ落ち着いた声で総田に今後の展望を語つた。

「これから考えなくちゃなんないのは、向こうの蝶人形がこれから

先、どうこう限をしかけてくるかだよ。今も言つたけど、あいつはとにかく杉本さんを守るためにだつたら手段を選ばないよ。おとひつちゃんがすつかり忘れてほおつとしている間に、杉本さんと会わせたりするかもしないよ。おとひつちゃんのところで止まるならともかく、水鳥中学生徒会にも飛び火したら、また大変ことになるよ。一重スパイが絶対必要だと俺、思うんだ。総田、俺だつたらベストキヤストだろ？ この前総田が言つた通りの計画を、そのまま実行するんだ。さすが総田教授つて、俺言いたくなつちやつたよ」

一通り説明を終えて僕は総田に話を振つた。

「ナイスだな、けどなあ佐川、それってかなりやばくないか？ あおつた俺が言つのもなんだけどな

言葉を濁した。

「無謀じやないよ。簡単だよ。この前総田も言つただろ？ お互ひ彼氏彼女がいれば、尊立つてもちゃんと違つつていえるつて

「おいおい、まさか

「そりだよ、まさかだよ。仕入先はもう用意してあるんだよな」
僕は悪役のお殿様が作るような口許をこしらえてみた。鏡がないから見えないけれども、たぶんそつそつと戻つ。

「お前がめろめろの、例の彼女か？」

「了解済みだ。いいだろ」

「や、やばくねえかそれ。それに水野さんもOKしたのかよ？」

自分で提案したくせに総田の奴、まじであせつてる。なんだかおかしくなつた。

「そりだよ、ちゃんと話はついているんだ。あとは総田、お前だけ

「俺はどひしきつてんだよ」

「ほり、俺生徒会室に暫く近づけないだり？ ビうしても生情報手にいれられないだろ？」

僕の口だけがするするすべる。じじんとこひまきつちりと約束しておかないと。自分の学校情報が曖昧なまま動きたくない。無駄な動きはしたくない。

「俺はひとりで青大附中の子と連絡を取るよ。けど水鳥中学生徒会の状況がわかんないと、俺だつてうまく質問できないよ。だから、おとひっちゃんに気づかれないように、こいつをやり情報教えてほしいんだ。総田、お前しかいなんだよな、その点頭のいい奴つてさ」

あいつの「教授」たるプライドをくすぐってやつた。やっぱり反応した。

「まあそのくらいならこいつらでもできるよなあ。けどな、佐川、お前まじでばれたらどうするんだ。関崎はともかくも、彼女の彼とか」

「その彼氏は僕のことわざと知ってるし、何の問題もないよ。おとひっちゃんは僕とわざわざたんが付き合えば安心するよ。要是あいつに、俺のことを手のかかる弟分だと思い込ませておけばいいんだよ。そんなのお茶の子さこさいだ。水鳥中学生徒会のためでもあるんだよ、これつて。俺だつておとひっちゃんをこれ以上、杉本さんと絡ませて神経ぼろぼろな運命に落としたくないし」

「ジエラシーの炎に対する対策つてねえのか？」

僕は首を振った。おとひっちゃんに限つてそれは心配ない。だつて、

「おとひっちゃんは、さつきたんが笑つていれば、それでいいと思つてるよきっと」

関崎乙彦はそういう男だ。誰よりも、自分にとつて大切な人が幸せだつたらそれでいい。たとえ親友に片想いの子を取られても、純粋に応援してくれる奴なんだ。

俺だつておとひっちゃんのことは大好きだ。ばかだけどひたむきなあいつのことを助けてやりたい。けど、今ままの弟分のままではだめなんだ。

守られてるんでなく、守りたいんだ、おとひっちゃんも、佐賀さんも、なにもかも！

ふふふっと笑つた後、総田は調子よく掛け声をかけてきた。

「待つてました、天才参謀佐川雅弘復活だな！」

総田の声を聞きながらも僕はしつかり冷めていた。今までは素直に喜んでいた「天才参謀」の肩書きも、もうはしゃいで受取れない。僕しか気づいていないかも知れないけど、言つておかなくちや。あつちり念押して。

「忘れるなよ総田、敵は立村、奴だけだ」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6700e/>

葉牡丹の花～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年10月8日15時03分発行